
この背中に、白い翼は無いとしても。《序章～どうか嘆かないで、どれほど残酷な世界でも～》

煌はじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この背中に、白い翼は無いとしても。《序章》どうか嘆かないで、
どれほど残酷な世界でも》

【Nコード】

N3389M

【作者名】

煌はじめ

【あらすじ】

『あんたの事は、あたしが護る。その為にあたし、強くなるから』

幼少時。財前塔子が出会ったのは、虐待と過酷な教育の中、擦り切れそうになっていた一人の少年。少女は誓った。少年を護る。誰より強くなって、彼を迎えに行く事を。その八年後。エイリア学園襲撃を契機に、塔子が彼――鬼道有人と再会した時、運命が回り出す。

塔子。鬼道。円堂。春奈。そしてエイリア学園。雷門が戦うべき
本当の敵、“魔女”とは。歪んだ愛に縛られた影山零治の真実とは。
記憶を消され、実験に晒され、踊らされたエイリアの子供達の本当
の姿とは。そして惨劇の前に、彼らが出した答えとは。

後に語られるエイリア事変。残酷で美しい、これはもう一つの物
語の序章。

はじめに

この作品は、イナズマイレブンの二次創作になります。公式とは一切関係がありません。また、以下の点が含まれます。

イナズマイレブン二期（驚異の侵略者編）をベースにしたパラル。

原作沿いと見せかけたサッカーバトルファンタジー。最終的には原作とまったく違った展開と結末が待っています。

闇墜ち要素、死ネタ要素強し。残酷な生体実験描写、暴力描写あり。また間接的に性的暴力や虐待を示唆する表現がある為、R15指定。

エイリア学園はマスターランク以外洗脳されている設定。

全てのキャラクターにおいて過去捏造だらけ。

塔子と鬼道が幼なじみ設定。若干この二人で恋愛描写あり（プラトニック）

鬼道やエイリアっ子をはじめとして、悲惨な目に遭うキャラが後を絶たず。

うみねこパロ要素あり。全ての悪事の黒幕として魔女が登場。

ディシディアファイナルファンタジー、キングダムハーツ、すばらしきこのせかい、からゲストキャラ出演。ただし上記キャラを知らずとも支障なし。

一応一般向けとして執筆しておりますが、一部女性向けに見える表現があるかもしれません。

基本友情重視ですが、塔子×鬼道以外にも公式の恋愛描写は若干あります。

また基本的にダーク。ものすごくダーク。

序章中盤までは安全ですが、序章終盤からの展開が真っ暗です。ぶっちゃけイナズマイレブンのキャラから死人が出ます。

それでも大丈夫な方のみ、どうぞ。長い長い物語になりますがお付き合いただければ幸いです。

オリジナルキャラクター紹介

この作品にはオリジナルキャラクターが登場します。ただし、以下出張るのは二名のみ。またあくまでメインは版權キャラクターになります（個人的にオリジナルがたくさん出る＆メインに来る版權小説は苦手なため）。

サクラミサトヤ 桜美聖也

雷門中三年の男子生徒。最近転校してきて、サッカー部に入部した。ポジションはMF。

青みがかった黒髪とキャップが特徴。群青色の瞳の中性的な容姿。黙ってれば相当な美形。が、とんでもない方向音痴。運動神経は良いのにドジ。さらに、可愛いコを男女問わずお持ち帰りしようとする問題児。雷門中の数少ないギャグ要員である。

体力馬鹿で怪力馬鹿だが、コントロール音痴すぎて試合ではあまり戦力にならない。必殺技は一応、彗星シュート。

FFで帝国地区予選の際、鉄骨の下敷きになりかけたにも関わらず足の骨折だけで済むほど丈夫。また、どこかの国の軍に関わる仕事をしていると専ら噂であり、謎の多い人物である。

外見は中三だが、どうにも見た目通りの年齢ではない模様。天涯孤独となった吹雪の面倒を見ており、今でも仕送りは欠かせていない。

実はあるS級犯罪者を追って、異世界からやって来たのだが…。今ではすっかり雷門中の兄貴分と化している。

ニノミヤランコ
二ノ宮蘭子

吉良星二郎直属の警護頭にして秘書官。エイリア石に関わる研究と実験を推し進める科学者達のリーダーでもある。

後ろでくくった茶髪のおかっぱが特徴。紅い眼をした、二十七歳くらいの妖艶な美女。ある日突然吉良の元に現れ側近になった為、エイリア学園メンバーからは多かれ少なかれ疑念を抱かれている。

冷酷で身勝手なサディストであり、ガゼルを始めとした多くの子供達に嫌われているようだが、詳細は謎。実は、全ての事件の鍵を握る存在である。

【0・0・Message from Toko】

あたしは過去二回、あいつに逢った事がある。

一回目の時、あいつの名前はまだ“鬼道”じゃなかった。親を亡くして、孤児院に入って少ししたくらい……だったと思う。

こういつちゃ何だが、あたしの家はデカい。財前財閥と言ったら、雷門財閥にも並んでその筋じゃ有名だ。お金に不自由した事なんかないし、パパはあの性格だから、慈善事業への投資も厭わなかったわけ。

で。何を思ってか、自分が援助してる孤児院に、まだガキンちよ（って今でもあたしやガキだけど）だったあたしを連れていった。そう、そこが当時、鬼道と春奈がいた孤児院だったのさ。

あの二人は、二人して当時からサッカーが大好きだった。まあ妹の方は単に、兄貴と遊びたくて一緒にサッカーやってただけっばいけどな。時折転びながら、必死でサッカーボールを追いかけてた。可愛いもんさ。

春奈は昔いじめられっ子だったらしい。というのは、後になつて聞いた情報だけど。あの時感じた違和感の理由が、今なら分かる。

妹は兄貴に依存しきっていた。常に常に、兄貴に守られて、庇われなきゃ自分の足でも立てないような子供だったんだろう。

二人と施設の連中が不仲だったわけじゃない。春奈を苛めてた子供ばかりじゃないからね。だけど、二人と他の奴らとの間には常に壁があった。二人と一緒にサッカーをやっても、その壁を越えられる妙な距離感を保ってやがった。小さなガキンどもがなぜ？

いや、ガキンどもだからこそ、二人の間にある歪な愛情に気付いてたのかもしれない。

あいつらは、その当時から歪んでいた。妹にとって兄貴は世界の全てで、兄貴にとって妹は命より大切なものだった。

小さい頃に親を亡くしたせいなのは分かる。それにしたってあの

関係はマズかった筈だ。もしかしたら本人達も薄々気付いてたかもな。

二人の愛は、兄妹の愛じゃなかった。

たった一つ違いの筈なのに、殆ど親子の愛に近かったんだ。

それが異常でなくてなんだというのだろう！

『サッカー、好きなの？』

そんな二人の間に――あたしは割り込んでいったわけだ。

たまたま施設を訪れた財閥のご令嬢、いやはや図々しいったらないね。

でも昔からあたしやこんな性格なわけで。良くも悪くも、他人の領域に踏み込むのに躊躇なんかしない性分だったんだ。それが余計、男にばかり間違えられる原因を作ってたんだろーけど。

うん。今はさすがに無いけど当時のあたしってば、男に間違えられてばかりだったんだよね。ショートカットで、女の子らしいヒラヒラした服なんて嫌いだったし、お絵描きやママごとより鬼ごっこや木登りの方が好きだったから。

あいつらにも、当時は男の子と勘違いされてたみたいでさあ。初めて見る人間に、二人はガチガチに緊張してた。というより警戒、だな。お前も春奈を苛めるのか、って目で鬼道はあたしを見た。本人はもう、覚えちゃいないんだろうなあ。

『サッカー好きなのかって聞いてるんだ。ずっとボールを蹴ってるじゃないか』

もう一度尋ねると、二人はおずおずと頷いた。だったら何だ、という顔をしたので――あたしは拾ったボールを差し出して、言ったのさ。

『教えてよ、サッカー。やってみたいんだ』

サッカーの存在自体は知ってたけど、ルールもまだ危うかったその頃。その場所であたしは初めてボールを蹴った。生まれて初めて、拙いながらサッカーをした。鬼道と、春奈と一緒に。

ルールが微妙だったのはお互い様だろう。そもそも人数が足りてないんだから、ミニゲームくらいしかできないし。それでも楽しくて、時間が許す限りボールを追いかけた。あたしが本気になればなるほど二人も本気になって――やがて笑ってくれるようになって。

その笑顔が嬉しかったよ。二人だけの世界に、短い時間ながらあたしも入る事ができたんだから。

『またいつか、逢える？』

帰り際に、寂しそうな顔でこっちを見る二人に、あたしも笑ってみせた。最高の時間をありがとう、って。

『おう！またな！』

無責任な約束だった。だけどあたしは勝手に決めたんだ。またあいつらと逢うって。逢ってサッカーするんだって。

実は、あたしがサッカーをきっちり始めた理由は、あの二人にあるのさ。

あいつらに次に逢った時には、うんとうまくなっていて――思いっきりビックリさせてやるんだって。パパは反対しないでくれた。女の子なのにサッカーなんて、とは言わないでいてくれた。そういう意味でもあたしは恵まれていたと思う。

それから月日は流れて。

あたしは小学生になった。あいつらにもう一度逢う機会を得られないまま、だけどサッカーの練習だけは怠らなかった。なんていうか、思い出が美化されていたせいかもしれない。

彼らに逢うまで、一生懸命打ち込むものもなく、退屈していた自分。あの兄妹はあたしにとって救世主にも近い存在だった。あいつらと逢わなければあたしは多分、サッカーにも出逢わなかったし、こうしてイナズマキャラバンにも乗ってなかっただろうし。

チャンスは唐突に巡ってきた。それはそれはショッキングなニュースと一緒に。

『あの二人が、別々の家に引き取られたって……！？』

あたしは何故そこまで驚いたか。きっとパパには分からなかっただろうな。あの二人の間にどんな聖域が張り巡らされていたかなんて。

あの、親子のように依存し合っていた兄妹を引き離す？運命はなんて残酷なことをするんだろう。

それとも――あの二人の歪みを修正する為には、必要な事だったのだろうか。彼らの道が、分かたれることが。

鬼道は、その名の通り鬼道財閥の元に引き取られた。そこで影山という教師の元、学問とサッカーの英才教育を受けているという。あいつがサッカーをやめてなかった事だけが、唯一の救いだった。

あたしはあいつに再会した。これが二度目の出逢いだ。だけどその時、鬼道はサッカーの才能と技術と引き換えに、大切な何かを毎日失い続けていたんだ。

『久しぶり。…お前、女だったんだな』

開口一番それかいな。あたしは思い切りどついてやった。確かに

あの頃互いの名前も聞き忘れたまま別れたから、それも一因なんだろうが。あたしもあたしでここでやっと、あいつの名前が“有人”であると思い出した。

随分時間は経った筈だけど、あいつは相変わらずチビのまんまだった。むしろあの頃より、同年代より小さいと感じる。あの頃はもっと小さな春奈が隣にいたせいかもしれない。

あいつはサッカーが本当にうまくなっていた。あたしも自信があったのに、簡単に抜き去られるわボールは取られるわで。

僅かに捲れたシャツの下は、傷だらけで。時折顔をしかめて、鬼道は痛みに耐えていた。

それだけじゃない。

あたしが脅かそうとして後ろから抱きついたら、怯えた声で悲鳴を上げた。すぐに相手があたしと分かって落ち着いたけど、その反応は明らかに変で。

『何があつたんだよ』

あいつはサッカーの練習で怪我しただけだと言った。だけど流石のあたしも、そこでごまかされる程馬鹿じゃない。

嘘だ、と。お義父さんは知ってるのかと尋ねると、あいつは弱々しい声で言った。

『義父さんは何も知らない。だから…言わないでくれ、何も』

あいつが多分、ずっと隠し続けて来たであろう秘密。それを、あたしだけが知った。言わせるべきで無かったのかもしれない。ただどあたしは知リたがった。

あいつが、好きだったから。

淡い淡い気持ちだとしても。まだ自分でも境界線の見えない想い

でも。それは確かに初恋で――あいつを護りたいと、強く強く願うようになっていたんだ。

だってそうだろう。

あいつは、今まで誰にも護って貰えなかったんだ。あたしには護ってくれる人がたくさんいた。だけど鬼道は、妹を護ろうとするばかりで、愛するばかりで、自分自身は誰にも護られずにそこにいて、どんどん擦り切れていくばかりのあいつに、その現実には、あたしは無力でしかないのかもしれない。だけど。

『あんたの事は、あたしが護る。その為にあたし、強くなるから』

妹と引き離されて。

義父の重圧に晒され続けて。

妹ともう一度生きる為には、影山の虐待に耐えなければならなくて。

その苦しみを、誰にも打ち明けられなかった少年を。

『擦り切れて擦り切れて、どうしようもなくなったらあたしを呼んで。絶対に、助けに行くから』

男が女に護られるなんて変だ、と。鬼道は苦笑いしたけど言ってくれた。ありがとう、と。

指切りげんまん、嘔吐いたら針千本飲ーます。

指切った。

『俺も、約束する。塔子。俺も強くなる。今よりもっとサッカーうまくなって、フットボールフロンティアで優勝する。そして、また三人でサッカーしよう』

これ以上あんたは強くなる必要、ないよ。これ以上強くなったら、いつかポツキリ折れてしまうよ。

そう言いたかったけど、言えなかった。自分が何を言っても、鬼道は自らの弱さを徹底的に封じ込めて生きていくと知っていたから。

まあそれでさ、今に至るわけだよ。

あたしとあいつと春奈。めでたく再会してキャラバンに乗ったわけ。

相変わらずチビだなーって言ったら怒られた。なんだか可愛いと思っちゃった。久々に逢った春奈は、長い時間経っているせいもあってずっと大人っぽくなってた。

羨ましいなあ、女の子らしくて美人って。憧れちゃうよ。

あの二人の歪みは、一見なりを潜めてたけど。消えたわけじゃないのはすぐ分かったよ。

二人はまだ“兄妹”になれちゃいなかった。まだ“親子”のままだった。離れていたのは逆効果だったのだろうか。確かに春奈は前よりずっと自力で立ち上げられるようになっていたけど、いつも視界で兄の姿を探してる。親を探す子供の眼で。

何がいいのか、何が悪いのなんてサッパリだけど。このままじゃマズい気は、してる。もしこのまま兄か妹の身にもしもの事があつたら――遺された片方はどうなっちゃうんだろう。

派手に傾いた天秤は、ひっくり変えるしかないだろうに。

約束は、忘れてない。

たとえ鬼道が忘れてたとしても、あたしが忘れない限り約束はそこにある。

鬼道はあたしが護る。鬼道が望むなら、春奈のことだって。

約束した。約束したんだ。大好きなひとを、救う。その為にサッ

カーも格闘技も強くなったし、腕っ節も鍛えた。パパの反対を押し切って、SPフィクサーズにも入ったんだから。

なのに、ね。

どうしてこんな事になっちまうんだろう。

護りたい。助けに行く。

そう誓ったのに――あたしは。

【0-1・貴方に逢えた奇跡に、乾杯】

今日は色々な事がありすぎた。ありすぎて、円堂守のあまり性能のよくない脳みそはオーバーヒート寸前だった。

悩んだ時はとりあえず、キャラバンの天井に上って星を見る事になっている。星を見て、空の広さを知れば、うじうじ悩んでる気持ちも吹き飛ぶ気がするのだ。実際今、自分達には俯いている暇など無いのだから。

例え目の前に立ちふさがっている敵がどれほど強大であろうと。その力の前に幾人の戦友達が倒れようと。

そして――自分が本格的にサッカーに打ち込むきっかけとなった友人と、別の道を歩まざるおえなくなっただとしても。

「あ」

円堂が梯子を半ばまで登った時、既に二人ほど先客がいる事に気付いた。ちよつと前の自分なら、意外な組み合わせだと驚いただろう。鬼道と塔子の二人はすぐに円堂に気付き、ちよいちよいつと手招きした。

「来るような気がしてたんだ。お前は悩むとすぐ高い場所に登りたがるからな」

あつさり言ってくれた鬼道に、何やら複雑な気分になる。自分はそんなに分かりやすいのだろうか。

二人の後ろに、ごろんと横になる。ちよつと大きな音がして焦った。下の皆は揃って爆睡中の筈だ。起こしてしまったら忍びない。

「……円堂ってさ、結構一人で背負い込むタイプだろ」

唐突に振り向いた塔子が言う。

「あたしは今日、キャラバンに参加したばかりかだけどさ。こー見えて勘は鋭いんだぜ？伊達に長年SPやってたわけじゃないっての」

そういえば、この一見可憐な少女は、総理大臣付きのSPフィクサーズのキャプテンだったのだけ。こうして話しているとどうにも忘れそうになる。

ザ・タワーも元々はサッカーではなく護衛の為の技だったと彼女は言っていた。それだけ修羅場を潜ってきたということだろう。

しかし分らない。何故総理大臣の娘で、まだ中学生の女の子である彼女がSPなんぞになったのか。父親が反対しなかったとは思えないのに。

「俺、一人で背負っただなんて思ったこと、一度も無いぜ？一人じや此処まで来れなかったさ。サッカーは十一人いなきゃできないだろ。それと一緒にだよ」

そう、背負ったと思った事は、無い。

時々――ほんの時々、キツいと感じる事があるだけで。キャプテンである事が。自分が折れたらチーム全体にどれだけ悪影響を及ぼすか――それがとても重いと感じる瞬間が、たまにあるだけで。

「お前は強すぎるよ、円堂。でも、強いばかりじゃいつかポツキリ折れる。今日くらい、泣いてもいいんじゃないか」

「はは、ありがと。でもそんなに弱ってないから大丈夫だって」

「どうだか」

鬼道の声は、驚くほど優しい。誰かを長い事、ずっと護ってきた兄の優しさだと気付いたのは最近。事実彼は、その細い両腕ですつと妹を庇い続けてきた。どれほど傷つこうと、涙一つ見せる事なく。

その感情を、その慈しみの心を仲間にも向ける事ができるのが、鬼道有人という少年だった。だから多分、帝国であんなに慕われていたし、雷門にもあつさり馴染む事が出来たのだろう。実力も必要だが、司令塔には同じくらい人徳と信頼が要求されるものだ。

本当は、彼のような人間こそキャプテンに相応しいのだと思う。自分の取り柄なんて、本当に“サッカーバカ”なことくらいしかない。皆を引っ張ってこれたのは自分の力ではなく、出逢いに恵まれた結果だと思っている。

出逢い――そう。世界を変えるのはいつも出逢いだ。例えその先に別れがあるとしても。

「豪炎寺ってさ、本当にみんなに慕われてたんだな」

「ごろん、と塔子も横になった。うーん、と伸びをした手が円堂の髪を掠める。

「暗い顔してたの、円堂だけじゃないもんな。あたしももうちょっと一緒にサッカーやりたかったなあ。ま、今それを言ってもどうしようも無いけどさ」

「…うん」

豪炎寺の事を考えると、胸が痛い。あれで本当に良かったのか。何も言わずに送り出してしまったのは正しかったのか。引き止めるべきだったのではないか。――彼が去って、明らかにギクシャクしだしたキャラバンを見ていると、そう思わずにはいらなかった。だが。仮に間違ってたとしても、自分は間違いを突き通すしかない。時間は戻りはしないのだ。それにあの時は確かにそれが正しい道だと信じて選んだ。その決断を、今更疑う事がどうして赦されようか。

「…泣いてたんだ、豪炎寺」

きつと彼は、誰にも知られたくなかっただろう。けど今、二人には話しておきたかった。彼が束の間見せてくれた真実の顔と、円堂自身の本音を。

「眼が潤んでた。…あいつも多分、凄く悩む事があって……その上でキャラバンを離れる事を選んだんだと思う。瞳子監督にも、何か考えがあつたんだろうし…だから、俺、引き止めちゃいけないって思ってたんだ」

豪炎寺が悩んでいる事に気付けなかった。それはキャプテンとしての大きな失態だ。だからこそ、自分は彼を信じて待つべきなのだろう。彼を信じて、先に行く。必ず彼が追いついてくると信じて、歩いていく。

それが今自分に課せられた責任だと、そう思う。

「その豪炎寺の事なんだけどさ、円堂」

「何だ？」

「実はあたし達も、さっきまでその話してたんだよ。あたしは豪炎寺の事あんまよく知らないけど、鬼道はそこそこ仲良かったみたいだし」

塔子は自分達の前で彼の事を“鬼道”、と名字で呼ぶ。しかし彼と春奈の前だけの時は、別の呼び方をしているのかな、と思う瞬間がある。たまに言い間違えて口がどもったりするからだ。

塔子と、鬼道と、春奈。三人が初対面でなかったことは既に知っている。昔鬼道兄妹が孤児院にいた時に、三人で一緒に遊んだ事があるらしい、という話も。しかし円堂はまだそれ以上のことは知らない。それでも、単に三人が“それだけ”の関係で無い事は見てとれる。

鬼道の事はよく知っているつもりだったけど。三人で話している時の彼は、円堂が見た事の無い顔をしていた。何かとても温かな、慈しむような顔。さっき、塔子と二人だけで話していた時も同じ顔

をしていた。

まるで聖域、だ。

彼らの間にある物は、一体何なのだろう。もし自分にも知る権利があるというなら――知りたい、と思う。彼らが自ら口を開かない限り、こちらから尋ねるつもりは無かったけれど。

「今日：ああ、そろそろ昨日になるかな。ジェミニとの試合で、あいつシュートを二本連続で外しただろ。それって相当珍しいんだって？」

彼女の声に現実に戻る。そうだ、今は塔子達のことではなくて、豪炎寺の話だ。

「珍しいも何も、前代未聞」

小さくため息をついて、円堂は答える。

「豪炎寺は、雷門に来る前から有名なストライカーだった。キック力とか必殺技も凄かったけど、何より技術力が俺達とは段違いだ。……コントロールが悪いなんて事ない。絶対」

そうだ。瞳子監督もそれは分かっている筈だ。少なくとも対SPFイクサーズの試合から自分達を指揮しているのだから。しかしだったら何故、たった二度のミスで豪炎寺をチームから外したのだろう？ ミスそのものが、原因ではない？

「人が、普段やらないミスを連発する理由は主に二つだろう。肉体的な不調か、精神面での気がかりか、だ」

「……確かに」

鬼道の言葉な頷く。

肉体的な不調――要は怪我や病気、は無いと思う。豪炎寺はポー

カーフェイスだから必ずしもゼロとは言いつけないが――あんなミスを連発するほどの故障に心当たりはない。

だが精神面はどうだろう。試合の外側で何か気がかりがあったとしても、自分達には知る由の無いことだ。

「何か、悩んでる事があって……試合に集中できなかったって事か？」

だとしたら筋は通るが。では豪炎寺の悩みとは一体？

「あの宇宙人を名乗る連中。荒っぽい手段は嫌いとか言いながら、サッカーボールで無作為に学校を破壊して回ってるだろう。真つ当な常識があるとは思えない」

こてん、と鬼道もキャラバンの上に横になる。きしり、と小さく軋む音。自分達三人は揃って小柄な部類に入る。これが壁山だったら結構な音がしたかな、と頭の隅で思う。

「あれだけ叩きのめしても執拗に追ってくる、それもフットボールフロンティアの優勝校。多少は警戒されたのかもな。そして……もし奴らが影山と似たり寄ったりな思想の持ち主なら、俺達に対してどんな手を使ってくるか。そう考えてみた」

天才ゲームメーカーらしい、理路整然とした思考だ。時折円堂の方を窺うように見てくるのは、円堂の知識レベルが信用されていないせい――ではないと思いたい。

「俺なら試合前に、お前か豪炎寺、もさくはその両方を潰しにかかると。お前達がチームの精神的支柱であるのは、少し試合を見れば分かる事だ」

「結論から言うとね、円堂」

鬼道の言葉を引き継ぐ塔子。

「豪炎寺、エイリアに脅迫されてたんだと思うんだ」

「ええ！？」

思わず大きな声を上げてしまい、ダブルでしーっ！と注意されてしまった。そうだ、今が真夜中で、キャラバンの中では皆が就寝中である事を忘れていた。

「試合中、豪炎寺がやたら一点を気にしていた。エイリア側に立っていた、いかにも怪しい黒服の男達だ。例えばあの男達が豪炎寺の弱みを握って監視していたとしたらどうだ？」

豪炎寺の弱み。そう言われて円堂にも漸く思い至った。確かに、彼には本人にもどうしようもない弱点が一つだけある。

未だ入院中で、ともに身動きのとれない――妹の夕香、だ。

「この時点じゃまだ憶測の域を出なかった。だがさつき、塔子にS Pの面々を使って調べて貰ってハッキリしたよ。…豪炎寺夕香が、今朝から行方不明だそうだ。既に警察に搜索願いは出してあるが、見つかってない。彼女はまだ自分一人で自由に動ける状態じゃないし、誘拐された可能性が高いと警察も見ているようだな」

「そんな…！」

じゃあ何であいつは相談してくれなかったんだ！そう言いかけてすぐに気付く。口止めされていたなら、誰かに話せた筈もない。妹の安全の為に、試合で手を抜けなどと言われていたのならあのミスも領ける。そうでなくとも心配でいてもたってもいられなかった筈だ。

もし瞳子監督が何らかの方法でそれを知って、豪炎寺の身に危害が及ぶ前に安全な場所へ逃がしたのだとしたら――。

「…くそっ…エイリアの奴ら、なんて卑怯な…！」

悔しい。自分はまた何も知らなかった。何も知らずに、呑気に豪

炎寺を送り出すしかなかったなんて。

こんなの・・・キャプテン失格だ。

「一人で背負うなっつったろ、円堂」

「いてっ！」

かなり強烈なデコピン。痛みに涙目になっていると、すぐ目の前に塔子の顔があった。

「仲間をもっと信じやがれ。・・・大丈夫、豪炎寺も夕香ちゃんも、あたし達が絶対に助ける。・・・円堂には円堂にしかできない事があんだろ」

「・・・うん」

俯いている暇は無い。それもまた事実だから。

今はただ歩き続けるしかないのだ。それがどれほどの、茨道であるとしても。

【0・2・探し続くは、幸福の在処】

自分達は間違っていたのかもしれない。過ちに気付きながら、気付かないフリでごまかしてきたのかもしれない - 豪炎寺がいなくなつてから、鬼道はずっとそんな事を考えていた。

「俺達はきつと、変わるべきなんだと思う。こう言つては何だが、いい機会かもしれない」

鬼道が言つと、話が見えないらしい円堂と塔子は揃つて首を傾げる。

その仕草があまりにそっくりだったので、つい笑みがこぼれた。塔子が影で“女版円堂だ”と言われる理由の一端。二人はいろんな意味で似ているのだ。外見ではなく、もっと根つこの部分が。

「雷門に来て、感じていた事がある。俺達はずっと豪炎寺に頼りつきりだった。必殺技一つとってもそう。豪炎寺の手を借りなければ打てない技のオンパレードじゃないか」

「う…言われてみれば」

イナズマ落とし。炎の風見鶏。イナズマブレイク。雷門の誇る強力な必殺技の殆どを豪炎寺が担っていた。雷門というチームはかなりの面で、彼の技術力に頼りきっていたのである。

確かに元々弱小のチームだったのだから、最初のうちは仕方なかったかもしれない。しかし今や雷門は日本の中学校で一番強いチーム。いつまでもその体制のままでいい筈がない。

これでは去年の木戸川清修の二の舞だ。彼らは技術的にも精神的にも豪炎寺におんぶにだっこだった。ゆえに豪炎寺が妹の事故で試合に出られなくなった途端、帝国に惨敗したのだから。

「精神面でもそう。…豪炎寺さえいたら勝てる、とか。こんな時豪

炎寺がいてくれたら…とか。そんな風に考えるのが当たり前になつてないか。俺達のそんな考え方が、あいつの負担になつていなかったとは思えない」

誰か一人に頼りきつて、甘えているようなチームでは駄目なのだ。もしかしたら豪炎寺自身も重圧を感じていたかもしれない。それで、悩んでいても誰かに相談できる状況になかったのかもしれない。彼を追い詰めたのはエイリアだけでは無かったのではないか。本人はきつと否定するだろうが、それでも思わずにはいられない。最たる悪は誰だったのかと。

「豪炎寺も、入院している連中もきつと戻つて来る。そう信じているなら…奴らが戻つて来た時、あいつらが安心して身を置けるようなチームになつていべきだと、そう思う」

彼らの席は、いつでも自分達の心にある。だけど彼らが居た場所を、大きな空白のままにしておくのは違う。

いつまでも崇高な記憶のまま、美化の限りを尽くされた豪炎寺の背中を追うなど論外だ。彼らが戻つて来た時、彼らの隣に立てる“仲間”になつていすること。

誰が上でも下でもない。

並んで走ることができる。それこそが目指すべき最強のチーム、なのではないだろうか。

「…そうだな。うん」

さすがに、ショックは受けたのだろう。それでも否定せず事実を受け止めた様子の円堂に、鬼道は内心で安堵する。

どんなシュートが来ても、逃げずに受け止めるGK。それはサッカーに限った話ではない。だからこそ自分達は彼についてきた。彼

と共に歩む道を選んだ。

それが、円堂守だからだ。

「ありがとう、鬼道。言ってくれなきゃ多分気付かなかった。豪炎寺と離れたことが、無駄になるとこだった」

俺もまだまだあ、と円堂は頭を掻く。

「仲間って、そういうもんなんだよな。誰が上とか下とか…それは違う。俺、無意識に、豪炎寺を高い場所に見て頼ってた。豪炎寺の代わりは確かにいない。でもそれは、“豪炎寺がいなきゃ何もできない”って事じゃない…ってうまく言えないけど」

本人も段々何を言ってるか分からなくなってきたんだろう。うーんうーんと頭を抱えて悩む円堂に、不謹慎ながら塔子と顔を見合わせて笑ってしまう鬼道。

自分達は、変わらなければならない。きっと豪炎寺や、フットボールフロンティアで戦い抜いてきた仲間達との別れは、その為に必要な事だったのだ。

この世界に、偶然など無いのだから。

「豪炎寺だけじゃない。…チーム全体で、俺達は円堂、お前にも頼りきっている。依存するのと共に立ち向かうのは違うから」

円堂を真っ直ぐに見る。まだ幼い、大きな瞳と眼があった。

「改めて言うぞ。お前も一人で背負いこむな。…仲間を信じてると言うのなら」

「…ありがとな」

突然、背中に温もり。少し身を強ばらせた鬼道はすぐ、その正体に思い至って安堵する。そうだ、自分がナーバスになったのを感じ

ると、彼女はよくこうして抱きついてきたな、と。

「ははっ…鬼道はやっぱ鬼道だな。昔も今もカッコよすぎて妬けるぜ！」

はぐはぐ、ぎゅー！と塔子は背中から抱きついてくる。恥ずかしいからやめろ、と言いつつ、ほっとしている自分がいるのも確か。

塔子と共に過ごしたのはこれで三度目。二度目に出会った時、自分は相当精神的に参っていて…彼女の優しさについて甘えてしまった。甘えは赦されない。鬼道家の跡取りに隙などあつてはならない。そう教え込まれていたにも関わらず。

そつだ、あの約束をしたのもあの頃だった。塔子は覚えているだろうか。懐かしくて恥ずかしくて…だけどどんなに追い詰められても、あの約束があつたから自分は生きて来れた。誰かに助けを求める事なく。

もう忘れられてしまっても仕方ないくらい昔だけど。

「仲がいいんだなーお前ら！いいなあ幼なじみって」

何やら見当違い…いや自分達に限り間違ってもないが、普通男女が仲良くくつついてたら別の勘ぐりをするもんじゃなかるうか…に感心する円堂。

「円堂には風丸がいるじゃんか。幼なじみって聞いたぞ？」

「風丸は俺が抱きつくと怒るんだもんー昔はだっこさせてくれたし逆におんぶもしてくれたのにー」

「ははは…」

鈍すぎる円堂に、鬼道は笑うしかない。ここがアメリカなら許されたかもしれないスキンシップも日本、しかも中学生じゃあキツイという事だろう。サッカー中ならまだしも普段のじゃれ合いじゃなあ…と思う自分は多分マトモだ。

「お前らなー！今何時だと思ってんだよー？」

「い？」

階下から声。見ればキャラバンの脇に立ち、こちらを見上げている少年の姿が。

青みがかった黒髪に、つばを逆さに被った蒼いキャップ。中性的な顔立ちに、群青色の瞳。

雷門中三年、サッカー部のMF（FW）、桜美聖也。フットボールフロンティア開催期間中に雷門中に転校して来て、サッカー部に入部した人物である。一ノ瀬より早くから在籍しているのでそこそこ付き合いは長い、が。

地区大会での帝国学園との試合にて。降ってきた鉄骨から豪炎寺を庇って怪我をし。殆ど試合に出る事なく長い間ベンチ生活を余儀なくされた不遇の人物でもあった。

いや、下敷きになりかけたくせに、怪我で済んだ&ごく短期間の入院で済んだあたり、頑丈すぎると思わないでもないが。

三年だが、敬語を使う関係を彼は嫌った。元々脳天気で明るい性格からチームに馴染むのも早く、年長者であることからよく仲間からの相談相手にもなっているようだ。鬼道も嫌いではない。彼と塔子が結構馬が合うらしい事に、多少複雑な想いが無いわけではないが。

「ごめんごめん、そろそろ寝る。でもそういう聖也は何で起きてんだよ？」

塔子の問いに、聖也はうーんと伸びをして。

「ちょっと気晴らしに散歩でもして来ようかと」

見事に星をつけてのたまった。

いやいやいや、何時だと思ってんだとか此処は平原のド真ん中だ

ぞとか一人で彷徨くのがそもそも問題だとか。ツツコミどころは多々あるがそれ以上に。

「『絶対駄目！』『』」

鬼道と塔子、円堂の声が見事にハモった。

この聖也という少年、頭が弱い事やパワー馬鹿すぎて物をすぐ壊すこと、コントロール下手な事など様々な弱点を抱えているが。一番の問題は、方向音痴。どんな場所でも迷う。一人で放置すると一分経たずに迷子になっている。

転校初日に校舎内で迷子になり、マックスに救出されたのは記憶に新しい。あげくとんでもない遅刻と忘れ物ラッシュをやらかしたのだからどうしようもない。

「お前：いい加減学習したらどうだ？シカ公園で迷子になってスミスさんに多大な迷惑かけたのは何処の誰だ？」

「き、鬼道様、目が笑ってません……」

いつもより三割り増し低い声を出すと、聖也はビビって超高速でキャラバンの影に隠れた。ジェミニストームも真っ青なスピードだ。頼むから試合に生かしてくれと切に願う。

「……寝るぞ。さっさと寝るぞ。聖也は散歩に行きたいなら勝手にしろ。喜んで放置してやる」

「えー助けてよー」

「だったら迷子にならない努力をしろー！」

隣で円堂と塔子が、万歳コンビできるんじゃないかね？と囁きあっているのは見事に聞こえないフリをする。こいつと万歳なんて死んでもごめんだ。面倒みきれない。

梯子を降りて、キャラバンの中に入る。まだ眠くないよーと騒いだ聖也は、塔子に一発くらって伸びていた。そのままかつがれてバスの中にポイされる。哀れだが同情の余地はないので無視だ。

寝る前に明日以降の予定を確認する。

やりたい事もやるべき事も山積みだ。バスは今、北海道に向けて移動中である。その間の時間を無為に過ごすつもりはない。鬼道財閥のネットワークに加え、SPフィクサースの塔子が仲間になってくれたのが心強い。調べられる範囲がぐんと広がった。

- 今回の宇宙人襲来事件。何か、裏があるような気がしてならない。

奴らは何故財前総理を拉致したか。そればかりマスコミで騒がれているが、疑問に思ふべき点はそれ以前にもある気がしてならないのか。

何故奴らは日本に降り立ったのか？世界の支配を目論むなら、頂点であるアメリカを叩くのがとり早いのではないか？

勿論奴らがたまたま降り立ったのが日本で、この地球の力関係を把握していない可能性もある。が、少なくともあのレーゼとやらは随分地球の事に詳しいようだったし、それを見せびらかしたがつていた。この世界を実質的に統べている大国の存在に気付いてないとは考えにくい。

- いや、待った。それより前にもとんでもない見落としをしているぞ、俺達は。

雷門にやってきた宇宙人と名乗る連中は - 随分流暢に日本語を話していたではないか。あれは一体どういう事だ。エイリアの科学文明では、言語翻訳の技術も格段に進んでいる - と解釈できないわけではないが。

最初から奴らが日本だけにターゲットを定めていたとしたらどうだろう。少なくとも最初は日本で何かしなければならぬ事があって、雷門に降り立ったとしたら。

疑問は山積みだ。奴らは何故支配の手段にサッカーを選んだ？あ

んな回りくどい方法をとった？そしてサッカーはサッカーでも、プロではなく中学サッカー界ばかり挑発してくる理由は？

そして肝心のエイリア学園が子供ばかりで構成されている訳とは。

- - 知恵比べか。…いいだろう。

受けて立ってやろうではないか。

天才ゲームメーカー、鬼道有人の名にかけて。

【0・3・未来予知の、得手不得手】

そこは暗い暗い、奈落のような道だった。

これはきつと、夢。夢なんだ。それが分かっているながら、風丸一郎太は恐怖を拭い去れないでいる。

今が夢だとしても――ただの夢では無い気がしている。同じ事が前にもあったのではないか？その時の結末を知るからこそ、自分はこんなにも怯えているのではないか？

――逃げなきゃ。早く、逃げなきゃ……っ！

ゼイゼイと息を切らし、走る。ああ自分の脚はこんなに遅かっただろうか。これでは雷門一の疾風ディフェンダーなんて呼べやしない。笑い出そうとしたが、喉から漏れたのは悲鳴のような喘ぎだけ。脚が恐ろしいほど重い。体力を消耗しているから？それもある。でも、それだけじゃない。こんな時にこそ火事場の馬鹿力とやらが発揮されればいいものを。

足の裏に伝わる、冷え切った堅いアスファルト。その感触だけが教える。自分はまだ走れている、と。

追ってくる足音と気配。その相手の姿は見えない。見えないが確実にそこにいりと知っている。

捕まったら。捕まったら恐ろしい目に遭う。とんでもない地獄が待っている。具体的な内容は何一つ分からないが、それでも風丸は確信していた。

逃げ延びなければ。

だが――いつまで？相手が諦めてくれるまで？それとも自分が諦めるまで？

「つかまえた」

がしり、と。着ていたパーカーのフードを捕まれた。愉しげな笑い声が反響する。

嫌だ。

嫌だ。

嫌だ！

怖い！！

「いやだあああ
ーッ！」

地面に押し倒され、馬乗りになれる。相手の耳障りな笑い声。それに混じって遠くから別の声が聞こえた。

それは――泣き声。

誰かが嗚咽している。一体誰だろう。とても聞き覚えのある、懐かしい声のような。

「ま……か……っ……かぜ……る……っ……!!」

途切れ途切れだが、自分の名前を必死に呼び続けているのが分かった。

ああそうだ、この声は――円堂。

どうして彼が泣いているのだろう。束の間、風丸は恐怖を忘れる。それを上回る、悲しみによって。

-
-
- ならないで。

泣かないで。

君は自分達にとって太陽だから。光そのものの存在だから。誰よ

り君には笑顔が似合うから。
どうして泣いているの。
何が君を悲しませているの。

- - ああ。

駄目だ。伸ばした手は宙を掻くばかり。大切な親友の姿にも存在にも届かない。目の前に在る筈の現実ですら。

自分を押さえ込んでいる人影がニヤリと笑うのが分かった。振り上げられる手、その先に光る銀色。風を斬る音。鋭い刃物の切っ先が振り下ろされて - - 。

- - だれか、たすけて。

でも一体何から？誰から？自分は助けて欲しいのだろう。

「風丸！風丸、おい！！」

体を揺さぶられる。先ほどまで響いていた泣き声が、怒鳴るように叫ぶ声に変わる。

急速に浮上する意識。戻って来る現実感に、風丸はぼんやりと瞼を持ち上げる。

最初に飛び込んできたのは円堂の顔。ドアップ、っていうか顔近すぎだ。最初に浮かんだのは、そんなある意味どうでもいいこと。

「円、堂…」

「良かったあ。目、覚めたんだな」

「我がサッカーバカのキャプテンは、心底ほっとしたように笑った。」

「大丈夫か？なんかすっごい魔されてたぞ」

外はまだ薄暗い。どうやら派手に魔されていた自分を、円堂が起こしてくれたらしい。もしや起こしてしまったのだろうか。だとしたら非常に申し訳ないのだが。

「…ごめん。ちょっと嫌な夢、見てた」

嫌な夢。ああ、思い出したくないのに、何でこんなにハッキリ覚えてるんだろう。

何かから追われて、逃げて。挙げ句自分が殺される夢 - - なんて。

「嫌な夢？どんな？」

「大した事じゃないさ。所詮夢だし」

そうだ。所詮は夢。現実なんかじゃない。

なのにどうしてこんなにも不安になるのだろう。

もしかしたら、それは。

「…なあ、円堂」

夢の中で聞こえた、彼の声が。

「お前、泣いてたか？」

途端に。へっ？という顔になる円堂。分かりやすいまでのキョトン顔。こういう時の彼は本当に幼い。サッカーをやっている時はあ

んなに男らしいのに。

「俺がー？そんなわけないじゃん」

「…だよな。ごめん、忘れてくれ」

「何だよ、気になるなー」

夢の中でお前が泣いてたんだよ、と。言いかけてやめる。口に出してしまえば現実になってしまいう気がした。

彼の涙なんて、見たい筈がない。

彼をあんな風に泣かせるほど悲しい未来なんて、誰が望むというのか。

はぐらかす風丸の言葉は円堂の好奇心に火をつけてしまったようで、なあなあ何の話だよー？と食い下がる。

実に面倒だ。他に話題は無いものか――と車内を見回していた風丸は、自分の隣が空席になっている事に気付く。

キヤラバンの中の座席は毎回ランダムという名のいい加減ぶりだ。昨晚自分の隣に座っていたのは誰だっただろう。

そつだ。あのトラブルメーカー野郎だ。

「そついえば聖也は？いないみたいだけど」

確か昨夜は、彼と円堂と塔子、鬼道は仲良く(?)夜更かしをしていた筈だ。風丸はいい子に寝てた一人なわけだが、隣が騒がしくなれば目も覚める。また聖也の阿呆が何かをやらかしたらしく、塔子の手で座席の上に投げ飛ばされていたのである。

あいつがどーなろうが知ったこっちゃないが、眠りを妨げるのはやめて欲しかったところだ。二度寝した結果があのお悪夢。あの馬鹿のせいだ、と半ば八つ当たり気味に思う。

「聖也？ああ、なんか急に仕事入って本社に戻る羽目になったって飛び出してっただけ。部下がミスして尻拭いめんどくせーとか愚痴ってた」

うまく誤魔化されてくれたらしい。円堂が思い出す仕草をして説明する。

「無理矢理にでも何でも、今日中に仕事終わらせて戻って喚いた。別ルートで白恋中に向かうからそっちで落ち合う事になってる」
「なるほど」

聖也が学生と社会人の両立に奔走してるのは有名な話だった。親がいなくて自分の食い扶持は自分で稼がなくてはならないらしい。また、誰かに仕送りをして養っているせいで金がいるねだという噂もある。詳しい事は誰も知らない。

仕事についてもよく分からない。普通の会社員やアルバイトでないのは確かだった。たまに妙な生傷をたくさん作って帰って来たり、そこそこの地位が高いのか携帯で部下に怒鳴る姿も稀に見る。また、授業中にこっそり書類仕事を片付けている姿も目撃されている。

鬼道曰く、海外の軍事に関わる仕事ではないかとの話だった。携帯で彼が話す内容に、某国の軍事用語が混じっているという。少なくとも、あまり安全な仕事で無いのは確かである。

それでも複雑な事情が垣間見える事から、誰もが深く突っ込んで聞けないのが現状だった。それとも瞳子監督だけはある程度把握しているのだろうか。

「今何時だ？つてか今場所はどのへんだ」

「青函トンネルを通過中よ」

声は意外なところから聞こえた。風丸と円堂がいる座席は前から二番目である。一番前に座る瞳子に、話し声が聞こえてもおかしくはない。

「雪原を抜けるのにどれくらいかかるか分からないけど。その前に一度市街地寄って買い出しするから、そろそろ起きて貰ってた方が助かるわ」

相変わらず淡々とした口調で言う監督。ポーカーフェイスのその顔は、暗さもあつて感情が読めない。

「もしかして…煩かったですか、俺達」

「多少は。…でも、私はあなた達より早く起きてたから関係ないわ。気にしないで」

気にしないで、というならもう少し口調だけでも優しく言ってくればいいのに。そのまま前を向いて沈黙してしまう瞳子。

風丸は彼女のことあまり得意ではなかった。SPフィクサーズ戦での采配と観察力から、実力があるのは確かだ。しかし豪炎寺の一件といい、完全に信頼を寄せるには彼女はあまりに物を語らなすぎた。

響木監督や理事長がチームを任せたくらいだ。そういう意味では自分達も彼女を信じるべきだとは思っただけだ。

今はまだ、考える事も問題も多すぎる。ただでさえ豪炎寺が抜けてギクシャクしがちなチーム。このままでは実力以外の意味でも、エイリアととともに戦えるか怪しい。

「白恋中のストライカー…吹雪士郎って言ったっけ。どんな奴だろうな」

「さあな」

どんな奴なのか。円堂はむしろ会つのを楽しみにしているようだ。ワクワクが顔に出ている。自分もいつもなら、もっと純粋な受け止め方ができた筈だ。

でも、今は。

瞳子監督が、彼の名前を出したタイミングが最悪だった。いや正確には、吹雪を仲間にしようと提案したのは響木監督だったわけだが。

まるで自分が追い出した豪炎寺の穴埋めをするかのように、アツサリと代わりのストライカーを探すと言い出した瞳子。そりゃ周りの不興を買うのも致し方ない。

特に、染岡の反発が凄かった。彼は自分の実力への自信や、雷門

のFWとしてのプライドの高い選手だ。

そんな彼が、豪炎寺のことだけは唯一無二のライバルとして認めていた。その代わりのストライカーなど、簡単に受け入れられる筈もないのである。

- 俺だつて豪炎寺のこと、悔しくなかったわけじゃない。だけど。

いつまでもその場所に立ち止まっているわけにはいかない。自分達はもはや、楽しいだけのサッカーをやって赦される立場にはないのだから。

自分達はフットボールフロンティアで優勝した。数多の参加校の、数多の選手達の夢を踏み台にしてその高見に立った。

そして今度は日本の中学生達だけでなく。世界の未来をも背負つて立とうとしている。大袈裟だけど、冗談でもない言葉。自分達は今もはや、自分達の意志だけで折れる事は赦されない。

そして強くなる為には、あらゆる努力を怠つてはならないのだ。強くなる努力を、そして新しく生まれ変わる努力を。

技術的にも精神的にも、豪炎寺に依存したままのイレブンでいい筈はない。染岡にだつてそれは理解している筈なのだ。

理性と感情。そのどちらを優先すべきか、時に応じて変えられないほど自分達は子供じゃない。

- 力が欲しい…強くなる為には、もっと力が。

世宇子中との試合。アフロディ達の姿が脳裏をよぎる。神のアクアという名のドラッグで強くなった戦士達 - あれが結局どんな薬だったかはよく分からないけれど。ただ服用するだけで圧倒的な力を得る事の出来る魔法の水。

サッカーを愛する者にとつてのタブーであると知っている。それでも、風丸の胸の奥で、もう一人の自分が囁くのだ。

御覧。あんなに魅力的な物があるかい？ - -と。

- - 世界を救う為にタブーを犯すのは… 本当に罪なのか？ なあ円堂…。

尋ねかけた声は音にならないまま、霧散する。隣に座った円堂は
楽しげに未来を語っていた。

幸福の訪れを、まるで疑う事など知らないと言つように。

【0・4・紅い傷口、瓜二つ】

白恋中へ向かうまでのバス。大雪原にて、ちょっとしたトラブルがあった。思い返して、塔子は今更ながらに胸をなで下ろす。

“ ちよつとした ” で済むのは結果論だ。一步間違えば大惨事になっていただろうから。

北ヶ峰を通過中に、木の下で震えていた子供を一人拾った。外ハネの銀髪に、整ってはいるがどこか幼な顔な少年。彼は何故だか小さな荷物とサッカーボールだけ持って遭難していた模様である。

ほつとく訳にもいかず、彼をキャラバンに乗せた、そこまではいい。しかしその直後に雪にタイヤをとられてバスが停止。そして - 見慣れない物体に興味を示したのか、山親父と呼ばれる熊がバスを襲ったのである。

あのままバスを横転させられていたら、全員怪我では済まなかった筈だ。ここは、メンバーで唯一まともな戦闘経験のある（というかSPフィクサーズの本領は本来サッカーではなく、要人護衛だ）自分がなんとかするしかないか、と塔子が腰を上げかけた時。

先程助けた少年が、見事に熊を倒してみせたのである。多分、他の面子には分からなかっただろう。しかし戦い慣れた塔子の目には確かに見えていた - 少年がその俊足で熊の背後に回り込み、サッカーボールを熊の頭にぶつけて昏倒させたのを。

並の技術と度胸では、ない。あれだけのシュートが打てるのだ、少年のポジションは恐らくフォワード。

そしてこの北海道で、それだけの實力を持ったストライカーといえは - 。

- あいつが吹雪士郎、か？

その予想は、あつさりの中した。白恋中で紹介された吹雪士郎と

は、まさしく彼の事だったのだから。

人間見かけによらないとはこの事である。虫も殺さないような、ばやーんとした顔で、あれだけのシユートをぶちかますのだから熊殺しの吹雪、はあながちガセでもなかったらしい。

とりあえず彼の实力を見たいと瞳子が言うので、着いて早々、体を暖める暇なくチームはグラウンドに放り出される事になった。豪炎寺の件を引きずる染岡はますます不機嫌だし、目金や壁山は寒いとごねていたが完全に無視である。

後者はともかく前者を放置するのはあまりよろしくない気がするのだが――その辺り監督はどう考えているのやら。

「吹雪つてちよつと緊張感足りなそうだけど……悪い奴じゃないみたいだな。うん、仲良くなれそう」

「お前が仲良くなれなかった奴なんて、見たことないぞ」
素直に感想を述べると、笑いを含んだ声で鬼道に返された。

「誰とでも仲良くなれる。それがお前と円堂共通の長所だな」

そうなんだろうか。確かに、自分とはりあえずぶつかって喧嘩してみても（この場合の“喧嘩”がサッカーである率は非常に高いが）、仲良くなるうとするタイプである。そして言われてみれば先入観から“こいつは絶対受け入れられない”という人間には未だかつて出逢った事がない。

外見だとか人間性だとか人格だとか――そんな問題以外で、わだかまりのある相手は除いて、だが。

「おーす！遅れて悪い、今着いたぜー」

一同がグラウンドに続く階段を降りていると、下から登って来る人物と鉢合わせた。仕事だなんだで一時別行動をとっていた聖也である。宣言通り、一日で仕事を片付けて戻って来たらしい。

「一体どうやって来たんだよ？飛行機？」

「会社のヘリ。パシリに使った」

「はあ！？」

見れば確かに、ブルブルと遠ざかるプロペラの音がする。何より向こうの方に小さくなっていくヘリコプターの影。

何処の世界に、ヘリをパシって移動する会社員がいるというのだ。いや、目の前にいるから問題なのだが！

「実は仕事終わんなかったんだけどな。残りの書類は、部下にまわすと押し付けてきた！やー楽しかった」

「最低だアンタ……」

彼と同じく、社会人と学生を両立している立場である塔子は心の底から呆れ果てる。そんないい加減っぷりで何で彼は会社をクビにならないのだろう。余程特殊な仕事内容なんだろうか。

「俺の事あ今はどうでもいいだろ。それより……久々に懐かしい奴に逢えるってんでこつちもワクワクしてんだ。おーい、吹雪ー！」

階下から手を振る聖也。塔子が目を丸くしていると、後ろからトテトテと階段を降りて来ていた吹雪が驚きの声を上げる。

「聖也さん！？……お久しぶりです！」

知り合いなんだろうか。それも相当親しそうに見える。ぼんやり顔の吹雪が、目を輝かせて柵から身を乗り出しているのだから。

「そんな前に出ると階段から落ちるぞー。それに敬語はやめろつつたろ」

「う、すみません……」

「ま、いいけどねん」

階段を降りてきた吹雪の頭を、わしゃわしゃと撫でる聖也。その仕草だけで、なんとなくこの二人の関係が見えた気がした。さしず

め、面倒みのいい兄貴と可愛い弟分つてところか。身長差があるせいで余計そう見える。

「その…この間はあるがとう聖也さん。仕送りだけでも有り難いの、忙しい中来てくれて」

タメ口に慣れていないのだろう。愛らしい顔をやや恥ずかしそうに染める吹雪。こうして見ると彼は小学生でも通りそうだ。顔もそうだが仕草が初々しくて、なんだか新鮮なものとして目に映る。

そして一つ、ピンと来た事があった。聖也がお金を仕送りして世話しているらしい、という人物。ひよつとしたら彼が。

「なるほど。聖也が保護者をしていたのが吹雪だったわけか。世間は狭いというかなんというか」

塔子とまったく同じ考えを鬼道が代弁する。

「可愛いだろー俺のふぶちゃん。お嫁にやらんぞ、パパ寂しいもん！」

吹雪を背中から抱きしめて、大袈裟に泣く仕草をする聖也。

「駄目だよさとやん！吹雪君は白恋中みんなでお嫁に貰ったんだからねー！」

「右に同じ！紺子ちゃんいい事言う！」

「僕、いつの間に聖也さんの物になったんだろ…。ってか嫁？王子とか旦那じゃなくて嫁なの僕？」

「ぎゃいぎゃいと騒ぐ聖也と白恋イレブン。当の吹雪は苦笑してされるがままである。」

なんか新たなコント集団がいるでやんす、と栗松が呟くのが聞こえた。その彼とこっそり漫才コンビを組んでいる壁山は、そうかこ

れがお笑いのプロつか！と見当違いに感動している。

「前に仕事で、ふぶちゃんに関わる事がありまして。で、色々あつて一人暮らしのふぶちゃんの金銭的援助を俺がする事になったわけです。以上」

「まったく説明になってないぞ、それは」

「細かい事気にするでないよ鬼道」。何、お前もウチに嫁に来る？養子でもオツケイよ？パパ大歓迎」

「心の底から遠慮する」

聖也のところで世話になるなど御免被る。世話されるどころか、間違いなく自分が彼の世話を焼かされる羽目になるのは目に見えている。

そんな風に皆が騒ぐ中、一人外れた場所でこちらを睨んでいる人物。染岡だ。吹雪が既にチームと親しくなりつつあるのが気に入らないらしい。不機嫌オーラは今やドス黒いまでになりつつある。

ありや本当にどうしたものか。隣で鬼道が頭を押さえるのが見えた。チームで問題が起きると、巡り巡って苦労するのは多分鬼道なのだ。根が真面目すぎて、他人ごとでも放置できない質。よく電話で愚痴の相手になっていた塔子は知っていた。

これからは自分も彼と一緒に行動できるのだ。メンタル面でも鬼道の負担を減らせるように頑張らなくては、と胸の内で誓う。

その時だ。

ドサッ。

ドサドサドサッ！

雪が激しく滑り落ちる音。僅かに地面が揺れる。

誰かが、雪崩か！？と叫んだせいで全員が身構える事となった。

雪国ならではの災害。特に山間の白恋中の近く、北ヶ峰の付近は雪崩が多い事で有名なのだ。

しかしすぐ杞憂だと知る。視線を少し上にズラして音の発生源を

辿れば、校舎の屋根の雪が不自然になくなっていく箇所があった。地面には小さく積み上がった雪山が。

「な、なんだ…ビックリしたなもう」

安堵に胸をなで下ろす塔子。だが再び視線を吹雪に戻した時、その姿にぎよっとする事になる。

吹雪がうずくまって震えていた。ガタガタ、という効果音が聞こえそうなほど。両手で体を抱きしめて、明らかに何かに怯えている。その姿を心配そうに見つめる白恋メンバー。彼の背を、聖也が子供をあやすように撫でていた。

「大丈夫だよ、吹雪。大丈夫。屋根の雪が落ちただけだから、ね」

その言葉に顔を上げる吹雪。明らかに怯えと不安の入り混じった瞳が聖也を見ていた。

ああ、同じ眼だ。

蘇った記憶に、塔子は握りしめた拳が震えるのを感じた。息を吞んで立ち尽くしている鬼道の顔を、見る事ができない。

同じ、眼。

自分は同じ眼を、昔見た事がある。

「屋根の雪…が？それだけ？」

「うん、それだけ。安心しな、吹雪」

聖也は優しい声で、吹雪に囁く。

「心配しないで。誰も死んでなんかいないよ」

他の者達には聞こえなかったかもしれない。だが近くにいた塔子と、多分鬼道にはその言葉も聞こえていた。

誰も死んでなんかいない？という意味なのか。

それに吹雪のあの症状は。

- - PTSD…？

正式名称は、心的外傷後ストレス障害。かいつまんだ説明の仕方をすれば、過去にとても辛い出来事があり、そのトラウマから発作的に恐慌状態に陥ったり精神不安定になったりする - - というもの。特に、その“辛い出来事”を連想する事象が起きると、発作を起こしやすい。例えばバス事故に遭った人間は、また事故が起きたらという恐怖からバスに乗れなくなったりする。無理に乗ろうとすればパニックを起こしたりする - - そんな具合にだ。

今の吹雪の症状が確実にそうだとは言い切れない。だが。

- - 前に。二回目に鬼道に会った時と…同じ。

あの頃。妹と引き離され、鬼道家に引き取られたばかりで、名家の重圧とプレッシャーから常に高ストレス状態にあっただろう鬼道。そこに加えて - - あの影山からサッカー教育を受けるようになったのもあれくらいの時期だった筈。

不意の接触。特に大人との接触を酷く怖怯えた鬼道。時には大人に背後に立たれるだけでパニックを起こしていた。あの時の鬼道は、今の吹雪と同じ眼をしていたのを覚えている。

彼が日常的に影山の虐待を受けていた事を知ったのもまた、その時の事で。

- - 影山から離れた今、鬼道を傷つける奴はいない。けどまだ、傷が癒えたわけじゃない。

心の傷は、簡単には消せない。
いや、どんなに時間が経とうとも、完全に消す事などできはしな

いのだ。

- - それでも、あたしは救いたい。鬼道は勿論…吹雪の事も。

「随分小心者ね。この程度で驚くなんて」

何も知らない、夏末の台詞に。瞬時に湧き上がりかけた怒りを、塔子は無理矢理沈めた。吹雪がごまかすように笑う声。それが酷く、辛かった。

知らない事は罪じゃない。でも。

知らないから、では赦されない事もある。

- - せめていつか。思い出して後悔してくれ。…その言葉が、罪だった事を。

まだ何も知らぬ自分に、言えた言葉ではないけれど。

【0・5・僕らの戦場、此処に在り】

ああもう、どうしてくれよう。

グラウンドを整備して、吹雪の実力を見る為に、白恋と試合する事になった雷門イレブン。心底頭が痛い鬼道は、隣で不機嫌オーラを撒き散らす染岡を横目で見た。

いや、分かっただけなのだ。豪炎寺が抜けた今、雷門は明らかに決定力不足。そして現時点で豪炎寺の代わりに誰がFWを務めるかと言えば――自分の他に、適任者はいない。

目金も一応、FWではある。が、ストライカーを任せるにはまだまだ彼が実力不足である事は、誰の目からも明らかだ。

それでも、強面にさらに磨きがかかっている染岡とツートップを務めなければならないのは――鬼道からすれば精神的に、かなりキツイものがある。

――分かっちゃいるんだがな……甘えている場合じゃないって事くらい。

他人から評価されるほど、自分のメンタルは強くない。単に隠すのに長けているだけである事を、鬼道自身が一番よく分かっている。まあそれでも、昔よりは十分打たれ強くなったのだ。帝国時代は、辺見と喧嘩して超八つ当たりモードの佐久間を止めに行っただし、源田の愚痴に延々と付き合った事もあるし。

ついでに、某一年がやらかした悪戯という名の阿呆なミスを、影山に知られる前に必死こいて隠蔽した事もある。うん、あの時の寿命の縮みっぷりに比べたらこれくらい大した事あるまい――！

鬼道はため息を一つついて、自分を律した。まるで親の仇でも見るかのごとく、吹雪を睨んでいる染岡を見る。

とりあえず今は私怨は忘れて試合に集中しろ。そう言いかけて、

しかし鬼道より先に当の染岡が口を開いた。
ただし鬼道に向けて言った言葉ではない。

「おい！何で吹雪があんなに下がってるんだ！！あいつはFWじゃなかったのか！？」

染岡の視線の先。確かに――何故だか吹雪がセンターバックの位置にいる。彼はストライカーだと聞いていたのに、一体どうして。それとも自分達の情報が誤りだったのか？

「吹雪君はFWだよ。でも今はまだDFなんだ」

紺子、と呼ばれていた傘を被った小さな女の子が答える。白恋イレブンの中でも、とりわけ吹雪と仲が良さそうだった一人だ。

「今はまだ？」

鬼道が尋ねると、少女はにっこりと笑った。これより先は見てのお楽しみ、と言うように。

だが小さく呟いた声が、鬼道の聴覚には届いていた。

「FWは、アツヤの方だから」

アツヤ？

アツヤって、一体誰だ？

だが、考える時間は無いようだった。瞳子が叫ぶ。

「今日は作戦パターンDで始めなさい。いろいろ試してみたいの」

作戦パターンD？それは確か、先日鬼道が提案したばかりのフォ

ーメーションではないか。練習していないわけではないが、まだ実戦では試していない。果たしてうまく行くのかどうか。

だが、瞳子の事だ。どうせ問い質しても語らないだろうが、訳があるのは間違いない。不信感が全く無いわけではないが、個人的に彼女の実力自体は認めているのである。

ホイッスルが鳴った。キックオフだ。

今日のポジションは以下の通り。

FWに染岡と鬼道。

MFに栗松、聖也、一ノ瀬、目金。

DFに風丸、壁山、塔子、土門。

GKに円堂。以上である。

人数の都合もあり、聖也が久々のスタメン。やや不安は残るが仕方ない。

「聖也、ブチかませ！」

その聖也に、ボールを下げる。その瞬間、隣で染岡が走り出したのが気配で分かった。胸でトラップしたボールを高々と打ち上げる聖也。

「行くぜー！彗星シュート！！」

開始十秒。いきなり聖也が白恋ゴールに向けて彗星シュートを叩きつけた。距離があるとはいえ、強力な必殺技でも使わない限り止められまい。それだけの威力を持った一撃。

が。聖也の最大の弱点はコントロール力の無さにある。ド真ん中を狙った筈の彼のシュートは、勢い虚しく白恋のゴールポストにぶつかり、ガンツと重い音を立てた。

そして、威力の死んだボールを、GKの函田がキャッチ。カウンターをくらわせるべく手を振り上げ――その眼が見開かれた。

「聖也のロングシュートなんざ、最初から期待してねえからな」

染岡が率直な感想を述べる。向こうで聖也が酷い酷いと喚いているが、実に同感だったのでキッパリ無視だ。

白恋メンバーが聖也の彗星シュートに気を取られている隙に、染岡&鬼道のツートップが白恋ゴールのすぐ前に迫っていた。その少し後ろには一ノ瀬と目金が。DF陣営も、壁山と塔子の最後の砦を除いて殆ど真ん中近くまで上がってきている。

作戦パターンDとは。点取りに特化した、超攻撃的フォーメーションである。

まず、MFの一人にボールを下げ、初っ端からロングシュートを打たせる。普通のシュートでは意味が無い。体力消費のしく無い、彗星シュートが最もこの役目に適してある。

この彗星シュートがゴールすれば儲けもの。が、入らなくても問題は無い。今回なんぞは打つのが聖也である為、余計に点は望めない。

このシュートがどんな結果を辿ろうとこちらにはメリットがあるのである。彗星シュートは必殺技を使わなければ止められない。止める為に相手が必殺技を使って来たなら、相手が使う技の種類を知る事が出来、尚且つ相手GKの体力を削れる。

GKより前、DFがシュートブロックで止めてきても同じだ。シュートブロックの出来るような技は体力の消耗が激しい。要のDFに使わせただけで効果はある。

そのどちらも叶わないケース――今のうちに、必殺技を使わせる事なく彗星シュートを外してしまったパターン――も、それはそれで構わない。

この作戦の最大の目的は、彗星シュートを罔に使っている間に、こちらの攻撃体制を整える事なのだから。

相手チームの眼が彗星シュートに向いている隙に、FWと攻撃型

MF陣が一気に上がる。キーパーがパンチングで弾いたなら、こぼれ球をそのまま拾ってボレーで畳みかける事ができ、キャッチした場合でもあちらのディフェンス陣を徹底的にマークできる。

よしんばGKが苦し紛れにチェックの厳しいDFにボールを回しても。こっちはそれを奪ってそのまま至近距離からシュートを決めるだけ。GKがキャッチしても同じ事を繰り返す。そう、こちらのゴールが決まるまで。

つまりは、向こうが作戦に気付いた時には、すっかりこちらの策にハマっているという寸法なのだ。

「やるじゃない」

鬼道がマークした背後で、吹雪が愉しげに呟くのが聞こえた。染岡が忌々しげに舌打ちする。

白恋のGKが、明らかに焦ったのが分かった。なんせパスできる相手がいないのだ。この場合、彼が苦し紛れにボールを投げる相手が誰なのか、想像するのは難しくない。

案の定、パスはこちら――即ち吹雪の方へと飛んできた。ピンチの時にエースに頼るのはごく自然な人間心理だ。やや分かりやすすぎるが。

「させないでやんす！」

背後で吹雪がマークを外そうと動く気配。が、そこを上がってきた栗松が妨害する。吹雪が気を取られて動きを止めた――その一瞬で十分だ。

「一之瀬！」

「ああ！！」

連携技発動。飛んできたボールを一之瀬にパス、その一ノ瀬が勢いをつけてヘディング。再びボールは鬼道へ。

「ツインブースト!!」

白恋のディフェンス陣は動けず、函田も反応できない。二乗の力で勢いを増したボールが、白恋ゴールに突き刺さる。

ゴール！まずは先取点だ。

「流石、フットボールフロンティアで優勝した雷門イレブンだ。今のフォーメーションも、チームの連携がちょっとズレたら成功しない。いいチームだね」

ボールを蹴って中央に戻しながら、吹雪が微笑む。

「だけど、同じ手が何度も通用すると思ったら大間違い」

再びホイッスルが鳴った。白恋のFW、氷上が、同じくFWの喜多海にパスする。そのままドリブルで上がると思いきや、今度はMFの空野へ。

パスが細かくて早い。しかも正確だ。

吹雪以外の白恋メンバーはけして身体能力が高くない。先程の雷門の攻撃だけでもそれが見てとれた。競り合いになれば自力の差でこちらが勝つだろう。

それを理解した上の、戦術。ショートパスを細かく回しながら、ジリジリ上がっていく。先日、雷門がジェミニストームに対してやったのと同じ作戦だ。

- - だが、うまくこちらのDF陣を誘導しない限り、パスだけで進むのには限界がある。

相手チームのパスを読んで奪うのも手だが、どうやら白恋イレブ

ンは身体能力には欠けてもコントロールには自信があるようだ。誘いこまれて開いたスペースにパスを出されても面倒。ならば。

鬼道は自陣で身構えている、DF陣営を見た。雷門の最後列を護る二人、壁山と塔子にアイコンタクトをとる。どうやら彼らも理解したようだ。

パスを回しながら、上がって来るMFの居屋。彼に皆が注目している隙に、FWの氷上が上がって来ている。彼にパスを出すべく、居屋の足が動く――今だ！

「塔子！壁山！！」

「オツケイ！！」

「ら、ラジャーっす！」

二人が猛ダッシュで、センターラインに向けて走り出した。その際、目立ちやすいよう手を上げる事も忘れない。居屋がしまった！という顔をするがもう遅い。既にボールは氷上のすぐ側まで飛んでいた。

氷上がパスを受ける。その瞬間に鳴るホイッスル。オフサイドトラップだ。

「ひゃあ…雷門イレブン凄か。こんな事もできるのかあ」

MFの雪野が鼻を嚙りながら感嘆する。相手を誘導してオフサイドを誘発する。失敗すればリスクは高いが、パスで攻めて来る相手には有効な手段だ。

自分達のゴールを守っているのが円道だというのも大きい。彼の鉄壁の守りがあるからこそ、こちらも賭に出る事ができるのだから。「さあ、もう一点いくぞ！」

「おう！！」

円堂の掛け声に、力強く答える雷門イレブン。塔子のスローインを壁山が受け、栗松へパスする。

「行くでやんすよ！彗星シュート！！」

今度は栗松の彗星シュートがフィールドを切り裂いた。聖也とは違い、威力は落ちるものの正確なシュートだ。真っ直ぐにゴールへと向かっていく。

しかし。

そのシュートの軌道上に、いつの間にか吹雪が回り込んでいた回りこんでいる。

いつの間に！そのスピードと対処の早さに目を見張る鬼道。だが彼の凄さはこんなものではなかった。

彼はGKの真正面で右足を振り上げると、シュートに向けて思い切り蹴り込んだのである。誰もが目を見張った。なんと必殺技が、GKでもない人間に、シュートブロックも使わず止められてしまったのだから。

「さあ、反撃開始だよ」

吹雪はそのままボールを前線へ。受け取る喜多海。が、すぐに風丸がそれを奪う。

「攻めろ、染岡！」

「おっしゃあ！」

吹雪を負かせたがっていた染岡は嬉々として敵陣に切り込んでいく。

「豪炎寺がない今、雷門のストライカーは俺なんだ！お前なんかに負けるわけにやいかねえっ！！」

吹雪が笑う。無邪気に、楽しそうに。

「そついう強引なの、嫌いじゃないよ」

【0・6・雪原と、永久の雪嵐】

染岡がドリブルで次々と白恋イレブンをかわしていくのを、鬼道は見ていた。元々熱くなりやすい染岡だが、今日はいつもにも増してプレイが強引だ。

そこはパスすべきだろうに。

D F二人に囲まれて尚力任せに突破していく彼に、鬼道はさらに頭が痛くなった。確かに今の染岡の実力なら、力技でも並大抵の敵ならば蹴散らす事ができるだろうが――。

並大抵、ではない相手が此処には居るのだ。その相手こそこの度の染岡の一方的な怒りの原因にして、潰したい標的ではあるのだが、そんなに冷静さを欠いていては、勝てる勝負にも勝てやしないだろうに。

そんな鬼道の予感はあるさりの中した。ペナルティエリアの手前、ついに吹雪が動いたのである。

少年はまるで滑るように大地を蹴り、冷気を振りまきながらその脚を大地に叩きつけた。

「アイスグラウンド！」

凄まじい勢いで次々上がる氷柱。染岡は逃げる間もなく氷漬けにされてしまった。その横を華麗に滑っていく吹雪の身体。胸元には、染岡から奪ったボールが。

なんて技だ。先ほど、片足で軽々彗星シュートを止めてみせた事といい、とんでもないディフェンス能力だ。

「そうか！吹雪はストライカーじゃなくて、凄いディフェンダーだったんだな！」

合点がいった、というように円堂が叫ぶ。どうやら敵である事も忘れて、すっかりワクワクスイッチが入ってしまったらしい。それが彼の長所でもあるのだが。

「さて、反撃といこうか」

相変わらず、声だけはおっとりした調子の吹雪。スツとその手が自身の首元――どこか古びた白いマフラーに伸びる。

鬼道にその呟く声が聞こえたのは、果たして偶然か必然か。

「出番だよ、アツヤ」

瞬間。優しげだった少年の口元が、ニイツとつり上がった。挑発的に――否、挑戦的に。

――なんだ？ 雰囲気、変わった？

それに彼は今なんと言った？ アツヤ？ そっいえば彼のチームメイ
トの荒谷紺子も同じ事を――。

――まさか？

ギリリ、と。殺気にも似た強い威圧感。吹雪の眼に、先ほどまでの彼とは間逆の光が宿った。笑い声上がる。同一人物とは思えない――愉快で愉快でたまらないといった風情の声が。

「ははははっ！ いっくぜえ！ 今日もバンバン点をとってやつからよ
お！――」

挑発的に叫び、凄まじい勢いで上がっていく吹雪。あまりの彼の

変貌ぶりに、啞然とする雷門イレブン。その為反応が遅れた。まずい、カウンターアタックだ。

戻れ――！という円堂の声に我に返る面々。氷漬けから染岡がやっと解放された頃には、吹雪は自陣の奥深くにまで切り込んでいた。

「させない！」

鬼道が風丸と二人がかりで止めに行く。両側からのスライディング――普通のプレイヤーならひとたまりもない。だが。

「邪魔すんじゃねえ！」

悲鳴を上げて吹っ飛ばされる二人。地面に叩きつけられ、鬼道は呻く。恐ろしい。自分と同じ程度の体格しかないのに。見かけによらない、なんてレベルではない。あの華奢な身体のどこにそんなパワーが眠っていたのやら。

ゴール前。ボールを軽く打ち上げ、くると回ると回る吹雪。みるみる氷の塊と化していくボール。

必殺技が来る。それもとんでもないのが。

「吹き荒れる……！」

彼の名前のごとく。ボールに吸い寄せられるように、凍てついた風がフィールドを切り裂いて。

「エターナルブリザード……！」

高く空を舞う氷塊を、吹雪はゴールに向けて撃ち込んだ。雪嵐の尾を引いて、絶対零度の一撃が円堂に襲いかかる。

パワーだけではない。そのスピードを前に、マシン・ザ・ハンド

では間に合わないと悟ったのだろう。円堂は神の手の迎撃体制を取る。

「ゴッドハンド！」

黄金に輝く巨大な手が、凍てついたボールを受け止めた――かに見えた。しかし。

吹雪がニヤリと笑う。

ボールを受け止めた筈のゴッドハンドがみるみる青く凍てついていき、まるでガラスを割るような音と共に砕け散った。円堂の眼が驚愕に見開かれ、そのまま彼の身体ごとシュートは雷門ゴールに突き刺さった。

「ゴッドハンドが、こんなに簡単に破られるなんて……！」

秋が驚きの声を上げる。誰の目から見ても明らか。円堂のゴッドハンドが、吹雪のエターナルブリザードに力負けした事は。

これで一対一。圧勝できるだろうと高をくくっていた一部のメンバーは動揺を隠せないようだ。

「シヨボー奴らだな」

そんな雷門イレブンを、鼻で笑う吹雪。

「いいか。よく聞け。この俺がエースストライカー、吹雪士郎だ！」

高らかな宣言。さっきまでの穏やかな面影は微塵も感じられない。そこには自信に満ち溢れた、闘争本能の塊のような男がいた。

「こんなんじゃ満足できねえ！もっともっと楽しませろ……！」

まるで飢えた狼のように吼える。楽しませろ。その言葉に、染岡が憎々しげに顔を歪めるのが見えた。

彼の悔しさが、分らないわけではない。だが、今は申し訳ないながら、染岡の意地よりも別の事が気になっていた。

アツヤ、という別人の名前を呟いた吹雪。慣れた様子で戸惑う事もない白恋メンバー。何よりあの豹変ぶりには。

- - まさか… 解離性同一障害？

解離。それは思考や感情や行動が変容してしまい、一定の情報が
ある期間他の情報から統合されなくなってしまう状態を言う。それは
はかつて酷いトラウマを負った人間が、心理的外傷体験を消す為に
発現してしまうもの。

離人性障害や解離性健忘。解離性の障害には何種類があるが。解
離性同一障害の場合特徴的なのは、いくつかの異なった人格が出て
くることだ。

昔は多重人格、と呼ばれていたので、そちらの方が想像しやすい
だろう。本来の主人格の他に心の中に現れる、まったく別の存在。
主人格とは別の名前がついているケースが殆どだった筈だ。

素人調べなので自分も詳しい症状は知らない。確か主人格が、別
人格の存在を認識しているのは珍しかった気がするが。

- - あいつがPTSD持ちだとしたら、解離性同一障害を併発して
いてもおかしくない… か。

瞳子監督は、どこまで知っているのか。いや、それとも吹雪の世
話をしているらしい聖也に詳細を聞くのが先か。

鬼道はぎゅっと拳を握りしめる。小さく震えた右手首を、左手で
押さえ込む事で鎮めようとした。

離人性障害だ、と診断された事のある鬼道。自分もどうやらPTSDを患っているらしいというのは、周りの反応で薄々気付いている。そのたびに、大した事はない、と言い続けて来たけれど。

- 俺にしか出来ない事が、あるのかもしれない。

傲慢と知りつつ。そんな考えが頭の隅を掠めた。自分をじっと見る、塔子の視線を感じながら。

一体何が間違っていたのか？

一体誰が最たる悪だったのか？

そんな事、分かる筈も無い。だが分からないなりに佐久間次郎は考える。あまりにも噛み合っていない、この世界の原因を。そして今の現状が誰のせいで起こり得たのかを。

- 分かってる。そんなの、俺自身の力不足のせいだって。

一瞬頭をよぎったかの人の顔を、無理矢理思考から追い出す。

世宇子中に大敗を喫して。挙げ句レギュラーの大半が病院送りになったあの日。プライドをズタズタに切り裂かれた自分達には絶望しか無かった。屈辱、悲壮、憤怒、憎悪。幾多もの負の感情がない交ぜになった絶望しか。

何より佐久間にとって、怪我の大事をとってベンチに入っていたかの人 - 鬼道の目の前で醜態を晒した事が何より赦せなかった。

彼に繋がたところで結末は同じだったかもしれない。でも自分達は結局、繋ぐ事すら出来なかったのだ。

そんな彼のその後の行動は。自分達にとって唯一無二の希望であり、同時に絶望の続きだった。

- すまない、と鬼道は言った。そしてどうか待っていてくれないか、と。

世宇子を倒して来ると彼は言った。その為に雷門に転校する。必ず世宇子を倒して帝国に戻るから待っていて欲しい、と。

傲慢にして独善的な行為である事は、彼自身が一番分かっていた筈だ。何より敵を討ちたいと願った仲間達に、憎まれて終わるかもしれないという事も。

だが彼は何一つ嘘をついていない。今までついた事などない。本人が善意などという甘ったるい感情で道を選んだわけではないという事も、憎まれる覚悟をしてまで自分達を仲間として愛してくれている事も。

それが分かっていたから、帝国イレブンは誰一人鬼道を責めなかった。自分とて例外ではない。むしろ喜んで送り出した。彼の強さが、彼が雪辱を果たしてくれるその日が、自分達にとって最大の光明である事に違いは無かったから。

- 鬼道は言った。俺に、留守の間帝国を任せたい、と。だから俺達も言った。俺達の分まで頼む、と。

だが現実はある以上には過酷だった。自分と源田の二人。鬼道がいないサッカー部をまとめようと必死になった。レギュラー陣はついて来てくれた。しかし、他のメンバーはそうもいかない。

元々、二年生の鬼道がキャプテンである事に、三年生の多くが不満を持っていた。それでも彼らが逆らわなかったのはひとえに彼が

キャプテンに相応しい実力の持ち主であつた事。そして彼の人徳とカリスマゆえである。

無論そこまで至るにはかなりの努力があつただろう。反面、自分や源田には鬼道のように積み上げてきたものが無い。鬼道不在を良いことに好き勝手する連中が出るのは必然だつた。ましてや今は自分達を管理するあの総帥もいないのだ。

- 鬼道は、部で起こる争いをみんな把握して、自ら出向いて解決していった。それなのに俺と来たら、部員全員の顔と名前すら覚えちゃいない。

帝国サッカー部員の人数は軽く三桁に及ぶ。多分把握していたのも鬼道と影山の二人だけだろう。だがそんな事は言い訳にならないのだ。自分は鬼道に、部長代理を任されたのだから。

うまく行かないイライラが、他の部員達にも伝染する。

三年生が、レギュラーのメンバーを殴つた。一部が部の備品を壊した。二年の一人が万引きに手を出そうとしたのをすんでのところで止めた。一年の何人かが退部届けを出した。無茶な練習で身体を壊す部員が出た - -。

噛み合わない歯車が、うまく廻る筈もない。さらにはエイリアの強襲で、鬼道の帰りが遅れる事になったとあつては。

元々世宇子に負けた事で部員達のモチベーションは下がっていた。そこに加え、一時的にとはいえ、昔は弱小と蔑んでいた雷門に自分達のカリスマが行ってしまう事になったとあつては - -。

- それでも鬼道には言うしか無いじゃないか。大丈夫、俺達はうまくやってるよ...って。

練習を続ける仲間達を見る。レギュラーの皆は優しかった。その優しさが時に辛かったけれど。

まるでバラバラになった硝子の欠片を、傷だらけになりながらかき集めるような日々。終わりを告げたのは、一つのニュースだった。

護送中の影山零治が行方不明になった、という。

【0・7・思惑錯綜、盤上の駒】

その場所の名を、『お日さま園』という。

親に捨てられたり、親と死別したり――そんな見寄りの無い子供達を引き取って育てる孤児院だった。オーナー、吉良星二郎が慈善事業として始めたものの一つである。

戦争が終わって随分と月日が経過したが、引き取り手の無い子供達は後を絶たない。大人の事情で盥回しにされる子供、不可避の事故にみまわれた子供、そして駅やロッカーに置き去りにされた子供――。

吉良はそんな子供達を引き取って、我が子のごとく可愛がって育ててきた。子供達も吉良を父と呼び、慕ってくれた。妻を亡くしている吉良にとつて、その笑顔がどれだけ心の支えになった事だろう。だが今。この場所に、子供の姿は見当たらない。彼らの部屋に、私物が大量に置き去りにされたまま。

不在の理由を、知る者は少ない。秘書の研崎。自分の信頼のける部下達。そして、実の娘である彼女。世間一般の多くの者達は、このお日さま園が長らくもぬけの殻であつた事すら気付いていない。自分が気付かせないように手回してきたのだから。

「私はきつと地獄に落ちるのでしょうかね」

園の一室。妙に広く感じる和室で、吉良は呟きを漏らす。

「あの子と同じ場所には逝けそうにない」

座布団に座り、研崎が入れてくれた茶を啜る。その研崎は向かいあわせた場所に座り、相槌を打つ事も否定する事もなく、ただじつとこちらを見ている。

自分の言葉に反応せずとも。彼は恐らく、山ほどの事を心の中で語っているのだろう。吉良への不満もある筈だ。そもそも計画が始まって一番最初に、自分は彼を巻き込んだ。その人生の逃げ道を封じた。

恨まれていても仕方ない。それなのについて来てくれるのは、愚かな年寄りへの同情か、それとも秘めた野望あつての事か。

「旦那様は、何も間違つてはおりませんわ」

襖が開き、一人の女が姿を現した。その無礼な態度に、研崎が咎めるような眼をするが彼女は気にする様子も無い。

吉良はといえばすっかり慣れた事だったので特に何も言わなかった。立場上彼女の主人は自分だが、彼女に恩があるのも確かなのだ。何よりこの、“もう一人の秘書”にして“護衛頭”と言うべき女性には優秀だった。その頭脳も、体術も、知識も。

「わたくしは、何処までも旦那様についていきますわ。そう、地獄にだって」

旦那様は正しい事をなさってるんですもの、と紅い眼を細めて彼女は笑う。茶色いショートカットが揺れる。

いつだったか、研崎が彼女を喻えた事がある。あの女は得体の知れない、魔女のようだ、と。あんな身元もよく分からない女を信用していいのかと。

なるほど、彼女――二ノ宮蘭子は確かに、魔女という名が相応しい。どんな残酷な実験も物怖じしないどころか自ら先導して進め、その度に結果を残してきた。

美しく若い女である筈なのに、その内面は狡猾な老婆のようである。吉良自身、そんな二ノ宮に恐れを抱かなかったわけではない。

しかし――彼女が自分の前に現れなければ。恐らく吉良の時間は、

十年前で止まったままになっていただろう。あの子を失った、あの日のままで。

「私は正しい事をしてる…か。どうですかねえ」

何処か苦笑混じりに言えば、彼女は吉良の耳元で妖艶に囁く。
旦那様は間違っではありません、と。

「だって憎いのでしょうか？この世界が。あなた様の大切な人を奪った全てが」

二ノ宮の言葉が、麻薬のように全身に染み渡っていく。妖しい魔法に魅入られるかのように理性を溶かして、ドス黒い感情に染め上げていく。

そうだ。憎い。自分はこの世界の全てを憎悪している。

こんな世界でなければ喪わずに済んだ。あの子に何の罪があったのだろう。何故あの子があんな死に方をしなければならなかったのだろう。にも関わらず罪人は何故野放しにされたか。

赦さない。許せる筈が無い。

仇ヲ、討ツ。復讐ヲ。

ソノ為ナラバ私ハ、修羅ニモナロウ。

「…今更ですよ、そんな事は」

自分は死ぬまで、否死んでも永遠にこの世界を憎悪し続ける。永久の挽歌を歌い続ける。その為ならばどんな事でもすると決めた。後戻り？それこそ今更だろう。

「…報告に来たのではないのですか、二ノ宮」

研崎が溜め息をついて、先を促す。二ノ宮はそうでしたわ、と言って吉良から離れた。ややキツめの香水の匂いが離れていく。あてられたのだろうか。少しだけ目眩がした。

「作戦は第二段階へ。…新たな一手として、あの少年を派遣しました。あの坊やには“人間”として、雷門と闘って貰う手筈よ」

あの少年。特攻役でも構わないから、自分を是非作戦に使って欲しい。そう直訴してきた、あの子。

強がりだけど本当はとても甘えん坊で、自分が誉めると嬉しそうに眼を細めた。闘争心が強さは、自己犠牲の精神に繋がる。

創世の名を与えた彼らと同じく。吉良を本当の父として心から慕ってくれた、少年。

「不動明王、か」

ちり、と罪悪感が胸を焦がした。自分のした実験のせいで、少年がどのように歪んでしまったか知っている。

本当は、とても優しい子だったのに。

「ターゲットの奪還には既に成功したと報告が来ていますわ。“第一の駒”を雷門に当てている間に、あの男の元で調整することのこと。素材は届けてありますから、戦力が整うのはすぐでしょう」

「頼もしい限りです」

第一の駒。二ノ宮が誰を指してそう言ったかは知っている。同時に、その言葉で納得してしまった自分がいることを。

たとえ自分が正しかったとしても、やはり逝く先は地獄に違いのないのだ。

愛した者達を、いとも容易く駒として捨てられるようになってしまった、そんな自分は。

エイリア学園に勝つ為にはスピード向上が不可欠だ。吹雪と戦つてよりそれを実感した雷門イレブンは、彼を仲間に加えて特訓を始めていた。

スピードを鍛えるには、身体と同じくらい動態視力が必要となる。吹雪の進めで、スノーボードで身体を慣らすことから始めた面々。だが、なかなかその輪に加わろうとしない者もいた。

その代表たる人物、染岡を探しながら、鬼道は先ほどの聖也との会話を思い出していた。

そして彼から聞き出した。自分が危惧した通り、吹雪がPTSDと解離性同一障害を患っている事。その原因たる事故の話を。

『あの子は本当に強くて、優しい子。だから現実から逃げられなくて、自分を追い詰めて、心を病んでしまった』

あの事故は、あの子のせいなんかじゃないのにね。聖也は彼らしからぬ、寂しそうな笑みを浮かべて言った。

『だけどね。心がどんなに壊れても、あの子は家族の分まで生きる事を選んだんだよ。自分の中にアツヤの幻を作つてまで、生きようと頑張ってるんだ。…あんなに強い子を、俺は他に知らない』

雪崩という天災。目の前で、両親と弟が死ぬのを見てしまい、自身も死の淵をさ迷った少年。その傷の深さは本人にしか分かるまい。

それでも立ち上がった事が、どれほどの覚悟であったのかも。

フットボールフロンティアに白恋が出場しなかったのは、単に白恋ができたばかりの弱小チームだったから――だけではあるまい。過酷な戦いに臨むには、エースである吹雪の精神に問題が多すぎた。例えば雪崩を連想する揺れや振動だけで、恐慌状態になるとしたら。地震も多く、電車のような周りを揺らす乗り物も多い東京で、どれだけやっていけるのか。

『瞳子監督の決断は残酷かもしれない。でも、俺はそれを承知で、あの子と一緒に戦ってみたい。このまま現状維持しても、あの子はきっと救われないから』

そう語る聖也の眼。多分それは、自分が春奈に向けているものと同じなのだろう。母親が我が子を心から想う眼。聖也と吹雪はきつとそれでも構わないのだろうが。

実の妹を、娘を見るような眼で見ている自分はきつと異常なのだ。分かっていながら、鬼道はどうする事も出来ずにいた。自分は兄としてというより、親として春奈を愛している。他の愛し方など、知らない。

『壁が必要なんだ。あの子を救う為に、あの子がゆっくりと乗り越える為の壁が。』鬼道。君みたいに、誰より痛みを理解している子と一緒に……きつとできる。どうか協力してくれないか』

人の気配。鬼道は目を凝らして、その場所に近付いていく。

杉の木の陰に、見慣れたピンク頭が覗いていた。背の高い彼は森の中でも見つけやすい。これが小林などだったら、茂みに完全に埋もれてしまっていただろう。

「染岡」

声をかけると、彼は仏頂面のまま振り返った。相変わらずの不機嫌顔だが、さっきまでのくすぶるような怒りはもう無いようだった。焦燥。悔恨。苦痛。それらが無い交ぜになった顔で、じっとこちらを見つめて来る。

「…さつき、木野が来たんだ。多分お前と同じ用件でな」

苦虫を噛み潰したような声で言う染岡。

「分かってんだ…八つ当たりなのは。吹雪が悪いわけじゃねえ…俺の気持ちの問題だって事はよ。だけど…ふとした瞬間に比較しちゃう。こいつは豪炎寺じゃねえっんだって。…吹雪の荒探しばかりして、いちやもんつけたくなっちゃう」

あまりにも正直な、染岡の本音。いや、彼の事だ。ここまで至るまでも随分な葛藤があった筈。染岡の意志は強い。裏を返せば、意地っばりだ。

だが、彼には自分の弱さを認められる強さがある。それを他人に、素直に語る覚悟も。

元々帝国にいた自分は、けして染岡と付き合いが長いわけではない。それでも鬼道は彼の本質を確かに見抜いていた。

「豪炎寺はいつも真剣にサッカーと向き合ってた。なのにあいつと来たら、楽しませてくれたと…？ふざけやがって！」

「…あいつは、ふざけている訳じゃないと思う」
「あ？」

吹雪の弁護をした鬼道に、染岡は眉をハネ上げる。彼は知らない。吹雪が心を病んでいる事も、彼の身に何があったのかも。

「吹雪にとってサッカーは意識的に取り組むものではない。あい

つの存在理由にして、存在証明だ。呼吸をするのと同じ事なんだ、きっと」

サッカーを取り上げられたら、きっと吹雪は生きていく事ができなくなるだろう。サッカーをする事で、どうにか生きている意味を繋いでいる彼は。

自分も、そうだったから。

「随分吹雪の事、よく知ってたんだ。聖也あたりから聞いたのか？」
「まあな」

今はまだ詳細を語るつもりはない。自分が語らずして仲間達がどこまで気付けるか。知ろうと努力するか。それもまた一つの課題だから。

「吹雪を認めたら、豪炎寺の居場所がなくなる。そう思ってるんだろうが」

ドキリ、とした顔で目を見開く染岡。詭弁を承知で鬼道は語る。自らの願いを込めて。

「誰にも代役なんていない。吹雪と豪炎寺は違う人間だ。皆それを分かっている。お前は違うのか？」

優しい彼に、辛い選択を強いたのかもしれない。でも、自分達は受け入れて進むしかないのだ。

今此処にある、現実を。

【0・8・さようなら、可愛いティティ】

お前達は選ばれし民なのです、と彼は言った。

人より遙かに優れた星の民、その中からさらに選ばれた崇高な戦士だと。名誉な事だと誇っているのですよ、と彼は笑った。

言葉だけではない。その笑顔が自分を、自分達を虜にする。彼の為に働ける事。それはレーゼにとっては誇りであると同時に、唯一無二の存在理由であった。

エイリア皇帝陛下、と自分達は彼の人を呼んでいる。正式な名前は知らない。知る事すらおこがましいのだろう。物心ついた時には既に、彼は自分達にとって絶対の存在であった。神にも等しいほどに。

戦士達の誰もが彼を尊敬し、敬愛している。それは疑う事なき絶対の忠誠。彼が命じるのならは何だってしたし、どんな罰も喜んで受けた。

心を殺して非情の仮面を被る事すら厭わない。彼の意志の前には自らの痛みなど塵にも等しい事なのだから。

- - あの方の為にサッカーを学び、地球の知識を学び。奴らがどれほど泣き叫ぼうが破壊し、踏みにじってきた。

激痛で何日も動けなくなるような実験にも耐えたし、拷問にも近い訓練で何度死にかけても立ち上がった。その経験と覚悟を得て、自分達は地球人とは比べものにならない力を手に入れたはずだ。なのに。

どうしてこんな事になったのだろう。

ジェミニストームのキャプテンとして義務付けられた破壊活動。今度のターゲットに選んだのは北海道の白恋中、そこまではいい。だがまたしても雷門の連中が現れ、自分達と戦うと言い出した。

二回も圧勝している相手。今度も虫けらのように踏み潰せると……
そう思っていたのに。

この状況は何だ。一体何が起きている。

レーゼの混乱は錯乱に変わりつつあった。自分達は、何故。

「ちいつ……！」

辛うじて繋いだボールを、パンドラがドリブルしていく。だがその顔はすぐ様驚愕に彩られた。神風のごときスピードで走ってきた影が、目の前に立ちふさがったのだから。

「ドンピシャだぜ！」

余裕の表情で笑う染岡。ワープライブでかわそうと手を翳すパンドラ。しかし技を出すより先に、彼女の足元にあった筈のボールは染岡の元に移動していた。

「くっ……二人がかりだ、奪え！」

すぐ様レーゼの指示通り、ジェミニストームの選手達が染岡を包围にかかる。しかし染岡は軽くステップして、こちらのスライディングやタックルをかわしていく。

最後にグリングゴをかわして、パスを出す。とるなら今しかない。だがレーゼが追いつくよりさらに速く、パス地点に正確に走り込んだ者がいた。

前の戦いでは自分が軽くないとした筈の風丸が。

「スピードは、お前達だけのものじゃない！」

速い。そんな馬鹿な。

「いけつ 鬼道!!」

風丸が高いパスを出す。やらせるものか、と選手達がそのスペースに駆けていく。だが。

青い色が、忌々しいほど華麗に羽ばたいた。

まるで脚にボールが吸い付くよう。それが鬼道の纏うマントの青だと気付いた時には、既に彼は空中で見事にボールを奪っていた。レーゼの頭の中で警鐘が鳴る。

マズい。

マズい。

マズい。

「まさか…我々のスピードについて来るといのか…!？」

こんな事、あつていい筈がない。

「させるかあああ…っ!!」

自分達は負ける事など赦されない。勝利以外の報告など誰が持ち帰れるというのか。

敗北は死にも等しい。自分達の存在理由が死んでしまう。弱き者を彼の人が側におく筈がない。必要とするわけがない。

捨てられる？自分達が？

- - 嫌だ…嫌だ嫌だ嫌!

わたしは まだ あのひとの そばにいたい!

- - 棄てられたくない!!

叫ぶ声は、絶叫にも近かった。鬼道がボールをパスする。そのボールを、レーゼは必死で追いかけた。この手から今にも零れ落ちそうになっている、大切な何か。それを掴む為に、がむしゃらに手を伸ばす。

そして、すり抜けていく、音が。

北風が吹いた。鮮やかに、優雅に、雪原の皇子がレーゼの目の前を舞って――自分達の希望を奪い去る。

「どうした」

ボールをトラップして、吹雪が凄絶な笑みを浮かべる。

「その程度か」

明らかに格下を見る、黄金の眼。体制を崩し、レーゼは地面に倒れ込んだ。激情と疲労に震える膝を叱咤して起き上がる。

「ありえんっ……こんな事が……あつていい筈がないっ……!」

認めたくない。それでも認める他無かった。

自分達は、負ける。エイリアの選ばれし戦士であるジェミニストームが、地上の民に敗れてしまう。

レーゼを支配したのは、恐怖と絶望。けれどそれは今自分達の目の前にいる雷門イレブンではない。

それは自分達の誇りが打ち砕かれ、敬愛する彼の人にボロ雑巾のごとく棄てられてしまう事への恐怖。そして絶望だった。

――私達は、一体何の為に今日まで耐えて来たのだろう。何の為に、生まれてきたのだろう。

全てはあの方の為。それ以外に欲しいものなんて何も無かったのに。

その一つすら、世界は奪っていく。

――これが、“悲しい”ということ？

地球にはこんな言葉があるらしい。神は、乗り越えられる試練しか与えない、と。

お笑いだ。馬鹿馬鹿しい。神なんていないではないか。乗り越えようの無い試練だって、あったじゃないか。

吹雪のシュートが、真っ直ぐにゴールに突き刺さる。エターナルブリザードが、ゴールポストごとボールを凍らせる。

ホイッスルが鳴った。

文字通り、絶望の笛が。

歓声が上がる。雷門イレブンだけではない。テレビ局の者達やカメラの向こうの一般人。最初は宇宙人なんて、と馬鹿にしたり疑ったりしていた者達も一様に喜びの声を上げていた。

これでもう、訳の分からない驚異に脅かされる事もない。特に中学生の子供を持つ親達はどれほど安堵しただろう。これで今日から安心して眠れる、と。

「やった！やったっす！宇宙人に勝ったっす〜！」

「か、壁山君！ぐぐぐるじい〜はな〜じで〜」

歡喜する仲間達。視界の端で目金が壁山に抱きつかれ、悲鳴を上げていた。ありや死んだな、合掌。塔子は思いつきり他人ごとで手を合わせた。まあ骨は拾ってやるという事で。

そうだ。父に電話しなければ。どうせTVで一部始終見ていただろうが、デスクの前で勝利報告を楽しみに待っている事は容易に想像できる。

父もエイリアから解放されたし、世界も宇宙人から救われた。個人的にはサッカーも思う存分できて楽しかったし、今日はなんと善き日だろうか。

「塔子。ちょっと待ってくれ」

バックから携帯を取り出した時、鬼道に声をかけられた。アレはどうなった、と目が言っている。そうだ、自分は試合前に彼に頼まれ事をしていたのだった。

「一応採取したけど…必要なのかなあ。このまま現行犯であいつらをしょっぴいて、洗いざらい吐かせれば終わりだろ」

「本当にそう思うか？」

「…何だよ鬼道、怖い顔しやがって」

勝利を喜ぶ顔、とはほど遠い険しい表情の鬼道。俺がとった分だと鬼道はケースに入れたそれを塔子に手渡した。

「遺伝子を調べれば、ある程度はつきりするだろうが。…エイリアの正体は何であれ、奴らが子供だけの集団とは考えにくい。あの情報網に移動手段。バックに組織的な何かがあると見て間違いない」

鬼道が塔子に命じて、自分でも採取したもの。それは試合中にこっそりと抜いた、エイリア学園の少女少女達の髪だった。

エイリア学園の彼らがどんな生物なのか。SPフィクサーズに頼んで、科学的に解明しようというのである。

「聖也にも一部渡した。奴も奴で調べるアテがあるらしいからな。両方で同じ結果が出れば間違いない」

同じ結果。それは即ち。

「鬼道、お前：本当に疑ってるのか？エイリア学園の奴らが、地球人かもしれないって」

鬼道は無言で頷く。それはほぼ確信に近い頷きだった。

だが塔子には俄かに信じがたいのである。まるで魔法のように現れ、消えてみせる連中。軽々蹴るにはあまりに重かったサッカーボールに、あの驚異的身体能力。

宇宙人だ、と言われた方が納得できてしまう。

「今回の事件のポイントは八つ。一つ、奴らのあまりに人間に近い容姿。二つ、奴らが妙に流暢に日本語を話している事。三つ、子供ばかりの集団である謎。四つ、奴らが降り立ったのが日本である理由」

指を立てて、スラスラと自らの推理を語る鬼道。その頭の回転の早さに恐れ入る塔子。

「六つ、奈良シカ公園で、いつの間にか持ち去られていた黒いサッカーボールと豪炎寺の妹が拉致された事実。七つ、そもそも何故奴らはサッカーなんてまどろっこしい方法で侵略してきたのか：？」

確かに。何故サッカーなのか？あれだけの破壊兵器を持ちながらわざわざ試合で決着をつける理由が分からない。彼らの流儀、というだけでは説明がつかない気はしていたが。

「そして最後の八つ目。：聖也がな、ずっと昔に、地球上のある場所
でレーゼの顔を見ているらしい、ということ」

「な、何だって！？そりや本当かよ！？」

「さあな。何処で見たかもよく思い出せないと言っているからあまり
アテにはならないが：もし本当ならとんでもないどんでん返しに
なる」

いずれにせよ、これで終わったとは考えにくい。鬼道はそう言っ
て話を締めくくった。勝利した喜びと熱気が急速に冷えていくのを
感じる。鬼道を恨む気にはなれなかった。どうせすぐ知れた事だ。

奈落に突き落とされる前に、腹は括つておいた方が、いい。

塔子にも分かってしまったのだ。このまま終わるにはあまりに不
可解な点が多いエイリア学園。今までの一連の事件から考えて、た
った十一人の子供だけの組織であるとは考えにくい。むしろ彼らは
一番最初の捨て駒に過ぎないとしたら？

膝をつくレーゼを見る。圧倒的優位で上から見下ろされていた時
には気付けなかった。そこにいるのは、少女のような顔をした小さ
な少年にすぎない事を。

彼は何かに恐怖と絶望に濁った眼で虚空を見ていた。焦点のあつ
ていない瞳に映すのが、自分達ではない事に気付く。彼は、彼らは
もつと別の何かを見て怯えていた――いつかの吹雪や、鬼道と同じ
ように。

一体、何に？

「お前達は：何も分かっていない…」

掠れたレーゼの声に、円堂達もようやくお祭り騒ぎを収めて振り
向く。

「我々は所詮、セカンドランクでしかない…。イプシロンには遠く
及ばぬ：真のエイリア学園の力は、こんなものではないのだ…」

場を包む異様な空気に、TV局の連中がざわめき出した。雷門の皆の間にも、不安の色が広がっていく。

そして、均衡を破る、一つの声が。

「喋りすぎだぞ、レーゼ」

レーゼが声にならない悲鳴を上げる。掠れた喉が絞り出した――デザーム様、と。

この戦いは何処から来て、何処へ向かうのか。

塔子は知らなかった。

本当の地獄はまだ、始まってすらもいなかった事を。

【0・9・追憶はただ、麗しく】

自分達は、どうなるのだろう。振り切った感情の中で、レーゼはぼんやりと思った。

自分達は負けてしまった。地上のどんな人間達より優れたエイリアの戦士である筈の自分達が。勝ち続ける事が誇りであり力の証明である筈のジェミニストームが。

闇色の光の向こう。雄々しく立つデザームを呆然と見る。イプシロンは自分達にとって憧れの存在だった。けして叶わない力の差が、恥ずかしいと思わない存在だった。

特にリーダーのデザームを敬愛する者は多い。それは彼が実力のみならず、絶大なカリスマをも誇り、また目立たないながらも同士達をとて大切にする事で知られていたからだ。

いつかデザーム様のようにになりたい。それが叶わずとも隣で戦える戦士になりたい。そう願っていたのは自分だけではあるまい。

しかし今。その憧れの彼から告げられた言葉がこれだ。

“用済み。”

“追放。”

“この地で死に絶えろ。”

絶望を通り越して笑いすら浮かんで来る。彼は不器用ながら優しい人だった。だがそれ以上に、エイリアの星に誇り高かった。誇りを汚した自分達に、情けなど与える筈がない。

陛下、ごめんなさい。仲間の誰かが呟いた。パンドラの嗚咽が聞こえる。ちくり、とレーゼの胸が痛んだ。

- 私達は、あなたの役に立てればそれで良かった。

けれどもうそれも、必要ないのですね。

- 私達は少しでも、貴方の力になる事が出来たでしょうか。

愛する方の顔が浮かび、霧散していく。デザームがその手を翳した。あの光に貫かれた後、自分達がどうなるかは知らない。もしかしたらデザーム本人にも分からないのかもしれない。

遠い遠い地に置き去りにされるのか。そのまま光に飲まれて死を迎えるのか。

どちらでも同じだ。自分達の存在理由は既に死んでしまったのだから。

仲間達に申し訳なく思う。勝利だけを追い求めるが為に酷い事も言った。酷い事もしてきた。心を鬼にして非情な事も強いた。そんな自分達の道も今此处で途切れる。

自分などがリーダーでなければ、こんな結末にはならなかったかもしれないのに。彼らを道連れにせずに済んだかもしれないのに。黒いサッカーボールが放たれる。光に貫かれる瞬間、レーゼは叫んでいた。その心だけは偽りたくなかったから。

「エイリア皇帝陛下、万歳…っ！」

そしてレーゼの世界は、光の中で弛緩して、消滅した。

最初、自分は天国にいるのかと思った。地獄がこんなに明るい筈がない。それは思い込みにすぎないかもしれないけれど、ただ漠然とそう思った。

少しだけ意外だ。自分は絶対地獄行きだと思っていたのに。無自覚とはいえそれだけの罪を犯した筈だ。かの人に、望んでついて行ったというその時点で。

「気がついたかい、嬢ちゃん」

視界に入る、知らない男の声。髭の生えた初老の男だ。誰だろう、と思うより先に別の言葉が出た。なんせ男は思いつきり自分のコンプレックスをついてくれたので。

「私…男なんだけど」

「おっと。そうだったな。あんま綺麗な顔してるもんだからつい」
まあ憎まれ口叩くくらいだから、目は覚めてるか。彼は一人納得したように椅子にかけ直した。

どうやら、自分は生きているらしい。腕に繋がる点滴と、薬くさい白い部屋。此处は病室らしい、と漸く理解した。

同時にそれが、何を意味するのもかも。

「私は…生きてるの？」

自殺した筈だった。最後、僅かに残る理性の中でそれを覚えている。薬の副作用で、かなり正気が飛んでいた。自分達の背中に翼が生えているなどという、幻想すら抱いた。

それは自分一人ではなくて。

だから皆で、手を繋いで空を飛んだのだ。本気で飛べる気がしていたのだからお笑い草だ。だけど自分達はやはりただの人間で、天

使にはなれなくて――。

墜落する瞬間、少しだけ戻った正気の中で思ったのだ。

これで良かったのかもしれない。どうせ自分達にはもはや帰る場所など無いのだから――と。

「…自己紹介が遅れたな。目覚めて最初に見るのが知らないオッサンの顔じゃ驚いたろ。俺あこういうもんだ」

男は、コートのポケットからそれを取り出してページ目を開いた。警察手帳。初めて見たな、どこか他人事のように思う。

「鬼瓦…警部補？」

「おう」

「何で…刑事さんがここに…？」

鬼瓦は一つため息をついた。何か、覚悟を決めた顔だ。

「落ち着いて聞いてくれないか。君の…友達について」

落ち着いて。そんな言葉が出た時点で、充分に予測は立った。だけど耳が、音を拾う事を拒んだ。

聞かなければならない。でも。

嫌だ。聴きたくない。

「君の友達は…全員、遺体で見つかった。君だけが奇跡的に助かったんだ」

衝撃が、じわじわと全身に広がっていく。声は確かに耳に届いた筈なのに、脳が受け取る事を拒否している感じがした。

仲間達の顔が浮かんでは、消えていく。

嘘だ。彼らが死んだ？みんな？自分一人が生き残った？

どうして？

「亜風炉照美君」

言葉が出ず、凍り付いたままの照美に、鬼瓦は静かに告げた。苦痛に満ちた顔で。

「辛いだろうが教えて欲しい。君は…君達は本当に自殺だったのか？それとも…何者かに殺されたのかを」

何かを尋ねられたのは分かったが、声は出ないまま。そして涙も、堅く捻られた水道の蛇口のように、凍ったまま。

霞む脳内で、ただ一つの事実だけがハッキリしていた。自分はまた、置いて行かれたのだと。

急展開に次ぐ急展開！新たな刺客、現る！

新聞の見出し風にならばこんな感じだろうか。自分が当事者でなければ、スクープだと盛り上がったかもしれない。音無春奈は書いていたブログを投稿し、ケータイを閉じた。

あのイプシロン襲撃から一週間。ジェミニストームに勝った時のお祭りモードはとうに消失している。彼らの実力や思想は依然不明であるものの、まだ敵がいると分かったのだ。気を引き締めるには充分だったろう。

春奈にとって特に気がかりなのは兄の様子だ。彼が塔子と一緒に何かを調べているらしい事は知っている。エイリア学園という組織

に対し、疑問を抱いているらしい事も。

ジェミニストームとの試合後も、皆が浮かれる中、鬼道は険しい顔で塔子と話をしていた。そしてレーゼが追放される時に叫んだ言葉――その後からより一層一人で考えこんだり、パソコンに向かう時間が増えた。

兄は、何かを掴みかけている。だがそれが何かは妹の自分にも教えてくれない。確証が持てるまで待つてくれ、とかわされてしまう。それが何だか切なかった。

自分が、男の子だったら。そして自分もマネージャーではなくサッカープレイヤーだったら、もっと兄の支えになれたのだろうか。

――私、お兄ちゃんの足、引っ張ってばかりだな。

自分は何も知らなかった。ずっと何も知らずに兄に護られて、再会した兄を身勝手に責め立てた。あの時の言葉は後悔してもしきれない。

『あなたはもう優しかったあのお兄ちゃんじゃない……他人よ!』

――最低だ、私。

鬼道はけして自分を責めなかった。あんなに酷い言葉を浴びせたのに。何も知らずのうのと、音無の家で幸せに暮らしていた自分なのに。

結局。あの時の言葉を、春奈は謝れないままにいる。受け入れてくれる兄の優しさに甘えているのは分かっているけれど。それでは

いけないのは知っているけれど。

- 駄目だな。全然駄目。…あの頃から、何も変われてない。

悩んだ時は、円堂君に相談してみたら？と秋が言っていた。夜、キラバンの上で円堂に話を聞いて貰うのが定番化しているという。別名、キャプテン相談室。本人が知っているかは微妙だが。

皆が精神的にも、キャプテンに依存しているのは知っている。自分まで彼に負担をかけるのは少々気が引けるのだが。秋は笑って言った-それでも、円堂君はいろんな人の話を聞いて、少しでも多くみんなの事を知りたがってるんだよ、と。

果たしてその円堂は既にキラバンの上にいた。特徴的なシルエツトが星空に浮かび上がる。北海道の夜は寒いが、本当に星が綺麗だ。天然のプラネタリウムに、つつい見とれてしまう。

「音無か？珍しいな」

「！よく分かりましたね…！」

梯子を登っている途中で声をかけられた。本当に、一人一人の事をよく知っているのだ、彼は。恋愛方面にはあれだけ疎いというのに。

「…お兄ちゃんが、心配なんです」

キャプテンの隣に座り、話し始める春奈。

「何か、私達の知らない情報を掴んでいるみたいなんですけど。全然、話してくれなくて。私じゃ…お兄ちゃんの力になれないのが悔しくて」

塔子が、羨ましい。彼女の事は自分も好きだ。それでも時折嫉妬してしまう。

塔子は自分と同じ女の子なのに、サッカー選手としても人間としても、強い。鬼道が彼女に隣に在る事を許しているのが見てとれる。自分はその背中を、見ている事しかできないのに。

兄と対等の存在になりたくて、なれなくて。自分はいつまでも護られてばかりなのが辛い。きっと彼は、自分が兄なんだから当然だと笑うのだろうけど。

「護られてばかりじゃ、嫌なのに。私もお兄ちゃんを護りたいのに」

離れている時間すら、自分は兄に護られていた。それを後から、塔子の口から聞かされたのだ。鬼道には口止めされたけど、あんたは知ってはいなくちゃいけないから、と。

「お兄ちゃん…影山に、虐待されてたんです。八年間、ずっと」

「え…？」

黙って話を聞いていた円堂が、驚いたように顔を上げる。

「その内容は…目を覆いたくなるほど酷いもので。それが原因で、何度も体調、崩していたみたいです。それでもあの男に従っていたのは…冷徹なフリをして我慢してきたのは。私とまた…暮らす為だったのに」

既に口にしてしまった言葉は取り消しようがない。どれほど辛かっただろう。どれほど苦しかっただろう。どれほど傷つけた事だろう。

「私にもつと力があれば…！」

サッカーがしたい。兄と並べるくらいの力が欲しい。今の自分には何もできない、なんて。

「俺は詳しい事、何にも知らない。だけどさ、音無」

ポン、と肩に温もり。振り向けば笑顔があつた。円堂の、背負う重さを知る者の笑顔が。

「どれだけボロボロになっても、傷ついても。あいつがピッチに立ち続けられたのは、お前がいたからだと思う」

俺にもこれだけは分かるよ、て円堂は言う。

「鬼道は音無の事が、ディスクだってこと！…それが一番大事な事だろ」

そう思っても、いいのだろうか。

自分は兄にとって必要な存在であると。邪魔なんかじゃないと。此処にいて、いいのだと。

「…うん」

間違い無く、これだけはハッキリしている。だからこそ自分は此処にいる。

「私も…お兄ちゃんの事、大好き」

俺も！と円堂が笑うので。つられたように、春奈も笑った。

【0・10・零れ落つ砂、泡沫の幻】

正直。春奈の話は、円堂にとってショッキングだった。

彼女の前では明るく励ましてみせたが、本当はヘコみたい。何も知らなすぎる自分が忌々しい。衝撃的な出来事だけで、いちいち落ち込んでいては身が持たないと分かつてはいるけど。

初めて鬼道に会った日を思い出す。雷門と帝国のファーストコンタクト。彼は最初、自分達の最大のライバルとして姿を現した。

彼は自分の事など名前も知りはしなかっただろう。だが円堂は知っていた。否、サッカーをする中学生ならみんな知っていただろう。それほどまでに天才ゲームメーカー、鬼道有人の名は有名だった。

まるで挑戦状と言わんばかりに、鬼道から自分へ向けて蹴りつけられたボール。円堂は両手でしっかり受け止めた。ビリビリ来るようなシュートに痺れたのは掌だけではない。

クサイ表現をするならば――魂に直接ぶつかるような一撃。もしかしたらあの瞬間に、自分達の物語は始まっていたのかもしれない。サッカーは元々大好きだ。でもあのシュートを受けてもつと好きになった。彼が雷門のサッカーに惚れて転校してきたように、自分もまたあの時にはもう虜になっていたのだろう。鬼道という人間が率いる、彼のサッカーに。

――だけど。あの頃の鬼道は、影山の支配下にあった。…毎日当たり前のように、暴力に晒されていたんだ。

影山の思想が自分には分からない。彼の家庭が、サッカー選手だった父の失墜から転がるように転落していったという話は聞いた。だが、何故そこまでサッカーを憎むかが理解できない。

というより。そこまでサッカーに憎悪を向けていながら、何故サ

ツカーに関わり続けるのが謎だ。そして自分が手塩をかけて育てた筈の鬼道をどうして傷つけるのかも。

復讐の道具にするというなら、大事に教育すればそれでいいではないか。無意味な暴力で壊してしまっただけなら無意味でしかない。なのに、何故。

- きつとギリギリまで追い詰められてたと思う。それなのに、あんなにしつかりとピッチに立ち続けた。それは凄い事だと思う。でも。

それは、正しい強さなのだろうか。誰にも頼る事が出来なくて、誰にも助けを求める事が出来なくて、消去法のように導かれた強さなのだとしたら。それはとても、悲しい事で。

影山が勝利を得る為に手段を選ばない男だと分かり。鬼道は最終的に自らの手で影山の鎖を断ち切った。そして仲間達と歩いていく事を決めた矢先にその影山率いる世宇子に夢を奪われ、雷門の元にやってきて今に至る。

彼は救われたとばかり思っていた。もう影山に縛られる必要はないのだと。そう信じこんで、自分達はそれ以上の事を知ろうとはしなかった。

彼にとってはまだ何一つ終わっていないというのに。

『お兄ちゃん影山と訣別しました。でも…影山といた八年がどんな残酷なものだったかは…お兄ちゃんにしか分からなくて。身体にもたくさん傷が残ってるし、何より…心の傷は、本当はまだ全然癒えてないんです』

医者に診断されたいらしい。鬼道はPTSDと離人性傷害だ、と。影山にされた暴力を思い出すような出来事があると発作を起こしパニック状態になったりするという。

例えば、背後から不意の接触。手首を掴んで抑え込まれる。それが大人相手に、特に男性相手だと相当な恐怖を感じるのだという。さらに酷い状態になると、まるで人形のように反応しなくなってしまう。精神が現実を切り離してしまうのだそう。まるで、今自分がされている筈の事が他人事であるかのように。

サッカーは接触の多いスポーツだ。今のところ試合中に目立った症状は出ていないが、選手としては致命的な弱点といっていい。

それでも彼はサッカーから逃げなかった。サッカーは彼にとって命綱にも近いものであったから。

- 俺、本当に何も知らなかった。俺が知らない間にも、鬼道は苦しんでたかもしれないのに。

無力な子供である自分。豪炎寺の事といい、最近は思い知らされてばかりだ。

- 決めた。…もつとみんなと、たくさん話をしよう。みんなの事、ちゃんと知りたい。

初期からいてくれたメンバーにも。マネージャー達にも、新しく加わった仲間達にも。

もつとたくさん話をしよう。彼らの生の声に、もつと耳を傾けよう。いつか必ず来る別れの日に、後悔する事の無いように。

真夜中のバス。皆の寝息が聞こえる中、円堂は毛布にくるまったまま手を翳す。まだまだ小さな子供の手。されど、たくさんのボールを受け止めてきた手。

- 俺は、ゴールキーパーなんだ。

試合で。自分は必ず、皆の最後列を守る。誰もが自分に背を向け

て走っていく。こちらを振り向いたりはない。それは、皆が円堂を信頼してくれている証。

お前になら俺達のゴールを任せられる、と。仲間達はその背中で語ってくれる。それが円堂の力になる。

- - この手は受け止めて、護る為にある。

自分が護るべきなのはゴールだけじゃない。皆の絆と、チームそのものの誇りをも守り抜かなければならない。

- - それが本当の、俺の役目なんだ。そうだろ、じいちゃん…。

ぎゅっと拳を握りしめる。なんとなく理解した気がした。祖父が一番最初に授けてくれた必殺技が、ゴッドハンドであつた訳が。

- - 大きく広げた掌で、全部受け止めて、護る。それがキャプテンにしてキーパーの役目、そのものなんだ。

どんなボールでも来るなら来い。

全部身体を張って、受け止めてやる。

それはくだらないプライドに過ぎないのかもしれない。それでも佐久間が最初に思ったのは - - これ以上鬼道に余計な心配はかけたくない、ということ。

これは自分達が解決すべき問題なのだ。彼の手を、また借りる事になってはならない。

「影山は、北海道を護送中だった」

まだ詳しい事は俺にも分からないんだが、と咲山は続ける。

「その途中、雪崩に巻き込まれたんじゃないかって話だ。北ヶ峰は雪崩が多い事で有名だからな」

普通なら助からない。護送車ごと雪で流されてしまったとあつては。

しかしここで冷や汗をかくような事実が二つ発覚した。

横転した車の中、運転手や刑事の遺体は発見されたのに、影山の姿は影も形も無かったというのである。後部座席のドアが開いていた事から車外に放り出された可能性もあり、搜索が続いているのだが - 現時点では発見されていない。

そしてもう一つの、驚くべき事実というのが。

「この雪崩が自然災害なんかじゃなく、人為的に起こされたものかもしれないって事だ」

護送車のすぐ側に落ちていた、黒いサッカーボール。世間を騒がせたジェミニストームやイプシロンのものとは違う、緑色の模様のついたボールだったが。紛れもなくそれは、エイリアの使っていたのと同じものだった。

もし本当にこの雪崩を起こしたのがエイリアで、目的は影山を逃がす為だったとしたら。

「影山がエイリアと繋がっている...と？まさか...」

「だとしたらとんでもねえ話だぞそれ」

寺門が苦い表情で言う。

「けどなんでニュースで流れないんだその情報。おかしいだろ」

「影山だぞ？考えたくもないが、警察の中にあいつの配下がいても変じゃない。大事になるまで、表に出さないつもりかもな」

反吐が出そうだ。フットボールフロンティアの地区大会決勝、雷門との二度目の試合を思い出す。影山は工事関係者を使って、試合もせず勝負に勝とうとした。雷門側のフィールドに大量の鉄骨を落とすなんて正気の沙汰じゃない。死人が出なかったのは本当に奇跡だ。

いや、一步間違えば。自分達帝国イレブンも危なかったかもしれない。鉄骨が落ちるタイミングがズレていたら。自分達が雷門側に攻め上がっている場面だったら。

考えれば考えるほど、ぞっとする。

「仮に影山が脱走したとして…今度は何をやらかす気なんだ？」

そんな事、分かる筈もない。いつでも彼の思考回路は、自分達の予想を遥かに超えていた。手段はともかく、恐ろしいほど優秀な頭脳の持ち主である事は確かなのだ。長年恩恵を受けてきた佐久間には分かる。

そう。恩恵だ。たとえどれほど非情な男であるとしても、自分達がここまで力をつける事ができたのは彼の力あってこそだと分かっている。あんな結末でなければ、感謝する事も出来ただろうに。

「奴が何をするにしても…探り出して、止める。それが俺達の責任だと思う」

考えてみれば。サッカーというスポーツそのものに復讐したい影山と、サッカーを破壊の手段として用いるエイリア。目的が一致している気がしないでもない。

どちらにせよ、ろくな結末にならない事は確かだ。

「…佐久間。お前の気持ちが分からないわけじゃないが」

発言したのは源田。その隣には洞面がちょこんと座り、不安げにこちらを見上げている。

「危険だぞ。俺達だけの手には余るんじゃないか。確かに安西の野郎は元影山の配下だし無能だしで役に立たないが…。せめて鬼道に連絡を入れるべきじゃ…」

「それは駄目だ！」

反射的に叫んでいた。その言葉を遮るように。

「鬼道に迷惑はかけられない…影山が絡む事なら尚更だ！みんなだつて知ってるだろ…あの人が裏で影山に、どんな目に遭わされてきたのか…！」

思い出したのだろう。誰もが沈痛な面持ちで俯く。

一般部員達は気付かなかったかもしれないが、自分達一軍メンバーは全員知っていた。鬼道が幼い頃から影山にサッカーを教わってきて、誰より厳しく当たられていたこと。

いや、それだけならいい。影山は“教育”の名を借りた暴力を鬼道に振るい続けていた。何年も何年もずっと。

初めて事実を目の当たりにしてしまった日の衝撃を、佐久間は忘れる事が出来ない。総帥に用があつて、ドアをノックしようとした瞬間に聞こえた声と物音。中で何が起きているのか確かめる事もできず…自分はそこから逃げ出してしまったのだ。

翌日、憔悴しきつた鬼道の顔と、包帯の増えた身体を見て、全ては確信に変わった。

「俺達はあるの人に頼る事しかなかった。苦しんでいるあの人を救

う事ができなかった…！」

世宇子に負けて打ちのめされた時、心のどこかで思ったのだ。
これは自分達への罰なのかもしれない、と。

「影山がまた鬼道を傷つけようとするなら全力で止める。今度は俺達があの人に恩を返すんだ…！」

今彼が世界の為全国を駆け回る立場にあり、非常に忙しいのも確かなのだ。

鬼道は雷門に行った。でも、彼は約束を果たした。あの凄まじい力を持った世宇子に勝ち希望を齎してくれた。

何より。必ず帝国に戻ると、誓ってくれたではないか。
自分達の絆を証明するのに、これ以上何が必要だろう。

「…そうだな」

源田が頷く。

「佐久間の言う通りかもしれない。俺達には…俺達にはできない事がある。これ以上の悲劇を、なんとしても防ぐんだ…！」

「ああ…！」

仲間達の眼に決意が宿った。新たな戦いの幕開けだ。

【0-11・魔女が愛した、夜会の始まり】

資産家・吉良星二郎の警護頭、二ノ宮蘭子は、施設の中を歩いていた。

その場所は、星の使徒研究所という。吉良が長年をかけて金と人材を費やしてきたプロジェクト。その実験と研究が行われてきた場所であった。

富士の樹海の奥深くにあるこの地に、部外者が辿りつく事などまづありえない。そして仮に“脱走者”が出たとしても――生きて森を抜ける事など不可能。此処は研究所の名を借りた牢獄だ。だがその牢獄を、二ノ宮はこよなく愛していた。

――素敵な場所よね。…もう少し血の匂いが強ければ、もっと良かったのに。

魔女のようだ、と。二ノ宮を喻えた研崎の言葉が実は大当たりである事を知るのは、今はまだ二ノ宮一人だけである。

二ノ宮蘭子、という名が偽名である事も。

ある地では“災禍の魔女”と呼ばれた正真正銘の魔女である事もまだ誰も、知らない話だ。だから二ノ宮はこうして堂々と表を歩いているのである。無知な人間達を内心で嘲笑いながら。

――計画がここまで辿りつくのに五年。…いや、あたしの中では十年かしら。退屈するほど長かったわ…。

十年などという時間は、魔女たる自分にとっては微々たるものだ。それでもこの十年は長く感じた。それだけ、計画の完遂を楽しむにできたのである。

この為に、吉良に力を貸す裏で幾つもの伏線を張った。面倒な工

作もした。たかが遊び――だが、遊びにも手は抜かない。じゃなければリスクを犯してまでこの地に留まり続けた意味がなくなってしまう。

367実験室、と書かれた部屋の前でカードキーを通す。甲高い電子音と共に開かれる自動ドア。かつん、と蘭子のハイヒールが、無機質な部屋に不似合いな音を立てた。振り返る白衣の研究者達。

「調子はどう？この子、また倒れたんですってね？」

電子機器に囲まれた部屋。その中央には、手術台のような台座があり、一人の少年が寝かされていた。

逆立った紅い髪。ややキツめだが充分に美少年の域に入るだろう。だが元々白い肌は不調からさらにまっ青になっており、瞼は堅く閉じられたままピクリとも動かない。まるで死んでいるかのようなうた。

しかし少年の腕と胸から伸びるコードが、規則正しい電子音を伝える。彼の心臓が動いている証拠を。

「申し訳ありません、二ノ宮様」

研究者の一人が、やや堅い声色で謝罪の意を示す。

「彼はパラメータは常にトップを叩き出す反面、体調にはムラがあります。元々の持病のせいが大きいかと。発作を起こしたため心臓内のペースメーカーを調整し直しました。今は体調も安定してきておりますのでじきに意識も戻るかと」

「そう。良かった」

そう簡単に壊れてしまつては困る。確かに自分の力なら何度でも“作り直し”は可能だが――同じ性能を保てるとは限らないのだ。何よりただ人の彼らの前で力を披露するのはまだ早い。

「この子は、あたし達の最高傑作だもの。スペックも、忠誠心も、容姿も……ね。せっかくの晴れ舞台を前に、使い物にならなくなつた

ら可哀想よ？しっかり管理して頂戴ね」

「はい」

彼と同等の性能を持つ被験体がないわけではない。だが、あとの二人は我が強すぎる。吉良への忠誠心は確かにあるが、それに勝るほどプライドが高い。加えて、二ノ宮をあからさまに嫌っている。扱いにくい事この上無かった。

「もう一つ確認。…ジェミニストームが敗れたそうだけど。ちゃんと始末はつけたんでしょうね？」

イプシロンのリーダー、デザームに命じて処分はさせている。しかし、レーゼ達が最終的にどうなるのかはデザームにも知らせていない。そこから先は自分達大人の仕事だからだ。

「それは問題ありません。脳波チェックは済んでいます。また、全員体内に通りの機材は埋め込んでありますから」

いつでもモニターできますよ、なんなら今ご覧になりますか、と研究員。

「今はいいわ。それが聞きたかっただけだから。…じゃあ、私も仕事に戻るから。引き続きよろしくね。何かあったら報告して」

「はい」

部屋を出ようとして、一度だけ振り返る。手術台の上では相変わらず少年が眠っていた。段々頬にも赤みが差してきている。直に目覚めるだろう。

持病さえなければ、これ以上の素材は無かったというのに。誠惜しい話だ。玉に瑕とはこの事が。

「また来るわね…グラン」

そう名前呼んで、二ノ宮は部屋を後にした。彼が目覚めたら、また来ようか。

ああ、次の仕事を楽しみでならない。

お仕置きだ、とかの人は言った。

言われた事もできない、悪い子には必要な事なんだよ、と。

鬼道はそれを信じた。否、信じる他に何が出来たというのだろう。義父とは相変わらず壁があつたし、使用人達はよそよそしいか畏怖の感情を向けてくるかのどちらかで――自分にとってかの人の存在はあまりにも大きなものだった。

神など信じた事もない。だが、かの人の存在はまるで絶対神のごとく自分の世界に存在していた。

畏怖と、尊敬の対象だった人。

ガラス張りの冷たい世界で、彼だけが生身で自分に触れてきた。大人の温もり。大人の優しさ。大人の力。全て、与えてくれたのは義父ではなく彼で。

義父より、多分自分は彼を“父”として見ていたのだろう。忙しい義父より彼という時間の方が遥かに長く、彼は義父の数十倍もの事を自分に教えてくれたのだから。

そう。イイ事も、ワルイ事も。

『鬼道。…そう…お前は鬼道有人だ。鬼道家の跡を継ぐ者。だから…』

だからそんな彼が - 影山が自分を裁く立場になるのも、ある種必然ではあったのだろう。

『完璧以外は赦されない。…分かっているだろう？』

ただその手段が、傍目から見ても歪んでいただけで。

『ごめんなさい…ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ！いい子になるからっ…いい子になるから！！』

暗い部屋。黒い影。迫る大きな手。明滅する景色。

大きな音がするだけで怯える自分。恫喝する声にうずくまる自分。痛みと恐怖と吐き気に泣き叫び、暴れる事が出来たのも最初だけ。

抑えつけられれば子供の力などではどうしようもない。逃げられない。失血で朦朧とする意識の中、鬼道は幼くしてそれを悟った。これが絶望というもののだと。

抵抗すればする程苦痛の時間が長引くのなら、やめよう。

大人しくしていればすぐ終わる。此処にいるのは自分じゃない、全く関係ない別の子供だと思い込めば楽になれる。そうだ、自分は被害者なんかじゃない、傍観者なのだ - 鬼道はいつしか自らにそう暗示をかけるようになった。

でなければ八年もの間、耐えきる事は出来なかっただろう。

- -あの人の力で、俺はマリオネットと化した。なのに。

否定する事はできない。どれほどの暴力に晒されようと、自分はある人を憎みきる事ができなかった。今の自分がいるのは影山のおかげである事も間違いなく - -そして。

何よりも、彼を父として愛する気持ちが消える事は無かった。自分にとって二人目の父は義父ではなく、影山だったのだ。

だからこそ怒った。自分にサッカーの全てを教えてくれた筈の彼が、そのサッカーを汚すような真似をした事が。

好敵手と認めた雷門を――円堂達を危険に晒した彼が。鉄骨を落とす？バスに細工させる？妨害工作では済まない。れっきとした殺人未遂ではないか。

――俺はあいつを赦しちゃいけない。それは分かっているのに。

鎖で縛りつけているのは。果たしてどちらの意志なのか。

「――ッ！」

声にならない叫びを上げて、鬼道は飛び起きた。毛布をずり落としたせいで、頬に感じるひんやりとした外気。目の前には――驚いたような風丸の顔。

此処はキャラバンの中だ。さっきまで自分は夢を見ていたらしい。それを認識して、鬼道は安堵の溜め息をついた。

「だ、大丈夫か？魔されてたけど……」

心配して見に来てくれたのか。さすが“雷門の母”と影でアダ名される風丸である。大丈夫だ、と鬼道は一言言っただけで体を起こした。そう、大丈夫なのだ。あれは夢。たとえ過去現実に起きた事だとしても――今の話ではない。

「嫌な夢を見ただけだ。ただの夢だ、気にするな」

「悪夢…か」

すると風丸は何かを思い出す仕草をした。

「…俺もさ。この間すごい夢見ちゃって、円堂に叩き起こされたんだ。ほんとに参るよ」

相当嫌な内容だったのだろう。はははっ、と笑う顔に力が無い。

「ありきたりだけど。散々追いかけて回された挙げ句殺される夢とかもう…勘弁して欲しいよ。しかもナイフでメツタ刺しだぜ？」

「それは」

想像し、鬼道は眉をひそめる。なんともまあ、リアルで残酷な。

「また災難だな」

「だろ。…あーアレが原因かな。変質者」

「？」

風丸いわく。彼が小さい頃、近所で子供ばかりに悪戯する変質者が出没したそう。それも狙われたのが男の子ばかり。ちょっと大きな怪我をした子もいて、子を持つ親達は大層心配したらしい。

しかも怪我をしたのが、当時の風丸と円堂のクラスメートだった。遊びに行く時はいつも二人以上で行動して、絶対一人にならない事。暗くなる前に帰る事。親達には口を酸っぱくして言われたそう。

「親としちゃ当たり前の心配だろ。だけど…あー俺って昔から意地っ張りなところあったからさ。煩く言われると逆らいたくなくならないか」

分かる気がする。鬼道は小さな風丸を想像してつい笑ってしまった。

この風丸一郎太という少年、見た目は女の子みたいなのに、中身はこれでもかというくらい男前である。ついでに頑固。それは昔か

ら変わってないのだろう。

「ある日円堂と喧嘩しちゃって。夕方、バラバラで帰ろうとしたんだよな。そしたら…お約束の展開が起きて」

出たんだよヘンタイ、と肩を落とす風丸。

「露出狂じゃなかったけど、住宅街の路地にポツンと立っててさ。俺を見たら笑って刃物出してきて…もー全速力で逃げたよ」

「よく無事だったな」

「ほんとほんと。かなり懲りたぜ。その直後にそいつは逮捕されたみたいけど」

それ以来、稀に何者かに追いかけられたり、殺される夢を見るのだという。夢は過去の体験や願望を如実に映し出すという。幼少時の怖い体験なら尚更だろう。

「…夢の中に影山が出て来たんだ」

呟くように語る鬼道。風丸だけに話させたのでは、フェアじゃないような気がして。

「情けない事に。…怯えていた。いや…現実でも俺は奴を畏れている」

流石に詳しい内容までは話せなかったが、風丸は突っ込んで聞いてこなかった。ただ、そっか、と相槌を打っただけで。

「…俺は何も知らないけどさ。鬼道は悪くないよ。…みんなだってそう言うさ」

気遣いが胸に染み入る。

その優しさに甘えきるわけにはいかないとしても。本心を吐露できる仲間が側にいる。それは幸せな事。

「ありがとう」

帝国の仲間達は今どうしてるだろう。彼らの顔が浮かんで、消えていった。

【0・12・決意の果てに、何想う天使】

何故自分は生きてるのだろうか。ここ数日、そればかり考える。何故死ねなかったのか。何故仲間達だけが命を落とす事になってしまったのか。

待合室のソファーに座ったまま、照美は動きを止めていた。自暴自棄、というのとは少し違う。どうにでもなれとは思わない。でも、喻え今この瞬間世界が滅んでも、自分は何も思わないのだろうかと思う。

全てが凍りついたまま停止しているかのよう。ここは病院。それにしたってもう少し色があってもいいではないか。どうしてこんなにもモノクロに映るのか。

「照美君」

隣に人の気配。こんな風に自分の側な立つ人間は現在一人しかない。看護師達は皆、照美のした事を知っている。誰もがよそよそしく、出来る限り関わらないようにしようという考えが見え見えだった。

「あんま出歩いちゃ体に毒だぞ。そろそろ病室に戻らないか」

彼なりの気遣いだろう。心配されているのは分かる。だが、差し伸べられた鬼瓦の手を取る事なく、照美は首を振った。

「…変わりませんよ。どっちみち、私の行く末なんて」

その意味するところを悟ったのだろう。何も言えなくなる鬼瓦。無骨な見た目をしているくせに、彼は不器用で優しい。本当は刑事

なんかには向いてなかったんじゃないだろうか。

自分の結末は、何も変わらない。

でもどうせ死ぬのなら、仲間達と一緒に逝けたら良かったのに。自分達は神だの天使だのと信じたまま死ねたなら。冷たい現実なんて知らずに済んだのに。

自分達世宇子は、影山に集められた孤児の集団だった。そもそも世宇子なんて名前の中学自体が影山のでっち上げだったのである。影山以外に大人はいない。そして影山の存在が絶対。そんな砂上の楼閣だった。

寄せ集めだった自分達に、神のアクアを与えて鍛え上げた影山。彼にとって自分達は使い捨ての駒に過ぎなかったのかもしれない。それでも、幸せだった。それが今なら分かる。神のアクアが強烈なドラッグで、自分達は半ばその実験体にされたのだとしても。あの人がいなくなってから余計にその大きさを知った。

どれだけ虐げられても、自分達を知る“父親”はあの人だけだったのだ。彼が拾ってくれなければ、照美はきつと何処までも悪夢に墜ちていくしかなかっただろう。

「…刑事さんは、総帥の事を恨んでるそうですね」

総帥。その名前を出せば、ピクリと反応する鬼瓦。

「でも親に捨てられた私達にとって…あの人は救世主だった。分かりますか？土砂降りの雨の中であんな一つ差し伸べられた手が…どれほど尊いものか。それが善か悪かなんて、関係ないんですよ」

縋らずにはいられないのだ。追い詰められ、ドン底にいる人間は。

「だから…もういい。あの人に必要とされなくなった時点で、私達はとっくに死んでいたんだから」

自分に帰る場所などもはや無い。体は治っても病院を出た先は施設か、もしくは元いた地獄のどちらかしかない。

ただ、本当にただ。仲間達の事が無念でならなかった。彼らの死に顔も見ることが出来ない。自分が今、生かされた意味が分からない。

『俺は、絶対諦めねえぞ!!』

ふと。フットボールフロンティア決勝で当たったチーム - 雷門中キヤプテンの声が蘇った。何度も何度もシュートをくらい、体力が限界に来てなお、立ち上がった少年。

円堂守。

彼なら諦めないのかもしれない。生きている限り - 人生という名の試合が終わってない限り、可能性はあると叫ぶのかもしれない。今なら理解できる。自分はちっぽけな人間に過ぎなかった事が。自分は弱い。彼らのようには、なれない。

ふと、テレビの電源が入る音がした。何やら聞き覚えのある調子の実況が耳に入り、照美は緩慢な動作で顔を上げる。待合室のテレビをつけたのは、杖をついた老人。パジャマを着ているあたり、入院患者だろう。

「雷門…」

テレビでやっていたのはスポーツニュースの特番だった。画面にはデカデカと“イナズマキヤラバンの軌跡”と書かれている。

そういえば、宇宙人だかなんだかが襲来して世間ほとんどもない事になってるんだっけ。どこか他人事のように照美は思う。その宇宙人と雷門の連中が戦っているらしい、というのには少し驚いたけど。

『いやはや…宇宙人がサッカーを使って襲ってくる…ってのがもう眉唾でしたか』

最近いろんな番組で見る、若い男性アナウンサーがにこやかに喋っている。

『それに対抗するのがプロの選手ではなく、まだ中学生の子供達という』

『中学生だからと言って侮れませんよ。フットボールフロンティアで優勝したチームが基盤ですからね。エイリアとの試合の中で負傷者が続出してメンバーは大幅に替わっていつているようですが…。全国各地を回って精鋭を集めているとのこと。逞しい事です』

プロの試合でよく解説者として登場する、初老の男性が説明する。メンバーが代わったのか。確かに映像の中には、見慣れない顔がちらはら混じっている。中には女の子らしき選手もいる。

あの強かな雷門ですら、無傷では勝利出来なかったのか。そういえば雷門中が襲撃されたのは、フットボールフロンティア決勝で自分達に勝ったその日。だとしたらコンディションはお世辞にもいいとは言えなかった筈。

それなのに…彼らはエイリアに立ち向かったというのか。満身創痍なのに、何故。

『本日はそんな小さな勇者達の軌跡を追ってみました。彼らの姿は私達に、新しい夢と希望を与えてくれます。では…どうぞ！』

画面がスタジオから、試合シーンへと切り替わる。それはテレビ局が自ら試合をしたものであったり、エイリア側がメディアに流してきたものであったり。雷門がエイリアに行った試合は全て映像が残っているというのだからまた凄い。

エイリア学園、第一の刺客・ジェミニストーム。最終的に三度目の試合で雷門が勝ったのは知っている。なんせ一面トップで記事が

出ていたのだから。しかし、その詳細を照美は何も知らない。
今日初めて。過去映像とはいえ、彼らとエイリアとの試合を、見た。

「…凄いだろ、あいつら」

いつの間にか番組に熱中していた照美の横で、鬼瓦が笑う。

「あいつらの武器はな。大きく分けて三つあると俺は思ってた。
仲間をとことん信じぬく事。諦めない事…そして」

どうして。無意識に、照美は口に出していた。
どうしてなの、と。

「何度地面に這いつくばっても、立ち上がるって事だ」

一番最初。傘美野中で行われた試合などヒドいものだった。あの
雷門が手も足も出せずに弄ばれている。ボールが凶器にしか見えな
かった。スコアの差もさることながら、エイリアは選手達にボール
をぶつけて痛めつけた。

一人、また一人と倒れていく。それなのに。
誰一人諦めない。その眼から光が消えない。絶望に這いつくばっ
ても、彼らは何度でも立ち上がる。
どうして。

『俺は、絶対諦めねえぞ!!』

そうだ。自分達との試合でも同じだった。彼らは諦めなかった。
そして…勝利の女神は彼らに微笑んだのだ。

「負けない事も強さだろうよ。でもな、負けない強さに勝るもんを、あいつらは持つてる」

試合に釘付けになる照美の肩を、ぽん、と叩く鬼瓦。

「負けない強さに勝るもの、それは負けて立ち上がる強さだ。絶望を知って叩きのめされてなお、諦めない強さなんだ」

画面の中で円堂が吼える。仲間達はその気持ちに答えるように走り出す。

ああ。そうか。今になってやっと理解できた気がする。
何故神よりも人間の力が凄いのか、を。

「照美君。…君の命だ。君が今すぐ死にたいと願うなら、俺にそれを止める権利はない。逃げないで生きていける人間なんて誰もいない。…でもな」

知らず知らずのうちに、涙が頬を伝っていた。

サッカーが楽しいものである事を思い出す。それは誰かを傷つける武器なんかじゃない。円堂達はその楽しさを武器に今も敵に立ち向かい続けている。

自分はまだ、そんな場所を知らない。

だから - - 知りたい。

「“死ぬ場所”じゃなくて…“生き抜く場所”を考えてみたらどうだ。後悔しない為にな」

膝の上で、拳を握りしめる。

今の自分にももし、できる事があるのなら。それに賭けてみても赦されるだろうか。

確かに、行く末は同じなのだろう。そうだとしても、道筋を変える事は出来るなら。

残された時間を、精一杯生きる。それがどれほど苦しい懺悔になるとしても。

それぞれの想いを乗せて、キャラバンは行く。次の目的地、京都に向けて。

- - イプシロン、か。ちつ…ジェミニストームを倒せば終わると思ってたのによ。

窓に寄りかかり、染岡は外を見る。北海道から京都まで、半端ない距離がある。バス移動なのだから時間がかかるのは必然だ。段々とあの肌を刺すような寒さは薄れてきた。寒さに耐えるのも東北を抜けるまでの辛抱だ。

京都の漫遊寺中。それがイプシロンが新たに予告してきたターゲットだった。彼らの思想ゆえフットボールフロンティアには参加して来なかったが、裏の優勝校と呼ばれるほどの実力があるという。電話で話した小林に非常に羨ましがられた。カンフーを志す者にとっては憧れの学校なのだという。

- - 吹雪…。

ちらり、と隣の席を見る。長旅に慣れていないのか疲れたのか、

吹雪は染岡の横でくーくーと寝息を立てていた。

サッカーしてない時のこいつは小動物だから、と笑ったのは聖也だったか白恋の奴らだったか。確かに、こうして見ればとてもあのトンデモシユートを打つ男とは思えない。

小柄で、ちょっと可愛い顔をした子供だ。スポーツなんかやってません、と言われた方が納得できそうなほど。

ジェミニストームの試合の後。彼は正式にイナズマキャラバンの一員になった。少し前の自分なら猛反対したか、ふてくされた事だろう。今だって何もかも納得できたわけじゃない。

だけど。

『吹雪を認めたら、豪炎寺の居場所がなくなる。そう思ってるんだろっが』

蘇る鬼道の言葉。あの時はかなりドキッとした。完全に凶星だったから。

『誰にも代役なんていない。吹雪と豪炎寺は違う人間だ。皆それを分かっている。お前は違うのか？』

詭弁だと笑う事もできただろう。しかし、吹雪を豪炎寺の代わりにしようとして足掻いていたのは他でもない、自分一人だと気付いてしまった。

代わりなんていない。それは当たり前でいて、なのに簡単に見失ってしまう事。

ジェミニとの試合をえて、さらに間近で吹雪のプレーを見てやっと決心がついた。こいつは勝利の為なら仲間との連携もとれるプレイヤーで、そのプレーは真剣にサッカーに取り組んでいるからこそできるものだ。

吹雪とならば、豪炎寺が戻って来た時、彼に恥じないチームを作

る事ができるのではないかと。

- - 豪炎寺…待ってるよ。

必ず最強のチームになる。そして。

- - 必ず迎えに行つてやる。

【0・13・菖蒲が謡う、花言葉】

瞳子は憂鬱だった。漫遊寺の噂は聞いてある。奈良シカ公園の時のように門前払いをくらったら面倒だ。

漫遊寺中、という学校は、サッカー以外の意味でも有名だった。仏教の精神に基づいて、心身ともに鍛える事を常とし、格闘技にも精通している。

京都の一部地区では、警察よりもアテにされているとの事だった。漫遊寺中の子達がいるから、私達の出番は全然無いんですよ、と初老の巡査は笑った。

元々この近辺は治安のいい街なのだろう。稀に出る窃盗犯や変質者は、警察より先に漫遊寺の生徒が捕まえてしまうのだという。共学校だが女生徒も十分頼りになるのだとか。変質者を捕まえたというのが、狙われた女生徒だったというのだから凄い。

「ただ最近、西の裏路地を見慣れない男が彷徨いているという噂がありました」

漫遊寺について話を聞かせてくれた警官は、ついでにそんな忠告をした。

「今のところ、何か悪さをしたという話は聞かないのですが。何せ目撃情報がみんな夜なせいで、本当に男なのかも分からのですよ。えらくすばしい奴だとか」

「そうですか」
すばしい奴。という表現をするからには、不審者は大柄ではなさそうだが。

もしかしたら、という考えが頭の隅を掠めて消える。今の“彼”ならばやりかねない。それでも信じたくはなかった。

それにもしそудだとしても、自分にできる事なんて何もない。

「漫遊寺中も手こずる不審者なんてめったにないもんですから、皆不安がつてるのですよ。まあ大した事ないでしょうが念の為気をつけて下さいね。宇宙人なんてヤボなもんも出て来る世の中ですから」

自分達を噂の雷門イレブンと知ってか知らずか。目皺を寄せて笑い、中年の巡査はそう話を締めくくった。

次の問題は漫遊寺中の場所だ。キャラバンでは行けない山の中にあると聞いて、メンバーの何人かがめんどくさそうな声を上げた。せめて街を観光してから行きたい、などと壁山や聖也のあたりがごねたので呆れかえる。遊びに来たわけではないというのに。

だが本当に面倒な事になるのは、漫遊寺中に着いてからだったのだ。

「ぎゃあっ！」

塀をぐるりと回って漫遊寺の正門を捜していると、あらぬ方向から栗松の悲鳴が聞こえた。そう、なんと上から。見上げれば、松の木の枝から栗松の体が逆さ吊りになっているではないか。

その足首にはロープが。円堂が目をまん丸くして叫ぶ。

「そんなとこで何やってるんだよ栗松ー？置いてくぞー！！」

…なんだろう。明らかに質問がおかしい気がしたのは自分だけではあるまい。そこはまず“どうしたんだ”と尋ねるのが普通ではあるまいか。

「これが遊んでるように見えるでやんすかああ！？自分にもよく分からないでやんす！突然吊り下げられて…とにかく助けてでやんすー！！」

頭に血が上るーと喚く栗松。しかしロープを外そうにも、枝の位置が高すぎる。

「あーもう、しょうがない奴だなあ…」

ため息一つ。裁縫用のハサミを貸してくれるよう、秋に頼む塔子。そのまま何をする気かと思えば――なんと彼女はハサミを投げナイフに模して投擲した。

ハサミはロープを見事に切断し、松の木に刺さる。そして。

「ぐえっ！」

栗松が落下。落ちた彼に皆が駆け寄り、足首に絡まったままの千切れたロープを解いた。

「あ、ありがとうでやんす。でも塔子先輩…乱暴でやんす」

「助けてやってただけ有り難いと思えよな」

フン、と鼻を鳴らす塔子。可愛い女の子の顔をしていても、元は総理大臣直属のSP。さすがの技術といったところか。

まあそれはいい。

瞳子は千切れたロープがぶら下がっている松の木を見上げる。

「何かしらこれは。随分質の悪い悪戯ね」

明らかに、何者かが仕掛けたトラップだった。チャチで子供じみではいるが、一歩間違えば怪我をする。

悪戯にしてはやや悪質だ。

さらに面倒はこれで止まらなかった。今度は別の所から上がる悲鳴。

「ちょ…目金離せて…わああっ！」

「ぎゃああつ！」

ドスン、という音が二回した。瞳子が辛うじて見たのは、地面の下に消える風丸の長い水色の髪。今度は一体何なのだ。ため息を一つついて、子供達と共にその場所へ歩いていく。

なんとまあ、典型的な落とし穴だこと。

穴は大して深くない。が、穴の底で目金がのびている。隣では頭を押さえて呻いている風丸。どうやら穴に落ちそうになった目金がつさに風丸の服を掴んだせいで、二人一緒に落下した次第のようだ。

「いつてえ…何なんだよもう」

「大丈夫か風丸」

砂を払う風丸に、手を差し出す鬼道。

「大丈夫。タンコブできたけど。…おい目金、起きろよ。人を道連れにしやがって」

彼の手に捕まって立ち上がりながら、目金に声をかける風丸。が、目金はすっかり昏倒して目を回している。しばらく起きそうにない。

「漫遊寺中ってなんだ、学長がトラップ趣味かなんかか？迷惑極まらないぞ」

一ノ瀬が憤慨して言う。すると木の陰から、子供の笑う声が聞こえた。

「うつしっし！引っかかってやんの！！ばっかじゃね？」

そこに立っていたのは小さな少年。栗松と同じくらいの身長しかない為、一見小学生にも見えるが――漫遊寺の生徒である事はその茶色い和風な制服が証明している。

彼は――そうだ、街で話してくれた警官が言っていた。漫遊寺の生徒は皆優秀だけど、一人だけ。一年のサッカー部員にとんでもない問題児がいるのだと。

悪戯やトラップが大好きで、先輩だろうと教師だろうと他校生だろうとおかまいなしに邪魔をしては迷惑をかけるそう。確か名前は――。

「あなた……サッカー部の木暮夕弥君？」

名を呼ぶと、少年はピタリと笑うのをやめて、不信感を露わにして瞳子を見上げた。

「だったら何だって言うのさ。ってか、あんた誰？」

その少年は瞳子監督が言っていたように、木暮夕弥その人であった。

見た目は天使だが中身は悪魔だぞ、と漫遊寺の生徒の一人が教えてくれた。学校設立以来の問題児だとも。サッカー部の監督が保護者という事もあり、サッカー部に所属したはいいが、とにかく迷惑をかけまくる。

あつちにトラップ、こつちにトラップ。幼稚園児ばりにくだらないものから、大人顔負けレベルまで何でもござれ。無論、栗松達がハマったのも彼が学校敷地内に仕掛けた罠の一つであった。

実はトラップの位置は、学校に入ってすぐ気付いていた聖也。こ

れでも一応“軍属”という事になっているのである。地雷に比べたら可愛いもん、と思ってしまうのはかなり末期だろうが。

しかも“命に関わるもんは無いつばいし、誰か引つかかったら面白いんじゃない？”という理由で誰にも喋らず放置していた確信犯である。まあ可愛い吹雪や個人的にお気に入りな鬼道が引つかかりそうになったら、その前に助けるつもりだったが。

もはや開き直りで鼻屑目万歳。

- - しかしまあ…あのガキがねえ。

木暮のした事を詫びたのは、本人ではなく学長とサッカー部の部長の垣田であった。

いわく。木暮があんな風にひねくれた原因は彼の過去にあるそう。まだ小さい頃、旅行先で母親に駅に置き去りにされた子供。それが彼なのだという。彼を拾って育てたのが学長だそうだ。

誰よりも信じていた親に裏切られた事で、極度の人間不信に陥った木暮。サッカー部に入れたはいいが、試合をしてミスをするたび人のせいにして、あげく練習はサボるわ悪戯するわ。

そうなつてくると対戦校にも迷惑がかかる。試合に出させるわけにはいかず、しばらく雑用をさせて心身共に鍛えさせようとしたところ - - 彼の悪戯小僧っぷりは、ますます悪化したのだという。

- - なんか…昔の誰かさんを見てるみたいじゃねえか。

聖也は自嘲する。

裏切られるくらいなら信じない。信じれば裏切られる。

彼の気持ちがかかるなんて、軽々しく言っている言葉ではないが - - でも、分かるような気はするのだ。

雪崩の事故の直後。まだ到底自活できる状態になかった吹雪を、暫く引き取って育てていた自分。彼だけは聖也の正体を知っている

し、逆に聖也も一番荒れていた時期の吹雪を知っている。

『死なせてっ…アツヤのところに逝かせてよおっ…!』

あんなに幼い子供が、そう言って泣き叫んだ。あの頃の吹雪の事を、聖也は忘れる事が出来ない。

『お願い…優しくしないで…ほつといて。どうせみんな僕を置いてくんだ…だったら最初から、何も要らない…』

自分には何も出来なかった。ただ抱きしめて言うしかなかった。

『オレは君を置いてったりしないよ。君を置いて死んだりしない。…約束する。だけどね…君が死んだら、オレは悲しいから。これはワガママだけど、まだ当分…一緒にいて欲しいよ』

身勝手だろう。聖也のエゴが、吹雪から逃げ道を奪った。彼の生を縛り付けた。まったく酷い話だ。

それでも言ったのは。かつて自分を救ってくれた人の言葉だったから。自分の愛する人が繋いでくれた想いだったから。

その瞬間に、吹雪も自分も道を選んだ。

聖也は、吹雪を我が子のように愛する事を。

吹雪は、それでもなお生き抜く事を。

吹雪が生きる決意をしたのは、彼の中に“アツヤ”の人格が現れた事で知った。“アツヤ”は言った…俺が士郎を守る、と。吹雪士郎が生きていく為に、彼の中の“アツヤ”は生まれたのだ。

「…あーあ。なんかガラにもなくセンチメンタル」

小さな呟きは、夜に溶ける。イプシロンとは戦わない、と言い張

る漫遊寺を放っておくわけにもいかず、襲撃予告日まで京都に滞在する事になったのだ。

多分、目的はそれだけでもあるまい。

雷門を罫にかけた罰として雑用を増やされた木暮。その木暮の掃除の手際の良さや身のこなしを見てピンと来た者もいる筈だ。

彼の身体能力、潜在能力は恐ろしく高い。ちゃんと鍛えればサッカー選手として面白い化け方をするだろう――と。

だがその為には、あの徹底した人間不信ぶりをなんとかする必要がある。

木暮の過去を聞いて、自分以外にも何人かの目つきが変わっていた。吹雪、鬼道、春奈、そして瞳子。

同情もあるだろうがそれだけではあるまい。自分達に出来る事はないか。多かれ少なかれそう思った筈だ。

寝室に飾られた掛け軸。菖蒲の絵が、月明かりに照らされている。菖蒲の花言葉は確か。

「信じる者の幸福：か」

信じなくてもいい。誰かを恨んでもいい。それでも人は、愛する事でしか幸せにはなれない。木暮もまた気付く日が来る。いつか、きっと。

布団の中から庭先に視線を映す。ジャージ姿の春奈が、どこかに歩いていくのが見えた。

――最初に動いたのは春奈、か。

化ける。確信に近く聖也は思う。

木暮だけではない――吹雪も、そして春奈も。

楽しみで仕方ない。此処にいる誰もが秘めているのだ。無限に広がる、可能性というヤツを。

【0・14・愛がなければ、見えない】

何だかうまく寝つけない。

柄にもなく緊張しているのだろうか。瞳子はため息を一つついて布団から出る。

お前は最近ため息が多くなったな、と。父がどこか物悲しそうに言ったのを思い出す。きっとその原因の一端が自分にある事に気付いていたのだろう。だからこそ何も言わずに瞳子を送り出したのかもしれない――もはや自らの修羅の道は引き返せないところに来ているから、と。

旅行先では、寝る時も普段着を着込むのが瞳子の癖であった。無意識に警戒心が働くのかもしれない。すぐに動ける服を着ていないとなんだか落ち着かないのだ。

漫遊寺に貸し与えられたこの部屋は、瞳子一人で使っている。たった一人だけの大人の女性への配慮だろう。襖を開け、縁側へ出るちよつと出歩く時の為にと持ってきておいたサンダルを履いて庭に出た。

――今夜は満月……か。……不思議ね。長い間、空を見ていなかった気がする。

自分の歯車は、十年前のあの日に狂った。そして狂ったまま軋んだ音を奏でて廻り続けている。さらなる歪みを飲み込みながら。

それでも父よりはマシなのだろう。父の歯車は凍りついたまま動く様子がない。彼の頭の中ではいつまでも愛する存在は過去の姿のまま――美化され続けて、微笑みを振り撒いているのだろう。

目の前にいる、彼をそれでも愛し続けている子ども達の姿は、見えないというのに。

- 私に何が出来るかなんて分からない。だけど… けども。

自分は一度逃げ出した。さよならすら言わないまま、あの子の前から姿を消したのだ。

既に運命が狂い出していたあの子の、最後に見た笑顔が忘れられない。もしかしたら全て分かっていたのかもしれない。自分が道具として利用されている事も誰かの身代わりでしかない事も - 瞳子が自分に言い訳をしながら逃げ出した事も。

彼を止める為。悲劇を終わらせる為。

そんな事を言いながら、自分は渦中にある人々を見捨ててしまった。あの時ならまだ戻れたかもしれない、彼らを。

赦されない罪を犯した。責め立てられても仕方ない事をした。 - だから。

せめて。最初の誓いだけは守り通す。悲劇を止めたいと願った心だけには絶対嘘をつかないと。

「私はエイリア学園を、倒す。そしてあの子を… 今度こそ救ってみせる」

誓いを小さく呟きに乘せる。迷ってはいけない。惑ってはならない。

その目的を果たすまで、何が起きても折れずに進まなければならない。そうでなくてはあの子達に - 雷門イレブンの彼らにも申し訳が立たない。

自分もまた彼らを利用している事に、間違いはないのだから。

「？」

誰かの話し声が聞こえる。こんな夜中に誰だろう。まさかメンバーの誰かがこっそり特訓してるんじゃないだろうか。だとしたら叱ら

なければ。いくらなんでも極端すぎる。明日に響いたらどうするのだ。

声は、寺の中からのようだ。月明かりに照らされた砂利道を抜け、木造の階段を音を立てないよう気をつけながら登る。

「…なんで俺に構うんだよ、お前」

入口まで来ると、今度ははっきり声が聞こえた。

「半端な同情なら帰れよ。わたしはいい人ですーってアピールしたいなら余所でやってくれる？はつきり言って迷惑なんだ」

声の主が判明する。

一人は木暮だ。もう一人は――。

「そうやって…あなたはずっと人を遠ざけて来たのね」

女の子の声。春奈だ。しかしどうして彼女がこんな時間にこんな場所で、木暮と一緒にいるのだろうか。

「最初から近寄らなければ…誰かを好きにならなければ。離れていったって傷つかずに済むから。裏切られるくらいなら信じなきゃいい。そう思ってるんでしょう？」

「よく分かってんじゃん」

二人は扉に背を向けて話しているようで、隙間から覗いてもその顔は見えない。それでも木暮が、嘲るように笑ったのは声色で分かる。

「そうだよ。どうせ人間はみんな損得勘定でしか動かない。邪魔になつたと思ったら簡単に捨てるんだ…血の繋がった親ですらな！親にすら愛されなかった子供が、他の誰に愛されるって言うんだ！！」

はははつと見下すような笑い声。だが瞳子には分かった。それは笑顔の仮面の下で、泣いている人間の声だった。

泣いて泣いて泣き続けて、絶望に、悲しみに狂って。歪んだ声で自分をごまかすように笑うしかない――そんな声。

『優しいフリなんて、しないで』

思い出したのは、六歳の子供とは思えないほど冷めた眼をしていた彼のこと。銀色の髪をイライラと手でいじくりながら、冷え切った青い眼で瞳子や父を見上げた。

『血の繋がった親ですら平気で子を捨てるんだ。赤の他人なんか信じられるわけない。……どうせ後で捨てるなら今私を捨てて。そっちのが早いでしょう』

子供は親に捨てられた。母親が余所に男を作って出て行ってしまい、父親も保護者としての責任を放棄した。さらには親戚中を盤回しにされた挙げ句、自分達のところへ来たのである。彼の心は完全に冷え切ってしまった。

当時六歳だった男の子が、まるで大人のように自分のことを“私”と言ったのである。それだけで、彼がどれほど高い壁を作ってしまったのか想像できた。

木暮はあの頃の彼と同じ。

実の親ですら愛されなかったのに、別の人間に愛される価値なんてない。そんな奇特な人間現れる筈がない。

だから。最初から期待しなければいい。何もかも疑えばいい。だからこれ以上、誰も自分の領域に入って来ないで。

「……私には、あなたの気持ち分かるなんて言う資格は無い。私に

も両親はいないけど…二人は事故で死んだのであって、私を捨てたわけじゃないもん。それに…私にはお兄ちゃんがいたから。お兄ちゃんが…お父さんの代わりも、お母さんの代わりもしてくれたから」

それはきつと良くない事。それでも私はお兄ちゃんに甘えてたの、と。春奈は少し切なそうに、まるで懺悔をするように言う。

「でもね。だからこそ一つだけ知ってるの。…失うのは悲しいよ。でも…人を幸せにするのは、愛することだけだつて。友達でも、恋人でも、家族でもいい。誰かを好きになるとね…自分も幸せになれるの」

人を幸せにするのは、愛だけ。

瞳子は無意識に、握りしめる掌に力を込めていた。その意味が痛いほど分かる。今まさに自分はそれを実感している。まるで自分達に向かつて言われているようで…胸が痛い。

今の“あの人”は幸せなんかじゃない。憎しみに溺れて愛することを忘れて、幸せである筈がない。それを思い出してしまう。

何度も何度も、理解させられる。

「私は恵まれてる。だから今まで、誰かに裏切られて傷ついたことは無い。でも、お兄ちゃんはあるの。お兄ちゃんは…本当のお父さんのように、信じていた人に裏切られたから」

本当のお父さんのように…それはもしか、響木監督が言っていたあの男の事だろうか。

影山零治。元帝国学園サッカー部の総帥にして、復讐に墜ちたかつてのイナズマイレブンの一人。忙しい義父に代わり鬼道の後見人及び教育係も務めていたという話も聞いている。

「それでも、お兄ちゃんは誰かを好きになる事をやめなかった。妹の私だけじゃないわ。キャプテン、雷門や帝国のみんな。お兄ちゃんはみんなが大好きだから、みんなもお兄ちゃんが大好きなの。お兄ちゃんもみんなも知ってるんだよ。それが“幸せ”って事なんだって」

木暮君は幸せになりたくない？春奈はまるで姉が弟に語りかけるように、優しく言う。

「信じられるかよ、そんな事…いきなり言われたって」

ずっと黙って聞いていた木暮が、漸く口を開く。

「…無理だよ。だってみんな、俺が嫌いなんだ。だから試合も出してくれないし雑用ばかり…。俺も…好きになんかなれないよ…」

「真実はね」

春奈の声は、優しい。自分より体の小さな木暮を抱きしめて頭を撫でている。そんな絵が目に浮かぶようだ。

「見る者によつていくらでも色を変えるよ。木暮君も勇気を出して、愛を持った見方をしてみて。きっと、世界は変わるから」

彼女が立ち上がる気配があつたので、瞳子は慌ててその場から離れた。二人は瞳子の存在には最後まで気付かなかつたようだ。春奈が扉を出て、母屋に戻っていくのが見える。

結局叱りそびれた上、自分も夜更かししてしまったけれど。今の話が聞けて良かった。そう思っている自分も、確かにいる。

…真実はいくらでも色を変える…か。

有名な漫画の名探偵の口癖は、“真実はいつも一つ！”だっただ

ろうか。だが見る者の心一つで真実は変わるとすれば、それは一つとは言い切れない。

本当の意味での真実は、その人の心の中にしか無いのだから。彼の人の大まかな目的や、既に行った行動ならば確定できないでもない。物理的証拠を挙げ連ねれば100%とは言わないまでも、90%くらいまでなら確証をつける事もできるかもしれない。

でも、心だけは無理なのだ。

その瞬間、彼の人は何を想っていたか？何を願ってその行動を起こしたか？他者はそれを、周りの状況によって判断し推測するしかない。そして推測である以上、“100%の真実”には成り得ないのだ。

推測する者が判断する、“50%の真実”は。観察者の主観が入るゆえ、探偵の数だけ真実を得るのだ。

木暮を嫌うから試合に出してくれない、は木暮の中の“50%の真実”で。

木暮を想うから試合に出されない、は春奈の中の“50%の真実”だとすれば。

それだけで真実の数は、複数になる。

- 幾らこちらが愛しても、向こうも同じように愛してくれるとは限らない…それが私の真実だけ。

悲観的に事実を見つめるも、その逆も自由なのだ。だとしたら、明るい見方をする人間の方が幸せになれるのだろう。

人間は人間にしかない。天使の翼も無ければ、杖のひとりりで無から有を生み出す魔女にもならない。

それでも。

自分を、人を、幸せにする魔法は、もしかしたら誰もが当たり前のようになっている力なのかもしれないと思う。ただ忘れてしまっていたり、気付く事が出来ないだけで。

春奈は気付けた一人なのだろう。苦難を乗り越え、傷ついて尚愛をくれた人が――兄の存在があった事で。

――信じるのは、簡単なようで難しいわ。一度裏切られた人間なら尚更。

自分は、父親を裏切った。同時に、父親に裏切られた。瞳子はずっとそう考えて、彼に背を向けてきた。

だがこう考える事も出来る。私達は裏切り合ってなどいない。ただ一時的に道を違えてしまっただけ。互いを愛する気持ちが消えたわけじゃない。だから必ず同じ場所に戻って来る筈だ、と。

――あの子は、あの子達は私に裏切られたと思うのかしら。それともまだ私を信じて待っていてくれるのかしら。

姉さん。お姉ちゃん。姉貴。

あの優しくて清らかだった子供達の顔が浮かんで、消えていく。滑稽な事に、誰もが笑って瞳子を呼ぶのだ。あの頃と同じように、嬉しそうに。

【0・15・愛し子の、空は遠く】

監督に知られれば、間違いなく叱られるだろうな。そう思いながらも、円堂の身体はサッカーボールを持って外に出ていた。

漫遊寺のグラウンドは静まり返っている。満月の青白い光で照らされた古都は、どうか幻想的だ。ジャージに運動靴の格好で抜け出し、ボールを蹴る。一人でできる事など限られているが、リフティングの練習くらい出来る筈だ。

- 真夜中でもドキドキして目が覚めるとか…俺ってほんとサッカーバカ、なのかなあ。

事あるごとにサッカーバカだと皆に言われる円堂。その度にバカって言うなーと反論してきたが。ここまで来ると残念ながら否定できない。

秋の夜風が涼しい。辺りに誰もいないのを見計らってボールを蹴り始める。

昔の有名なサッカー漫画の名台詞に、“ボールはともだち”というのがあるが。あながち大袈裟な表現でもないのだと最近思う。

だって、ボールが無ければサッカーは出来ない。いつも蹴られるは殴られるは、自分達の為にある主酷い目を見してくれるボール。いつも感謝して磨いて、手入れを怠ってはならないぞ、と響木監督は言っていた。

サッカーが今出来るという幸せ。自分はあらゆる事に感謝すべきなのだろう。そのサッカーを守る為に戦うのは自分自身の為であり、今まで支えてくれた人達への恩返しでもあるのだ。

「…ん？」

漫遊寺中のグラウンドは広い。他の部活とスペースを取り合う必要が無いのか、サッカーゴールは地面に完全に固定されている。いちいち出し入れしなければならぬ雷門とは大違いだ（まあそれは自分達が弱小だったのも大きな要因だろうが）。

そのサッカーゴールの前に――人がいる。

最初は幽霊かと思つてドキリとした。時間は真夜中、場所もお寺の側と来ている。さらには色白の美少年と来れば、怪談としてかなり王道の域に達しない。

――いやいやいや、んなわけ無いつて。足あるし、透けてないし……っ！

自分の中で必死に否定理由を探しながら、しかし好奇心には勝てずそろりそろりと近寄っていく。

少年は少し長めの紅い髪をしている。色白、と先程表現したが、色白というよりあまり血色が良くないと言った方が正しい。横顔なので見えにくいだが、切れ尾の青い眼をしているようだ。

年は体格も、自分と大差無いように見えた。むしろサッカー部のGKとして鍛えている自分より華奢かもしれない。

「……君は」

「ひゃ！」

じつと観察していたら、突然相手が振り向いたので。思わず円堂は間拔けた声を上げてしまった。

おばけ！と叫ばなかったただけマシかもしれないが。

すると相手の少年は、意外な対応に出た。

「円堂守君、だよな。雷門中キャプテンの」

なんと自分の名前を呼んで来たのである。

「へ？俺の名前……知ってるの？」

「勿論さ。君達是有名人だもの。特に君はキャプテンじゃない」

どうやらちゃんとした人間らしい、と知って安堵の気持ち半分、自分の名前を知られていた驚きが半分。

そんな円堂の戸惑いを察してか、少年は苦笑する。

「見たんだ、試合。凄いよね。みんな君達の噂、してる。だから俺も…一回君と話してみたくて。年も近いみたいだし」

そういえば、自分達のエイリアとの試合は全てTV中継されていたのだっけ。思い出してつい赤くなる。彼はメディアで円堂を見て知ったのだろう。漸く、自分達が有名人になっただけという実感が湧いて来たのだ。

まさかこんな所でファンに会おうとは。

「あ…ありがとう。でも俺なんかまだまだ全然だよ。ジェミニストームの後も強いチームは控えてるみたいだし…あ、えっと…」

「あ、ごめんごめん。名前言って無かった。俺、基山ヒロト。ヒロトでいいよ」

片仮名でヒロト、と書くらしい。シンプルだけど気に入っている名前なのだという。

大人しい性格なのかもしれない。よろしく、と円堂が手を差し出すと、ちよつと遠慮がちに右手を出してきた。

再びほつとしてしまふ。握った手は確かに冷たかったが、それでも確かに人間の温度だった。

「こんな時間にさ、まさか君に逢えるなんて思ってた。勝手に敷地内に入った俺も俺だけど」

「あ、それ気になった。俺達に逢いたいなら昼間に来ればいいのに。何で夜中に来たんだよヒロト。親御さん心配するぞ」

いや、その親の反対押し切ってサッカーを続けた挙げ句、現在進行形で心配かけまくっている自分に言えた事では無かったのだけど。

「…こつそりね。抜け出して来たんだ。今じゃなきゃ当分無理そうだったから」

俺、身体弱くてすぐ倒れるからさ、と。そう言われて得心する。ヒロトの肌の青白さは、病弱さから来るものなのだと。

「生まれつき心臓に欠陥があるんだって。自分でもよく分からないし、これでも昔よりずっと良くなったんだけど。この間具合悪くしたから、暫く外出禁止令出されちゃって」

「ちょ…いいのか、出歩いて。また倒れたら」

「大丈夫だよ。みんな心配性なだけ」

そう言って微笑むヒロトは確かに肌の色は悪いが、病人の顔には見えなかった。ちよつと色の白い、普通の少年に見える。

「君達のサッカー、見ていて羨ましいな。どんなに辛い状況でも真剣に楽しんでるのが分かるもの。俺もサッカーやるけど…君達のようには、出来ないから」

その言葉を円堂は、身体が弱いせいで思うようにサッカーができない、という意味だと解釈した。

語るヒロトはどこか淋しそうで、円堂の足元のボールを眩しそうに見ている。その視線に気付いた時、円堂の行動は早かった。

「じゃあさ、今一緒にやろうぜ」

サッカーを愛する奴に、悪い奴はいない。確かにサッカーを悪用する奴らと自分達は戦ってはいるが、彼らだっていつか分かり合う事が出来る筈だと円堂は信じている。

そして同じくサッカーを好むヒロトは、既に円堂にとって友達も同然だった。なるほど、確かに自分はサッカーバカなのだ、果てしなく。

「二人しかいないから、大した事できないけど。どっちみち特訓する為に、夜更かししてたんだよな俺」

「いいのかい？」

「いいって！特訓も、一人より二人のがずっと楽しい！！」

そこから先は語るまでもあるまい。どうやらヒロトがかなりのテクニックを持つプレイヤーである事と、彼もまた相当なサッカーバカであるらしい事が判明して。

二人は空が明るくなり始めるまでボールを蹴っていた。ヒロトの身体を気遣いながらなので加減はしていたが、それでも時間を忘れるほど楽しい一時だった。

自分達がすっかり徹夜してしまった事に円堂が気付いたのは、ヒロトが帰った後である。

その後慌てて布団に潜り込んで寝てしまった円堂が、思い切り寝坊して瞳子に大目玉をくらったのは――言うまでもない事である。

あの円堂とかいうキャプテンは馬鹿だ。

木暮は呆れ果てていた。確かに自分も朝は相当弱い。普通、世界の命運をかけた戦いの真っ只中で寝坊なんぞするだろうか。

――こんな奴がキャプテンで、大丈夫なのかよ雷門。

その円堂は今、木暮の隣で欠伸を噛み殺している。夜中に特訓しすぎて寝過ごしたらしいと専ら噂だった。本当に馬鹿げている。そこまでサッカーに一生懸命になる理由が理解できない。

サッカーが好きか嫌いかと言われたら、多分好きに分類されると思う。元より身体を動かす事自体が嫌いじゃない。そんな自分と与えられたのがたまたまサッカーだったというだけかもしれないが。

- 馬鹿みたい。そんな無理しちゃってさ、頑張っちゃってさ。…いくら努力したって報われない事もあんだよ。

ギリ、と奥歯を噛み締める。

悪戯やトラップで皆を掻き回してきた自覚はあるが。これでも自分なりに、一生懸命サッカーに取り組んできたつもりなのだ。命じられた雑用だつて嫌々ながら手は抜いてない。なのに。

いくら頑張っても頑張っても、自分は試合に出させて貰えない。それどころか漫遊寺の連中は、自分達で大会にも出ようとしない。

拳げ句今回の一件だ。宇宙人襲来だなんだと世間は大騒ぎしているのに、あまりにも楽天的すぎる対応。話せば分かつて貰える筈だ？邪念さえなければ理解しあえる筈だ？だから試合はしない？

- お気楽すぎんだろ。話の通じる相手じゃないって早く分かれよ。

邪念？くだらないつたらない。心に闇の無い人間なんているわけがない。漫遊寺の奴らだつて自分を勝手に嫌ってハブって、パシリみたいな真似をさせているくせに。

自分達は聖人だとも言つつもりか、偽善者気取りめ。反吐が出る。

- 宇宙人にボロボロにやられちまえ。学校が壊されたって知るもんか。

死にたいと思うほどブラックじゃないが。それでもいつそ全部壊れてしまえばいい、と常々思つてはいたのだ。

どうせ何も変わりやしない人生。誰もが裏切りあつて綺麗な仮面だけ被つて生きていく世界。

なんとでもなればいい。どうせ、自分が愛されない事に変わりはないのだから。

- だから放つとけよ。くだんねえ同情なんか、うんざりなんだ。

チラリと、マネージャーの席に座っている眼鏡の少女を見る。音無春奈。昨晚一人で特訓していたらやって来て、長々説教垂れていった女。

確かに自分はチビかもしれない。哀れな境遇に見えるかもしれないが。

気に入らなかった。同い年のくせに上から目線。同情丸出しな顔で見やがつて。自分はお前の安っぽい言葉に引つかかるほど、落ちぶれちゃいない。

- そうだよ。俺も…無視すればいいんだ、あんなヤツ。

なのに。イライラして仕方がない。彼女の言葉が耳について離れない。

『私は恵まれてる。だから今まで、誰かに裏切られて傷ついたことは無い。でも、お兄ちゃんはあるの。お兄ちゃんは…本当のお父さんのように、信じていた人に裏切られたから』

自分には、“幸せ”というものがよく分からない。幸せになれば、こんな風に苛つく事もなくなるんだろうか。それも知らない。だけど。

『それでも、お兄ちゃん是谁かを好きになる事をやめなかった。妹

の私だけじゃないわ。キャプテン、雷門や帝国のみんな。お兄ちゃんみんなが大好きだから、みんなもお兄ちゃんが大好きなの。お兄ちゃんもみんなも知ってるんだよ。それが“幸せ”って事なんだって』

春奈は兄の話をする時、とても“幸せ”そうに、見えた。

兄の事が好きで、心から信じているのだと。信じる事をやめた木暮にも分かったのだ。

――じゃあさ。誰かを好きになる事も信じる事も出来ない人間は、どうすればいいんだよ。

それは、やっかみなのかもしれない。認めたくない事だけど。グラウンドを見れば、いつものように修練に励む漫遊寺イレブンの姿がある。

卑屈な気分になって、木暮が身体を丸めた時、だった。

ドオン！

空から、重たい音と共に何かが落下してきて。砂埃が晴れた先を見た雷門の連中が、身構えたのが分かった。

黒いサッカーボール。

イプシロン、襲来だ。

【0 - 16・見えぬ真実、掴めぬ事実】

事は鬼道の危惧した通りの展開となった。

自分達は闘わない。お引き取り願いたい。そう意思表示して説得にあたった漫遊寺の話を、イプシロンの面々が聞く筈もなく――ああ、そもそもそんなお人好しの集団なら、そもそも侵略行為になど走る筈がないではないか。

長い黒髪のイプシロンのリーダー――デザームといったか――は、痛く機嫌を損ねたようだった。そして副将らしき褐色の肌の少年、ゼルにアイコンタクト。ゼルはニヤリと笑って、黒いサッカーボールを蹴り上げた。

制止の声をかける暇なく。

ボールは容赦なく、漫遊寺の校舎の一部を破壊した。正確には漫遊寺の敷地内にある寺の五重の塔を、である。

生徒達の悲鳴が上がる。ガラガラと歴史的建造物が音を立てて崩れていく。それは築かれた積み木の城をちよつと手でつついて崩壊させる様にも似ていた。そう、あまりにもあっけなく。

流石の漫遊寺イレブンも、黙ってはいられなくなつたようだ。そして部長の垣田が告げた――お前達の挑戦を受けてやる、その代わり自分達が勝つたらこれ以上の破壊はするな、と。

計算通り、と言わんばかりに満足げなデザーム。彼らに異論があるう筈もない。そうして漫遊寺とイプシロンの試合が始まつたのだ。

だが。

――まさかここまで力の差があるとは……。漫遊寺は裏の王者とまで言われたほどの強豪校だぞ？

あまりにも無残な負け試合。いや、それはもはや試合と呼べるも

のなのか。

スピード、パワー、テクニク、作戦立案能力と実行力。全てにおいてイプシロンが圧倒している。次々と倒されていく選手達。哀れなほど開いていく点差。まるで初めてジェミニストームと戦った時の自分達のような有り様だった。

それでも、漫遊寺イレブン諦めない。そして彼らがボロボロになりながらも立ち上がり続ける限り、自分達も目を逸らしてはならないと知っていた。

傍観者だからこそ。最後まで目を逸らさず見届けなければならぬのだ。たとえどのような結末になったとしても。

――エイリア学園について。だいぶ分かってきた事がある。

先日の北海道でのジェミニストーム戦において採取した、エイリア達の髪。その半分は、塔子がSPフィクサーズに頼んで、とある科学機関に解析を依頼していた。
ところが。

『解析データが…握りつぶされたみたいなんだ』

その科学機関がクロだったのか。あるいはもっと上から圧力がかったのかは分からない。いずれにせよ、自分達は解析結果を知る事ができなかったのである。

だがこれでハッキリした。エイリア学園には少なくとも、地球人のバックにいる。それも公的機関に圧力をかけられるほどの。加えて彼らのDNA鑑定をされたらマズイ理由があるのだ。

鬼道の中で、既に推測は確信に変わりつつあった。だが肝心の証拠がまだ無い。さらに、黒幕の正体をハッキリさせなければ解決にはほど遠い。

そこで、影山絡みの件で世話になっている鬼瓦刑事に幾つか依頼

をしたのである。何処に敵がいるか分からないから内密に、を前提にして。

- - たくさんの子供達。サッカー。圧力をかけられるほどの権力。研究機関に財力。そして…神のアクア。恐らく、そこに鍵がある。

影山が脱走し、側に黒いサッカーボールが落ちていたという話は、まだニュースになっていない。しかし鬼道財閥を率いる義父から情報を得て、鬼道は既に知っていた。まだ皆には話していないが。

影山の脱走にエイリアが関わっているのはほぼ間違いない。ならば影山のフットボールフロンティアの陰謀にも、エイリアの影があった可能性がある。

鬼瓦は言っていた。神のアクアの解析を進めているが、原材料に見た事もない物質が混じっていて調査が遅れていると。

最初は軍事用のドラッグと思われていた。確かに某国で使われていた増強剤がベースなのは間違いないという。だが明らかに、それ以外の物質が混じっている。まるで独自の改良を加えられたかのよう。

- - エイリアの連中がもし本当に人間で。神のアクアのような薬物により強化されているとしたら…。

薬物と生体実験。相応の規模の研究機関が必要になる筈だ。つまり、黒幕はかなりの権力と金を持つ人物。影山がああの時間に北ヶ峰を通るという事を知っていたのなら、警察にもネズミがいる筈である。敵は組織力がある。それも規模は決して小さくない。

それだけではない。エイリアの子供達という被験者を、黒幕はいかにして調達か。ジェミニストームとイプシロン、少なくとも二十人以上。その人数を集めるのは容易ではない。

宗教か、拉致か。ここは日本なのだ。二十二人もの子供達が突如

失踪して足がつかないとは思えない。少なくとも親達が騒ぎ出す筈だ。その二ユースも圧力をかけて握り潰しているのか？それとも親達も洗脳されているのか？

海外から攫っていたという可能性は低いと思っている。何故ならレーゼ達は流暢な日本語を喋っていた。特筆すべき訛りもない。幼い頃から日本語教育を受けていたと考えるのが自然だ。

だったら。

一番簡単な方法は。全員身寄りのない子供達を使うこと。それならばこの国でも事実発覚しにくいのではないか。

- - 黒幕は日本人。日本の情勢に詳しい権力者。孤児院のアテと研究所のアテがあり、かつサッカーに固執する人物…。

全ては憶測の範囲でしかない。しかし筋は通るのだ。

その推論を鬼瓦に話した上で依頼した事とは。今挙げたような条件に当てはまる人物をリストアップして欲しいという事。

特に孤児院の件から絞り込める筈だ。最近子供達の姿を見かけなくなったり、奇妙な失踪事件が起きた施設はないか。その関係者に、サッカーに固執し、なおかつ経済界の大物がいないか。

何より。レーゼやデザームの顔はテレビでも流れているのである。その顔の子供が施設にいた証拠を掴めれば決定打になるだろう。

物的証拠さえあれば、この直感ばかりのデタラメ推理にも裏付けがとれる。あとは鬼瓦がうまく動いてくれるのを期待するしかない。ある程度お膳立てしてくれば、今度は義父の方からも手を回して貰える筈だ。あまりやりたく無いがそうも言ってられない。事は一刻を争う。使えるものは全て使わなければ。

もし。もし本当に“サッカーでの侵略”がブライドに過ぎないとしたら。自分達は勝っても負けても地獄行き、だ。自分達が勝った場合、向こうが強硬手段に出て来る可能性がなきしにもあらずにわけ。

- - 俺が、真実を掴んでやる。

これはきつと自分にしか出来ない事だ。塔子のような強さもなく、円堂のように皆を支える事もできない非力な自分にも。真実を明らかにする事で皆を護れるなら - - 救えるのなら。

迷いはしない。必ず掴み取ってみせる。自分達の未来の為に。誇りの為に。

自分達はジェミニストームほど計画性が無いわけではない。

破壊活動の範囲と内容についてそれなりの指示は受けているが、細かなターゲット設定などに関しては一任されていると言っている。デザームの性格を考えれば。簡単に踏み潰せるような弱小校に興味を持たないのも当然。“既に破壊済みの学校”と“形式だけで真つ当な教育機関と認知されていない学校”、さらに“ある一校”を除けば好きにしているとの事。

フットボールフロンティアの裏優勝校と名高い漫遊寺をイプシロンが襲撃するのは、ある種必然だったといえる。

しかし。

デザームは現在非常に不機嫌だった。強豪校である筈の漫遊寺が、対戦を断ってきたのもある。だがそれ以上に不愉快に思ったのは、いざ戦ってみた彼らがあまりに弱かった為だ。

「退屈させるな…人間が」

買い被りすぎていたようだ。少なくともこちらに必殺技を出させるくらいには、足掻いてくれるものと思っていたのに。

そりゃ身勝手な落胆だと言いかもしれないが。期待していた分失望は大きい。開始三分でデザームはこの試合に飽き始めていた。

それでも完全に叩き潰さなかったのは、僅かばかり面白みがあった為である。愚かすぎて笑えるのもある。漫遊寺イレブンは圧倒的力の差を見せつけられて尚屈しなかった。何度倒されても立ち上がる姿には呆れると同時にやや感服させられたのである。

そういえば、あの雷門もそうだったか。

チラリとベンチの方に目を向ける。オレンジ色のバンダナを来た小柄な少年と目があつた。彼は圧倒的実力差で叩きのめされる漫遊寺を見て尚怯んでいない。それどころかデザームを睨み返してさえ来る。

- 奴が円堂守。雷門イレブンのキャプテン、か。

最初はジェミニストームに、手も足も出ず叩きのめされた筈だった。しかし彼らは諦めを知らず、努力を怠る事も知らず。三度エイリアの前に立ちふさがり、ジェミニストームを打ち破ってみせた。実に興味深いではないか。

今戦えば間違いなく自分達が勝つ。それくらいの自信はある。だが、二度目三度目は分からない。そう思わせる何かが奴らにはある。

- お前達が来い。私の前に。このフィールドに！

決着は精々、六分あれば充分だっただろう。しかし漫遊寺が実力差にめげず粘った事と、イプシロンが本気で無かった事で、一応形だけでも試合は最後まで行われた。

結果は言つまでもない。二桁の点差がつくなど、地球のサッカー

では有り得ない事だっただろう。

「お前達は試合に負けた。ペナルティは受けて貰うぞ」

地面に這い蹲りながら、影田、とかいう名前の副将が制止の声を上げる。惨めな姿を鼻で笑いながら、デザームは黒いサッカーボールを掲げた。

お前達は地球人のように弱くはない。選ばれた、星の使徒なので――敬愛する人の声が耳の奥に木霊する。

そう、自分達はエイリア。誇り高きイプシロンの戦士。目の前の人間達のような無様な敗北は有り得ず、ジェミニストームのような醜態も晒しはしない。勝利だけが自分達の存在証明なのだから。

敵は残さず誘き出し、殲滅するのみ――！

「やめろ！」

ゼルが掲げたボールを蹴る寸前に。上がった声に、デザームはニヤリと笑った。計算通りだ、と。

「俺達が代わりに戦う！お前達を倒す！勝負しろイプシロン――！」

キツ、と幼い面に怒気を乗せて、こちらを睨みつけてくる円堂。

他の者達はやや戸惑い気味だが（こちらの力に気圧されていると見える）声に出すほどの異論は無いようだった。

奴らの性格は既に、三度のジェミニストームとの戦いの様子から把握している。人間思いでお人好し。一度目の時は傘美野中、三度目の時は白恋中を庇ってこちらに戦いを挑んできたくらいだ。

漫遊寺イレブンが敗れ、彼らの学校を破壊するとなれば。今度は自分達が闘うと言い出すのは容易く予想がついた。

それがこちらの狙いだとは考えもせず。

「…面白い。死に急ぐか、雷門イレブン」

ジェミニストームに打ち勝った現代のイナズマイレブン。彼らは
楽しませてくれるだろうか。

【0・17・平等不平等、公平不公平】

雷門とイブシロン。今この場で二つのチームがぶつかる事に、異論のある者はいなかった。

たった一人を除いては。

「待て円堂。…今すぐ勝負という訳にはいかない」

制止の声を上げたのは――鬼道。えー！と驚きを隠しもしないチームメイト達。

「な、何でだよ鬼道！」

まさか止められるとは思わなかったのだらう円堂が困惑した顔でこちらを見て来る。

どうやら試合試合を許可しない、と受け取られてしまった模様。違うそうじゃない、と慌てて否定する。

「フェアじゃない勝負はしたくない。お前もそうだらう。ハンドのある相手に仮に勝てたとして、それで満足か？」

「へ？…ハンデ？」

「考えても見る。あっちは一時間フルに戦つての連戦だぞ。これの何処が公平なんだ」

「あ…」

どうやら円堂も初めてそこに行き当たつたらしい。ポカンとした顔で、確かに、と頷く。

「我々もナメられたものだな。こちらは構わないというのに」

「お前が構わなくても、こっちは構うんだ」

不愉快、というより。不思議そうな顔になるデザム。きょとんとしているというか何というか。ますますそれが人間くさい。つい

でに子供っぽい。

最初は彼らを、“理解できない宇宙人”という思い込みで見ている。故に視点にはフィルターがかかっていたし、最初から彼らを理解する事を放棄していたのだ。

まったく、ゲームメーカーとして失格だ。

敵の思考を予測し、理解する。それは救済のみならず、敵を倒し、またその正体や作戦を暴く事にも有効。むしろ基礎中の基礎ではないか。

真実は、愛が無ければ見えないという。即ち思い込みや偏った認識だけで世界を見てはいけない。それでは決して真実には辿り着けないのだ。

「…そもそも、俺達はただでさえ最初から、有利なゲームをさせて貰ってるんだ」

これは一種の賭。鬼道は素早く頭の中で作戦を組み立てる。

心理戦もまた、まごう事なき勝負。かつてあのフットボールフロンティア地区決勝で、自分達が影山の策略に読み勝ってみせたように。

「考えても見る円堂。俺達は何回ジェミニストームと戦った？…三回だ。最初の二回は負けている。妙だと思わないか？確かにペナルティは受けたが…再戦を許されたんだ。だから最終的には勝てた。しかし、俺達に一回負けただけのジェミニストームは…どうなった？」

円堂は暫く考えこみ…何かに気付いたように顔を上げる。

「…再戦が許されなかった。一回負けただけなのに…消された」

「そつだ。…お前達、俺が言いたい事が分かるか？」

後ろに並び立つ雷門メンバーを振り返り、問う。塔子は一ノ瀬と

いった面々は合点がいったようだが、壁山や栗松はイマイチ理解できていない顔だ。

「このゲーム。俺達は負けても、何回だって再挑戦できるが、エイリアは一回の負けも赦されないルールなんだ。これが有利でなくて何なんだ」

さて、向こうはどう打って出るか。デザームを窺えば、彼はどこか愉しげな笑みを浮かべていた。何だか玩具を見つけた子供のようだとすら思ってしまう。

「なかなか面白い点を突くな、貴様。だが勘違いしてないか？我々が貴様らにリトライを許しているのは、単なる気紛れにすぎん」

デザーム自身は冷静なようだが、鬼道は気付いていた。隣に立つゼルが、どこかハラハラしたように自らの主将を見た事に。

「気紛れ？それは有り得ないな」

出来るだけ動揺を誘い、隙を突いて情報を奪う。それが出来るのは自分しかない。

「そもそもサッカーでの侵略というのが不明瞭にして回りくどい。お前達がやっているのは手間を増やそうとしているとしか思えない。そして一回のミスでジェミニストームを消すような組織が、気紛れで反乱分子をほっておく？随分矛盾してるな」

自分達を早急に排除したいなら、サッカーなんか使わずとも簡単な方法がいくらでもある。塔子以外は皆普通の子供にすぎないのだ。大人達に一齐に襲いかかれるだけでアウトな筈である。

サッカーに拘る理由があるのだとしても。最初の試合でそうだったように、メンバー全員片っ端から病院送りにすればもうリトライはきかない。それどころか彼らの能力ならば試合中に自分達を殺す事すらできるのではないか。

ジェミニニストームの二回戦以降、明らかに連中の戦い方が変わったように思う。まるで雷門イレブンをわざと生かして、自分達を追うように仕向けているかのよう。

「お前達は上から命じられてるんじゃないか。俺達を倒し、何度でも戦う機会を設けよと。少なくともジェミニニストームを倒した時点で俺達の存在はマークされている。ここで俺達と出逢った時点で、“戦わない”という選択肢は赦されていないんじゃないか？」

たたみかける鬼道。じつと視線を逸らさず、イプシロンの面々を見つめる。その動きを見逃す事の無いように。
そして――重たい沈黙が破られる。

「ははははっ…素晴らしい！」

デザームが笑い出したのだ。

「つまりこういう事だな？そちらの条件を呑まない限り我らとは戦わない、と」

「好きに解釈すればいい」

「ははは、我らに対して臆さず、隙あらば正体すら暴こうというのか。気に入ったぞ、その度胸。いいだろう、目的は何だ？」

「デザーム様っ…！」

後ろから紫がかった黒髪の少年、メトロンが非難めいた声を上げる。しかしデザームは彼らの不満を睨みつける事で黙らせた。

なるほど。イプシロンの中でも、キャプテンのデザームは別格の存在であるらしい。“様”付けするくらいだからよほどだろう。そ

ういえばレーゼも、チームのメンバーから様付けして呼ばれていた気がする。

「大した事じゃない。言っただろう、俺達の望みは漫遊寺が破壊されない事と、あんた達と少しでもフェアな条件で戦いう事。それだけだ」

「なるほど」

くつくつと笑うデザーム。長身長髪に加えその喋り方と声のせいで、随分大人びて見える彼だが。実際の年齢は自分達と大差ないのかもしれない。いや、もし予想が正しければ、彼も中高生の年代である筈なのだ。

「先の望みは心配要らない。我々の標的はたった今変更した。破壊すべきは漫遊寺に非ず。我々に刃向かう反乱分子：貴様ら雷門イレブンにな」

ひっ、と背後で目金がやや情けない悲鳴を上げる（いくら体が大きいからって、後輩の壁山の後ろに隠れるのはいかなものか）。

勝手に決めんなよ…と土門が怒り半分呆れ半分な呟きを漏らした。

「正々堂々の潰し合いはこちらも歓迎するところ。面白い。…三日後。我らはもう一度この場所に現れよう。そこで我らイプシロンの挑戦を受けるがいい、雷門イレブン！」

ブン、と黒いサッカーボールがデザームの手の中から浮かび上がる。一時撤退する気なのは見て取れた。漫遊寺の生徒達がある者は啞然とし、ある者は悔しげに顔を歪めながらその光景を見守る。

「…お前達が俺達と戦い続ける目的。それが何らかの時間稼ぎなのか、俺達を対抗馬に仕立て上げて何かをしでかすつもりなのかは分からない」

だが一つだけ訊かせろ、と。鬼道はまがましい光の中に消えようとするエイリア学園に、疑問を投げかける。

「お前達は…本当に宇宙人なのか？」

一瞬、デザームの顔が驚愕に染まり――しかしすぐに元のポーカイフェイスにとって代わられた。

「…戯言を」

それ以上勘ぐる事は出来なかった。次の瞬間黒い霧がはじけ――彼らの姿は消滅してしまったのだから。

「…ビンゴ、かな」

いよいよ、自分は事件の核心に近付きつつあるらしい。裏を返せばもう引き返しようのない場所まで来ているという事だ。

そして奴らに、三日という猶予をつけさせる事に成功した。その真の狙いは、彼らの情報を探る時間を稼ぐ為だったのである。鬼道の目論見通りに事は運んだと言っている。

三日あれば、鬼瓦の調査、聖也の遺伝子解析、義父経由の情報――どれかは揃える事ができるかもしれない。

「鬼道」

イプシロンの気配が完全になくなったと見て、風丸が声をかけてきた。

「お前、何が狙いなんだ？」

正直。侵略者相手にフェアプレイに拘る必要はない、と彼は思っているのだろう。以前円堂相手に、神のアクアが欲しいとすら漏らしていた彼だ。

「…もう少しで、奴らの尻尾を掴む事ができるかもしれないんだ。その為に時間が欲しかった」

「何だって、本当か？」

「ああ。だが…憶測で物は言いたくない。証拠が揃ったらお前達にも話す」

ふと、色の違う視線を感じて顔を上げる。瞳子は鬼道と目が合うや否や慌てて逸らした。まるで動揺を隠すように。

彼女の正体についても気にかかる。何故そこまでエイリアを倒す事に拘るのか。今までの言動からすれば、エイリアに何らかの因縁があると思えないのだが。

- 瞳子監督には悪いが。彼女経由から連中の正体をあぶり出すのも可能かもしれない…な。

胸の奥がざわざわする。

握りしめた拳が震えている。塔子は心を落ち着けたくて、一つ息を吐いた。

どうやら鬼道は、真実の一部を掴みかけているらしい。鬼瓦刑事や義父の権力を使って、いろいろ調べているようだ。

一体何を知っているのか。教えて欲しいとせがんだが、ハッキリするまで待つて欲しいと断られた。何やら深刻そうな表情で。

今だってそう。

うまくイプシロンを口車に乗せて、時間を設ける事に成功した。完全に彼の独断だ。判断が間違っているとは言わないが――もう少し相談してくれればいいものを。

――あんたは、一人で背負いすぎんだよ。

分かっている。分かっているのだ、鬼道は自分達を想っているからこそ、不安を煽らないように口を噤んでいるのだと。だけど。

――せめて……あたしにくらい話してくれてもいいじゃんか。そんなに頼りないってのかよ。

スミスの堅い声を思い出す。

データが消された。政府や警察にも、エイリアの息がかかった連中が潜んでいる可能性がある。事は思っていた以上に規模が大きい。お嬢様はどうか手を引いて下さい、と。

それでのこの引き下がる塔子では無かったが、ヤバい事になっているのは確かだ。しかしこれ以上はSPフィクサーズにも最低限しか協力して貰えないだろう。こちらとしても彼らにまで火の粉がかかる事態は避けたい。

――あたしにはこれ以上調べるアテがない。……でもさ。あたしにだって出来る事があるんだよ。

彼は、忘れてしまったかもしれないけれど。

約束したのだ。鬼道の事は、塔子を守るのだと。彼が辛い時は自分が必ず助けに行くと。

彼に頭があるなら、自分にはこの拳がある。彼が心に誓うなら、

自分は魂に刻む。

――だから……もっと近くに居させて。やっと一緒に戦えるんだから。

その背中が、今はまだ遠い。

いつか触れる事もできないほど遠ざかってしまっ気がして、塔子
は唇を噛み締めた。

【0・18・アレグロ、カンタービレ】

「情けなさすぎて、ほんつと笑える」

木暮は愉しげに――しかし何処か苦い笑みを浮かべて言った。

「結局、ズタボロに負けてやんの。あんなにエラそうに俺の事パシつてたくせにさ！馬っ鹿みたい！！」

春奈は哀れに思った。悲しい子だ。まるでいつかの自分を見ているよう。

イブシロンが一時撤退した後。今回はまったくダメージを負っていない雷門イレブンは、普段以上に特訓に励んでいた。しかし、漫遊寺メンバーで唯一無傷の筈の木暮はすっかりやさぐれて、皆の邪魔をするばかり。

食事に唐辛子をぶちまけてダメにした時は、流石に春奈も怒った。愛情に餓えている木暮は責め立てられればどんどん卑屈になるだろう。それでも時には真正面から叱ってやるべきなのも分かっている。そして夜。

この間は道場で密かに特訓していた木暮が、今度はトラップ作りに終始していた。水の入ったタライをせっせと用意する姿は楽しそうではあったが――間違いなく、何処かが歪んでいた。

悪意のある遊びは、第三者の目からは明らか。それを本心から楽しめてしまう人間は、けして多くないのだから。

今日は特訓しないのか、と。尋ねた春奈に木暮は言う。あいつらを見てたらやる気が失せた、と。

そのまま会話は冒頭へと戻る。

「…力が及ばない事は、誰にでもあるよ。勝ちだけがすべてじゃないなんて言ったらそれは奇麗事かもしれないけど」

そんな木暮に、春奈は静かに語りかける。 昨晚と同じように。

「倒れた事がない人なんていないの。…どんなに足掻いても叶わない敵が、どんな人の前にも必ず現れる。漫遊寺のみんなにとってはそれがイブシロンで、今日という日だったんだと思う」

勝ち続けるだけの者が、負けを知らない者が果たして最強に成りうるのか。

答えはNOだと知っている。自分は兄や、雷門の皆の姿を見てきたから分かる。

何度這い蹲っても立ち上がる姿の、なんと神々しく美しい事を。

「でも、漫遊寺のみんなは何回打ちのめされても立ち上がった。それ以上の強さは無い。…木暮君も、立ち上がってみたら、自分でもビックリするくらい強くなれる筈よ。保証する」

倒れ伏して尚立ち上がった時、人は空の青さを知るだろう。

深い深い絶望に打ち勝った時、人は傷だらけの希望を掴み取る事ができる。

春奈にはまだ、そんな試練は訪れていない。両親を失った悲しみから立ち直ったのは自分の力などではなかったから。だからきつと、本当の試練が来るとしたならば、これから先の未来なのだ。

自分は、なりたい。兄のようにキャプテンのように、立ち上がり続ける強さを持った人間に。

「…んなカツコ悪いの、ごめんだよ。そもそもどうせ俺、試合に出して貰えないんだ。チャンスなんかあるもんか」

悔しげに唇を噛み締める木暮。

「だから！あいつらを別の方法で見返してやんだよ！俺の為に修行させた？俺の為に試合に出さない？はっ！偽善者すぎて虫酸が走るぜ！！誰が信じるかよ！！」

偽善者。確かに、そうかもしれない。

あなたの為を思っただけを何かにして“あげた”。そんな恩着せがましい言葉を、自分は施設で何度も聞いた。その度に思ったのだ。そんな言葉、誰が信じるものか、と。

あの頃の自分は、卑屈に縮こまるだけの子供だった。

両親が死んだと聞かされて。誕生日に帰って来るという約束が反故になったと知って。最初に思ったのは悲しみではなく怒り。死というものを臆気にしか理解していない春奈は泣き喚いた。

どうしてパパとママは帰って来ないの、と。

泣き喚いて、兄に八つ当たりして困らせた。自分も悲しくて辛かった筈なのに、鬼道は憤る事もなかった。ただ春奈を抱きしめてくれた。春奈の前では、涙すらも見せなかった。

両親が死んだのは飛行機事故だ。彼らとて死にたくはなかっただろう。約束を破るつもりなどきつとなかっただろう。それでも幼い春奈は思わずにはいられなかったのだ。

両親は嘘を吐いた。

自分達は裏切られたのだ、と。

だが父と母のいなくなった空白を埋めてくれた存在が、自分にはいる。周りの大人達を誰一人信じられなくなっていたあの頃、兄だけは信じる事ができたのだ。

鬼道は一度たりとも言わなかった。お前の為に、なんて。理由を言う時はいつもこう言った。自分の為にやっている、と。

そんな彼が春奈の世界の全てで、父の代わりで、母の代わりで。

依存しきってしまっていた。彼は死んだ両親の分まで自分を愛してくれたから。

もし兄がいなかったら。きっと自分も木暮のように歪んでしまっていただろう。

「サッカーが出来ない腹いせに悪戯三昧、か。また短絡的だな」

はっとして振り向く。道場の扉を開けっ放しにしていた事を思い出した。いつの間にかそこに鬼道が立っている。どうやら話を聞かれていたらしい。なんだか気恥ずかしくなつて俯く。

「チャンスが無いなら作ってみせろ。都合のいいハッピーエンドなんて、待っていても訪れない。自分で創らない限りはな」

「知ったようなクチきくなよ」

木暮は警戒心丸出しで睨むが、兄はどこ吹く風とばかりに涼しい顔だ。

「これ以上春奈の心労の元になられるのも、練習の邪魔をされるのも御免でな。…いい機会だ。そろそろケリをつけておこうか」

「何？」

「お前の实力を見せろ、と言っている。もし俺を唸らせるようなプレイができたら…お前を試合に出すよう、進言してやってもいい」

木暮の目がまんまるに見開かれる。

兄の意図は分からない。だが鬼道がわざと上から目線で木暮を挑発しようとしているのは確か。何か考えがあるのだ。

「そうね。…いい加減、終わりにして欲しかったところよ」

だから春奈も便乗した。立ち上がり、木暮のコンプレックスを突く形で見下ろす。

「ほっといってくれて私に言ったでしょ。いいよ、この勝負にあなたが勝つたらいくらでもほっといてあげる。もうあなたに関わらな

いつて誓うわ。その上試合にも出られるって言うんだから悪くない話でしょ？」

「か、勝手に決めんなよ！俺を試合に？そんなの信じられるわけ…」
「信じる信じないは結構！！」

ふん、と挑発的に鼻を鳴らし、壮絶な笑みを浮かべる春奈。

「それとも何？自信がないわけ？ま、せれなら仕方ないわね。弱虫のチキン野郎じゃ、相手にするだけ無駄だし」

お前も随分言うな…とやや引き気味な兄の呟きが聞こえた気がしたが、とりあえず無視する事にする。

怒りを感じているのだろ。木暮の小さな肩がわなわなと震えている。

「…分かったよ」

キツとこちらを睨みつけて、少年は言う！

「見せてやろうじゃんか、俺の実力！」

「はっ、言ったわね！」

まったく分かりやすい奴、と考えて。一瞬単細胞と名高い我が輩がキャプテンの顔が浮かんでしまい、春奈は慌てて打ち消した。

いやいや、いくらサッカーバカでも失礼だろう自分！

肩を怒らせてグラウンドに飛び出していく木暮。まあこの時間ならもう練習している面子もないだろうし（絶対と言い切れないのがうちのチームだが）大丈夫だろう。

「ちょっと可哀想な事言っちゃったかな…お兄ちゃん相手に木暮君が勝てるとは思えないし」

「何言ってるんだ？春奈」

春奈の呟きに、鬼道はきよんとした顔で、とんでもない爆弾発言を投下してくれた。

「木暮の勝負の相手はお前がやるんだぞ」

「…はい？」

ひっくり返りそうになった自分は…多分間違っていない。

TO：基山ヒロト

FROM：円堂守

メール遅れてごめん。試合やら特訓やらでバタバタしてて遅れちった（・―・；）

具合どう？まだ外出禁止令解けないの？昼間にも一緒にサッカーやりたいんだけど無理かな（^―^；）

TO：円堂守

FROM：基山ヒロト

メールありがとう。こっちこそ忙しい時に空気読まなくてごめん。具合は大丈夫だよ、父さんが大げさなだけだから。だけど当分出歩かせて貰えそうにないや…。

試合って宇宙人とやったの？あれ、でも中継入ってなかったよね？

TO:基山ヒロト

FROM:円堂守

- - - - -

試合やったの俺達じゃないんだ、漫遊寺。そもそも漫遊寺に来た襲撃予告だし。俺達も最初頭に来ちゃって喧嘩ふっかけてただけどさ、そしたら鬼道に止められちゃって（＾o＾；）

フェアじゃないからやめようって…あ、鬼道って誰か教えたっけ？

- - - - -

TO:円堂守

FROM:基山ヒロト

- - - - -

教えて貰ってないけど分かるよ、彼も有名だし。ドレッドにマントにゴーグルの小さい子でしょ？

天才ゲームメーカーなんだよね。

- - - - -

TO:基山ヒロト

FROM:円堂守

- - - - -

ち、小さいって…？（口　　）

本人が聞いたらキレるぞ。ってか鬼道に限らずうちのみんな身長気にしてるし…ヒロトだって充分ちっさかったじゃん！！

- - - - -

TO:円堂守

FROM:基山ヒロト

- - - - -
君もさりげなく酷い…守にだけは言われたくないよ。ほんと、神様
って不公平！チームには俺よりずっと背が高い人もいっぱいいるの
にさ。

TO：基山ヒロト

FROM：円堂守

- - - - -
あ、ヒロトもサッカーチーム入ってた。どんなところ？対戦してみ
たいなあ〜（＾Ｏ＾）京都のチームなのか？

TO：基山ヒロト

FROM：円堂守

- - - - -
京都じゃないよ。そもそも京都には父さんの仕事の都合で一緒に来
てただけだから。

試合したいけど、外出禁止令解除されない限りはどうしようもない
かな…。暫く屋内サッカーチーム場で我慢してる。

TO：円堂守

FROM：基山ヒロト

- - - - -
そっか。じゃあ仕方ないな…；

まあ俺達も当分全国飛び回ってるしなあ…。

でも約束だぞ！！いつか絶対試合しような（*^_^）b

- - - - -

TO：円堂守

FROM：基山ヒロト

- - - - -

うん、いつかね。じゃあそろそろ遅いし、おやすみ。風邪引かないように気をつけてね。

- - - - -

TO：基山ヒロト

FROM：円堂守

- - - - -

おう。おやすみ！

- - - - -

メールを打ち終わった円堂は携帯を閉じる。残念ながらまだ眠くない。

もう少しくらい起きていてもいいだろう。勝手にそう決めて、円堂はまたキャラバンを抜け出した。

【0-19・跳躍の、戦乙女】

自分なんかじゃ力不足だと春奈は言ったが。鬼道は首を縦には振らなかった。本人は謙遜しているが、実のところ鬼道は妹の実力を、鼻屑目なしでも高く買っていたのである。

実は春奈は相当サッカーができる。幼い頃施設で、彼女は唯一鬼道のペースについて来れた人間である。そこには少しでも兄から離れたくないという、依存した気持ちがあつたのも確かだろう。だが彼女には才能があつた。その努力も含めて。

あの後、春奈が音無家でどんな生活をしていたかは分からない。だが彼女は今の両親のことをいつも幸せそうに語る。その笑顔が全てを物語っていると言っている。きつといい人に拾われたのだろう。雷門に女子サッカー部はない。むしろ女の子がサッカーをやるというのを良い顔しない親も多い。危険度の問題では他スポーツと大差ないのだが、未だに“サッカーは男子がやるもの”というイメージが根強いのだろう。

しかし、春奈は逆境にもめげず、サッカーを諦めなかった。自身がプレイヤーとして表舞台に立つことを考えているわけではないようだが、マネージャーとしてサッカー部を支える為の努力は怠っていない。

彼女が密かに、リカや塔子に付き合つて貰つて練習しているのを知っている。そのレベルがけて低くないことも。また自分達が試合をしている時、皆の動きや行動を逐一観察して勉強していることも。

塔子いわく。春奈は言っていたそうだ。 - 自分は皆と一緒に戦えるほど実力はないけど、少しでも皆と同じ世界を見たい。少しでも皆の辛さや楽しさが理解できるようになりたい、と。

ずっと思っていたのだ。春奈がどれだけの実力を持っているか見てみたい。彼女が試合に出たくないというなら無理強いするつもり

はないが――女性だからとか、兄の自分がいるからという理由で遠慮しているならそれは違う。

木暮と春奈。その両方の实力を見るいい機会ではないか。

「……あんな風に啖呵切っちゃったら、後に引けないじゃない……。お兄ちゃんの意地悪」

引くに引けなくなったのは木暮も春奈も同じ。兄を恨めしく見ながらも、渋々腹を括ったらしい春奈は――やがてキツと木暮を見据えた。

「仕方ない……来な！木暮君っ！！」

「見てろよっ！！」

グラウンドの中央に立つ春奈。その右足の下にはボール。木暮は猛然と彼女に向かってダッシュしていく。

が、その動きはがむしゃらに突っ込んでいくばかりで隙だらけ。長いこと試合に出して貰えてないというのは本当だろう。

「甘い！」

素早く身を翻すと同時に、ボールを右足から左足の下へ渡す春奈。木暮の身体は宙を切り、勢い余って地面に激突した。

あれは痛そうだ。もろに顔面から落っこちたように見えたが大丈夫だろうか。

しかしそんな鬼道の心配も杞憂に終わる。木暮はすぐに立ち上がり、雄叫びを上げながら走り出そうとする。が、春奈も馬鹿じゃない。木暮が転んでいる間に距離をとって体制を整えている。

対し木暮の行動はワンパターンだ。猪突猛進と言わんばかりに同じ突進。あんなタツクル、試合じゃ間違いなくファールだろうに、と呆れる。

それで結局同じようにかわされていては世話ない。

二度目の失敗にで少しは学んだのか。鼻の頭を擦りむきながらも立ち上がった木暮、今度は近距離から春奈をピタリマークして隙を見る作戦に出る。

「今だ！」

今だ、と彼は叫んだが残念、我慢が足りていない。少女がニヤリと笑う。木暮の体当たりをリフティングでかわす。

触れる事すらできず抜かれて、地団太を踏んで悔しがる木暮。

- - 確かに忍耐力が足りないが…今の木暮のタイミングは悪くなかった。

鬼道は冷静に分析する。今のは木暮が素人だけでなく、春奈が上手かった。

つい笑みが零れる。思っていた以上に、春奈のボール捌きには磨きがかかっている。小さな頃、何度やってもリフティングが続かず、泣きじゃくっていた少女とはとても思えない。

「まだまだあ！」

テクニクの差を見せつけられても木暮は怯まない。

「そうだ…あいつらはこうやってボールを奪ってた！」

漫遊寺の彼らの練習風景を思い出したのだろう。見よう見まねで少年はスライディングを繰り返す。素人技だが、鬼道を驚かせるには充分だった。

速い。思っていたよりスピードがある。

「やらせない！」

春奈も驚いたようだが、彼女が一枚上手だった。木暮のスライディングをジャンプでかわす。

だが木暮はただ滑り込んでただけではなかった。かわされたのを確認するより先に停止して身を翻し、回し蹴りの要領で脚を振り上げる。完全な不意打ち。脚をひっかけられて春奈はつんのめる。

決まったかに思われた。しかし、彼女は寸前でボールを高く打ち上げ、また無様に転ぶ事もしなかった。ボールを蹴ったその脚で踏みとどまり、ひっかけられた脚で逆襲する。

ひっくり返ったのは木暮の方。力負けして、少年は吹っ飛ばされる。驚いた。春奈は意外とパワーがある。確かに木暮相手なら、春奈の方が体格で上回るだろうが――。

そして木暮が呻いている間に、打ち上げたボールを胸でトラップしていた。これでマネージャー専任とはあまりに勿体無い。

「二人とも、化ける。そうは思わないか、円堂」

「ありや、気づいてたんだ」

振り返りもせず名前を呼ばれて、我らが熱血キャプテンが苦笑するのが分かった。円堂がこちらに歩いて来ているのは気付いていた。またこっそり特訓するつもりだったのだろう。

まあ、昨晚のように真夜中にやられて寝坊されるより、この時間で我慢してくれた方が余程いい。

「びつくりした。木暮も春奈も凄いじゃん！あれで補欠とマネージャーなんて信じられないよな……！！」

当の二人は、円堂がやって来た事に気付いてないようで、ボールの奪い合いが続いている。軽い勝負のつもりがすっかり熱中してしまい、周りが見えなくなっている様子だ。

再び木暮が勢いよく突進していく。今度は春奈もドリブルしたま

ま木暮に突っ込んでいく。何をする気なのやら。

「行くよっ…イリユージョンボール!!」

目を見張った。あれは鬼道が得意とするドリブル技ではないか。ボールの動きに緩急をつける事で残像を生みだし、相手を幻惑する。向こうが迷っているうちにこちらは抜き去ってしまうという寸法だ。春奈の必殺技は見事に決まった。分裂する幾つものサッカーボールに木暮が目を白黒させている間に、春奈は遙か彼方に抜き去っている。勿論、ボールは奪われていない。

「まさか必殺技までマスターしてるなんて…音無すっげえ!」

円堂が興奮した声を上げる。まるで試合中のように目を輝かせている円堂に、見事期待に答えてくれた春奈と木暮。なんだか嬉しくなってしまう。

彼らになら、雷門を任せられる。

例え…自分がいなくなる日が来ても。

- - 俺はひょっとしたら、とんでもない事を知ってしまったのかも
しれない。

聖也の会社の化学部門で調べて貰った、エイリアの子ども達のDNA鑑定結果が来た。それは鬼道が危惧していた通りの事実を示すもので。

加えて。鬼瓦と義父の方からも連絡が来ている。孤児院、と言った時点で、リストアップされた人数はそう多くはない。そもそも日本にある孤児院の数自体に限りがあるのだ。その中で見事に、最近子供の姿を見かけなくなった不審な施設が一カ所あって。

驚くべき事にそのオーナーは、鬼道も顔を合わせた事がある人

物だった。当然と言えば当然か。自分は鬼道財閥跡取りであり、パーティーでは義父に代わって挨拶にも回っているのだから。

その男には。サッカーに因縁を持つ理由が確かにあり、莫大な研究費を投じるのも可能な金があった。恐ろしいほど条件が一致する。

- - 気になる事は他にもある。

聖也は言っていた。彼に解析を依頼したのは僅かな髪や血といった素材ではあるが - - 彼の会社は相当優秀な設備を持っているらしい。そこからDNA以外にも分かった事があるという。それは神のアクアに含まれていたのと同じ成分が、僅かながら彼らの血液から検出された事。

その神のアクアの解析も任せてある。警察がいくら調べても結果が得られなかったのは、影山が妨害していたせいもあると考えられるからだ。

神のアクアに含まれていた謎の鉱物。なんと聖也の会社はその正体にも目星をつけて、データを送ってくれたのだという。

『五年前にな、富士山に隕石が落下してニュースになったろ。覚えてるか？』

彼に見せて貰った文書と画像を思い出す。

『ところが奇妙な事に、隕石が落下した形跡はあるのに…隕石そのものが見つからなかったんだ。見つかったのは僅かな破片だけ。…うちの化学部門も回収してたから助かったよ。本体は何者かが運び去った可能性が高いつてハナシ』

その隕石に含まれていた成分と、神のアクアの成分が一致するのだという。その隕石には人の潜在能力を限界まで引き出す、恐ろし

い力が眠っている事も。

鬼道の中で全てが一本に繋がる。

隕石が落ちたのが五年前なら、研究が始まったのもそれ以降だろう。義父いわく、例の男はその前後から様子がおかしくなっており、殆ど表舞台に出て来なくなったのだという。

- - だが、本当の元凶があつた男と決めつけるのは早い。確かに奴には世界に復讐する理由もその手段にサッカーを使う理由もあるが…。

彼の復讐心を利用して煽つた人間がいけないとは限らない。実は彼のごく近い場所に、不審な人物の陰がチラつくのである。

五年前、隕石衝突直後に彼に雇われ、しかし身元が一切不明の女。表向きは秘書とSPを兼ねているようだが、それだけではなさそうである。

施設にバイトに入っていた人間によると。最初彼女を医者だと思つたそうなのだ。子供達の健康診断を実施したのが彼女だった。そして- - 彼女の健康診断を受けた次の日に、施設から子供達の姿が消えたのだという。

レーゼやデサームと名乗つた彼らを含めて。

- - ニノ宮蘭子…。一体何者なんだ。

まだ証拠は不十分。しかし、ニノ宮の雇い主がクロなのは間違いない。彼の施設にレーゼ達と思しき子供達がいたのは裏がとれている。あとは真の黒幕が彼かニノ宮のどちらかという事だけ。

ニノ宮蘭子という名前が偽名であるのはハッキリしている。ただその正体に皆目見当がつかない。そもそも戸籍も無い女を何故、いかようにしてあの男が雇つたかも気になる。

- - …あの男は確かに食えない人物だったが…子供達を人体実験に

使うような真似のできる人間じゃなかった。

どうやら最後のアテに賭けるしかないらしい。鬼道はチラリとキヤラバンを振り返る。

- -あとは瞳子監督とイプシロンの連中、財前総理が、何処まで知っているか、だ。

このままでは誰も救われない。エイリアの子供達はそのまま、生きた兵器として政財界の玩具にされてしまう。

自分が何とかしなければ。

いや - -何とかしてみせる。

【0・20・策士と魔術師、小さな宴】

翌日。

円堂はまたしても寝坊しかけて、危うくまた瞳子の雷が落ちるところだった。ギリギリのところまで起こしてくれた土門に感謝である。驚いた事に、寝坊しそうになったのは円堂一人。同じく夜更かした筈の春奈、木暮、鬼道は何もなかったようにケロっとしている。睡眠時間が短くても平気なのか朝強い体質なのか。だとしたら実に羨ましい。

「今日は全員のキック力強化を中心に特訓したい」

朝食後。午前練が始まって最初に鬼道が提案する。

「先日白恋やジェミニストームとの戦いではつきりした。…俺達にはポジションごとに役割があるが、臨機応変に攻守を使い分けられる事も大切だ。そういう意味では吹雪の能力はかなり重宝すると言える」

ちらり、と彼は吹雪を振り返る。突然名前を出されて吹雪はキョトンとした顔をしたが、やがて意味する事を悟ってかニコリと微笑んだ。

確かに。吹雪はFWとDFを瞬時に切り替えて行動できるユーティリティプレイヤー。攻撃が手薄な時は攻撃、守備が手薄な時は守備に回る事ができる器用さを持つ。彼のおかげで作戦のバリエーションも大幅に増えたと言っている。

「だが今現在、攻守両方に長けた人材が吹雪しかないのが現状。このままだと吹雪の負担が大きすぎる。全員薄々勘づいてるだろう」

が、今のメンバーの大半の能力が攻撃か防御に偏りすぎているからな」

それでは今後の戦いで対応しきれないだろう。

鬼道の言葉に、それもそうだ、と誰もが頷く。

「一番分かりやすい喻えをしようか。勝負を決める為にとザ・フェニックスを出そうとするだろ？そうすると…どんな問題が発生する？」

「あー…なるほど」

声を上げたのは一之瀬。たった今喻えを出された必殺技の主軸となる人物だ。

「まず円堂が抜けるから、ゴールがガラ空きになるだろ。おまけにウィングバックの土門もサイドハーフの俺も抜けるから…守備がめっちゃんこ甘くなる」

「げ」

理解して皆が一斉に苦い顔になる。円堂も多分似たような顔になっているだろう。

ザ・フェニックスは強力な必殺技だ。しかしリスクが非常に大きい。まず必殺技を出す為にはかなり三人の助走距離が必要であり、技の準備時間が長いという事。

この助走中、ドリブルする一之瀬がボールを奪われでもしたらどうなるか？

ゴールはガラ空き。ディフェンダーは人数が足りず当の一之瀬がすぐ動ける筈もなく。つまり中盤から下が全部手薄になる危険が高いという事。あっという間にカウンターの餌食だ。

むしろ今までよくこの問題が浮上しなかったもんである。

「根本的な事を言うと、MFの一之瀬とDFの土門とGKの円堂でシュートを打つ事自体が大いに間違ってるわけだが」

「め、面目ない…」

この三人でシュートを作ってしまった当事者の一之瀬が、俯いて

オドロ線を背負う。分かっちゃいるが鬼道、容赦がない。

「まあ今それを言っても仕方ない。とにかく……こんなケースは残った全員で空いたポジションをカバーしなければならぬわけだ。状況にも寄るが、三人が上がっている間代わりにFW二人が中盤まで下がるくらいでないとマズい」

地面に簡単なコートの図を書いて鬼道は解説する。図解してみると状況がよく分かる。シュートを打つ事でフィールドのどの辺りが手薄になるのかも。

一之瀬が抜けた穴を一時的にFWが埋め、彼の代わりにディフェンスに入るとするのは合理的だろう。無論FWの本領は攻撃。後ろに下げすぎでは意味を成さなくなるのが難しいが。

「だがせっかくツートップを後ろに下げてカウンターに備えても、この二人の守備がザルでは話にならないわけで」

あ、今染岡が明らかにギクリとした。

彼はストライカーとして非常に優秀だ。そのキック力や強力なシュートは頼りになるし、雷門の点取り屋としても名高い。

だが良くも悪くもFW体質なのだ。地道な守備にはほとほと向いてない。今はだいたいバシになったが、前はスライディングで奪ったボールがどっか行ってしまうのもザラだったほど。

今にしたって彼はブロック系の必殺技を持っていない。相手が必殺技を使ってドリブルしてきたら簡単に抜かれてしまうだろう。

「つまり、いざという時対応できるように、FWにも守備を、DFにも攻撃を叩き込むって事だよな」

土門が結論を代弁する。

「そういう事だ。DFに叩き込みたい攻撃というのは主にロングシュートになる。先日白恋との試合でやった作戦パターンD…は覚えてるな？あれの応用を考えたい」

「え、なにに、俺大活躍？」

「先日の試合でよく分かったからな。聖也のロングシュートはまったくアテにならんと」

「があんっ！」

鬼道クン酷いわっ！と聖也がしなを作って泣き崩れる真似をする。その彼を仕方なしといった様子で吹雪が慰めている。

申し訳ないが円堂もこっさり同じ事を思っていたり。どんな強力なシュートでも入らなきゃ意味がない。あの作戦ではボールを敵陣深くまで上げるのが最大の目的だったからいいようなものの。

「今ロングシュートの必殺技を持っているのは聖也と栗松だけ。だが俺としては最終的に、ディフェンスのほぼ全員にロングシュートを会得して貰いたい」

拾った枝を握り、鬼道はさらさらと図の上に線を書き足していく。

「例えば最終防衛ラインの壁山&塔子のところまでボールを下げられてしまっても。塔子がロングシュートを持っていれば、得点できなかったとしても一気に前線まで引き戻せる。向こうも上がってきても守備が手薄になっているだろうからカウンター効果は抜群だ」

壁山と塔子の所にまでボールが来てしまつとなると相当ピンチだろう。だが効果的なロングシュートがあれば一気にひっくり返せる。ピンチがそのままチャンスになるのだ。

シュートに明らかに向いていない壁山はともかく、塔子にロングシュートの必殺技を覚えて貰うのは、なかなか悪くない提案である。

「なるほどね。…ディフェンス陣にロングシュートを覚えて貰うのは、心理戦の意味でもかなり効果があるよ。…チェス盤をひっくり返そうか」

対戦相手の立場になって考えてみるんだ、と吹雪。

「僕が対戦相手だったら。ディフェンスまで攻め込んだのに、どこからカウンターが来るか分からないのはかなり怖いよ。あと、もし誰にボールが渡ってもシュートが来るようなチームなら…マークするのにも一苦労だ。何処から攻撃されてもおかしくないってのはかなり脅威だと思う」

「その通りだ、吹雪」

その為のキック力強化とロングシュート会得。円堂も含め誰もが納得した。ロングシュートが打てる人間が多いほど作戦の幅は増えるし、心理的にも相手にプレッシャーを与える事ができる。

例えば全員で一発ずつ相手ゴールにロングシュートを見舞ったらどうなるか。全てが得点に結びつかなくとも、相手のGKとディフェンス陣をかなり消耗させる事ができるだろう。

「さつきは守備の話をしたが…雷門のサッカーは基本攻撃型だ。ロングシュートが多ければ守りを固めた上で超攻撃的サッカーができる」

天才ゲームメーカーの本領発揮。鬼道の言う事はもつともで、誰にも異論は無い。多分明日は逆に全員での守備練習になるのだろう、と予測する。

その時だった。

「雷門の皆さん、練習中すみません」

漫遊寺中の正門。石段の方から駆けて来たのは、漫遊寺サッカー

部レギュラーの一人、影田巡だった。彼はメンバーの中でも比較的怪我が軽くて済んだ一人である。

「実は雷門の皆さんにどうしてもお話があると…客人がお見えになっ

っているのですが。…あれ、監督さんは？」
「監督は今席を外してる。すぐ戻って来ると思うが…客人？一体誰だ？」

風丸が首を捻ると影田は少しだけ頬を染めて、言った。

「それが…女の子なんです。私達と同じ年くらいの…。長い金髪の、とても綺麗な方でしたか」

「金髪！？女の子！？」

マジで誰だ。心当たりがなくて、皆顔を見合わせる。鬼道だけが
“もしかして”という顔をしたが、誰も気付く事は無かった。

自分が歩んで来た道は、間違いだらけだったかもしれない。

少なくとも個人的には正しいと信じて来たし、そもそも善悪になんて頓着が無かった。正義だとか悪だとか、そんな基準は多数決で決められた後付けにすぎない。

だから、たとえ多くの外野に悪だと罵られても一向に構わなかった。あの人さえ必要としてくれるなら。あの人と仲間達さえ側にいるなら。

- - 罪を罪と知っていながら犯した。これからも償いきれる事ではないのかもしれない。

あの人を――影山の傷を知っていながら止められなかった罪。

神のアクアの副作用にとうに気付いていながら、仲間達をむざむざと死なせた罪。

自分も死ぬべきだった筈だと。そう考えて死に場所を求めてきたけれど。彼らを――雷門イレブンの生き様を見て気付いた。

人はいつか必ず死ぬ。だが大事なのは死ぬ場所ではなく、生き抜く場所なのだと。

――私はあの人を救いたい。あの人と同じ悲しみがもう続く事のないよう……悲しい鎖を断ち切りたい。

だから自分は――亜風炉照美は此処にいるのだ。後悔せずに生き抜く事こそ、死んだ仲間達への手向け。それは自分がかつて貶めてしまった彼ら、そして自分を悪夢から目覚めさせてくれた彼らの側こそ相應しい。

名前も知らない者達の世界の行方なんてどうでもいい。赤の他人の為にガムシヤラになれるほど自分は聖人なんかじゃない。だけど、彼らの世界は護りたい。

――身勝手な誓いだとしても。例え拒まれる事になっても、私は。

石段を登りきると、もうそこはグラウンドだ。自分の事を通してくれた漫遊寺の生徒が、こっちです、と手招きしてくれる。

待っていた雷門イレブン。照美の姿に、円堂は大きな眼をさらに大きく見開いた。

長い金髪の女の子。

確かに――影田が見間違えるのも無理はない（フットボールフロンティア決勝を見ていたなら知っている筈だが、争い事は邪道と考える漫遊寺なら試合を見てなくてもおかしくはない）。

自分だって赤の他人だったら彼を女の子と勘違いしたかもしれないかった。

久しぶりに見たその少年は相変わらず少女顔負けの美貌で、少し遠慮がちに微笑んだ。

「久しぶりだね、円堂君」

円堂は口をポカンと開けて、見れば見るほど女の子にしか見えな
いその顔を見つめてしまった。きっと周りの反応も似たようなもの
だろう。

「何をしに……来たんだ、アフロディ」

どうして。何故彼が此処に。まさかまた影山の命令で自分達を倒
しに来たのか？ いやしかし、影山は逮捕されている。薬物法違反や
ら傷害やらなんやら（あまり詳しくは知らないが）で、今度こそ出
て来れない筈だ。

それが今になって何で。

「戦いに来たのさ、君達と」

その言葉に、雷門の仲間達が一気に殺気立つ。だがその先に続い
た台詞はあまりに予想外のものだった。

「君達と共に……エイリアを倒す」

【0・21・舞い降りた、光の翼】

何故こんな展開に。

土門は現在、絶賛混乱中だった（ああ、日本語がおかしいのは分かっているがそれ以外にどう説明しろと言うのだ）。

目の前にいるのは“あの”、アフロディこと亜風炉照美。フットボールフロンティア決勝では影山の指揮の下、散々自分達をいびりぬいてくれた残酷天使だ。

世宇子が雷門に負けて。その後彼らがどうなったかは知らない。ただ影山が逮捕されて指導者を失った事だけが分かっている。

それが今になって、世宇子キャプテンの彼が自分達の前に現れるなんて。それも――彼を地に墜とした自分達の、仲間になりたいと申し出てくるとは。影山の報復に來たと言われた方がまだ驚かなかつたに違いない。

「ま、待てよ！」

また何か企んでるんじゃないか。騙そうとしてるんじゃないのか。何よりもまずそう思ってしまった自分は、ひねくれているのだろうか。

「いきなり何言っただよ。訳分かんねえよ！俺達と共に戦いたいって…どうしてそんな話になるんだ！」

俄かに信じがたい。隣を見れば一ノ瀬も似たような顔だ。吹雪や塔子は知らないだろうが、フットボールフロンティアを戦った自分達は知っている。

彼がああ“狡猾非道”の代名詞たる影山の下についていた事も、神のアクアなんてドラッグで卑怯な勝ち方をしようとしたチームの主将である事も。

「信じられないのも無理はない。それだけ…卑怯な事をした自覚はあるから。それにフットボールフロンティアで戦うまで私は君達を一方的に見下してた。神なんて妄想を気取ってね」

その言葉に、はつとする。鬼道が少しだけ眉を寄せて苦い表情をした。土門も、また。

自分と鬼道は元々帝国学園にいたし、影山にも従っていた。それが正しい事だと信じていた。騙される弱者が悪いのだと。

雷門に対しても例外ではない。どうせフットボールフロンティアに出れもしない弱小校だと見下していたのだ。だから初めて雷門と戦った時、鬼道は容赦なく円堂達を痛めつけた。自分は平気でスパイなんてものに名乗り出た。

同じだ。世宇子をどれだけ悪者扱いしようと思えば自分達は紛れもなく彼らと同じ事をしていたのではないか。

「だけど…君達と戦って、君達の戦いを見て気付いたんだ。本当の強さは負けない事じゃなくて、負けて絶望を知って尚立ち上がる強さなのだ。私も総帥も間違ってた。人は、倒れるたびに強くなる。誰かに与えられた強さなんて本当の強さじゃ、ない」

土門達と照美の違い。それは神のアクアという薬物を使ったという、たった一点に尽きるのではないか？

そして神のアクアにしたって…彼らはただ心酔していた影山の指示に従っただけ。最初は脱法ドラッグだとも知らなかったかもしれない。

かつて神を名乗り、光の翼を背負って自分達の前に立ちふさがった少年は。真っ直ぐな眼で自分達を、円堂を見た。

「…私は一度、絶望に負けた。でも…そのまま過去にすがりついて

地面に伏せていても：虚しいだけで」

土門は初めて、彼がこんなに綺麗な眼をしていた事に気付いた。そこにいるのが誰かの作品や兵器ではなく、自分達と同じ十四歳の子供である事を知った。

本当は何一つ、自分達と変わりなかった事を、理解した。

「私は私の誇りを取り戻したい。償いだけじゃない：気付かせてくれた君達に恩を返したい。君達の強さが、私を悪夢から目覚めさせてくれたのだから」

照美が嘘を言っていない保証なんて、ない。
だけど土門は思った。
信じてみたい、と。

土門が自分の意見を言おうとした、その時だ。

「円堂」

先に鬼道が口を開いていた。

「俺は、いいと思う。こいつを信じてみたい」

照美は目を見開いて彼を見る。まさか鬼道からフォローが入るとは思わなかったのだろう。そもそも鬼道が雷門に来たきっかけは、照美率いる世宇子に帝国が惨敗し、痛めつけられた彼のチームメイト達が病院送りになったせいだったのだから。

だが土門には分かる気がする。彼が一番最初に照美を理解した訳が。

円堂は頷き、真正面から照美を見た。

「アフロディ…本気なんだな？」

その瞳の前で、嘘をつける人間はいないと知っている。円堂には、人の心を洗う“何か”がある。

その円堂の前で、彼は確かに頷いてみせた。

「ああ」

あの眼で見られて尚偽り続けられるのは、よほどの悪魔か詐欺師だろう。

だが目の前の彼はそのどちらでもない。明らかに自分達と同じ人間だから。

「…分かった。その眼に嘘は無い。みんなもいいよな？」

「強いんだろ、そいつ」

塔子が無邪気に笑う。

「フットボールフロンティアの一件はよく知らないけどさ。悪い奴かどうかは見りや分かるもん。あたしは大歓迎だぜ？」

「彼にはもう影山のような後ろ盾は無いわ」

そう言ったのは、瞳子監督を呼んで来たらしい夏未だった。その隣には春奈と秋、何故か木暮の姿もある。

「拒絶されるのも、糾弾されるのもわかっていた筈よ。その上で私達の前に現れたのは…よほどの覚悟だったんじゃないかしら」

「ま、戦力になのは間違いない…か」

意外なのは、吹雪の時はあれだけ頑なに拒絶した染岡が、随分あっさりとした事だ。初期メンバーの彼は、世宇子への恨み辛みもそれなりだろうに。

彼もまた、変わったのかもしれない。どんな風に、とはうまく言えないけれど。

「その子は影山に利用されてただけじゃないかな」

その空気に、聖也が追い風を吹かす。

「神のアクアはともかく、なんだかんだでその子はただ試合をしただけ。多少やり方が荒っただけ。…鬼道だって、雷門のサッカーに惹かれてこっち来たんじゃない？ 昨日の敵は今日の味方ってゆーし」

「そっか。…そうだな」

染岡も聖也も塔子も鬼道も…何より円堂が信じると言った。その様子を見て、後輩達や風丸達も頷く。

過去は紛れもなく事実だけど。事實はまた過去に出来る。新たな今に塗り替えられる。

新しいものを受け入れて、人は進化していく。

「ありがとう、みんな」

受け入れて貰えたこと知り、花が咲いたように微笑む照美。向こうでは、あれで男なんて詐欺です…！と影田がオドロ線を背負っているが見なかつた事にする。

「監督、構いませんか？」

「許可をとるタイミングが間違つてると思うけど」

瞳子は若干呆れたように前髪を掻き上げた。

「いいでしょう。戦力が増えるのは歓迎だわ。…ディフェンスの方も新しく人員が増えそうだし」

「え？」

「何、まだ話してなかったの？」

ディフェンス人員？ 何の話だろう。キョトン、と顔を見合わせる一同。さらに呆れる瞳子。

そして何故か過剰反応する木暮。

「音無さんと鬼道君から直々に推薦があつてね。木暮君を、今度のイプシロン戦に使わせて欲しいという要望があつたのよ」

数瞬の間。

「え、ええええーッ!?」

雷門イレブン大多数の叫び声が、見事にユニゾンを奏でたのだつた。

その部屋に呼び出されたガゼルは、ガツカリした様子を隠しめせず溜め息をついた。

私室でなく実験室、という時点で粗方予想はついていただけ。どうせ同じ任務を告げられるなら、大好きな父から良かったのに。

――お父様を誑かす魔女め。

ガゼルは、目の前の女が嫌いだった。

顔は確かに美人の域に入るかもしれない。が、いつも喜悅と狂気に歪んでいるその眼が気持ち悪くて仕方ない。本能的な何かが彼女を拒絶する。

何処で学んだかも分からない科学技術と頭脳、不可思議な体術で父の信頼を得た女、二ノ宮蘭子。

どうせ偽名に決まってる。そもそも日本人かどうか怪しい女を

何故父は雇ったりしたのだろう。

こんな魔女が何故いつも父の隣に控えるのか。彼女に比べれば、あの爬虫類のような眼をした研崎の方がよほど好感が持てるというもの。

- 私の方がずっと長く父さんの側にいるのに。どうしていつも私以外の奴ばかり…！

一瞬。赤い髪の彼の事を思い出しかけてやめる。完全に思い出してしまえばますます不愉快になるのが分かっていた。

実はバーンよりよほど激情家だと自覚しているガゼルである。

「そんなに嫌な顔しないで頂戴。あたし、これでも貴方の事気に入ってるのよ？」

不快感を露わにすりガゼルに気分を害した様子もなく、白衣姿の二ノ宮は笑う。

「安心なさい。あたしの任務に従ってくれば、それがちゃんとお父様”の役に立つ。結局はあたしも、旦那様の為に働いてるわけだもの。ねえ？」

嘔吐け、とは心の中だけで。

自分達の敬愛する父の為に、と二ノ宮は言うが。この女はそんな甘っちょろい感情なんかで動くような奴じゃない。

実験時の、狂ったような笑みを貼り付けた顔を思い出すとゾッとする。この女は自分の理論を実証するのが楽しいだけだ。どうせ自分達の事も、体のいいモルモットにしか思っていない。

「…ご用件は？こちらでも忙しいので手短にお願いしますが」

イライラと言いつつ、それなただけだね、と彼女は手術台の上で足を組み直した。

「イプシロンの監視をして欲しいの。マスターランクチーム・ダイヤモンドダストのキャプテンとして」

「…監視？」

あまり穏やかでない言葉に、眉を顰めるガゼル。

「ああ、裏切り者が出たとか、そういうのじゃないわよ？」

ひらひらと手を振る二ノ宮。

「彼らに盗聴器と発信機をつけてるのは知ってるでしょ？この間の漫遊寺との一戦も全てモニターしてたわ。そしたら…雷門との間に気になる会話を拾ってね。イプシロンのメンバーの中には相当動揺してる子がいるのよ」

赤いネイルが毒々しい、彼女の指がカルテを捲る。研究という名の人体実験が本領だとしても――仮にも医療に携わる人間の手にゃないだろう。

どうせ彼女は自分達に何があっても精々“作品が一つダメになった”くらいにしか思わないのだろうが。

「そう、この子…鬼道クンって言ったかしら。随分賢いのね。私達の事を独自のルートで探り回ってるみたい…。デザームに言ったのよ、“お前達は本当に宇宙人なのか”って」

「…！」

さしものガゼルも、驚愕に目を見開いた。

ジェミニからの報告は全て聞いている。エイリア学園“宇宙人。その等式を、今まで出逢った人間達は誰一人疑わなかったというのに――一体何故。

「あなた達マスターランクはともかく。万が一イプシロンのメンバーが記憶を取り戻す事態になったら困るのよね。また最初からやり直しなんて面倒な事御免だわ」

最初から。即ち・・いざとなったら何度でも書き換えるつもりという事だ。たとえ子ども達の心が壊れたとしても。

ガゼルは悔しさに唇を噛み締める。

「そうならない為の、監視。面倒になる前に止めるのよ。：貴方がね」

魔女は薄い笑みを浮かべて、ガゼルの肩を叩き、部屋を出て行く。後に残されたのは、凍てつく闇を背負いし少年。

「くそっ……」

呪詛の言葉は、虚空に消えた。

【0 - 22・脳裏横切る、君の名は】

自分達は確かに焦っていたかもしれない。あの人が――鬼道がいなくても。大丈夫だという事を見せたかった。彼にこれ以上負担をかけるのは耐えられなかった。

自分達はずっと彼に護られていたのに、彼を護る事が何一つ出来ないのなら。それは対等な関係とは呼べない。本当の仲間とは言えない。

それはあくまで源田幸次郎という人間の個人的観念かもしれないが――いつまでもその庇護下で甘えるのはプライドが赦さなかった。離れていてすら、自分達は鬼道に救われていたのだから。

その為に。鬼道をこれ以上、影山の鎖で縛り付けるような事があってはならない。やっと彼は支配から逃れ、自由になれたのだ。ならばその自由は自分達が護らなければなるまい。

それに。影山の存在に縛られていたのは――鬼道だけではないと知っている。

――鬼道が影山から暴力を受けていた事は、少なくともレギュラーは全員知っていた。

影山は鬼道の顔には大した傷をつけなかったが。ロッカールームで一緒に着替えれば否が応でも目に付く。酷い時は刃物で切られたような跡すらあった。包帯に血がにじんでるなんてザラだ。

警察。教育委員会。大人の手を借りれば解決できたかもしれない。しかし影山の影響力の強さを考えれば、握りつぶされて終わるのは想像に容易い。たとえ鬼道が虐待死したとしても――その死は事故死で片付けられるのが目に見えていた。

何より誰かに露見する事を畏れていた鬼道。もし握り潰される事態にならなかったとしても、警察は虐待の詳細を根掘り葉掘り聞く

だろう。嫌な噂も立つかもしれない。それらに耐えるには、鬼道の精神は追い詰められすぎていた。

自分達にできたのは精々、一人で涙を流す姿を知らないフリをして。強がって背筋を伸ばす姿をどうにか支えて。傷だらけの体に応急手当するのが関の山だった。

守れない。救えない。その事実にも誰も絶望し嘆いていた。気付けば鬼道以外の帝国イレブンも皆失意の底に沈んでいた。

影山にとって自分達は哀れな小鳥に過ぎなかったのだろう。どれほど鳴き叫んでも外の世界には届かない。鳥籠に羽根を打ちつけても傷が増えるだけ。誰もが影山を畏れ、怯えていたのだ。

他ならぬ鬼道が道を開いてくれるまで。

「俺達はもう籠の鳥じゃない……！」

自分達を連れ出してくれた鬼道に恩を返したい。世宇子にボロボロに負けても自分達を見捨てなかった彼を、戻ってくると約束してくれた彼を裏切りたくない。

影山脱走がまだニュースになっていないなら好都合だ。鬼道の耳に入る前に自分達でケリをつける。佐久間の提案は源田にも願ったリ叶ったりだった。

鬼道が知る時には。今度こそ影山は刑務所の中だ。自分達で捕まえてやる。あの鬼瓦という刑事なら喜んで動いてくれるだろう――なんだかんだで警部補と地位は高いようだし。

そう思っ。数少ない情報を手がかりに、調査を始めた。咲山の親が警察関係者だったのが有り難い。そうでなければ自分達は何一つ分からないままだっただろう。

まあ、警察の家の息子が元暴走族（サッカー）を始めるまで、咲山はとんでもない不良だったのだ。鉄パイプ振り回してるのを見た、とは洞面の話だが――だったのはさぞかし頭が痛かったに違いない。とにかく。本当はそんな捜査情報、家族にもらしちゃダメだろ、

というのも含めてよ所に置いとくとして――。

最初のニュースが入ってから数日後。どうやら影山は愛媛にいらしいとの情報が飛び込んできた。その愛媛で奇妙な失踪事件が頻発しているらしいという事も。

実際に現地に飛んで確かめるのが早いという事で。

調査隊に名乗りを上げたのが源田と佐久間だった。現在帝国の部長代理を務める二人が同時に抜けるのは良い事ではないが、元々偵察は自分達の得意分野である。鬼道がいた頃、彼と共に情報収集に駆け回るのは自分達の役目だったのだから。

影山に勘づかれてはマズい。ゆえに短期間での集中捜査になる筈だった。短い時間で手がかりを掴もうと躍起になった――そう、否定しようがない。自分達は焦りすぎていたのだ。

今のこの事態は、自分達の油断と慢心が招いてしまったこと。

「源田！こつちだ！！」

佐久間が手招きする方へ走る。素早く壁の裏側に回り、乱れた息を整える。すぐに幾つもの足音が通り過ぎていった。黒服の大人達と――深緑の制服を来た少女少女達の集団が。

「くそっ……あいつら一体何なんだよ！」

悪態をつく佐久間。しかし源田にも答えられる筈がない。

大人達の事は分かっている。影山の配下のエージェント達だ。中には見覚えのある顔も混じっている。

自分達の疑問は子供達の方だ。彼らの事などまったく知らない。なのに大人達と一緒に追いかけてくるのは何故だ。しかも気味の悪い事に、どいつもこいつも無口で、死んだように感情のない眼をしているのだ。

「…まさか…失踪した子供達か？だが一体何故…？あれじゃあまるで…」

源田の呟きは中途半端に途切れた。佐久間の顔を見る。彼は凍りつき真っ青になった顔で――自分達の頭上を見ている。

まさか。源田はゆつくりと首を動かす。首筋を嫌な汗が伝う。見るのが怖い。そう思うのに、その原因を探らんと顔を上げてしまう。

屋根の上から、子供の顔が覗いていた。

モヒカン頭にフェイスペイント。そう書けば不良チックだが、その顔立ちは幼い。可愛らしいと言ってもいいかもしれない。

それが逆に、恐怖を煽った。

少年は笑う。無邪気に笑う。そして。

「見伊つけた」

カッと目を見開き、飛び降り――源田が気付いた時既にその手は眼前に迫っていて。

悲鳴を上げる暇すら、無かった。

木暮をD F、照美をM Fに迎えての練習が始まった。その様子を見守る漫遊寺イレブン。木暮が何をしでかすかと気が気でない模様

だ。

確かに、初日の暴れっぷりを考えれば、彼の普段の素行も見て取れる。悪戯三昧で試合を邪魔しまくってレギュラー落ちしたのは本当だろう。

- うまくやっていけるのかしら、ほんと。

夏末は不安げに練習風景を見る。不安要素は木暮だけではない。あの世宇子中キャプテンだった照美と、うまく連携がとれるかどうか。

戦力になるのは間違いない。だがあのフットボールフロンティアでのわだかまりがそう簡単に解消されるとは思えない。

影山の存在はそれだけ自分達に重い影を残している。帝国の一戦で雷門イレブンは影山に殺されかけた。なのに、明らかな殺人未遂にも関わらず逮捕後すぐ釈放された。再逮捕された今も安心出来ないのが現状だ。

そしてその影山に最後まで心酔していたであろう照美。今も影山に通じていないとは限らないわけで。

- 信用できるの？本当に？

そんな夏末の心配をよそに練習は続く。

今日はキック力強化とロングシュート会得を中心に練習する事になっている。まずチームを、円堂を除いてAとBの二つに分けて順番を決める。

初めはAチームがフィールドに出てBチームが下がる。Aの1に当たる人物がキッカーだ。まずはセンター付近からその人物がロングシュートを蹴る。

そのボールを円堂がキャッチ。キャッチできなくても拾って、今度は2に当たる人物にパス。その間に最初にキッカーを務めた1の

人物は最後尾に回る。そうやってポジションをローテーションしていくのである。

その間にBチームはAチームの様子を観察して、フォームや弱点をチェック。同時にゴールから程遠い場所に飛んでいつてしまったボールを拾うのもBチームメンバーの仕事だ。

制限時間は五分。その間に何本シュートを決めたかゴールを割ったかも数える。五分したら休憩の後Bチームと交代。BチームはAチームに成果や気付いた事を報告するという寸法だ。

この練習で試されるのは、いかに素早くローテーションを回すか。またいかに正確なシュートが決められるか。円堂のGKとしての基礎的能力も求められる。

もしGKが次のシューター以外にボールをパスしてしまった場合、もう一度ボールを戻してパスのし直しになる。大幅なロスだ。円堂のパスのコントロールも鍛えられるのである。

――一見地味だけど、かなりキツイ練習なのよね…。

一人キックするたびに素早く動き回らなければならず、またシュートを正確に狙うには集中力が必要、指定エリア外からシュートしたりGKがパスミスすればやり直し。体力とコントロールとキック力、集中力が要求される。

メンバーのシュートを五分間キャッチ&パスし続けなければならぬ円堂も相当大変だ。今回のゲーム、勝った方はおにぎり増量、負けたら罰走が決まっているので、みんな余計に気合いが入っている。

「そこまで！Aチームは上がってくれ！」

ピイイ、と古株がホイッスルを鳴らした。途端倒れ込むAチームのメンバー――一之瀬、塔子、土門、栗松。それに円堂もヘトヘト

だ。倒れないだけ大したものだが。

「ちくしょおつ全部外したあ！」

「安心しなよ、聖也には最初から誰も期待してないから」

「一之瀬あーた…時々さらつと酷い」

落ち込む聖也。彼は殆ど疲れていないようだが（馬鹿力かつ体力馬鹿だと名高い）シュートは見事外しまくった。夏末も呆れるしかない。あのコントロールの酷さをどうやって直せばいいのか。じゃなきゃいつまでたっても戦力にならないではないか。

聖也と同様に、大して疲れていないようなのが木暮。なるほど、あのスタミナは見上げたものだ。漫遊寺の雑用で足腰を鍛えられたのかもしれない。初見ながらシュートも一本決めている。聖也より遥かにマシだろう。

ここでBチームのメンバー…鬼道、吹雪、照美、壁山、目金が観察結果を報告する事になっている。

「塔子ってデیفエンス担当なのに成績いいね。ロングシュート向いてると思う…パワーもあるし。ただ動作にあちこちタメが多すぎて、時間をロスしてるかな」

「げっ…ほんとだ。よく見てるアフロディ」

さっきまで戸惑いもあったが、どうやら照美は皆に溶け込みつつあるようだ。完全な信頼を得るにはまだ時間がかかるとしても、良い兆候には違いない。

「…一番意外だったのは、鬼道君があっさり受け入れた事だったんだけどね？」

「そうか？」

近くに來た鬼道にペットボトルを手渡しながら言う夏末。

「世宇子の事、憎んでたんじゃないの？」

彼の愛した帝国が世宇子にボロボロに傷つけられた。それが彼が雷門に来るきっかけだったのに。

「…俺達はその時、絶望に負けた。アフロディ達を恨みもしたさ。だが…」

鬼道はドリンクを飲みながら、静かに言う。

「あいつらはあくまで影山に従って俺達に試合で勝っただけだ。…俺達が恨むべきは己の無力さであって、あいつらじゃない。誰かを憎む為のサッカーでは救われないと、円堂が教えてくれた」

その眼に嘘は、ない。けれど思う

「…そう」

誰もがそうやって生きられたらどれほど良いか、と。

【0・23・碧の上で、舞い踊れ】

そうして――イブシロン戦、当日。彼らが指定した時間は午前十時だが、いつも朝早くから練習している自分達にはあまり関係がない。精々木暮が朝ご飯への悪戯と、聖也あたりの寝坊を阻止すればいいだけだ。

前者は春奈が目を光らせているし、後者は寝間着のまま塔子に投げ飛ばされていたのでまあ大丈夫だろう（さすがにあれで起きない奴はいまい）。

昨日一昨日と、全員がハードな練習で基礎能力を底上げした。何人かは新たに必殺技も会得した。弱点も洗い出してフォームも修正した。あとは――実戦で試すのみ。

「お前さ」

ウォーミングアップを終えた木暮が声をかけてきたので、振り向く春奈。

「何で選手じゃないの？ マネージャーって退屈じゃん…雑用ばっかだし試合中ただ見てるだけだし。フィールドに出たいとか、思わないわけ？」

彼の疑問は多分、先日の彼との勝負から来ているのだろう。あの日は結局、木暮が春奈からボールを奪う事はなかった。木暮はいつまでも勝負を続ける気マンマンだったが、さすがに時間も時間なので鬼道と円堂からストップがかかったのである。

春奈からすれば。あのまま続けていればいつかきつとボールはとられていた。自分は彼に負けていた。だが木暮は納得してはいないのだろう。

勝つてもしないのに何故推薦が得られたのか、と。

「私の実力なんて、まだまだもん。試合に出てもみんなの足引つ張るだけだよ」

「その謙遜ハラたつ。馬鹿にしてんの？その“まだまだ”なお前に勝てなかった俺はなんなわけ？」

「あ、いや…別にそういう意味じゃ…」

木暮はすっかりヘソを曲げてしまったらしい。どうしたものかと考えあぐねて頭を掻く。

こういう時。自分はあまりに多くの言葉を持っていないのだと気付かされる。それでもテストの成績は悪くないし、元新聞部なだけあって文字に触れる機会は多いのに。

とっさに浮かんで来るのはありきたりでつまらない言葉ばかりだ。

「…うまく言えないけど。私ね…マネージャー業が退屈だなんて思ってた事はないの」

自分がマネージャーになったきっかけは、雷門のサッカーに惹かれたから。

自分は望んでこの場所にいる。確かに選手になりたいと思った事が無いわけではないが、選手として走る事ばかりが戦う手段じゃない。

「選手になる事だけが方法じゃない。…私は私のやり方で雷門を守りたい。みんなと一緒に戦いたいから、此处にいるのよ」

元より人と直接争うのが苦手な性分だ。サッカーはぶつかり合いの多いスポーツ。そのぶつかり合いを遠慮して実力を発揮できないようでは、チームにも対戦相手にも失礼というもの。

「マネージャーは裏方仕事ばかりって木暮君は思うのかもしれない

い。それも多分間違つてないわ。でも…縁の下の力持ちがいなきゃ、お城はあつという間に崩れちゃうでしょ」

誰かがやらなきゃいけない事を自分がやる。望んでやる。

それがみんなの笑顔に繋がっているのが、嬉しくて仕方ないから。

「だから、私はみんなの背中を押せる事、誇りに思ってる。…前に出て戦うのは木暮君達がしてくれる。でしょ？」

春奈より遥かに小さな体と背丈しかない少年。自分と同年の筈なのに、まるで弟ができたかのような。だが彼はその華奢な体に、たくさん重たい物を背負ってそこにいる。

親に愛されなかった痛み。親に捨てられた怒り。誰かを信じる事のできなくなつた悲しみ。それを他人である自分が推し量る事はできないけれど。

傷を癒やす為の時間を、与える事ができるなら。その為の場所を用意できたなら…きっと自分達はみんなで幸せになれる。

過去を自然に乗り越えられる日が、きつと来る。

「私、応援してる、今日の試合。木暮君ならきつと奇跡を起こしてくれるって、信じてる」

奇跡は待つていても起きるものじゃない。神が気まぐれに起こすものでもない。

人の強い意志が、作り出すものだ。円堂が、兄が、自分にそれを教えてくれた。

「あのさ。…軽々しく、信じてるとか言つなよ」

頭を撫でる春奈の手を払いのけて、木暮は睨んだ。

「簡単に言うから嘘くさいんだ。お前はその言葉にどんな責任をとってくれる？俺は…信じられないね。会ったばかりの俺を受け入れたフリなんか…どうせ裏切るならしなきゃいいのに」

最後は消え入りそうな声になった。信じられないと彼は言う。だけど。

「でも木暮君、信じたいって思ってる」

その心の声が、春奈には確かに聞こえた。信じられない。だけど、本当は信じたいのだ、と。

「明らかに悪戯の数減ってるし。一昨日も昨日も練習は真面目にやってたじゃない。みんなの期待に応えようって頑張ってる。頑張ってる君だから…私も信じるって決めたんだ」

変わろうとしているのだ。彼も彼なりの精一杯で。だから自分達の元に来て、試合に出る事にも了承した。これが試練であると同時にチャンスだと、木暮もまた心のどこかで気づいている。

「過去は、越えていけるよ。大丈夫。一人で頑張らせたりしない。私達みんなと一緒に頑張ればらうよ！」

そろそろ時間だね、と隣で秋が時計を見て呟いた。するとまるでその言葉を聞いていたかのように…黒いサッカーボールが空から降ってきた。

「望み通り…挑戦を受けに来てやったぞ、雷門イレブン！」

デザームの声が砂塵の中から響き、イプシロンのメンバー達が姿を現す。

びくり、と震えた木暮の細い肩に手を置いて、不安げな彼に微笑む。心配しなくていい、と。

自分達は誰も一人ぼっちなんかじゃない。誰も、一人になんかない。

さあ、盛大な祭を始めようか。

エイリア学園とはどんな組織なのか。実のところデザームも知る事は少ない。ファーストランクチーム、イプシロン。そのキャプテンである事から他のメンバーよりは上層部に触れる機会も多いが -
- それでも彼らにとっては駒の一つでしかなく。

マスターランクを統べる三幹部も敬愛する皇帝陛下も、語ってくれるのは事実の一部のみ。自分達に隠している真実がある事は薄々勘づいていた。

それでも。自分達の存在意義は陛下に仕え、陛下の剣として敵を薙払い、陛下の盾として死ぬ事にある。

疑う事は赦されない。それはある種の逃避行動なのかもしれないが、疑ってしまうは自分達の存在は足下から崩れ落ちる事となる。

デザームは知っていた。まるで宗教のごとく皇帝に心酔していたジェミニストームとは違う。イプシロンのメンバー達は多かれ少なかれ上層部に疑念を抱き、しかし疑いきる事に怯えて眼を背けている事を。

自分には、彼らの不安を取り除いてやる事は出来ない。ただ彼らを心配させないよう、堂々とした振る舞いで引っ張り続けるしかない

い。

必要なのは、覚悟。たとえ騙されていたとしても陛下を愛し続ける、覚悟。そして騙されたと知っても傷つかない覚悟だった。

それでは何も解決にはならないと、人間達は笑うだろうか。

- 勝手にすればいい。どちらにせよ私達は他の生き方など知らないのだ。

「始めようか、雷門の諸君。お前達は私を楽しませる事ができるかな？」

不安も、怯えも、恐怖も。他人にはけして見せない。見せてはならない。自分が“デザーム”としてここに在る限り、最期まで誇りを捨てず立ち続ける。

ホイッスルが、鳴る。イプシロンのキックオフで試合が始まった。

- 私、私達はずっと自分達はエイリアの星で選ばれた誇り高き戦士だと信じてきた。

その考えが間違っているとは思っていない。思っていないが

- 三日前の鬼道の台詞が、自分達の信念を揺るがした。

お前達は本当に宇宙人なのか、と。

その真意が何処にあったかは分からない。単にカマをかけられただけなのか、それとも根拠あつての発言なのか。

ただ事実なのは、その言葉に酷く動揺させられた自分がいた事。

何故だか自分でも分からないのに、酷く恐ろしくなって - 不安にかられた。

何か、とても大切な事を忘れている気がするのに、思い出せない。

- 私達は、お前達地球人とは違う。お前達のような脆弱さは持ち

合わせていない…！

宇宙人ではないと疑われたのか。だとしたら――デザーム達が人間のように彼の眼に映ったとしても。

それこそ、有り得ない。侮辱にも程がある。何故殆ど怒りを感じないのかが不思議だが、今はそんな事どうでもいい。

――私達は、人間なんかじゃない。

まるで自分に言い聞かせているようで、滑稽だった。分かっていたがデザームは気付かないフリをした。

「フレイムダンス！」

踊り狂う炎の帯がイプシロンを襲う。

一之瀬がマキュアからボールを奪った。ひゅう、と口笛を吹く。こちらにも本気は出していないとはいえ、あのマキュア相手に。どうやら漫遊寺よりは楽しめそうだ。ジェミニストームを倒しただけの事はある。

「栗松！ いけ！」

一之瀬は栗松にボールを下げる。何をする気かと思いきや。

「くらうでやんす！ 彗星シュート！」

なんとロングシュートが飛んで来た。完全に不意をつかれ、シュートコースはガラ空き。ブロックのできる人員がルート上にいない。しかし。

「その程度の軽いシュートで、私からゴールを奪えらるでも？笑わせるな」

必殺技を使うまでもない。デザームは右手を突き出し、ボールを軽々とキャッチした。彗星シュートはレンジが長いが威力が低い。栗松とやらはコントロールはいいがパワーは無いようだった。

そのままカウンターを決めてやろうとボールを投げる。すると。

「甘いよ」

ボールは高い位置で照美にカットされた。

いつの間にかFW二人とMF - 染岡、吹雪、照美の三人がゴールのすぐ側まで迫ってきている。なるほど、先程の彗星シュートに自分達が気を取られている隙に一気に上がってきたのか。

照美がパスを出す。その先には染岡。

面白い。さっきよりはマシなシュートが来そうだ。

「止めてみやがれ！」

染岡のドラゴンクラッシュ。青い飛竜が雄叫びを上げてゴールに迫る。なるほど、これがジェミニストームを倒した雷門の力か。

だがこの程度、自分達の敵ではない。

「ワームホール！」

両手を広げ、超小規模なブラックホールとホワイトホールを胸の前に作り出す。飛び込んで来たボールはワープして、デザームのすぐ隣に落下。

ゴールを割る事なく、地面にめり込んで止まった。

「ちっ…！」

悔しげに舌打ちする染岡。それでも立ち尽くしている暇はないと分かっているのだろう。他のメンバーと共に、立て直しを図るべく走っていく。

切り替えが早くチームワークもいい。確かに、いいチームだ。

「まだだ…まだまだ…私をもっと楽しませろ！」

エイリアの目的は理解している。自分達が成すべき事も。その上で、デザームは思ってしまった。

雷門との試合は楽しい。自分達にとってサッカーは破壊の道具である筈なのに…楽しいと。

【0・24・されど、全ては闇へと消えて】

今回の勝負で、雷門を完全に潰すことは赦されていない。

おそらく自分達にはジェミニストームとは違う命令が下されている。ジェミニストームは、雷門をある程度なら潰しにかかる事を許可されていた。が、雷門がジェミニストームを打ち破るほどの力を持った事で……どうやら上層部は多少考えを変えたらしい。

つまり。出来る限り多く、雷門と戦う機会を儲けよ、と。無論エイリアは勝利以外許されない。だが負傷者が続出するような事態は避け、殊に第一戦はデータ収集に重点を置くようにとされている。皇帝が何を考えているのか、デザームには分からない。ただこの戦いが、単なる侵略ではなく、何らかの実験的意味合いを兼ねているだろう事には気付いている。

だが謎だ。雷門の存在を軽視できなくなったのならば、全力で潰しにかかるべきだろうに……どうしてわざわざ面倒を長引かせようとするのか。

……よそう。余計な事を考えても仕方ない。正々堂々戦えるのは……私にとっても本望なのだから。

デザームがパスしたボールはモールへ。さらに雷門陣営が包囲するより先に、クリプトへとパスが繋がる。

「させるかつ！」

土門がキラスライドで迫るが、クリプトは余裕の表情。ひらりとジャンプしてかわしていく。そのままドリブルし、雷門陣営を引きつける。

「温いな」

彼女はニヤリと笑い、FWのゼルへとパスを出す。ペナルティエリアは目前だ。ゼルはボールを蹴り上げ、両手を構える。

「ガニメデプロトン…！」

ゼルの掌にエナジーが集まっていく。収束される紫の光に、警戒心を高める雷門イレブン。

しかし彼らにとってより不幸だったのは、ディフェンスの要である塔子がクリプトに引きつけられていたせいで、ゼルからかなり離れた場所に行ってしまった事。あの場所ではシュートブロックは使えない。

頼みの綱は壁山一人。

「行かせないッス！ザ・ウォール…！」

壁山が雄叫びと共に、大柄なその身体をどっしりと構え、通せんぼうをする。その背後にせりあがる巨大な岩壁がシュートコースを防いだ。

けれど。壁山一人でエイリア学園のシュートが止められない事は過去にも実証済みで。ボールを受け止めた岩壁に亀裂が走っていき、やがては粉々に砕いた。壁山の身体が吹っ飛ばされる。

「くそっ…」

ガニメデプロトンのスピードに円堂も反応しきれていない。マジン・ザ・ハンドでは間に合わないと判断してか、一段階下の技を構える。

「ゴツド・ハンド!!」

金色に輝く神の掌がボールを受け止め――たかに見えた。イプシロンの誰もが心の中で嘲笑した事だろう――我らのシュートが、その程度の必殺技で止められるわけもない、と。

次の瞬間、神の手は硝子のような音を立てて砕け散る。円堂はボールと一緒に吹っ飛び、ゴールネットに受け止められた。

ホイッスルが鳴る。イプシロンの先制点。まあ当然だ。ゴールはデサームが守っている。失点する筈もない。

しかし、予想していたよりも手応えは感じている。漫遊寺は殆どまともなサッカーをさせずに勝つ事が出来たのに――雷門はこちらの連携に怯まず、冷静に対処してくる。

何より、勝とうと足掻く気力が違う。

「まだまだ一点!取り返してくぞ!!」

「おうっ!」

体格こそ小柄だが、さすがキャプテンなだけあって鍛え方は半端じゃないのだろう。あれだけ派手に吹っ飛んだにも関わらず、すぐに立ち上がって仲間達に激を飛ばしている円堂。大したダメージもないようだ。

仲間達もその声に応える。簡単に挫けるほどヤワじゃない、とその眼が言っている。

試合再開。吹雪からパスを受け取り、染岡が駆け上がっていく。

そのままドリブルを許すほどこちら馬鹿じゃない。ゼルとメトロクンが素早くチェックをかける。

「吹雪っ!」

ボールを奪われる前に、染岡は吹雪にパスを出す。

「任せろ!」

ギラリ、と金色の眼を輝かせて、吹雪が前線を駆け上がっていく。邪魔する者は蹴散らしてでも進んでやる、といった勢いだ。

スオームがタツクルに行けば、疾風ダツシュを繰り出し華麗にかわしていく。

奴を上がらせると面倒だ。イプシロンメンバーもジェミニの試合は見ているし、吹雪のシュートの破壊力も知っている。残ったディフェンス全員で吹雪を止めに走る。

さすがに今度はかわしきるのは困難と悟ったか。まだゴールまで遠かったが、吹雪はシュート体制に入った。

「エターナルブリザード！…おおおおっ！」

吹き荒れる雪嵐。ボールを中心に、凍てついた一撃がこちらに迫って来る。シュートブロックをしようとしたタイタンが失敗し弾き飛ばされるのを見て、デサームが感じたのは喜悦だった。

面白い。自分達にここまで抗う事ができるとは。この距離でこれだけの威力のシュートをくらわしてくれるとは。

デザームのワームホールが、ほぼ完璧にエターナルブリザードを止める。悔しげに舌打ちする吹雪。彼は気付いていないようだ。エターナルブリザードの威力に、鉄壁のディフェンスを誇るデザームがゴール側に押し出されていた事を。

無論それはゴールラインを割るには至らなかったが。

「楽しいな…！お前達のサッカーは実に面白い…！」

ああ、本来の目的を忘れてしまいそうだ。忘れられたら幸せなのかもしれないとすら、一瞬思った。そんな事は赦されないのに。自分達はいずれ雷門を潰さなければならぬだろうに。

カウンターアタック。パスを受け、マキユアが攻め上がる。栗松

と鬼道が二人で止めに来たが、その程度のタツクルで彼女は止まらない。

「メテオシャワー!!」

「うわああっ!」

降り注ぐ隕石の雨霰。あれはくらはば相当ダメージを受ける。直撃した鬼道達は地面に這って呻き、すぐには立ち上がれない。

マキュアは再びゼルにパスを出す。行け、とデザームは声に出した。ガニメデプロトンをもう一発叩き込んでやれ、と。ゼルもそれを理解して、再び両手を構えエネルギーを集中させる。

「ガニメデプロトン!!」

紫の光が、真っ直ぐゴールに伸びていく。壁山がザ・ウォールで、塔子がザ・タワーで止めに来るが、パワーはこちらが上。二人は無残に吹っ飛ばされる。

あとはG Kの円堂だけ――な筈だった。そこにもう一つの人影が現れるまでは。

「お…俺だつて…俺だつて…っ!」

今まで悲鳴を上げながらフィールドを逃げ回っていた子供――木暮だった。ジェミニストーム戦にいなかった選手。その臆病っぷりに、早々にマークを外していたのだが――。

どうやらその判断は間違いだったらしいと悟る。一見自棄になつてシュートに突っ込んで来ているようにも見えたが。木暮は地面に両手をつき――シュートコースを塞ぐように逆立ちした。

「旋風陣っ!はああああっ!!」

少年は逆立ちしたまま、両足を振り回すように身体を回転させた。

その膝元にまるで吸い寄せられるがごとくボールが巻き取られる。

最も啞然としたのはシュートを打ったゼル本人だっただろう。少年が回転を止めてポーズを決めた時、その足首の上にはボールが乗っていた。そう、彼はガニメデプロトンを止め、さらにはボールを奪ってみせたのである。

確かに、塔子と壁山のダブルディフェンスで勢いは弱まっていた。それでも円堂以外の人間が、ああも鮮やかにボールを止めてみせるとは予想外。意外なところに、さらに意外な伏兵がいたものだ。ますます面白くなってきた。

そこへ、前半終了を知らせるホイッスルが。

「デザーム」

僅かばかりの休憩時間の終わり。鬼道が声をかけてきた。ああ、あの話の続きが来たか、と思う。

「サッカー、楽しいか？」

何の意図あつての問いかは分からない。しかしデザームは純粹に、感じたままを答えた。

「さあな。お前達にとっては納得できぬだろうが、我らにとってサッカーは破壊の道具にすぎん」

分かりやすく、雷門の何人かが不快感を露わにしてこちらを睨んでくる。本当の本当に、彼らはサッカーを愛しているのだ。

たかがスポーツ。たかが勝敗をつける為の手段。なのに彼らは、そんなサッカーが命を賭けるにも値すると考えているようだ。

不思議に思う。けれど今――それがまったく理解できないとは思わない。

「だが…お前達とやるサッカーは悪くない」

ゼルがやや驚いたようにこちらを見た。無意識に笑みが零れていたらしい。

何だろう。この感覚は知らない。この感情をなんと呼ぶべきかが分からない。

そんなデザームを、どこか切なげな眼で見て――鬼道はついに確信に近い一言を放つ。

「…お前達は何の為に戦うんだ。お前達の黒幕…ああ、レーゼはエイリア皇帝陛下と言っていたな。その人物の為か？」

皇帝の存在が知られている。デザームは記憶の糸を手繰り寄せた――どうやらレーゼは消滅の直前に、失言していたらしい。

たが死ぬかもしれないという一瞬。敬愛する人を讃える言葉を口にしたい気持ちは、分からないでもない。

「そうだ。…我々エイリアの戦士は、あの方の為に戦い、あの方の為に生き、あの方の為に死ぬ事こそ本望。そして存在理由にして証明…！」

かの人の夢を叶える事こそ自分達の夢。かの人の願いは自分達の願いだ。

「あの方が望むならどんな非道も厭わぬ。この命に代えても全うする。あの方が死ぬと命じれば我らは皆喜んで命を捧げるだろう」

「そんな…」

そんなの、なんか変だ、と。円堂が愕然とした様子で呟く。なるほど、彼ら人間の常識で考えれば自分達の信念は何かが歪んでいるかもしれない。

それはさながら、無神論者達が宗教に生きる信者達を解せない事によく似ている。

「死すら厭わない…か」

何を思ったか。鬼道は嘆きを隠すように俯く。

「それでも戦うのか？たとえ…最終的に…自分達が人殺しの道具にさせられても…？その全てが、お前達の信じる人の意志ですらなくても…か！？」

その言葉に。

世界が、凍った。

「な…に？」

イブシロンのメンバーも。雷門のメンバーも。皆凍りついた顔で鬼道を見た。

人殺しの道具？

信じる人の意志では無い？

なんだ、何の話をしているのだ。この少年は一体何を知っているのか。

「かの人物が妙な研究を始めたのは…五年前からだろう？身元不明の妙な女が男に仕えだしたのも同じくらいの時期じゃないか？」

デザームは混乱し始めた頭で必死に考える。五年前？妙な研究？女？

いやそもそも五年前…自分は何をしていた？何故思い出せない。側近の女…と言われて思い当たる人間は一人しかいない。

だがまさか。あの女が――。

「そこまでだ」

突然だった。突然、凍えそうな冷たい嵐が吹き荒れ――風が収まった時、そこに彼は存在していた。

「私の名は、マスターランクチーム、ダイヤモンドダストのキャプテン、ガゼル」

青い眼の少年は冷え切った眼差しを向ける。

「この勝負、預からせて貰おう」

【0・25・凍てつく闇の、冷たさが】

「ガゼル様：どうして貴方が此処に：っ」

デザームもイプシロンの面々も、驚愕してこちらを見ている。

無理からぬ事ではある。ガゼルがこの段階で表舞台に上がる事は当初の計画にはなかった。イプシロンは計画の全てを知っている訳ではないにせよ、彼らが役目を終えるまでは、マスターランクに一番は回ってこないのは明白である。

実際。この展開は誰にとっても予想外だったろう。あの女は自分にイプシロンの監視を命じたが、その発信源が敬愛する父本人とは限らない。あの女の独断である可能性は十二分にある。

悔しい事に――その判断は間違ってたようだが。

今の時点で、真実が漏れる事になってはならない。雷門は勿論、イプシロンにも。

「マスターランクチーム：ダイヤモンドダスト……。やはり、イプシロンより上のランクがいたか」

二ノ宮がマークするように言った少年――鬼道有人。彼はガゼルのプレッシャーにも臆する事なく、真正面から対峙してきた。

なるほど。天才ゲームメーカーの名は伊達じゃないという事が。頭も切れるし度胸もある。ついでに諦めが悪い。敵に回すと厄介なタイプである事は間違いない。

「……困るな。好き勝手に、適当な憶測吹き込んでうちのメンバーを動揺させるのは。君達は正々堂々と戦うサッカーが好きだとか聞いていたけれど」

「悪いがガゼルとやら、こっちは根拠があって喋っている。お前達

の身元についてもだいぶん分かってきたところだ」

「…へえ」

ゴーグルごしに覗く、自信に満ちた眼。ハツタリなどではなさそうだ。まったくどうやって調べたのか。警察にも科捜研にも圧力はかけているというのに。

そういえば、データにあったような。鬼道の父は大財閥のトップ。個人的なコネや情報網があってもおかしくはない。

「お前達とはイーブンで戦いたい。本当の意味でだ。…今のお前達と俺達が戦う意味が、どうしても見えない。…俺の話を遮って登場したあたり…お前は真実を殆ど知っているんじゃないのか？」

面白い人材だ。敵でさえなければ、こつも苛つかされる事も無かっただろうに。髪を弄りながら、ガゼルは深い溜め息をついた。

あの魔女の思惑通りに動くのは癪だが、今は仕方ない。

「…残念だけどノーコメントだ。それ以上教えてやる義理は無い。

…繰り返す。この試合は中止だ。今回は前半で勝ち逃げさせて貰おう」

「ま…待つて下さいガゼル様！」

口を出したのはゼルだった。

「私達は負けたわけではありません！何故こんな半端なところで引かなければならないのですか！？」

試合をまだ続けたい。このまま終わったのでは納得いかない、という顔。ゼルだけではない、デザームを含めたイプシロンのメンバーは皆多かれ少なかれ不満そうだ。

気持ちがまったく分らないではない。が、ここで情にほだされるのはお門違いだ。これ以上イプシロンに動揺を広げるわけにはいかない。

彼らにはまだ、働いてもらわねばならないのだから。

「上の指示だ。…それとも何かな、この私に逆らうつもりかい？」

ギリリ、と強く睨みをきかせてやれば、それ以上何も言えなくなるゼル。これがエイリア学園における絶対の上下関係というもの。ましてやゼルは雷門の、キーパーでもない人間にシュートを止められている。その負い目もあつて強い態度には出られないのだろう。

「…分かりました、ガゼル様」

やがてデザームが代表して、了解の意志を示した。納得のいかな様子ではあるが、そこで理解して引くあたり彼は大人だろう。

そのまま、突然の展開に固まっている雷門を見やるデザーム。

「…そういう事だ。私達も不完全燃烧だが仕方ない。勝負は次に持ち越ししよう」

「ちょ…待てよ！勝手に決めるなよ！！」

我に返った円堂が非難の声を上げるが、既にデザームの手には黒いサッカーボールが。溢れ出した紫の光が、イプシロンとガゼルを包み込んでいく。

「安心しろ。我らは必ず再び貴様等の元に現れる…今度こそ、我々の真の実力を思い知らせてやろう」

デザームの言葉は、いつもながらの傲岸不遜なのに…不思議だった。なんだか、口調がいつもより穏やかな気がする。

雷門と戦ったせいだろうか。短い前半三十一分。その間に、一体何を見たというのだろう。

いや…自分は知っている。“デザーム”を名乗るその人が本当はとても面倒見がよくて、温厚な人物であった事を。そんな彼を変

えてしまったのは――。

「……鬼道とやら。忠告しておいてやる」

暗い光に包まれ、ワープする寸前。ガゼルはそんな言葉を口にしていた。殆ど反射的に。

「下手な興味で……我らの領域に踏み込まない事だ。さもなければ命の保証はない。……あの残酷な魔女が、嬉々として貴様を喰らいに来るぞ」

あの女の本性に、一体何人が気付いているだろう。
彼女ならやりかねない。あの女のサディスティックな趣味は、思
い出すのもおぞましいものばかりなのだから。

マスターランクチームのキャプテン、ガゼル。

その出現に、衝撃を受けたメンバーは少なくあるまい。かくいう
風丸もその一人。ジェミニストームを倒せば終わると思っていた戦
い。しかしイプシロンが現れてさらなる勝負を挑んできて。さらに
そのイプシロンよりも上がいるという。

「イプシロンを倒せば、終わりだと思ってたでやんす……」

栗松の呟きが、皆の気持ちを代弁していた。

戦っても戦っても終わりが見えない。倒して立ち上がったもまた倒される。自分達はそんな場所に立たされているのではないか――そんな不安が皆に広がりつつあった。

こんな時。上級生の自分は率先して皆を勇気づけるべきと分かっている。しかし今、風丸自身の気持ち折れつつあった。

あのイプシロンにも、自分達は押されていたというのに。それより上のランクのチームなんて尚更勝てる気がしない。

ガゼル様、と。あの傲岸不遜なデザームが敬意を払うくらいだから、余程実力があるのだろう。実際目で確かめてみない事には如何ともし難いが――今は確かめようと思う気概すら失われている。

怖いのだ。もし圧倒的な力で叩きのめされるなんて事があつたら、自分達が今まで積み重ねてきたもの、全て否定されてしまう気がして。

そもそも。風丸をはじめとした雷門の初期メンバーは、こんな世界規模の戦いをする為に集まったのではないのだ。

あくまで部活として。フットボールフロンティアで優勝するとうささやかな願いの為に此処に居た筈なのに、それがいつの間にか世界を救う為の戦いになつて――。

違うんだ、とは言えなくなつた。一度乗った列車からは降りれない。周りの期待から背負わされた荷物を、まるで自分の意志かのよう背負うしかなくなつた。

確かに、エイリアのしている事は赦せない。サッカーを汚す奴らを放っておきたくない。だからといって逃げたくなる瞬間がある事の何がいけないというのか。

何もかも割り切つて納得できるほど大人じゃない。円堂のように真っ直ぐ前を見て歩けるほど強くもない。

「この戦いは……いつになれば終わるんだ。強くなつても強くなつても、また次の敵が現れてさ……」

「風丸君……？」

どうやら声に出ていたらしい。たまたま側に立っていた秋が不安

げにこちらを見てきたが、一度決壊してしまえば止める事などできなかった。

「なあ…教えてくれよ円堂。俺達はいつまで頑張ればいいんだ？」

円堂の大きな眼が見開かれる。

彼の強さがいつも眩しかった。真っ直ぐ進める純粹さが羨ましくて…時に妬ましくて。

彼の事は親友だと思っている。だが円堂を好ましく思うほど、ドス黒い嫉妬の炎が風丸の中で渦を巻く。

自分は決して彼のようにはないのだと、思い知らされる。

「神のアクアがあれば…！それで世界が救われるなら何が罪だ…！悪事に使っわけじゃないんだぞ…なんで否定できるんだよ円堂っ！」

「風丸っ…まだそんなことを考えてたのか…！」

神のアクア。その名前が出た事で、フットボールフロンティアの一見を知る面々は誰もがぎょっとした顔になる。

風丸は以前にも円堂に同じ話をした事があった。だから円堂は皆ほどは驚いていないのだろう。それでも、あの時は冗談の範疇だと言ってみせた。今の風丸は、違う。

本気で。神のアクアを欲している。円堂の理論が理解できなくなりつつある。

「前にも言ったじゃないか！正々堂々エイリアと戦わなきゃ意味がないって…！！お前だって分かってたんじゃないのかよ…！！」

肩を掴んでくる円堂の手を払いのける。これではいけない。後輩の前でこんな感情的になるのはまずい…分かれている。分かっているのに。

「みんながみんな！お前みたいに強いと思うな！！そもそも俺は…俺達は世界を救う為にサッカーを始めたわけじゃない！！そんな大それた目的、背負いきれるわけないのにつ…」

円堂の横で。悲しそうな顔で風丸を見ている照美。かつて影山率いる世宇子中に所属し、神のアクアを使って自分達を絶望の縁に叩き込んだ天使。矛先は自然に彼へと向いた。

「誰かに与えられた強さなんて本当の強さじゃない…そう言ったよなアフロデイ？」

「…言ったよ」

「それ、本当か？本当はまだ神のアクアを隠し持ってるんじゃないのか？」

「おい、風丸！」

言い過ぎだ、聖也が非難の声を上げる。だがその制止をも無視して、風丸は照美に詰め寄る。激情は、もはや自分でも止められそうになかった。

照美は、その少女のような顔を苦痛に歪めて沈黙している。それがますますイライラを募らせた。

否定するなり肯定するなり、何か言えればいいじゃないか。何故答えないのか。苛立ちのまま、華奢な肩を掴もうとした、その時だった。

パン！

頬に、衝撃。そして甲高い、乾いた音。平手をくらったのだ、と気付き、風丸は呆然とその相手を見る。

「いい加減にしろ、風丸」

鬼道だった。彼は静かな、しかし厳しい声で言った。

「知らない事は罪じゃない。…だが、知らないからで赦される事は
何もない」

まさか彼に叩かれるとは。しかも何の話をしているのだ。混乱する
風丸に、鬼道は険しい視線を投げる。

「神のアクアがどんなものか…どんな悲劇を巻き起こしたか。アフ
ロデイが誰より分かってる」

はつとした様子で照美が顔を上げる。

「鬼道君…君は…」

「すまないな。…神のアクアについて調べる時、鬼瓦刑事から話を
聞いたんだ…お前の身に起こった事を」

照美の瞳の奥が揺れる。泣き出しそうな顔に、見えた。一体鬼道
は何を知っているのだろう。照美が自分達と一緒に戦いたいと言
出した事と、何か関係があるのだろうか。

「…そうだね。やっぱり、私から話さなくちゃいけない事だ」

意を決したように、顔を上げる照美。無理に話さなくても、と鬼
道は言ったが、彼は首を振った。

そして、語り出す。

「神のアクアは…私から全てを奪った」

一つの、真実を。

【0 - 26・幻想妄想、症候群】

鬼道があ的事件を知っていた事には驚いた。しかも、まさか自分の為に怒ってくれるなんて。

不謹慎ながらも、嬉しい。

自分は彼らに対してあれだけの罪を犯したのに……それでもなお仲間として受け入れて貰えている事が、だから。

「神のアクアは……私から全てを奪った」

照美は決める。

自分も覚悟して話すべきであると。

「……大したニュースにはなっていないようだけど。先日、千葉の海で死体が上がった。見つけたのは近所の漁師だったらしい」

思い出す。あの瞬間。自分が最後に見た、仲間達の笑顔。怖い。身体が震えるのを叱咤して気を持たせる。

雷門のメンバーの視線を感じる。今更引き返すわけにはいかない。

「見つかったのは全て中学生の子供の死体。息があったのは一人だけ。……あとは全員助からなかった。彼らの身体から大量の薬物が見つかった事もあって……事件は薬物中毒が原因の幻覚による事故死か集団自殺として片づけられた」

世宇子中のメンバーが生活していた場は千葉にあった。辛い練習に挫折そうな時は、みんなであの場所から海を見た。

かき集めのイレブンだったかもしれない。だけど、互いの存在が

教えてくれた。自分達は一人ではない事を。

あの頃、自分達は確かに、家族だった。

「…あの海の上にね。学校とは名ばかりの小さな生活の場があつて…一人の大人に育てられた子供達が暮らしてた。死んだのは全て、そこで生活していた子供達だったんだ」

その先が予想できたのだろう。まさか、という顔になる雷門イレブン。風丸に至っては顔から血の気が引くほどだ。

「唯一の生存者の名前は、亜風炉照美」

そんな彼を真正面から見つめて、照美は告げる。

「分かるかい？神のアクアはつまり脱法ドラッグなんだ。依存性は少なかったけど、強い洗脳作用と幻覚症状を伴う。また、潜在能力を強制的に引き出す事から、身体にかかる負担も半端じゃない。…知らなかったとはいえ、多用した人間の末路がそれだ」

いや。きっと誰もが薄々、神のアクアのおかしさに気付いていたに違いない。それでも総帥に命じられるまま飲み続けたのは、彼が自分達にとって絶対の存在だったから。

自分達は影山に育てられた。影山の意志は絶対だった。敬愛する彼に逆らう事など考えもしなかった…たとえその代償が自らの命であるとしても。

「私は助かったけど。死にかけた事とドラッグのせいで…身体には後遺症が残った」

幸い。体力が落ち、時折発作的に激痛が走る事以外に問題はない。

長くフィールドに立つのは難しいがサッカーもできる。
でも。

「私は…あと二年も生きられない。医者にはそう宣告された」

顔面蒼白になる風丸。理解したのだろう。－自分が言った事の意味が。どんな危険な真似をしようとしていたのかが。

そんな彼に、照美は事実を突きつける。

「それが…偽りの強さに頼った者の、代償だ」

自分は神のアクアの力で全てを得た筈が、気がつけば全てを失っていた。

敬愛する人も。共に生きた仲間達も。最後には自分の命さえも喪う。

「…君の気持ち分からないわけじゃない。いつの間にか世界の命運すら背負わされて、終わりの見えない戦いに放り込まれて。…でもね、これだけは忘れちゃいけないよ」

「あ…アフロディ…」

「何の対価も払わず、強くなてなれないんだ。…君達は強くなる為に努力という対価を払ってきた。それに対して私は何も努力せず強くなるうとして…罰を受けた。…愚かにもほどがある」

怠惰と傲慢の代償は。あまりにも重くて、重すぎて。

「風丸君。君は、私のようになっちゃいけない」

失ってから気づいても、もう戻りはしなくて。

「……ごめん」

俯き、風丸は消え入りそうな声で言った。

「何も知らないで…勝手な事、言った」

「…いいよ。君が悪いわけじゃない」

彼を追い詰めたいわけじゃなかった。結果的にそうなってしまったとしても。ただこれ以上、自分達と同じ過ちを犯す人間を増やしたくない。仮初めだとしても、再び得た仲間を失いたくはない。

悲劇はどうか、自分で終わりに。

「…こんな身体にはなったけど、今すぐ死ぬってわけじゃないしサッカーもできる。反省も後悔もしてるけど…けして不幸になったわけじゃない。君達とも出会えたしね」

それは照美の本心からだった。

人間はいずれ死ぬ。自分はその期限がほんの少しばかり人より短くなったにすぎない。

大切な者達と出会えた奇跡も、歩んだ道筋も。けして消えたわけじゃない。

何億分もの確率で今自分は此処にいる事ができる。それはきつと、幸せな事だ。

「風丸」

円堂が風丸の肩に手を載せる。そして笑いかける。

いつもの力強い笑みとは違う、優しく語りかけるような笑顔で。

「俺だって…強くなんかないよ。本当はいつも不安でいっぱいなんだ。試合の時だって…精一杯頑張っても手が届かなかったらどうしよう、とか。せっかく修得した必殺技が通じなかったらどうしよう、とか」

「だけど、俺は一人じゃないから、と。彼の言葉が照美の胸にも染み渡っていく。」

「一人じゃないから、頑張れるんだ。風丸が、みんながいてくれる。みんなが俺にパワーをくれる。だってさ、みんなより先に、キャプテンの俺がヘコたれるわけにはいかないじゃん！」

本当は。キャプテンである事の重圧を感じてきたのかもしれない。自分だけは頑張らなければ、自分だけは立ち上がらなければ、と。言い聞かせて、ポジティブな自分を演じてきたのかもしれない。

それでも、円堂はそこに立ち続ける。残酷な世界にも折れずに前を見ようとする。

照美は思うのだ。それは彼が努力の果てに得た強さの、最たるものではないかと。

「終わりは必ず来る。一万回駄目でも一万一回目は違うかもしれない。…頑張れなんて言わない。風丸もみんなも今、充分頑張ってる」

「円堂」

「だから俺が言いたいのは一つ」

パン、と。景気つけのように手を叩いて、我らが最強無敵のキャプテンは言った。

「一緒に戦おうぜ！逃げる時も走る時も、俺はみんなと一緒にいたい！！」

たとえすぐ側に姿が見えなくても、心はずっと側に。

それは多分、離脱したメンバーにも告げなかった言葉だろう。

「“頑張る”のも一緒、だな」

「ああ」

一ノ瀬が、土門が頷く。シリアスな空気に頑なっていた仲間達も、笑顔で頷く。春奈の後ろにはちょこんと佇む、人間不信の代名詞（

と、土門が言っていた）木暮すら小さく笑っている。

これが円堂守。みんなが愛したキャプテンの力なのだ。

「みなさん、ちょっといいですかな」

その時だった。囁れた声が。

振り向くとそこには漫遊寺の監督と瞳子の姿が。

「試合直後で申し訳ないのですが…あなた方に頼みがありますのじや」

「頼み？」

「本来なら漫遊寺の仕事なのじゃが、先の戦いでメンバーの大半が負傷しております…代わりにお願いしたいのです」

やや申し訳なさそうに、僧侶姿の老人は言う。

そういえば。京都に来る前に一通りの事は調べてきたが…武道に長けた漫遊寺中の生徒は、この近辺の治安維持においてある種警察より頼りにされている存在だと聞いている。町の住人達から頼みごとをされるのも珍しくないとか。

その漫遊寺の生徒が今はイブシロンとの試合で動けなくなっている。住人達からすれば困った事態ではあるのだろう。

「京都に来た時、あなた達もお巡りさんから聞いたと思うけど」

漫遊寺監督に代わり、瞳子が続ける。

「最近この近辺で不審者が出て困っているそうなの。今のところ、向こうから何か面倒を起こすわけじゃないみたいだけど…」

彼女の説明によると。その不審者の姿をハッキリ見た者はいないが、小柄ですばしっこい子供らしいとの情報が入っている。

それで先日、たまたま見かけた警察官の一人が職務質問をしよう

としたところ、激しく抵抗されて事もあろうに負傷。大した怪我ではなかったが、住民達の不安をますます煽る結果になってしまったという。

普段なら漫遊寺に頼むところだが今はそれもできそうにない。よって、雷門に代わりにお願いできないものかと話が回ってきたそうだ。

「実は最初、木暮君がイタズラの為に夜中に散歩してるせいじゃないかって話もあったらしいわね。でも警官が怪我をしたその日も目撃情報があった日も、木暮君は垣田君や監督さんの監視下にあった……まあ、説教されてたつてのが正しいみたいだけど」

「うっせえや！」

悪かったな、とむくれる木暮を春奈が苦笑しながら宥めている。要は、木暮には“アリバイ”があつたわけで。疑いはあつさり晴れたということだ。

「……単なる不審者ってだけなら、私達の出る幕でもないわ。警察に任せるべきだと思う。だけど……」

瞳子はそこで、何かを考えこむように言葉を切る。

「……ある筋の情報でね。もしかしたらその不審な子供、この一連の事件に関係があるかもしれないの」

「一連の……ってまさかエイリア学園！？」

「断言できないけどね」

一気にざわつくイレブン。照美は内心眉を顰める。

今、瞳子は何か別の事を言おうとして、言葉をすり替えた。“ある筋の情報”という言い方もまた妙に引っかかる。

そう思っているのは自分だけではないらしく、隣で鬼道も訝しげな顔をしていた。

「……サッカーボールを持っていたという証言もある。丁度いいわ。」

明日、私達で確かめに行きましょう」

瞳子の決定に異論がある者はいなかった。エイリアに関わる情報が少しでも判明するのならそれにこした事はない。

- - まあ… 鬼道君はとつくに全部知ってるのかもしれないけどね。

デザームに、意味ありげな言葉を投げていた鬼道。彼はどこまで調べがついているのだろう。

『それでも戦うのか？たとえ…最終的に…自分達が人殺しの道具にさせられても…？その全てが、お前達の信じる人の意志ですらなくても…か！？』

エイリア学園が、人殺しの道具？

全ての侵略行動が、彼らの心酔する“エイリア皇帝陛下”の意志ではない？

『かの人物が妙な研究を始めたのは…五年前からだろう？身元不明の妙な女が男に仕えだしたのも同じくらいの時期じゃないか？』

妙な研究？五年前？身元不明の女？

照美には何の事やらサッパリだったが - - それらのキーワードに、デザーム達が明らかに動揺していた。しかもその話を遮るようなタイミングで現れてイプシロンを退却させたガゼル。

勝っていた試合をわざわざ中止させたのは、これ以上鬼道とイプシロンを会話させるわけにいなかった為なのか？鬼道の言葉は的を射ていた？

分からない。分からないが - - 何か嫌な予感はある。

『下手な興味で…我らの領域に踏み込まない事だ。さもなければ命の保証はない。…あの残酷な魔女が、嬉々として貴様を喰らいに来るぞ』

ガゼルの言っていた“残酷な魔女”。

あれはどんな意味だったのだろう？

【0・27・きみの、こゝろ】

デザームは一人、研究所の廊下を歩いていた。向かっているのは、マスターランクの三幹部の居場所だ。

本当は皇帝に直接訊きたいところだが、自分の地位では簡単には謁見を許されない。最低でもその前に、マスターランクリーダーの誰かを通して許可を貰う必要があった。

まあ、致し方ない事ではある。それにデザームはこのシステムにさほど不便さは感じていない。エイリアを動かす三人はなんだかなだで面倒見が良いし、上に立つに十分な実力もある。

たまに感情任せに不機嫌になったり三人で揉める事はあったが、個人的には彼らのそんな人間くさは嫌いじゃない。たまに喧嘩に部下達を巻き込む（主にバーンが）のだけは勘弁して欲しかったが、やがて辿り着いたのはグランの私室。三幹部の中でグランが一番発言力がある。何より今この時間帯、ガイアのメンバーが揃って休憩中である事をデザームは知っていた。

「グランならいねえぞ」

ノックをするより早く、後ろから声をかけられる。

振り向くとバーンが立っていた。タオルで汗を吹いているあたり、彼もトレーニングを終えて戻ってきたところなのだろう。

「何処行ったかは知らね。ついでに言えばガゼルはどこぞの魔女サマに呼び出しくらってて、こっちもいつ戻るか分かんねー。…用件なら俺が聞くけど？」

熱血元氣キャラのイメージが強いバーンだが頭の回転は早い。瞬時にデザームの用を見抜くあたりさすがである。

口調こそぶつきらばうだが、さりげなく配慮もみせる。彼が部下達から慕われる理由も分かるというもの。

「お気遣いありがとうございます、バーン様。…僭越ながら申し上げます。バーン様は我々タイプシロンと雷門の試合は、ご覧になりましたか？」

「ああ、ガゼルが割り込んで水入りになったヤツな。…やっぱその件か」

「…ええ」

バーンも気になってはいただろう。

彼がどこまで事実を把握しているかは分からない。自分達よりはずっと内情に詳しいだろうが、それが“真実”と言える域かどうかは不明だ。

確かなのは。あの段階でガゼルを登場させる予定など、当初の計画には無かったという事。マスターランクの一番はイプシロンが万が一負けるか、計画が最終段階に入ってからの方だった。

少なくともイプシロンは試合に勝っていたし、終了のホイッスルも鳴っていない。にも関わらずあまりに不自然な形で自分達を撤退させたガゼル。そのガゼルに指示を出したのは、二ノ宮蘭子。

二ノ宮に指示を出したのが陛下であつたかどうかは…分かっていない。

「ガゼル様が試合を中止させたのは…鬼道有人の言葉が原因とみて間違いない。…奴が我々を偽情報で混乱させるのを防ごうとした…という見方も可能です」

決定的な話を話す前に、話を強制的に終わらせた。それは確かだろう。

問題は、鬼道の言葉の真偽。そしてマスターランクの三人はどこまで知っているかという事。

「自分達はあの方に騙されてるんじゃないか…そう疑ったか？」

自分より小柄なバーンに下から睨むように見上げられ、反射的に首を振る。

あの方を疑うなんて、考える事も赦されない。疑問を持ったのは確かだが、皇帝を疑えばそのまま自分達の存在理由が崩壊する。

「…疑う事など、我々には赦されない。同時にイプシロンのリーダーとして…仲間に不安が広がるのは避けるべき事態と考えます」

「お前はエイリアの鑑だねえ」

顔に本心、出てるけどな、と。くつくつと笑うバーンに思わずドキリとする。

「…ただ。もし…この現状が陛下の御意志に背くものならば。私には戦士として、真実を明らかにし、陛下をお護りする義務があります」

自分達は、皇帝から直接指示を貰う事は殆ど無い。大抵は二ノ宮や研崎、バーン達三幹部を通す。

つまり…彼らの誰かならば、皇帝の指示を捏造するのも可能ということ。

「私は陛下の事は疑えませんが…それ以外の人物は疑います。…二ノ宮様のことも」

彼女の事は好きではないが、能力があるのは認めている。

ただ二ノ宮蘭子というのが偽名であるらしい事は皆噂しているし、どういう経緯で今の地位に上り詰めたかも怪しい。研崎にも似たような事は言えるが、彼の方がまだ自分達とも付き合いが長いのだ。

「バーン様。何かご存知でしたら私にも教えて頂きたい。私達は…何の為に戦うのか。私達は本当に…」

「デザーム」

有無を言わさぬ声。気圧されて、デザームは言いかけた言葉を飲み込む。

「ガゼルにも忠告されたんだろが。…やめとけ。正直二ノ宮の事は俺も嫌いだし疑ってるが…あの女の力は今はまだ必要だ」

どうやら本当に嫌ってるらしい。バーンはすぐ顔に出る。

「それに…奴は得体が知れない。下手に嗅ぎ回ってるのがバレてみる、いくらお前でも…」

その言葉は中途半端に止められる。何かを言いかけて、しかし相応しい言葉を考えあぐねているような。

消される、というのか。確かにエイリアの体制からすれば自分の立場など“所詮”ファーストランクチームのキャプテン。代わりなどいくらでもいる。

実際、消された事例はあるのだ。なんせ手を下したのは他ならぬデザーム自身なのだから。

「…バーン様。私が…私が追放したジェミニストームのメンバーは…どうなったのです？」

日本の何処かに飛ばされただけだと信じたかった。しかし、もし違ったなら。酷い目に遭わされていたら、あるいは殺されていたら。知るのを恐れていたゆえ、避けていた質問。だけど。

『デザーム様…よろしいですか？』

自分を慕って、よく勉強を教えてくださいとせがんだ小さな少年。レ

ーゼという名の、微かな記憶の中の彼は大人しい子供にすぎなかった。本当は率先して誰かや何かを傷つけるなんて真似のできる子ではなかった筈だ。

それが、いつの間にか――変わって。それこそ強くなった証と陛下も二ノ宮も言っただけだ。

「……それは……」

バーンは、黙り込む。沈黙は長く続いた。それでもデザームは静かに、返事が返るのを待った。

とりあえず、漫遊寺の代わりに不審者を捜すことになったわけだが。

ハッキリ言って手がかりが少なすぎるのである。これは安請け合いだっただんじゃないかと内心染岡は思う。

――時間は夕方や夜が出現率が高く、身長は多分円堂くらいで多分木暮よりは大きいっばい……って言われてもなあ。

分かっていることも曖昧なのだ。性別も不明。容姿なんて論外。そもそも目撃された不審者が本当に全て同一人物かも怪しい。正直捜しようがない。

ただ気になるのは、瞳子が不審者がエイリアと関係あるかもしれないと言い出したこと。何を根拠にそんなことを？彼女の秘密主義は前からだが、最低限語るべき内容があるのではないか。

「RPGの基本は情報収集なのです！」

困り顔のイレブンでただ一人、輝いてるのが目金。

「ここは雷門の名探偵と名高いこの僕にお任せあれ！不審者だろうがエイリアだろうがきっちり捕まえてご覧にいますっ！」

「初めて聞いたぞそんなの…。ってか元気だなお前」

「補欠で試合に出てなかったしね」

「こういう時オタクって強いよな」

土門に夏未に木暮。グサグサと言葉の矢でつつこまれ、目金は一気に萎む。さらにすぐに復活するのも分かっているのでみんなで放置。地味に酷い。

「体格からして、とりあえずは子供と見ていいんじゃないか？」

おふざけモードに突入しかけたのを、引き締めたのは、塔子。

「最近見慣れない子供が彷徨いてないか、聞いて回ってみようよ。あと最近変わったこと…万引きが増えたとか誰かがいなくなったりとか引越してきたとか…も」

「目撃者はいるのに誰も顔を見てない…。となると、相手は顔を見られないように逃げ回っている可能性があるな。何もしていないのに逃げるのは妙だ。考えられるのは隠れて犯罪行為を行っているか、既にお尋ね者として顔が割れているか…」

「あたしもそう思う」

塔子と鬼道の会話に、誰もが感嘆の溜め息を漏らす。さすが元SPと天才ゲームメーカー。頭の回転が早い。

とりあえずはやはり町の人に話を聞いて回るしかない。その結論に誰も異論は無かった。

「鬼道君」

不意に、照美が口を開く。

「さつきは…ありがとう。私を仲間として認めてくれて。鬼道君だ
けじゃない。雷門のみんなに…本当に感謝してる」

「構わないさ。大事なのは未来。過去はあくまで、未来の為に存在
すべきものなんだ。そうだろう？」

そうそう、と円堂も頷いている。

自分に言われているわけではないが。どこか深い言葉だと染岡は
噛み締める。

豪炎寺のことを過去として片付けるつもりは毛頭無い。しかし、
過去は未来の為にあり、逆であってはならない。過去の為に未来を
犠牲にしてはならないし、今を否定するのも虚しいだけだ。

だから自分は、吹雪と共に戦う道を選んだ。

いつか豪炎寺が帰って来る、その日という未来の為に。

「同じユニフォームを着たら、心は一つ！お前も木暮も、もう立派
な仲間だ！」

ニカツと笑う円堂。その隣で木暮が、俺も？と目を丸くしている。

「お前も！勿論だろ！！」

みんなを太陽のごとく照らして導く光。これが円堂の魅力なんだ
なあと改めて実感する。そんな彼に惹かれて、自分達は同じ場所に
集ったのだ。

証拠にあのひねくれ坊主がすっかり大人しくなっている。ここ何
時間はイタズラもして来ないあたり素晴らしい。

円堂は日本一嫁候補の多い中学生かも…と彼を評したのは土門
だったか目金だったか。

「円堂君は凄いなあ」

小さく笑みを浮かべて、吹雪。そういえば少し前まであんなに邪険にしていたのに――いつの間にか吹雪の定位置は染岡の隣になっている。

「照美君のこともそうだし……正直……あのままイプシロンと戦ってたら僕達負けてたよ。風丸君の気持ちも分かるんだ。……その上、新しい敵も出て来て……落ち込んだって仕方ないのに」

もう立ち直ってるなんて、凄いや。

吹雪の呟きはなんだか寂しくて、空虚だった。

「お前……落ち込んでるのか」

見れば分かるだろ、と染岡の中でもう一人の自分が言う。

「ちょっとだけ……ね。へこんだかも。ごめんね、エラそうなこと言ったくせにシユート……決められなくて」

そういう事か。

確かに今日のイプシロン戦、吹雪のエターナルブリザードは止められた。どうやらそれが相当尾を引いてるらしい。彼の表情が悔しげに歪む。

「……落ち込むとは言わねーけどよ」

こういう時、自分はそう多くの言葉を持っていないと気付く。ただ、吹雪の落ち込んだ顔を見るのは辛い。

やっと自分にも、彼の力の凄さが分かってきたところなのだから。

「円堂見てると、お前にも分かるぜきつと。勝ちっぱなしより…一回負けて立ち上がった奴のが…強くなれるってな」

「…うん」

ぼん、と染岡は小さな頭に手を乗せる。吹雪はなんだか、ほっとしたように笑った。

【0・28・風のように、鳥のように】

我ながら無茶をしてると思う。ついでに言った事とやってる事が合致してない。

自分はあれほど彼を陸上部に引き戻そうとしたのに……今も彼の帰りを待っている事は変わらないのに。あの時とは真逆の事をしようとしている。その為にたった一人で京都にまでやって来てしまった。

だが、けして後悔はしていない。考えに考え抜いて出した結論。陸上部の先輩達も背中を押してくれた……風丸を助けて来い、と。

宮坂了。雷門中陸上部の一年生にして風丸一郎太の元後輩は、現在京都駅にいた。

……早く漫遊寺中に行かないと……イナズマキャラバンが発売しちゃう……！

何分初めての場所である。そもそも関東から殆ど脱出した事の無い宮坂だ。方向音痴とからかわれるほど酷くはないが、それでも迷いそうになるのはどうしようもない。

出口が山ほどある上、その場所の名前が地図から消えてたりする東京駅よりはマシな筈だ（余談だが管理人は東京駅で迷子になるのが得意技である。駄目じゃん）。

とりあえず近くの案内板を探す事にする。できれば詳細なガイドマップもあればいいのだが。

……驚くだろうなあ……風丸さん。

口をぽかん、と開けた彼の様子が容易く想像できて、つい吹き出してしまふ。

- 僕なんか…一緒にいても役立たずかもしれない。でも…ただ見てるだけなんて、嫌なんだ。

雷門中とエイリアの戦いは、全国ネットでテレビ中継されている。全ての試合を宮坂もチェックしていた。最初は尊敬する風丸を目で追っていたのだが、次第に心から彼らを応援するようになった。

実は。風丸をサッカー部に連れて行ってしまった彼らを、特に円堂を、宮坂は快く思っていないかったのである。最終的には風丸の意志を尊重して激励してみせたが、わだかまりは完全には消えていなかった。

彼らが悪いわけではない。だけど円堂達さえいなければ、陸上部は風丸を失わずに済んだのに。そう恨みがましく思ってしまう瞬間があるのも確かなのだ。

今も全て吹っ切れたわけではない。だが、雷門イレブンはあれだけ怪我人を出してなお、世界の為に戦ってくれている。校舎を破壊されて尚何もできなかった自分達の無念を晴らそうとしてくれる。

テレビの中。宮坂の大好きな先輩は、傷だらけで何度でも立ち上がった。円堂の声が、仲間達の声が彼を強くするのが見えるよう。

ほんの少し、嫉妬して。羨望を抱いて。

そして…考える。自分にも何か、出来る事はないだろうか、と。

- 僕はサッカーなんて、体育の授業くらいでしかやった事ない。

これから先サッカー部に入ろうとも思わない。…でも。

これは、ただのスポーツではない。世界の命運をかけた戦いなのだ。風丸はその重荷を必死で背負ってそこにいる。

自分にも、少しでもその重さを軽くする事ができるなら。

- やってみよう…サッカーを。

自分はズブの素人。もしかしたらあの気難しい監督のお眼鏡に叶わず門前払いされるかもしれない。いずれ陸上に戻る気でいる自分なんて、キャラバンのメンバーに受け入れて貰えなくても仕方ない。だけど今は雷門の疾風デیفエンダーと名高い風丸だって、ほんの少し前までは初心者だったのだ。根気さえあれば出来ない事はないと、既に彼が証明済み。

だから、やってみよう。

自分は体格もテクニクもないけど、脚とスタミナにだけは自信がある。陸上部での練習を怠った事はけしてない。身体能力だけ見ればそうそう引けはとらない筈だ。

「僕もできる事があるなら、やりたい…！」

自分の為に。風丸の為に。雷門の為に。

宮坂は小さくガッツポーズして気合いを入れる。見つけた案内板を確認し位置を確かめる。

幸い出口は遠くない。宮坂はナップザックを背負い直して歩きだした。

駄菓子屋のおばさんが、最近見知らぬ子供の世話をしているらしい。町人にそんな噂を聞いた雷門イレブンは、早速話をうかがう事にした。

円堂が見上げた先にあるのは、年季の入った“篠田文具”の看板。本来は文房具屋で駄菓子はおまけ程度だったのだが、今ではすっかり立場が逆転しているという。文房具を買いに来たついでに駄菓子も買う、という子供達も多いのだとか。

稲妻町にある行きつけの駄菓子屋さんを思い出し、頬が緩む。なんだか懐かしい。あの店のぼんやり顔のお婆さんは元気にしてるだろうか。

「…ええ。来ますよ、ここ数日の事ですがね。可愛い顔した男の子が」

店のお婆さんは、目に皺を寄せて語る。

「世話をしているといても、あたしゃご飯をご馳走してるくらいです。朝になるといなくなつて、また夕方が夜戻つて来るもんで」

「どんな子なんですか？」

「あんたらと同じくらいの年…かねえ。あたしも詳しくは知らないんですよ。ただ心配でね…あんな小さな子がお金もなしに町をうろつくなんて。せめて探し物が見つかるといいんだけど」

どんな子か、という円堂の質問には、容姿を尋ねる意味もあったのだが。お婆さんのが一枚上手で、のらりくらりとかわされてしまふ。

それだけに、何か隠している感が否めない。

「町の不審者騒ぎはご存知でしょう。危ないじゃないですか。その子を警察に相談して保護して貰うべきではないのですか？」

何かある、と感じ取つてか鬼道がたたみかける。すると老女はふう、と息を一つ吐いて言った。

「あの子は悪い子じゃないですよ。年寄りにはね、目を見れば分か

るんです。…あの子は誰かに騙される事はあっても、自分から誰かを傷つける事なんて絶対やりやしませんよ」

…それ以上の事は何も聞けなかった。老女はこれ以上口を割りそうにない。結局殆ど新しい手がかりが得られず、円堂は内心肩を落とした。

一堂は彼女に礼を言って、そろそろ店を出る。

「そうでもないよ」

落ち込む円堂の肩を叩き、塔子が言う。

「あたし達、不審者を捕まえる気だもその子が例の不審者かもしれないとも言ってない。鬼道はただ“警察に保護して貰ったらどうか”って提案しただけ」

確かに。身元不明の子供が一文無しでうろついてるなんて、訳ありとは思えない。家出、にしてもおかしい。

普通は警察に相談するものではないだろうか。

「よく思い出せよ円堂。あの婆さんの答えはどう考えてもおかしいだろ」

言われてうーん、と考えこむ円堂。

よくよく考えてみれば…なんだか町の不審者騒ぎや警察の話を出した途端、あのお婆さんの目つきが変わった気がする。まるで自分達が子供を捕まえに来たと断定するような。

悪い子じゃない、と言った老女。自分の可愛がっている子供を説明するというより、まるで弁護するような口ぶりだ。

「…警察に相談しなかったんじゃない？…できなかった？」

はっとしたように一ノ瀬が呟く。

「子供は既に、別件でお尋ね者になっていて顔が割れている。だから警察の手は借りられない。彼女はそれを知っているが、子供に罪があるとは思っていないゆえ、こっそり匿うような真似をしている…。俺にはそういう風にしか聞こえなかったがな」

鬼道のため息。円堂もやっと理解する。

ただそうになると、ますますエイリアがらみの線が強まったようなタイミングもタイミングだ。

この場所で、子供がやって来るまで張り込むべきだろうか。しかしあのお婆さんに見つかる厄介だ。もめ事も避けたい。

「…あれ？守？」

不意に名前を呼ぶ声がして振り返る。自分を下の名前で呼ぶ人間はそう多くはない。円堂は目を見開く。

「ヒロト！」

特徴的な赤いサラサラ髪に整った顔立ち。先日、夜中に一緒にサッカーをやった基山ヒロトが、きょとん顔で立っていた。

「誰だ？円堂の知り合いか？」

「うん。友達」

土門の声に、円堂はにつこりと返す。気のせいかなその一言に、ヒロトの顔が綻んだ気がした。

「出て来れるようになったんだ。良かったなヒロト」

「まだ制限つきだけどね。…えっとそっちの子達が、雷門のみんな

か」

京都の円堂の友達、にんだか興味津々な視線を送ってきていた仲間達に、ヒロトは笑いかける。

「初めまして。基山ヒロトです」

ペコリとお辞儀をするヒロト。なんか育ちが良さそう、と塔子が呟く。

「みんなの事はよく知ってるよ。地上最強チームになるんだって。頑張ってるね」

「有名人なんすね俺達！」

「そりやもう。応援してるよ」

壁山と栗松が顔を輝かせる。有名になったという実感が湧く上、応援して貰えるのはやっぱり嬉しいのだろう。

そんな中 - 鬼道だけが、どこか厳しい表情をしていたのだが - 円堂はその時気付かなかった。

「ところで…そんなところで集まってみんなして何してるんだい？何か困り事？」

ヒロトは確か、親の仕事の都合で京都に来ているだけだと言っていた。となれば町の事に関してもそう明るくはないだろう。

「…最近この近辺に不審者が出て困ってるらしい…って話、聞いてないか？」

それでも一応、話はしてみる。

「捕まえてくれないかって頼まれちゃってさ。で、みんなで作戦会議中だったわけ」

「不審者… かあ。そういえば…」

何か考えこむ様子のヒロト。

「噂を聞いたよ。この間目撃情報があった時、不審者がペンダントを落としていったって。場所は西の裏通り。とりあえず警察で預かっているらしいけど…」

「本当か!？」

「う、うん。本当」

つい円堂が肩を掴んでしまい、びっくりした様子で頷くヒロト。

もしそのペンダントが、不審者にとって大事な物なら。西の裏通りに、探しに戻って来るかもしれない。

そういえば駄菓子屋のお婆さんは言っていた。探し物が見つかるばいい――と。もし子供が探しているのがそのペンダントだったなら。

「…警察の人に交渉してみよう。ペンダントを貸して貰えるかどうか」

もし相手が凶悪犯罪者ならそうもいかなかっただろうが。幸いまだ“不審者”程度の扱いで済んでいる。相手がエイリアの誰かだとしても、まだ警察はその顔を把握していないなら。

うまく口八丁手八丁で誤魔化せるかも――と思ってたつい鬼道を見る。その手の事が一番得意なのは彼だ。

鬼道もよく分かっているのか、苦笑して肩を竦める。

「仕方ない。…やってみるさ」

とりあえずこれで確定だ。急いでペンダントを借りて、西の裏通りに張り込む。あまり多人数だと姿を現さないかもしれないから、何人かで分けるべきだろうが。

自分も協力する、とヒロトが言ってくれた。多分自分達よりは町

に詳しいだろう。

「えっ!？」

突然、風丸が声を上げた。携帯の画面を凝視している。

「どうした、風丸？」

風丸はびつくり顔のまま、円堂を見て言った。掲げた携帯はメール画面を表示してるって。

「陸上部の部長から…メール。宮坂が京都に来てて…イナズマキヤラバンに参加したがってるって…」

「ええっ!？」

宮坂の事を知る雷門の初期メンバーが、一斉に驚きの声を上げた。

【0・29・コトノハは、溶けて流れて】

張り込み、もとい怪しい男探しの最中、円堂は西裏通りの入り口に隠れた。

一緒にいるのはヒロト、風丸、秋、鬼道。他のメンバーは反対側の入り口や、東の通りに待機している。これ以上の人数で一力所に固まっていると、不審者に気付かれやすくなるからだ。

「俺、元々は陸上部だったんだよ。宮坂了は陸上部の後輩」

宮坂って誰なの、と尋ねるヒロトに、風丸が説明する。宮坂の一件については確か鬼道もよくは知らない筈だ。彼は戦国伊ヶ島戦の後に雷門に来たのだから。

「昔は雷門って、試合もできないくらい部員がいなくてさ。円堂とは付き合い長いし、助っ人に入ったのがきっかけで正式にサッカー部に転部したんだ」

「へえ…でも、揉めたんじゃないの？最初は助っ人のつもりだったんでしょ？」

「揉めた揉めた。特に宮坂にはかなり迷惑かけたなあ」

苦笑する風丸。今だから笑って語れる話なんだろうな、と思う。

あの時彼が真剣に、陸上とサッカーの間で悩んでいた事を円堂は知っている。

陸上部から風丸を奪った円堂が、宮坂から恨まれていた事も。去り際のあの時の睨むような眼は今でも忘れる事ができない。

最終的に、少なくとも今はサッカーに専念すると言ってくれた風丸。宮坂もそれで納得してくれたようだった。多分その辺りの経緯は、彼らにしか分からない想いもあったのだろう。

「メールくれたのは陸上部の現エースにして部長の速水って奴なん

「ただ。宮坂がテレビで俺達の試合を見て…協力したがつてゐるらしいんだ」

風丸の表情は複雑だ。なんとなくその胸中也分かる気がする。嬉しい、よりも驚きが勝っているのだろう。あれだけ陸上に拘っていた彼が、一時的にとはいえサッカー部に来たがるなんて、と。

それに…なんだかんだで風丸は後輩達に対し面倒見がいい。それはサッカー部でも陸上部でも変わらない。宮坂の事も先輩として可愛がつているのが分かる。だからこそあれだけ慕われるのだ。

そんな大事な後輩を、世界の為とはいえ危険な戦いに巻き込またくないというのも本心だろう。元々サッカー部だったならまだしも、宮坂は陸上部なのだ。

「つまり…サッカー部に対して含みがあるのに、一緒に戦いたいつて言つてゐるんだよね？」

風丸の言葉に、ヒロトはにっこり笑う。

「それだけ、風丸君の事が好きなんだね。たとえそれがどんなに危険な戦いだとしても。それって、素敵な事じゃないかな」

意外な言葉に、風丸のみならず円堂や秋、鬼道も眼を丸くする。

「もしかして…ヒロト君にもいるとか？それくらい大事な人が」
「いるよ」

秋の問いに、即答するヒロト。

「その人の為なら命だつて賭けられる。その人の為なら何だつてできる。だから…その宮坂君つて子の気持ち、分かる気がする」

ヒロトは真つ直ぐに風丸を見つめた。純粹な、それでいて強い意

志をこめた瞳で。

「だからね…風丸君。宮坂君を危険に巻き込みたくないって気持ちも分かるけど、宮坂君の気持ちも汲んであげなよ。きっと他の信念を曲げてでも、君の役に立ちたいって考えてると思うから」

「ヒロト…」

風丸達はヒロトとは今日会ったばかり。円堂もヒロトに会ったのは二回目だ。だからけて彼の事を多く知ってるとは言えないが。きつと凄く一途で、思いやりがある人間なんだろうな、と思う。そういえば、彼もどこかのサッカーチームに所属していると言っていたっけ。

ヒロトの大切な人とは、その中の友達なのかそれとも家族なのか。いずれにせよ、大好きな人なんだな、というのは伝わってくる。

命だつて賭けられる、大事な存在。自分にとっては…と考えて、円堂は内心苦笑した。

残念ながら、一人に絞るのは無理そうだ。家族は勿論、今チームに所属するみんながかけがえのない仲間なのだ。その一人一人の為に、できる事は精一杯やりたいいつも思う。

大切な人がたくさんいる。それは大変でありながら、とても幸せな事に違いない。

「しっ…円堂！」

唐突に鬼道が鋭い声を上げた。緊張が走る。円堂は塀の陰から、じつと鬼道が示す方を見た。

薄暗い夕方。さらには木陰のせいにより視界が悪い。その陰沿いに、向こうから小さな人影が走って来るのが見えた。

焦っているのか、息が荒い。陰になっているせいで足が速いせいで顔がよく見えない。子供は辺りを少しだけ見回すと、裏通りの方へ駆け込んでいく。

そう…警官が言っていた、不審者がペンダントを落とした袋小

路の方に。

「後を追うぞ」

「合点承知！」

鬼道に続き、円堂も路地に入る。後ろから秋、ヒロト、風丸もついてくる。怪しい人影は予想通りの角を曲がった。再び塀に隠れて様子を見る面々。

「どうしよう…無い、無いよ…」

子供は膝をつき、小さなペンライトで地面を照らして何かを必死に探し始める。十中八九、あのペンダントを捜しているのだろう。声だけでは性別も分からない。女の子にしては低めだが、男の子にしては高いような。徐々に呟く声が泣き出しそうなそれへと変わる。

だから…すぐには分からなかった。その声の主の正体が。

「あの子…まさか…」

秋がそう呟いた時だ。円堂の足元からことのほか大きな音がした。お約束すぎる。木の枝を踏んづけて尾行対象にバレるだなんて。

誰！？と。子供は叫んで、振り向く。その時になってやっとその顔が見えて…一同は驚愕して目を見開いた。

「れ…レーゼ！？お前なんで…こんなところに…っ!？」

黄緑色の特徴的な髪型。キツネっぽいつり目に女の子みtainな顔立ち。間違いない…レーゼだ。エイリア学園セカンドランクチーム、ジェミニストームのキャプテン。

北海道でデザームに消されてから行方不明になっていた、彼だ。しかし何故京都に？

「お前っ…今度は何をやらかす気なんだ！何で…」

「待て円堂。…様子がおかしい」

言い募ろうとした円堂は、鬼道に肩を掴まれて止まる。

改めてレーゼを見た。さっきは先入観と頭に血が上ったせいで気付かなかったが…確かに何か、変だ。

さっきから戸惑ったようにこちらを見ている。そこに敵意は微塵も感じられない。むしろその瞳にあるのは…怯え。

「…誰？」

「……え？」

「君達…誰だ。わたしを、知ってるのか？わたしは、誰なんだ…？」

「……！！」

まさか…記憶喪失？

演技には見えない。こんな、怯える子供のような姿のレーゼなんて、知らない。これで演技ならノーベル賞ものだ。

「まさか…記憶を消されたのか？試合に負けたから…」

「…そんな…っ！」

鬼道の言葉に、円堂は愕然とする。自分達が言うのもアレだが一度…たった一度、それもたった一点差で雷門に敗北しただけだ。

なのに…記憶を消されて、捨てられたというのか？アイデンティティを奪われて、見知らぬ地に放り出されたと？

イプシロン戦の前に鬼道が言っていた事の意味を思い知る。自分達は最初から有利な勝負をさせて貰っているのだ…と。自分達は何度でも再戦が赦される。しかし彼らは一度負けたらもう明日が無いという事を。

ギリ、と奥歯を噛み締める。

そんなの…酷すぎる。

「円堂君。ペンダント」

「あ…」

ヒロトに囁かれ、思い出す。円堂からペンダントを受け取り、ヒロトはレーゼに近付いていく。

それ…！とレーゼが目を見開く。

「ごめんね。俺達が拾ったんだ。君に返したくて捜してたんだけど」

「あ…ありがとう」

レーゼはヒロトからペンダントを受け取り、大事そうに握りしめる。

「…何も覚えてないけど。これは、とても大切なものだった気がするんだ」

少年はポツリ、と漏らす。

「夕焼けと…ペンダントと…サッカーボール。何かを思い出しそうになる」

「…そっか。きつと…大切な人に貰ったんだね」

「そうかもしれない」

「きつと…そうだよ」

ヒロトの顔が、なんだか泣き出しそうに見えた。感受性が高いのかもしれない。レーゼもまた、そんな顔でうずくまっていたから。

「…レーゼ」

円堂は落ちていたサッカーボールを拾う。きつとレーゼが持ってきたのだろう。それを差し出してみせる。

「俺達…ちよつと前まで敵同士だったんだけどさ。今のお前は悪い奴じゃない。見れば分かる」

目を見れば分かる、とあの駄菓子屋のお婆さんは言っていた。多分彼女はレーゼがあゝの侵略者のリーダーだったと気付いたのだろう。でも本当は悪い奴じゃない事も、目を見て分かったから。こっそり匿って、一目を避けるようにアドバイスしたのではないか。

でもレーゼは記憶を取り戻したくて――サッカーボールを持ち歩
きながら、町をさ迷っていたのかもしれない。

「お前、すつごくサッカーうまかったんだぜ。だから…そのボール、
絶対に無くすなよ。俺達とまたプレイしよう。そしたら…きっと本
当のお前を、取り戻せると思うから」

なんとなく、だ。それは直感だ。侵略の為に人を傷つけ破壊活動
を行っていた彼は――本当の彼ではなかったのではないかと。

何か悪いものにとり憑かれていただけではないのかと。

レーゼは差し出されたボールをじっと見つめ――小さく笑った。

「…そうだな。いつか、きっと…」

こんな顔も、するのか。そう思って、なんだか切なくなった。

円堂とて、全ての核心にレーゼがいたとは思わない。デザームが
黒幕だとも思わない。彼らに上から指示していた大人が存在しただ
ろう事は予想している。

何故なら、自分は鬼道や照美の例を知っているから。彼らはただ
影山の指示に従っていただけ。大人の私怨の為に利用されていただ
けにすぎない。

多分、レーゼもそうだろうと思う。だから赦せなかった。こんな
子供を利用するだけ利用して、記憶まで消して捨てる大人の存在が、
レーゼにこんな顔をさせる連中が。

大好きなサッカーを、サッカーを愛する者達を道具のように扱う
奴らが。

「円堂君！」

落ち葉を踏む足音。振り向くと瞳子監督の姿が。鬼道がパチン、

と携帯を置く。どうやら彼が電話で瞳子を呼んだらしい。

突然登場した見知らぬ大人の姿に、レーゼがビクリと反応する。怖がっているのかもしれない。秋が大丈夫だよ、と微笑みかけている。

「話は鬼道君から聞いたわ。まさか本当に…」

サッカーボールを抱えて立っているレーゼ。その姿に苦い表情になる瞳子。

「…彼を保護してあげるべきじゃないかな。記憶を失っているみたいだし」

「あなた…」

ヒロトの顔を見て、何故か瞳子は驚愕する。なんだ？と思った時には…その顔はいつものポーカーフェイスに戻ってしまっていたが。

「……そうね。状況的に警察に引き渡すのも…酷ね。彼の身柄は、私の方で預からせて貰うわ」

具体的にどうするか、はまだ考えているところなのかもしれない。いずれにせよ今は監督に任せる他無いだろう。

とりあえず路地を出ようと促す円堂は気付かなかった。俯く瞳子が…どんな顔をしていたかを。

【0・30・硝子の幻】

瞳子の驚きと悲しみが入り混じった顔が――瞼の裏に焼き付いて離れない。

胸の奥がキリキリと痛んで、ヒロトは唇を噛み締める。それは発作による痛みではないと分かっている。その原因が、何であるのかも。

少なくとも今はまだ、自分と彼女の関係を知られてはいけない。まだ早すぎる。だから他人のフリをした。理由は違えどそれは瞳子も分かっていたから、何も言わなかったのだらう。

彼女がレーゼを連れてキャラバンの方に消えていく。その背中に小さく、ごめんなさい、と呟いた。

その謝罪は、瞳子に対するものだけではない。

レーゼ――そう呼ばれるようになったあの子は。自分が誰かも分からないまま、サッカーボールを抱きしめて、ペンダントを握っていた。それが唯一彼に遺された真実であったのだらう。

彼らの処分を決めたのは自分達マスターランクの三幹部ではない。自分達が敬愛する人が直々に決めたという事になっている――表向きは。

実際は、二ノ宮蘭子という名前のあの女が進言したものだ。処理の殆どは彼女の手で行われたと言っても過言ではない。デザームは何も知らずに、ジェミニストームを彼女の元に転送したに過ぎないのだ。

二ノ宮がレーゼ達の身体に、正確にはどんな処置を施したかは分からない。ただ記憶が消えるという結果の一部を聞いたただけだ。実際この眼で確かめてみてハッキリした。

分かっている。自分とて二ノ宮一人を責める事はできない。殺さず済んだだけマシなのだと言い聞かせて、事実を知りながら止めようとしなかった。証拠隠滅の為に必要である事も知っていた。

だけど。それでも思わずにはいられない。

- -これは…本当に父さんの望みなの？

記憶を書き換えられて、消されて、捨てられた子供。彼はもはやその事実を悲しむ事すらできない - -何も覚えていないのだから。ヒロトは服の胸元をきつく握りしめる。痛い。本当に痛い。痛くてたまらない。

あの子の事は自分もよく知っている。とりたてて仲が良いというほどではなく、引つ込み思案の彼は外で遊ぶより本を読むのが好きで。特にことわざに凝っていた。彼からは自分もいろんな事を教えて貰った。

あの子が大切にしているペンダントは、あの子の兄代わりだった彼が誕生日にあげたもの。

その記憶ももはや無く。あの笑っていた頃ですら何故予想できたのか。レーゼの世界を奪うのがその彼になるなど。ああ、きっとデザームの方も忘れさせられてしまっている。

「…ヒロト？どうした？」

瞳子が去っていった方を凝視して動かないヒロトに、円堂が声をかけてくる。

「…何でもないよ。ただ…」

罪悪感で心臓が潰れそうだ。自分は今のところ嘘はついてない - -ただ肝心な事を何も語っていないだけ。

それでも、初めてできたかもしれない友達を騙している事に、代わりはない。

「あの子が…自分を取り戻せたらいいなって思っで。…酷いよね。」

勝負に一回負けただけで…記憶を消されるなんて」

「…そうだな」

「…うん」

円堂と秋が苦い顔で俯く。視線を感じてそちらを見れば、鬼道だけはヒロトに別の色の目線を投げていた。

ああ、彼は…自分の正体に気付いているのだ。二ノ宮が言っていた事を思い出す。鬼道有人は、危険だと。

そう…危険なのだ。このまま二ノ宮に目を付けられたら、もしかしたら。

「…君達も…気をつけてね。悪い事は言わない。エイリアをあまり…嗅ぎ回らない方がいい。仲間だった子を、記憶を消して捨てるくらい…平気でやる連中なんだ」

これは、契約違反かもしれない。でも言わずにはいられなかった。“基山ヒロト”として赦される範疇で…せめて。

「もしかしたら…本当にもしかしたら。君達は殺されてしまうかもしれない…だって相手は、恐ろしい侵略者なんだから」

「殺されるって…さすがにそれは」

「頼むよ、守」

円堂を見、秋を見、風丸を見、そして鬼道を見る。どうか分かってくれ、という想いをこめて。

「…俺は…君達が結構気に入ってるんだ。特に…守が悲しむような事が起きたら…凄く、辛いよ」

「ヒロト…」

お願い、と繰り返す。これが今自分にできる最大限にしてギリギリの忠告なのだ。

身勝手とは分かっている。だけど。

もうこれ以上…大切な物は喪いたくない。たとえそれが誰かへの裏切りであるとしても。

子供の手を引いて、歩く。レーゼはどこかきこちなく瞳子の手を握り、もう片方の手でサッカーボールを抱えている。その首には、かつて実の兄のように敬愛していた人から貰ったペンダントがさがっている事だろう。

こんな風に、子供の手を引いて歩いた事が前にもあったな、と瞳子は思う。その時連れていったのは赤い髪のお子だった。

身体が弱いのに雪が、大好きで。

雪が降るとついついふざけて雪合戦や雪だるまを作って遊び、父に怒られていた。すると頭のいいお子は次からこっそり父に見えない場所で遊ぶのだ。そうになると叱る役目は大抵最年長の自分に回ってきた。

父にこっぴどく叱られて、少し落ち込んだお子の手を引いて家に帰る。自分はもうやっちゃん駄目よ、と注意しながらも、また遊ぶ約束をする。

今度はもつとあったかい場所でサッカーをしようね、と。すると雪よりもさらにサッカーが大好きなお子はあっさり機嫌を直すのだ。

泣いたお子はすぐに笑う。その顔がいつも誰かに似ていて――瞳子はその度に胸の奥が締めつけられるのだ。

この子だけは。どんなに残酷な世界でもこの子だけは奪わせはしない。護ってみせるのだと――そう誓った。

誓った筈、だったのに。

「あの……」

「！」

小さく呼びかける声に、瞳子は我に返った。レーゼが不思議そうな顔で自分を見上げている。

「どうかしたんですか…？ なんだか…その…」

うまく言えないのだろう。そう、昔からそうだった。この子は博識なのに、いざ言葉にしようとすると考えすぎて悩んでしまう。相手を思いやりすぎて、何も言えなくなる。

そんな子だったのに…彼は何をされた？ 何をさせられた？

TVを見た時の自分がどれだけ愕然とさせられたか、誰にも分かるまい。大人しくて、基本的に口数も少なめで…どちらかという

と臆病で、だけど優しくかったこの子が。

大勢の人達に怪我をさせて、学校を壊して、瓦礫の上から人々を見下ろした。そして傲慢なまでに高笑ってみせたのだ。

なんて…恐ろしい事だろう。

なんて悲しい事なのだろう。

「…私の名前は、吉良瞳子。私の事も…覚えてないのよね？」

レーゼは何も言わなかったが、申し訳なさそうに俯いた。それが十分、答えになった。

滲みそうになる涙を必死で堪える。泣いてはいけない。自分には彼らの為に泣く資格なんて無いのだから。

代わりに…抱きしめていた。それは何か意図があつての行動ではない。ただ、そうしなければならなかったのだ。

「な…何を…っ？」

「ごめんなさい」

戸惑う身体を抱きしめる手に、力を込める。華奢な、子供の身体。こんな子に自分はなんて運命を背負わせてしまったのだろう。

「許してなんて…言う資格ない。でも…謝らせて。ごめんなさい。貴方達を…私が護らなきゃいけなかったのに…！」

この子だけじゃない。自分が罪を負うべき子達はたくさんいる。ジェミニストーム。イプシロン。ガイア。ダイヤモンドダスト、プロミネンス。そして…雷門のあの子達も。

自分の無力さゆえに…悲劇を招いた。誰かに許しを請うなどどうしてできよう。

「…せめて…償いをさせて。許してくれなくてもいい。その意味が分からなくてもいいから。本当の貴方を取り戻す手伝いを、させて欲しいの」

温もりを離す。レーゼは未だに意味がよく分からないといった顔でこちらを見ていたが、やがてこくと小さく頷いた。

「吉良…さん。貴女は…私が誰か、知ってるんですか？」

なんて答えればいいのだろう。少しだけ悩んで、瞳子は言う。

「貴方は、サッカーをしていたの。そして私のチームと戦ったのよ」

「サッカー…」

「サッカーをしていれば…貴方も思い出す事が出来るかもしれないわね」

多分これから一悶着あるだろう。この子を匿ってくれていた駄菓子屋の店主と話もつけなくてはならないし、それ以上に雷門の皆が何を思うか。

だけど、瞳子の中で既に答えは出ていた。それを貫き通す覚悟も。「貴方はレーゼと呼ばれていたけど…事情があるの。その名前を今は口にしてはいけないわ。貴方は当分、“緑川リュウジ”と名乗っ

て貰うけど…いいかしら」

「みどりかわ…りゅうじ？」

「そうよ」

その名前の意味するところは…まだ彼は知らなくていい。

「暫く、私が貴方の面倒を見る事になると思う。戸惑う事も多いでしょうけど…よろしくね」

手を差し出す。レーゼはおずおずとだが手を出して握手に応じた。これからだ。瞳子は心の中で呟く。

自分はまだまだたくさん、するべき事があるのだと。

円堂がキャラバンに戻ると…やはりというべきか、皆が混乱の極みにあった。

宮坂が単身京都に来ているらしい、という事もそう。怪しい男がレーゼであり、しかも暫くキャラバンで預かると瞳子が言い出した事もそう。

殊に一番最後については…反対意見が続発した。特に学校を破壊された旧雷門メンバーが反発しない筈もない。

学校だけではない、レーゼ達ジェミニストームとの戦いで仲間が病院送りにされている。穴戸や影野なんて一歩間違えば命に関わる大怪我だったのだ。そう簡単に赦せる筈もない。

記憶が無いというが、それも本当なのか。演技ではないか。本当だとしても、記憶が戻ったらまたエイリアに味方するのではないか…。

それを皆に納得させたのは、鬼道だった。

「俺は独自のルートでエイリアの正体を探ってきた。…レーゼの身元についても見当がついてきている。多分、こいつは上に洗脳されて、あんな強行に出たのではないかという事も」

いわく。ジェミニストームもイプシロンも、あの破壊活動自体が彼らの意志ではない可能性が高いこと。彼らも自分や照美のように大人に利用されているだけではないか、と。

「今の奴に害はないと思う。それに…記憶を取り戻したら取り戻したで、何か重大な情報が聞けるかもしれない。それだけでキャラバンに置く意味はあると思うが？」

利用価値はある。最終的にはその言葉で皆を引き下がらせた。円堂としては苦々しい事この上無かったが。

分かるのだ。今のレーゼに悪意が無い事も嘘を言っているわけじゃない事も。できる事なら…救いたい。またサッカーしたい、そう言った気持ちに嘘は無いから。

顔を隠す為に、青いパーカーを着て。緑川リュウジという名でキヤラバンに乗る事になったレーゼを円堂は見る。

それはとても小さな子供だった。少年は震える手で瞳子の手を握っている。まるで、世界に怯えるかのように。

怪しい男の一件は解決し、京都に留まる理由はなくなったわけだが。次の目的地はまだ決まっていない。とりあえず今日はもう遅いので京都にもう一泊だけして、明日様子を見る事になった。

夕食前の、本日最後の練習時間。今日はディフェンス強化の練習だった。ミニゲームの合間、出番の無い聖也はさりげなくベンチに佇む少年に目を向ける。

パーカーを着込み、マネージャー達と少しだけ離れた場所に、レジーはちょこんと座っている。その距離が少し寂しいが、今の段階では致し方ないだろう。

なんだか、似ている。

自分が初めて逢った頃の――吹雪と。胸の真ん中にポツカリと穴が空いて、そのすきま風の冷たさに怯えて――呆然と座り込んでいた、あの子と。

――子供が……あんな風に小さくなってるのを見るのは、嫌だな。

そうさせたのは誰なのか。世界なのか、運命なのか――どこかの身勝手な大人なのか。

聖也は鬼道の調査に協力したゆえ、ある程度の事実なら把握している。レジー達の髪や血の化学分析結果から、彼らがれっきとした地球人――それも日本人である可能性が高い事。そして彼らが神のアクアかそれに酷似した薬物を使ったらしい事を。

だが――自分が知っているのはそこまで。神のアクアが出てきた事から、彼らの黒幕は影山なのかと思っていた。しかし、イプシロンに言い放った鬼道の言葉からすると、その読みは外れらしい。

身元不明の妙な女。一体誰の事なのか。そいつが、“エイリア皇帝”を名乗る男を牛耳っていると――そういう事なのだろうか。

だとしたら。

- - まさか…あの女じゃねえだろうな。

つ…と嫌な汗がこめかみを伝う。

そもそも自分がこの世界にやってきた理由。それが、S級の危険人物にして指名手配犯である一人の魔女を捕まえる為であった。

災禍の魔女 - アルルネシア。

あの女の恐ろしいところは、その強大な力だけではない。彼女の究極的な目的が全て、彼女自身の“愉しみ”に帰結する事だ。そして彼女は血と悲鳴と臓物をこよなく愛する。快樂殺人鬼にして異常なまでのサディスト。

その思想が、その異常愛そのものが、あまりにも危険なのである。ゆえにあらゆる世界のトップが、長い事アルルネシアを捕まえようと躍起になってきた。聖也もまたその一人なのである。

どうやら今はこの世界に執着しているらしい。そんな噂を聞きつけてやって来たはいいが、なかなか尻尾を掴む事が出来ずにいたのだ。

もしエイリアの黒幕が彼女なのだとしたら、やっと手がかりが見つかったといってもいい。しかし - - 聖也はとても喜ぶ気にはなれなかった。

- - 冗談じゃねえぞ。もし本当にあの女が裏にいるなら…雷門のみんながどんな目に遭わされるか分かったもんじゃねえ…！

アルルネシアを捕まえる、という仕事の一環で中学生のフリを始め、雷門に入った。それは否定しない。けれど聖也は我が子同然に可愛がっている吹雪は勿論、雷門の仲間達の事も本気で気に入っているのだ。

そんな彼らが、あの魔女の毒牙にかかるような事になったら - -

考えるだけで恐ろしい。ただでさえ力を制限されている聖也は今、あの魔女と全力で戦う事ができないのに。

レーゼだってそうだ。きつともう既に、相当酷い目に遭ってきているに違いない。記憶がなくなっているのは本当だろう。だが体の中に妙な部品やら爆弾やらが仕掛けられていてもおかしくはない。あの女なら、小さな子供だろうと構わず嬉々として蹂躪するだろう。彼女がそのテの科学技術や医術に長けているのは有名な話だ。

- - くそっ…落ち着け俺。まだあの女の仕業と決まったわけじゃねえんだ…！

嫌な予想を無理矢理振り払う。

- - 仮にそうであつたとしても…精一杯生きてるこいつらの物語を、あの女の好きにさせてたまるか…っ。俺が絶対護る…護ってみせる…！！

鬼道が何故探り当てた真実を皆に語りたがらないのか。なんとなく予想はつく…まだ確実な証拠が無い段階で物を語るのははばかれるから。さらにどうやらとんでもない裏がある以上、万が一の事を考えるとうかつに仲間にも話せないから。

多分本人が一番、その傲慢さに気付いているのだろう。優しすぎるから、背負い過ぎてしまう。身勝手と分かっていても抱え込んでしまう…聖也はその程度には鬼道の性格を把握していた。

だから心配なのだ。いつかその重さに、少年が押しつぶされてしまふのではないかと。闇に近付きすぎて、その深さに喰われてしまふのでは、と。

少なくとも。もし黒幕が本当にアルルネシアだとしたら、一番最初に被害を受けるのは…。

「今日の練習はここまで！」

その鬼道が、皆に終了の合図を出した。その途端に地べたに座り込む者もいれば、水場にダッシュする者もいる。

自分もそうするかな、と思いかけ――聖也はレーゼを振り返った。

「レイ。…どうかな、練習見てたら何か思い出した？」

急に話しかけられたレーゼはきょとんと首を傾げている。ああそうか、まだ彼は自分の名前を知らないのだ。

「俺、桜美聖也。雷門の三年でMFやってんだ。よろしくな。何かわかんねー事あったら遠慮なく聞けよ」

「あ…はい…ありがとうございます」

「ちなみになるべく敬語はなしの方向で！。堅苦しいのは苦手なの！」

「えっ…は…はい…」

びっくりどつきり、なレーゼの様子につい吹き出してしまふ。なんだろうこの小動物。可愛いすぎる。

多分本来は大人しい子なんだろうな、と思う。神のアクアには洗脳作用があり、人格すら変えてしまふ事がある。照美がいい例だ。

彼は確かに加害者だ。しかし同時に被害者でもある。彼に薬物を与えて洗脳し、破壊活動をさせた大人がきつという。許す事は、出来ない。

――それにしても…。

頭を撫でると、ちよつと顔を赤らめて俯くレーゼ。慣れていないのか、ほつとしているのかは分からないが…。

駄目この子、絶対一人歩きさせらんない！誘拐されないかお父さんは心配よ！

「むしろ俺がお持ち帰りして」

「犯罪行為は禁止ですっ！」

「ぶぎゃっ!!」

パシーンッ！

聖也は見事に吹っ飛ばされた――秋の繰り出したゴットハンドによつて。

「リュウ君は犬猫じゃないんですよー？お持ち帰りしたら逮捕されますよー？」

秋は愛らしい顔に素晴らしいまでの笑顔を浮かべている。可愛いんだ、可愛いんだが――怖い。

ってかあんた、いつの間にゴットハンドを会得したんでしょうか。

「は……はい、すびばせん」

地味にほっぺが痛い。しかもレーザーや春菜にまでくすくす笑われている始末。

――俺結局……このお笑いポジションで固定なわけ？え？

相変わらず酷い扱いに、涙がちよちよぎれそうになってる聖也であつた。

その晩。吹雪は一人でキャラバンの上に登り、空を眺めていた。今日はいい天気だ。北海道の夜空ほど星はハッキリ見えないが、京都の夜空も悪くはない。

- 同じように見えて、空はいつも違う。違うけど同じ、空。…あの時もそう。

家族を失って、吹雪の世界はあっさりと崩れ去った。崩れた瓦礫の世界で見た最初の空は、病院の窓から眺めたもの。

自分にはもう何も無いのに。アツヤがいた頃と変わらない夜空が広がる。変わらない朝が来て、夜が来る。それが怖くて悲しくて - 一人きりで、泣いた。

涙を流しても、慰めてくれる母も叱ってくれる父もない。一緒に泣いてくれる弟もいない。

どうして自分一人生き残ったんだろう。どうしてアツヤではなく自分が生かされたのだろう。何千回、何万回繰り返しても答えは出なくて。

- 土郎君。…死にたい？

死を考えて - 屋上のフェンスを掴んだ吹雪。そんな時、吹雪の手を握ってくれたのが - 聖也だった。

彼の正体については、吹雪も深くは知らない。ただ彼が、ある犯罪者を追っている軍人らしいということと - 中学生なんて年齢ではないという事だけ、把握している。

吹雪の事故について何か思う事があつたらしく、現場を調べていたのが彼だった。最初は警察官だと思っただけくらいだ。無論、すぐに違うと分かったが。

どんな裏があつたのやら、どんな経緯を辿つたのやら――確かなのはただいつの間にか彼が自分の後見人になつていた事と。彼がいなければ多分今自分は生きていないだろうという事。

――君がどうしても死にたいなら……俺に止める権利、無いよ。だからこれは……お願い。

まだ幼かつた吹雪を、聖也は抱きしめて言った。

――俺の為に、生きてくれないかな。

自分では失つた人の代わりにならないかもしれない。だけど、一緒にいさせて欲しいと。

絶望のどん底にいた吹雪には、その言葉の善悪や真意を図る余裕は無かつた。ただ誘われるようにしてその手をとって――その日から彼が自分にとって新しい家族になつたのだ。

あれからもう何年も経つが、聖也は相変わらず中学生の姿のままである。彼は言った。自分は別の世界から来た存在で、だから年もとらないのだと。だから――けして吹雪より先に死ぬ事もないんだよ、と。

自分は弱い人間だ。だからその言葉が何より嬉しくて、甘えてしまった。もう二度と、大切な誰かを失うなど耐えられ無かつたから。

――あの日、決めたんだ。もう誰も失う事の無いように……完璧になるんだって。

自分が完璧じゃなかつたから。力が無かつたから、誰一人護れなかつたのだ。あんな悲劇はもう二度と見たくない。

もう二度と――あつてはならない。

- -なのに。

先のイプシロン戦。吹雪が打ったシュートは、デザームに止められてしまった。いや - - 吹雪が、じゃない。“アツヤ”のエターナルブリザードが、だ。

オリジナルのアツヤが存命中も、兄の自分が彼の代わりになった後も - - 一度も止められた事はなかったのに。それがあんなにあっさり。

悔しい。あれでは完璧など語る事すらおこがましい。

- - もつと。もつと強くならなきゃ。もつと力をつけなきゃ。でも... どうしたら... どうしたらいいんだ... !

思い出したのは染岡の顔だ。彼には初めて逢った時、妙に毛嫌いされていたのである。理由は後で知った。自分が雷門に誘われた理由が - - 豪炎寺というストライカーの穴を埋める為であったからだ。豪炎寺以外のストライカーを認めたくない。だが吹雪は豪炎寺とは違う人間で、豪炎寺の代わりではない。最近はその納得して接してくれるようになったが - - 。

逆にそれが。吹雪にとつては負い目でもあった。自分は彼の代わりとして見合う存在でなくてはいけない。豪炎寺の帰りを待つ染岡やみんなを失望させてはいけないのだ、と。

沈む気持ちに、吹雪が身体を丸めた時だった。

「あれ、先客がいた」

梯子の方から声が。そちらを見 - - 目が合う。登って来たのは意外な人物だった。

「アフロディ君... ?」

照美はにっこりと、文字通り天使の顔で微笑んだ。

【0・32・月明かり、チルドレン】

フットボールフロンティア決勝で雷門と戦った、世宇子中のキャプテン。照美について吹雪が知っているのはその程度の知識だ。

雷門に入っただけの自分は、照美に対してわだかまりは何も無い。ただ、TVで見た試合のせいで多少なりの先入観があったのは確かである。

雷門のメンバーを、やや不必要なまでに痛めつけた世宇子中。そのあまりに攻撃的なサッカーには寒気がしたし、キャプテンの彼も怖い印象を抱いていた。

フィールドに舞い降りた残酷天使。美の女神の名を語るに相応しい美貌と実力を誇りながらも、そのプレイは華麗にして傲慢。見る者に畏怖を感じさせる事はあっても、共感を抱かせるには程遠かっただろう。

だが――こうしてすぐ側で見れば分かる。実力はある。才能もある。だけどその素顔は、容姿が並外れて美しいだけの子供にすぎないのだと。

フットボールフロンティアで見せた攻撃性も刺々しさも、今の彼にはまったくといっていいほど感じない。本来は物静かな性格なのだろう。

それを変えてしまったのは影山零治という一人の大人。そして、神のアクアという名のドラッグ。

影山という男について自分は僅かに伝え聞いた事実しか知らないが、その僅かだけでも充分だ。その男は雷門メンバーの上に鉄骨を落として殺そうとした。全ては勝利を得る為に。なんと恐ろしい事だろうか。

その影山の元で利用され、薬漬けにされ、仲間を自殺に追い込まれ――全てを失った照美。

彼は吹雪以上に過酷な運命を背負って、そこにいるのだ。

「吹雪君。：先に謝っておくね。ごめん」

「え？」

突然の謝罪。謝られるアテが分からず、首を傾げる吹雪に、照美は言う。

「実は：鬼道君から勝手に聞いちゃったんだ、君の過去。鬼道君は、聖也君から聞いたらしいよ」

吹雪の、過去。みなまで説明されるまでもなく、それが雪崩の一件であると悟った。

「いいよ、別に。隠してたわけじゃないから。改まって話すような内容でもないし」

嘘ではない。自分で言うのもあれだが、あっさり打ち明けるには少々重たいネタであると分かっていた。だから隠しているというより、話しにくかったのである。もし両親の事に言及されたら多少触れるつもりではあったが。

それに：今でも時々、あの時の光景がフラッシュバックして頭が真っ白になる。恐怖。絶望。喪失感。あの時の感情はふと油断した瞬間に襲ってきて吹雪を苛む。

忘れているわけじゃないけれど。思い出して、平静でいれる自信は正直無いのだ。傷を簡単に克服できるほど、自分は強い人間ではないから。

「君は、強い子だね」

しかし：まるで吹雪のそんな心を読んだかのように、照美は言った。

「だって君はちゃんと…生きる事を選んで頑張ったんだもの。私には、できなかったよ。だから…一番大事なものを、失ってしまった」

それは…集団で心中を図り、世宇子の仲間達みんなを失って、ただ一人生き残ってしまった…その事を指しているのだろう。

自分達は確かに似ているかもしれない。二人とも、愛する者を目の前で失いながら、ただ一人生き残ってしまったて…その過去を悔やみ続けているのだから。

どうして自分だけが。何の為に自分だけが生きているのか…と。
「僕は…強くないよ。聖也さんが拾ってくれてなかったらとつくに死んでたと思う」

「そう？」

「そうだよ。あの屋上から飛び降りてたと思う…きっと」

「……そっか」

握りしめたフェンスは冬の外気で冷えて凍るように冷たくて。握った手もすぐ冷たくなって…やがて痛みになった。

目の前に広がる町はいつものように動いている。アツヤが死ぬ前と同じような夕焼けが当たり前のように広がる。

それが本当に悲しかった。彼らの命など、この世界にとっては歯車を狂わすにも至らない、塵にも等しい存在なのだと示すかのようで。

真下に見える駐車場。叩きつけられたらきつと凄く痛いだろう。

醜い死に様を晒すのだろう。だけど…今感じている以上の痛みがどうしても想像できなくて…まあいいや、と思ったのだ。

この痛みを別の痛みが消してくれるなら、そっちの方がきつとマシだろう…と。死にたい、というより生きていたくなかった。アツヤも両親もいない世界に、意味なんてない、と。

「…君にも、手を差し伸べてくれた人がいたんだね」

照美はフツと小さく笑みを零す。

「なんとなく、分かるかも。…土砂降りの雨の中でさ、たった一人手を差し伸べてくれる人がいたら…人は縋らずにはいられないんだ。その人の善悪なんか関係ない」

手を差し出してくれた人が…照美にもいたのだろう。それは、ひよつとして。

「影山って人のこと？」

「……うん」

白い手が、ぎゅっと服の裾を掴むのが見えた。

「私にも…両親はいないんだ。顔も知らない。…気付けば一人で、汚くて暗い場所にいたから」

照美が語ったのは…あまりに衝撃的な過去。親が死んだか捨てられたのか。物心ついた時に側にいたのは一人の男。その男は照美をまともな教育も受けさせず、ただ商売道具に使ったという。

酷い毎日に嫌気がさして、男の元を飛び出した方がいいが…金もなければ後ろ盾も無い。あるのは自分の身一つ。

結局何も変わりはいしなかった。生きる為にはあらゆる犯罪に手を染めるしかなくて…気がつけばどんどん暗い場所へと墜ちていた。クスリに手を出さなかっただけマシだったかもしれない、その程度。生きるには力がある。強さがある。浮浪児同然の身ではあったが、だからこそ身体能力だけは鍛えていた。影山にスカウトされたのはそんな時だそうだ。

「あの人は間違っていると今なら分かる。みんながあの人を憎むのも理解できる。でも私にとってあの人は救世主で…世界の全てだった」

彼は読み書きを教え、知識を与え、生きる術を教えてくれたという。

そして――サッカーも。影山が集めてきた身よりの無い子供達の集団。世宇子中とはそんな場所であったという。

「幸せだったよ。あの人がいなかったら私はとっくに死んでた」

同じだ、と吹雪は思った。

自分達は確かに数奇な運命を辿ってきたけれど。

「差し伸べられる手があった……それがどんな意味だとしても……か」

「そう。同じだよ、私達」

「……うん」

出逢いがあつて。そのおかげで今生きている。それはとても幸運なこと。

「私はね。……今でもあの人に、裏切られたとは思ってないんだ。方法は正しくなかったかもしれない。あの人にとっては最初から私達なんてただ復讐の為の駒だったのかもしれない。だけど……」

照美は切なげで、だけど優しい眼をしていた。それは心から誰かを慈しむ眼。

聖也が自分に向けてくれるのと、同じ眼差しだと気付いた。

「私にとっての父さんはあの人だけだから。たとえあの人私が私を愛してくれてなくても、いいんだ。私さえあの人を愛しているなら」

かつん、と梯子の方から音がした。もしかして誰かいるのだろうか――覗き込むまでもなく、答えは分かった。特徴的な青いマントが視界の端に映ったから。

「悪いな。…気になる会話だったんで立ち聞きしてしまった」

あっさり開き直るあたりが鬼道である。彼はそのまま梯子を登って来た。そのまま照美の隣に腰掛ける。

自分に照美に鬼道。なんだか不思議な組み合わせだなあと吹雪は思う。それでいて妙な共通点もある。自分達は揃いも揃って親がない。そして多分、深い傷と闇を抱えて此処にいる。

「鬼道君は…今でも総帥を恨んでる？」

さっきまでの会話は全て聞かれていたものと判断してか。真っ正面から疑問を投げる照美。いきなりだな、と鬼道は肩を竦める。

「恨んでない、と言ったら嘘になるな」

「…そっか」

「でも」

夜空を見上げ、鬼道は静かな声で言った。

「最近…考えるんだ。影山に出逢わなかったら俺はどうなっていたのか。…たとえ間違ったやり方だとしても…今の俺があるのは影山の力でもあるんじゃないかと」

不本意なのかもしれない。苦い記憶なのかもしれない。しかしゴーグルごしではその表情を窺い知る事は出来なかった。

もしかしたら。鬼道がドレッドヘアーにマントにゴーグルなんて奇抜な格好を始めたのは… - 本当の自分を隠す為だったのではないだろうか。

過酷な現実から身を守る為の方法。

吹雪が心の中に弟の人格を作ったのと同じように… - 彼は素顔を隠す事で自己防衛を図ったのではないだろうか。

なんて… - 推測にしかすぎないけれど。

「影山を許す事はできない。でも…もしまた顔を合わせる機会があったなら。今度は真正面から話をしてみようと思う。…あの人の闇は…あの人が望んで得たものじゃないのだから」

誰にでも闇はある。けれどその闇は受け入れて歩いていく事ができる。光で照らす事も出来る。吹雪には、二人がそう言っているように見えた。

やっぱり、彼らは強い。自分なんかより、ずっと。

「私は…誰かに手を差し伸べられる人間になりたい。あの人が助けてくれたように。そして…雷門のみんなが、私を悪夢から救い出してくれたように」

総帥の事も救いたい。照美はそう言って…次に吹雪を見た。

「勿論…君の事も、ね。吹雪君」

「僕…？」

「悩んでるでしょ」

そんなに分かりやすかっただろうか。なんだか申し訳なくなって落ち込む。

今はチームみんなでエイリアに立ち向かっていかなければならない時だ。それなのに自分が暗いオーラを撒き散らしてみんなに心配をかけていたらまったく意味がないではないか。

自分は完璧にならなくちゃいけない。みんなのお荷物なんて論外だ。

完璧じゃなければ、生きてる価値すら、ない。

「初めて君を見た時に気付いてたよ。心と体でバランスがとれてないなあって。…解離性障害だって聞かされても驚かなかった」

「…やっぱり僕…おかしいのかな」

「そんな事無いよ」

即答する照美。鬼道も頷いてくれる。その優しさが申し訳なくて、
だけど嬉しかった。

「僕の中のアツヤは、僕が作った偽物のアツヤ。…分かってるんだ。
でもアツヤが僕には必要だった…完璧になる為に」

両腕で体を抱きしめて、うずくまる吹雪。

「だって完璧にならなきゃ…失うじゃないか。何一つ、守れやしな
いんだ」

あの雪崩の日、無力だった自分のように。

「完璧じゃなくなつて…護れる物はあるさ。円堂を見る。あいつは
完璧じゃないから負ける。だけど何回だって立ち上がる」

ポン、と鬼道が肩を叩く。その温もりが死んだ父に似ている気が
して…涙が出そうになる。

自分と同一年の筈なのに、彼の、彼らの強さは何処から来るのだ
ろう。

「…その強さは、完璧な存在よりもずっと貴い物だと思う。…安心
しろ。俺達はお前の前からいなくなつたりしない。…大事な仲間を
置いていったりはしないさ。なあアフロディ？」

「そうだよ」

ありがと。そう返した声は、音になつただろうか。

【0・33・吹き抜けて、吹き荒れて】

風丸の気持ちは沈んでいた。空は晴れ、澄み渡っている。暑すぎず寒すぎず、清々しい朝である筈だ。しかし自分の心は未だ曇ったままにいる。

誰かを責める事はできない。なんせ自分で撒いた種なのだ。力に飢えて焦るあまり、神のアクアを持っていやしいかと照美に詰め寄って――あの鬼道に頬を張られて。

照美の事も鬼道の事も、多分円堂の事も傷つけた。自分が無知であるが為に、照美に痛ましい過去と事実を告白させる事になってしまった。

こんな筈じゃなかったのに。

ただ自分は、皆と楽しくサッカーをやれていれば幸せだった。仲間の仇討ちにジェミニストームを倒せば終わる筈だった。それがほとんど話が大きくなって、途中下車などできなくなって。

無力さに絶望し、力が欲しいともがくあまりに、仲間を傷つけて一体何をやっているのだろう。一人で暴走して、落ち込んで――馬鹿みたいだ。

――俺、本当に此処にいて、いいのかな。

キャラバンに寄りかかり、風丸は俯いて考えこむ。

――力も足りない。挙げ句みんなに迷惑をかける。――此処にいる資格、あるのかな。

照美は気にしないと言ってくれたし、鬼道も反省しているならそれでいいと言ってくれた。だけどそれで過ちを忘れられるほど自分ではできた人間じゃないのだ。

神のアクアがどれだけ危険な薬物だったかは理解した。世宇子イレブンを自殺に追いやり、照美の命を削る魔のドラッグ。しかしそれでも尚、甘い誘惑がチラついて離れない。

力さえ、あれば。

ほんの少しだけなら大した症状もなく済むんじゃないのか――なんて。

――そんな風に考えちゃう事自体が弱さの証：なんだろうけど。

駄目だ。考えれば考えるほど気持ちが弱くなる。

鬱々とした気持ちを少しでも晴らすと、風丸は一人、仲間達の側を離れた。まだ出発までは時間がある。顔でも洗って、散歩でもすれば多少気分も晴れるだろう。

漫遊寺は山の中に作られた学校だ。自然を身近に感じる環境が、彼らのモットーである、心と身体を鍛える、事に適しているのだろう。

正門の外は深い竹藪になっている。木暮がこっそり作った抜け道やらなんやらが結構な数あるらしい――と専ら噂だ。悪戯好きの彼らしいと言えば彼らしい。

ふと、聞き慣れた――ボールが弾むような音に、風丸は顔を上げる。竹藪の向こう、ちらちらと見え隠れするサッカーボール。誰かがこっそり特訓しているのだろうか。

風丸は藪を掻き分けてその場所に進み――目を見開いた。

――レーゼ……！

レーゼが一心不乱に、ボールを蹴っている。壁に蹴りつけ、跳ね返ってきたボールをまた蹴って――その繰り返し。

単純な動作の中にあつてなお、技術力が窺えた。壁にはボール一個分の後しかついてない。彼は正確に同じ場所に向けてボールを蹴

っているのだ。なんてコントロールなのか。

「…何してるんだ」

「！」

突然声をかけられて驚いたのか、レーゼはびっくりと肩を震わせて振り返る。蹴り損ねたボールがてんと地面を転がった。

何をしているのか？そんなの、見れば分かる。それでもあえて尋ねたのは、風丸の中には彼に対する猜疑心が拭い去れないからに他ならない。

風丸は、レーゼが仮とはいえキャラバンに加わる事に、最も反対したメンバーの一人だった。

本当に彼は記憶を失っているのか。演技ではないのか。仮に本当だとしても、目の前にいる少年はまごうことなきジェミニスチームのキャプテンだった男なのだ。

そんな彼が…一生懸命練習まがいの事をしてるなんて。努力ともとれる行為をしているなんて…まったく想像もつかなかったのである。

「…すみません。迷惑、でしたか…？」

「そうじゃないけど…ってかその敬語やめろよ。白々しくて苛つく」

「ご…ごめんなさい」
すっかり萎縮するレーゼ。何だか自分が苛めているみたいじゃないか…気持ち落ち着けようとため息をつく。

半分は八つ当たりだという自覚もあるから、尚更そんな態度をとられると罪悪感が募る。

せめてもの償い…でもないが。転がったボールを拾って手渡した。

「練習を見てたら…凄く楽しそうに見えて」

彼はどこか恐る恐るといった様子で受け取る。が、語る口調少しだけ嬉しそうだ。

「ボールを蹴っていたら、何か思い出せそうな気がしたんだけど……なかなかそう簡単にはいかなくて……」

風丸に嫌われている事は気付いているのだろう。声は最終的に、遠慮がちに萎んでいく。

分かっている。これが演技ならノーベル賞ものだ。それでも不思議で仕方ない。ボールを蹴る技術は衰えてないようだし、ジェミニスチームにいた時はあれだけ不遜に自分達を見下ろしてくれたのに……。

今日の前にいる存在は、一体何なのだ。

「……お前さ」

その問いは、自然に口から零れた。

「サッカー、好きか？」

レーゼは少しだけ考えて……やがて小さく頷いた。

「多分……そうだったんだと思う」

まだ記憶は戻らない。けれど、あれだけ一生懸命にボールを蹴る人間が、サッカーが嫌いな筈がない……円堂ならきつとそう言う。

「……そうか」

未だに、レーゼを信じきれない自信はない。けれど、瞳子がレーゼをキヤラバンに置くと決めた時、円堂は賛成した。レーゼに、また一緒にサッカーしようと約束すらしていた。

単純バカの代名詞のような人間だけど。疑う事を知らぬ、純粹すぎるくらい純粹な奴だけど。円堂の人を見る目は確かだと風丸は知っている。

だったら――自分も、受け入れるべきなのかもしれない。今のレーゼとなら――それができるかもしれない。

風丸が口を開きかけた、その時だった。

「う……ぐっ……！」

「……！？」

突然レーゼが、真っ青な顔でうずくまった。ボールがその手から滑り落ち、竹藪の向こうへと転がっていく。が、拾いに行っている場合ではなさそうだ。

「どうした！？」

明らかに尋常ではない。胸を押さえて、うめき声を上げている。

「息、が……急に、苦し……」

「おい、しっかりしろっ」

さっきまであれだけ元気にボールを蹴っていたのに。一体何が起きたというのか。確かなのは――このまま放っておくのは非常にマズイという事だ。

大人――瞳子監督を呼んで来なくては。そう思って立ち上がろうとした風丸の視界を、黒い影が覆った。

「なっ……！？」

誰だ。顔を上げた先にいたのは――三人の少年少女達だった。少年が二人に、少女が一人。

漫遊寺の生徒、ではない。三人が三人とも、一様に深緑色のウェアを着込み、感情の無い瞳でこちらを見下ろしてくる。けて大柄な子供達ではない。しかし、無感動な眼が不気味で、妙な威圧感を

持つてそこに佇んでいる。

「雷門中サッカー部二年、風丸一郎太だな？」

口を開いたのは、真ん中の少女。低く、淡々とした口調で言葉を紡ぐ。

「そいつは二ノ宮様の貴重な実験体だ。我々に引き渡して貰おう。逆らった場合命の保証はない」

「な…なんだと…!？」

そいつ…レーゼの事だ。まさかこいつらはエイリア学園の人間なのか？貴重な実験体とはどういう事だ？

それに…二ノ宮様？一体誰だそれは。

「繰り返す。その子供を寄越せ。さもなくば実力で奪い返す」

ぎよっとする風丸。三人がポケットから一斉にバタフライナイフを取り出して掲げたからだ。ギラリ、と刃が凶悪な輝くを放つ。

まずい展開だ。

この場所はグラウンドにいる皆からは完全に死角。騒ぎ立てればさすがに気付くだろうが、多分その前に自分は刺されて終わるだろう。

今此処にいるのは自分と、未だ謎の発作で身動きが取れないレーゼ。もし此処にいるのがレーゼ以外の誰かならここまでピンチにはならなかっただろう。仮にも修羅場を潜った雷門イレブン、皆が皆身体能力には自信がある。

それは風丸も例外ではない。自分一人だけならば、三人の合間を疾風ダッシュで駆け抜けて逃げ切る事も、ボールを拾って彗星シュートで撃退する事もできた筈だ。

しかし今は、彼がいる。彼を連れて刃物を持った相手から逃げ去るのは、いくらなんでも分が悪い。

・・・どうする。どうすればっ…！

無意識に、レーゼを抱きしめる手に力がこもっていた。三人はナイフを手にじりじりと距離を詰めてくる。風丸の頬を冷や汗が伝った・・・その時だった。

「クロスドライブ！」

十字の光を纏う強烈なシュートが、三人をぶっ飛ばしていた。彼らが手に持っていた武器も全て地面に転がる。風丸は一瞬呆然として、しかし慌てて刃物を拾い上げる。

今のは一体誰が・・・。

「風丸さんっ！」

「宮坂!？」

竹藪の向こうから、見慣れた人物が顔を出した。褐色の肌に金髪、少女のような可愛らしい顔立ちの少年・・・宮坂了が。

「まさか…今のシュートお前が打ったのか!？」

確かに、彼が京都に来ている事は知っていた。けれど自力で漫遊寺にまで辿り着いたのがまずスゴいし、何より陸上部の彼があんなシュートまで会得しているなんて。

「見よう見まねですけどね。風丸さんの役に立ちたくて…こっそり練習してたんです」

「そうだったのか…。ありがとう、助かった」

「いえいえ」

照れたように頭を掻く宮坂。そこまできてやっと思感が湧いた。速水のメールの真偽を疑っていたわけじゃないが・・・まさか本当に、たった一人で京都まで来てくれるなんて。しかもあんな必殺技

まで練習していたなんて。風丸がサッカー部に転部する際はあれだけ揉めたのに――。

彼の決意は本物なのだ。その技を目の当たりにして、宮坂の覚悟の重さが理解できた気がした。

「と…今はそんな事より」

宮坂は険しい顔で、足下で倒れている三人組を見た。

「こいつらは…一体何なんです？どうして風丸さんを襲ったんですか？」

「分からない…ただ」

風丸は簡単にいきさつを説明する。

突然彼らが現れて、レーゼを引き渡せと迫ってきたこと。レーゼを、“二ノ宮の実験体”と言ったこと。断れば殺すと刃物を出して脅されたこと――。

ついでに、レーゼの事についても解説した。彼が記憶を失っていること、キャラバンに乗せたのは瞳子の意志であることなど。

「レーゼ…」

宮坂は複雑な顔で、荒い呼吸をする少年を見る。波は去ったようだがまだ顔色の悪いレーゼ。学校を壊された恨みつらみは宮坂にもあるだろうが、さすがにこの状態の彼を糾弾できるほど非情にはなれないと見える。

「…愚かな…何も知らないのだな…貴様らは」
「！」

倒れた三人のうち、一人の少年が顔だけ上げて言う。どうやらまだ意識があつたらしい。

「我らが此処に来た、もう一つの目的を果たす…」

少年は恐ろしく無感動に、その事実を告げた。

「鬼道有人に伝える。影山総帥からの伝言だ。総帥は復活し、愛媛の真帝国学園にて貴様らを待つ。悪夢を止めたければ来るがいい」

それが――今まで想像もつかなかった悪夢の始まりであると。
一体誰が予想しただろう。

【0・34・虚空に溶けし、別れの言葉は】

イナズマキヤラバンに、改めて木暮を正式に迎える事になった。それは漫遊寺サッカー部の彼らとも相談して決まった事である。

何より木暮が円堂や春奈に懐いているし、雷門を居心地のいい場所と感じているようだ。塔子をはじめ、他メンバーにも異論はない。多少、傍迷惑な悪戯にさえ気をつければ。

それともう一人、加わる事になったメンバー。それが風丸の後輩の陸上部員、宮坂了である。彼の脚の速さはお墨付き。ついでに、強力な必殺技も会得してきている。こちらも断る理由は無かった。二人の仲間の事はいいのである。問題は――風丸とレーゼを襲ってきた三人組の事だ。

「記憶が無くなってるなんて…誰かさんみたいじゃないか」

一ノ瀬が溜め息混じりに呟く。塔子としてもまったく同感。記憶ってそう簡単になくせるものなんだろうか――と、つついレーゼの方を見てしまう。

風丸を襲った三人の少年少女は――宮坂のシュートをくらって意識を失い、目が覚めた時は何も覚えていなかったのである。生活には自分の名前や出身地などは覚えていたが、京都に來た記憶も無いという。無論、彼らが自分達に伝えたメッセージの意味も。

ただ。どうやらメッセージの三人が愛媛の中学生であった事と。影山が脱獄したという話の裏がとれ、どうやらメッセージの信憑性は高そうだと判断された。

また、愛媛ではサッカーを嗜む少年少女の謎の失踪事件が相次いでいるという。彼ら三人はその失踪したメンバーのようだ。つまり影山が一枚噛んでいるのは間違いない。

- - 影山零治…

ギリ、と奥歯を噛み締める塔子。自分は直接彼に逢った事はない。だが、個人的には相当な恨みがある。

あの男さえいなければ。鬼道は妹と引き離されずに済んだかもしれない。何より - - 心にあんなにも深い傷を負わされる事など無かった筈だ。

奴に鬼道がどれだけ酷い目に遭わされてきたか。どんなに追い詰められ、汚されてきたか。

いつもは冷静な鬼道の手が小刻みに震えている。その姿が視界に入り、塔子の腸は煮えくり返りそうだった。

絶対に赦せない。とりあえず出会い頭に一発ブン殴って頬骨を叩き折ってやらなきゃ気が済まない。どうせ公式に試合することなど無いのだ、構うものか。

「危険かもしれないけど…やはり彼は、キャラバンで保護するしかないわね」

レーゼを見、瞳子は言う。

「エイリアの情報を得る為でもあるわ。理解して頂戴」

本当にその為だけなのかな、と塔子は思う。瞳子はレーゼを側に置いておきたいのではないか。時々、意外なほど優しい眼で彼を見ている瞬間があるのである。

不遇な彼に同情しているのか - - それとも。

「…いい加減話せよ鬼道。知ってんだろ、レーゼを実験体だとか抜かした…二ノ宮ってヤツが誰なのか」

聖也がいつになく厳しい口調で鬼道に問う。それは誰もがずっと気になっていた事だ。鬼道は一人、かなり真実に近付いている。あの三人が“二ノ宮様”と呼んだ人物の事も、調べがついているんじゃないだろうか。

鬼道は小さくため息をついて、あと少しだけ待ってくれ、と言った。

「影山は…エイリアと繋がっている可能性が高い。影山の事を調べていけば、エイリアの事も掴めるかもしれない」

どうやら鬼道は、少し前から影山が脱走していた事を知っていたらしい。おそらくあの鬼瓦刑事から聞いたのだろう。

影山は北海道を護送中に、護送車ごと雪崩に巻き込まれて行方不明になった。その雪崩は人工的に起こしたものだと言われ、さらには横転した護送車の側からは、エイリアのものに酷似した黒いサッカーボールも見つかっているという。

なるほど。もしエイリアが影山の脱走をしたなら、そこに何らかの訳がある筈だ。

「愛媛と反対方向で申し訳無いですが…監督、一度東京に戻らせて下さい。実は佐久間から連絡があったのです」

「佐久間…帝国学園の佐久間次郎君かしら？」

「そうです」

影山の脱走を、どうやら帝国イレブンが鬼道よりも先に知っていたらしい。鬼道に迷惑をかけたくなくて、彼らだけで調査を進めていたそうだった。

しかし、真帝国学園として動き出してしまった以上、いつまでも隠し立てはできない。しかも影山はエイリアと繋がりがある事も分かった。

自分達が調べた内容を鬼道に報告したいから、帝国に来て欲しい
- 佐久間はそう言ったそうだった。直接逢って話したい、と。

瞳子はやや苦い顔をしたが、今は真帝国学園に関してもエイリアに関して圧倒的に情報不足だ。データが手に入るチャンスを逃す手は無いという事で、渋々了承して貰った。

「新幹線ならともかく、バス移動なんだよな…。道路状況どうよ」

「さっきネットで確認しました。土曜日ですからね…。あんまりよろしくない雰囲気」

「うげえ」

春奈の言葉に、明らかにうんざり顔の土門。他のみんなも似たり寄ったりだ。さすがにこの時間すぐ出れば、今日中に着けない…ことは無いだろうが。

道路が渋滞していると、東京まで行くのにいつぱいいつぱいかもしれない。少なくとも今日は雷門に着いてもほとんど練習できないだろう。約束の時間に間に合わないかもという事で、佐久間との待ち合わせは明日になったらしいが。

鬼道がすまなそうに皆に謝る。謝るべきは影山だ、と塔子は言いたい。仕方ない、顔面パンチは暫くお預けだ。

「木暮を何卒よろしく頼みます、皆様方」

漫遊寺の監督には何度も頭を下げられた。影田や垣田といった面々も同様に。イタズラっ子で問題児、という扱いだっただ木暮だが、なんだかんだで愛されてはいたのだろう。

様々な想いを遺し、キャラバンは京都を後にした。またな、と笑顔で手を振った円堂に対し、もう来る事はないかもね、と照美が小さく呟いたのが印象的だった。

照美が…自らが長く生きられない事を知っているからその発言だろう。たまたますぐ傍にいた塔子には、聞かなかったフリをするしかできなかった。

「ぎゃあああっ！」

出発して暫くして。目金が唐突に悲鳴を上げた。隣の席では木暮がうつしつと笑っている――となれば何が起きたかなど想像にたやすい。

「ぼ…僕の…幻想戦士ティーナちゃんがああっ！」

喚く目金の手元には、いかにも、なオタク系フィギュアが。赤い剣を持ったミニスカに緑髪の女の子が、きりりとした表情で微笑んでいる――ものであったのだろう。

しかし今は油性ペンの落書きで無残な有り様だ。少女の鼻の下と顎には厳つい口髭がこれでもかと生え、眉毛はぶっとく塗られている。元の可憐な姿は見る影もない。

「数量限定販売のレア商品だったのに…徹夜してアニイトで並んだのに…！」

「ってかなん大事もんなら持って来るなよ…」

染岡が心底呆れた調子で言う。まったくその通りだ。それにたかがフィギュア一つ手に入れる為に徹夜するとは――なんて根性なのか。その情熱をどうかサッカーにも生かして欲しい。

木暮の悪戯ラッシュはそれにとどまらず。今度は聖也が悲鳴を上げた。

「俺のサマドロップがっ…中におはじきって火の墓がああっ！」

うつかりおはじきを口に入れてしまい、苦い顔をしている聖也の向こうで、今度は立ち上がるうとした円堂が派手にコケる。どうやらいつの間にか両足の靴ひもを結ばれてしまったらしい。

木暮は楽しそうに駆け回る。これだけの数の悪戯を短時間こなすなんてまた器用な。

「ようは暇なんだな…コイツ」

呆れて物も言えない。バスは渋滞に捕まって本格的に動かなくな
ってしまった。時間は無駄に余っている。特に試合の作戦を考える
一部頭脳担当者以外は。

塔子はさりげなく隣を見た。その作戦立案の要たる鬼道は、何か
を考え込むように窓の外を見ている。周りがどれだけ騒ぎ立てても
黙り込んだままだ。

影山のこと。エイリアのこと。考えるべき事が山ほどあるのは理
解している。だが、もう少し…もう少し、誰かにその荷を明け渡
してもいいのではないか。

一人で何もかも背負いすぎる彼は、見ていて、辛い。

- ……馬鹿野郎。

好きだ、と一言伝えれば何かは変わるだろうか。変える事が出来
るだろうか。

拒絶される事は確かに怖い。今の関係を壊すかもしれない事も、
怖いと言えば怖い。だがそんな事は些末な問題だ。それより塔子が
恐れているのは、自分が伝えた事で余計彼の重荷になってしまうの
ではということ。

これ以上鬼道の荷物を増やす事になったら本末転倒なのだ。だか
ら言えない。言うわけにはいかない。

まったく自分らしくもない女々しさだとわかってはいるけれど。

「つ…疲れたつ…す…」

長い時間をかけ、やっとキャラバンは雷門に到着。ぐったりする
壁山の頭の上には、遊び疲れた木暮がちゃっかり乗っかっている。

ちなみにその木暮の最終的な被害は、照美と栗松だったりする。照美の長い髪は寝ている間に二つ結びになっていたし（あの髪型だと余計女の子に見える）、栗松の水筒にはタバスコが突っ込まれていた。

ちなみに最後はキレた照美がヘブンズタイムを発動させ、逃げ回る木暮を捕獲。春奈に引き渡して、説教タイムとあいなったのだった。

着いた時にはもう日が傾いていた。今日はもう、簡単な練習しかできないだろう。円堂の家に泊めて貰えるという事で、多くのメンバーがその厚意に甘える事になった。

さて。着替えの事もあるし、何より一度父の顔を見たいのも本音。塔子はちらりと鬼道の様子を窺う。彼はどうするのだろう。鬼道邸は東京にあるが、電車を使わないと帰れない距離である。

「塔子。お前はどつする？」

尋ねるより先に、鬼道の方から訊かれた。

「あたしは：一回パパの顔見に行つて、そしたら円堂ちに世話になるのかなあつて考えてるけど」

「そうか」

「鬼道も顔見せに行つたら？親父さん、心配してるんじゃない？」

親父、と言つても勿論血がつながつた間柄ではない。しかし影山の逮捕を契機に、鬼道と義父の距離も徐々に縮まりつつあると聞いている。

義理だとしても。子を想わない父はいない筈だ。厳しく接するの、たとえそのやり方が正しくなかったとしても――全ては子を想つてこそ。塔子はそう、信じている。

「…そうだな。そうする」

「おう」

ひよつとして、と思う。長年、鬼道を育ててきた影山は――どれ

だけ歪んだ手段だとしても――鬼道にとって、父親にも等しかったのではないか。

影山もまた、鬼道を我が子のように愛していたのではないか。自分の身勝手な願望だと承知の上で、思うのである。せめてそうあればいい。愛もなく虐げられ傷つけ合うだけの関係なんて、悲しすぎるから。

――愛媛に行けば、その答えも出るのかな。

雷門に愛媛に来いと言った影山。それは果たして本当に復讐の為だけなのだろうか。

見上げた空はオレンジと藍のグラデーションに染まる。この空の下で影山は何を想うのか、塔子は自分なりに考え続けていた。

【0・35・ラスト、キッス】

イナズマキャラバンは、雷門のグラウンドに停められている。雷門が私立で、夏末の家の私有地であるゆえである。

ひっそりと静まり返った夜の空気。本来ならとくに子供は帰る時間。にも関わらず、塔子は円堂の家を抜け出して、一人ジャージ姿でそこに立っていた。

- - あたしも練習中毒だな…。

苦笑しながら、サッカーボールを蹴る。普段のしつちやかめつちやかな練習に慣れすぎたのか。今日のように短時間に簡単な練習をしただけではどうにも落ち着かないのである。

焦っている - - のとは違うだろう。とにかく、少しでも長くボールを蹴って、少しでも早く強くなりたいのだ。その成果は如実に試合に反映される。それが嬉しくてたまらない。

要は、自分は本気でサッカーが好きなのだ。

サッカーは自分にたくさん素敵なものをくれる。新しい世界を見せてくれる。今回のエイリア侵略だって - - 勿論彼らのする事は赦せないが - - サッカーをやっていないければ、宇宙人との試合なんて経験できなかったに違いない。

父や世界を守って戦うことも。鬼道や円堂と同じフィールドに立つことも。

「考えることは一緒だな」

「お？」

声がして振り向けば、鬼道が苦笑しながらそこに立っていた。

「円堂顔負けのサッカーバカっぷりだな。練習し足りないってどこか」

「へへっ…あたり」

ボールをパスする。鬼道は軽く胸でトラップして、そのまま返してきた。簡単な動作の中にもテクニクが窺える。天才ゲームメーカーとして、全国トップの帝国学園に君臨していただけある。

その技量も力量も。才能だけではない、鬼道が努力によって身につけたものだ。しかし同時に、影山に仕込まれたものでもある。

彼は今――どんな想いでサッカーをしているのだろう。もしサッカーをするたびに影山を思い出すとしたら、影山に与えられた痛みが蘇るとしたら――それは彼を縛る鎖に他ならない。

もうすぐ、再び影山と対決する事になる。辛いのではないか。また苦しむだけの結果になるのではないか。鬼道は本心をまるで表に出してくれないから――心配でたまらないのである。

塔子からすれば鬼道に尋ねたい事は山ほどあったが、最初の一言がなかなか見つからなくて困った。

「下手な気遣いはいい」

すると鬼道の方から、告げられた。

「お前は昔からそうだな。思った事が全部顔に出る」

「うげっ……マジか」

「マジだ」

なんだかおかしくて、くすくすと笑い合う。影山の存在は、確かに鬼道を縛っているのかもしれない。けれど彼の表情は昔よりずっと穏やかになった。それは多分、鬼道がサッカーによって、痛みよりもっと大きな物を得る事ができたという、その証ではないだろうか。

「……ずっと、不思議に思っていた事があるんだ」

キャラバンに寄りかかり、鬼道は言う。何か、吹っ切ったような声だった。

「エイリアと影山が繋がってるかもしれないと知って…疑問が一本の線で繋がった」

帝国の事なんだが、と彼は続ける。

「中学校として正式な形になっていなかった世宇子は例外にしても…。木戸川に、尾刈戸に、野生に、千羽山に、戦国伊賀島…。フットボールフロンティアの出場校はみんな、エイリアの襲撃を受けている」

ジェミニストームは、サッカー部のある学校なら強豪も弱小も無差別に襲っていた。それに対しイプシロンは漫遊寺を始めとした隠れた優勝候補に狙いを定めていたようだ。

僻地の学校はまだ無事なところも多いようだが、殊にフットボールフロンティア出場校は早い段階で殆どが潰されている。SPフィクサーズとしてエイリアを追っていた塔子はその辺りを熟知していた。

そう…“殆ど”、なのだ。

鬼道の疑問が何か思い当たり、まさか、と顔を上げる塔子。

「そうだ塔子。…帝国学園だけが、未だに襲撃を受けていないんだ」

それは…塔子も不思議に思っていたことだ。

確かに帝国は地区大会で雷門に負け、全国大会でも世宇子に負け。悪い言い方をすればその権威は失墜している。

だが、それでも四十年間フットボールフロンティアを制覇し続けたサッカーの超名門校であることに変わりはない。

サッカー部としてやっと成立したばかりの傘美野中は襲ったのに、何故長年の王者たる帝国をエイリアは見逃したのか？

ジェミニストームはともかく、あのデザーム率いるイプシロンなら、真っ先に勝負を挑みそうなものなのだが――。

「まさか…影山がエイリアの上層部に進言したのか…？帝国だけは手を出さないでくれって…」

「…さあな。証拠は何もない」

影山は、帝国学園を復讐の道具として扱ってきた筈だ。実際卑怯な真似を数え切れないほどやらかしたと聞いている。鬼道への扱いに至っては凄惨極まりないものだ。

最終的には帝国イレブンを捨て、世宇子を使って彼らを病院送りにした。それは紛れもない事実。

なのに――それでももし本当に、影山がエイリアに帝国を見逃させていたとしたら。それは一体何の為で、誰の為というのか。決まっている。決まっているが――どうにも信じられない。

「…もし本当に…それがあの男の、俺への最後の気遣いだとしても…。俺はあいつを、赦すことは到底できないだろう」

でも、それでも知りたいんだ、と言う鬼道。

「……影山の…本当の心が知りたい。今更それを確かめたって何ができるってわけじゃないけれど、でも…あの男にとって俺が、俺達がどんな存在だったのか、奴の口から直接聞きたいんだ」

それは感情を絞り出すような声だった。あの鬼道が初めて見せてくれた、本心の一端。

「だって…どんなに虐げられても道具扱いされても…。あの人は俺にとって…父親のようなものだったから。大切、だったから。…ふっ、笑える話だろ」

「笑わないよ」

無意識に手が伸びていた。鬼道の眼が見たい。そう思って、彼の

ゴーグルをそつと外していた。

鬼道は驚いた顔をしたが――抵抗しなかった。

「笑わない。…笑うわけ、ないだろ。鬼道が初めて本当のキモチ、話してくれたのにさ」

切れ尾の、大きな赤い瞳。綺麗な色は昔からちつとも変わっていない。その眼を真正面から見つめて、塔子は言った。

「本当は…好きだったんだな、あいつのこと。だから裏切られたと知って…本気で傷ついた」

鬼道の瞳が揺れる。瞳の中には、塔子の顔が映っている。

「…頑張ったな。お前は今日まで本当によく、頑張ったよ」

塔子は微笑んだ。今だけは彼を、幼い子供のように誉めてやりたい。鬼道はずつと頑張つて、頑張つて、頑張り返ってきた。だけどそれを誉めて、頭を撫でってくれる存在がいなかった。

だから自分が、彼をたくさん誉めてあげたい。ありきたりな言葉しか浮かばないけれど、讃えて、たくさん抱きしめてあげたい。だって自分は、鬼道のこと大好きだから。

「…なあ鬼道。覚えてるか。昔、あたしがお前に約束したこと」

そつと抱きしめた身体は、小さくて痩せっぽちだった。こんな細い身体で、どれだけたくさんのものを背負ってきたのか。どれだけの傷を負ってきたのか。

「お前のことは、あたしが護る。お前が辛い時は、あたしが助けに

行くって」

離れていた長い時間にはできなかったこと。ずっと護れなかった約束。だけどこれからは一緒にいられるから。傍にいるから。

「今まではできなかった。でもこれからは…約束を果たす。もう誰にも、傷つけさせない」

我ながらベタな台詞だ、と塔子は思う。しかしそれ以上に相応しい表現が見つからない。

貴方を傷つける全てから、護りたい。

貴方を苦しめる全てを、自分が取り除きたい。

かつては淡い淡い気持ちだったけれど。こうしてまた一緒に過ごすようになって、ますます想いは強くなった。それはとても苦しくて、とても切なくて、でも世界一素敵な気持ち。

「好きだ、鬼道。愛してるって意味で…あたしはあんたが好きだ」

抱きしめる耳元で、一瞬彼が息を呑んだのが分かった。涼しい夜風が吹き抜ける。学校のグラウンドで、キャラバンの前で。まったくムードも何もない場所かもしれないが。

月と星が綺麗な夜だ。とりあえずそれだけでも充分ではないか。

「…馬鹿だな」

背中に回される手。照れてるのだ、と鬼道の声で分かった。

「お前はずっと、約束を護ってくれていたさ。あの約束があったから…お前との思い出があったから、俺は今日まで生きてこれたんだ」

覚えていて、くれたのか。驚きと喜びと――言葉にできぬ想いで頭がいつぱいになる。腕を緩めれば、再び綺麗な赤い眼と目があった。

そこに、彼の答えも、あった。

「これがその、答えだ」

一瞬。時間にすればとても短い間に過ぎなかったが――唇が触れる感触があった。その短さに彼の照れ隠しと性格が如実に現れている。

だけど塔子にとっては、何物にも代え難い一瞬だった。あまりにも純粹すぎる、ファーストキス。された塔子より、勢い任せでしてしまった様子の鬼道の方が真っ赤になっている。

愛しくて愛しくて仕方ない。ありがとう、一言呟き、もう一度抱き締めようとした――その時だ。

「お兄ちゃん。いるのー？」

春奈の声。お互いドキリとして、慌てて離れる。危ない、二人きりだと思っつてつい油断していた。

「お兄ちゃん…あ、塔子さんも一緒だったんですね」

校舎側からとことこ歩いてきた春奈に、お、おう、と答える声がどもる。よもや今の見られちゃいなかっただろうな？あと自分の顔は真っ赤じゃないだろうか。

「いつの間にかいなくなってるからどうしたのかと思ったら。またこっそり練習しに来てたんですか」

「ま、まあね」

転がっているボールからそう判断してくれたようで塔子はほっと

する。とりあえず、周りが暗くて良かった、本当に。

「すまない。捜しに来てくれたのか？」

瞬時に切り替えるあたり鬼道は流石だ。その鬼道を見て春奈が眼を丸くしている。そういえば、彼はゴーグルを外したままだった。珍しかったのだろう。

「お兄ちゃんが、キャプテンばりの練習バカだって知ってるもん。まあキャプテンほど無茶な特訓はやらないだろうけど」

「当たり前だ。円堂はやることなすこと無茶すぎる」

「それが円堂の魅力でもあるんだけどな」

「ふふっ言えてるかも」

それからしばらく、円堂の話題で盛り上がる。今日の円堂はすっかり木暮に振り回されていた、とか。あと、塔子が出逢う前の彼の話も聞いた。

こうしてこの三人で話すのも、久しぶりな気がする。

鬼道も春奈も眼が優しくなった。昔よりも強くなった。話しぶりだけでもそう感じる。

「久しぶりにさ、三人でやろうよサッカー」

ボールを拾い上げ、二人を誘う塔子。

「悪くないな」

「懐かしいですね…！」

響く笑い声。三人を照らしていた丸い月。

それはとても貴い、二度と無い今という時間。この日の事を、塔子は忘れないだろう。多分、一生。

【0・36・ラスト、ダンス】

あの程度の練習じゃ物足りない……と思っていたのは円堂も同じ。ジャージに着替え、雷門中へ。キャラバンを停車してある場所まで来た時、何やらバスの陰でこそそこそしている二人組を見かけて目を丸くした。

「木暮に……聖也？何やってんの？」

「おう円堂。丁度いいところに」

バタつく木暮を小脇に抱えて、聖也がバスの影からちよいちよいっと手招きした。まるで面白い悪戯を思いついた悪ガキのごとくニヤついている彼。何か面白いものでも見つけたのだろうか。

「見ろよ。面白い組み合わせで練習してるぜ」

聖也が指差した先はグラウンド。そこで、鬼道と春奈と塔子の三人が練習している。

なるほど、あまり見ない組み合わせだ。しかし、施設にいた頃はあの三人でサッカーをやっていたというし、仲が良いのは傍目からも分かる。別に不思議な事でも何でもない気がするのだが。

「いやいや……俺もさ、こっそり練習しようとグラウンドに来たわけなんです」

そしたら見ちゃったんだよねん、と声をひそめる聖也。

「塔子と鬼道！すっげーいい雰囲気でやんの。あいつらこれを機会にくつつくんじゃね？」

「くつつ……えええっ！？マジかよっ！？」

「驚いてる驚いてる。はーお父さんは我が子を嫁に出す気分よ本当に」

「嫁って…どっちがだよ。ってかいつからそういう話に」

「野暮な事言うでないよ木暮君。ふぶちゃんを筆頭に、キャラバンのメンバーはみーんな俺の息子なの！はい決定！」

「うわぁ」

「ってかいい加減離せ！と木暮がジタバタするが、キャラバンの怪力を誇る聖也の腕が彼にふりほどける筈もない。

しかし…さすがの円堂もビックリである。塔子と鬼道が仲が良いのを知っていたが、それは良きライバルとして、という意味だと思っていたのに。

「どっちも恋愛なんて興味ありません、という顔をしているくせに、いつの間に。」

「そこに春奈が随分タイミング良く現れて、ラブラブ甘甘タイムがサッカー熱血タイムになったわけです。お分かり？」

「ごめん聖也、どっからツッコめばいいのか分かんない」

「ラブラブ甘甘タイムで。センスの無さが神業だ。こいつにだけは必殺技のネーミングを決めさせるまいと密かに決意する。

春奈が塔子に嫉妬して割って入ったって？そんな馬鹿な。春奈は鬼道の実の妹ではないか。

「ついでにこの木暮は、そのへんウロチヨロしてたんでなんとなく捕獲してみました」

「なんとなく、で捕獲。また不憫な。木暮も木暮で、こっそり練習しに来たのであるう事は容易く想像できる。

「けど小脇に抱えて捕まえる意味は何なのやら。そろそろ降ろしてやればいいものを。さすがに哀れな気がする。」

「離せって言ってんだろこの馬鹿力！俺は早く旋風陣を進化させたんだよーっ！」

小さな手足を振り回して木暮は再度ジタバタ。旋風陣――それは木暮がイプシロン戦で見せてくれた、あの技だ。

あの時は木暮も無我夢中だった。元々練習していた技が土壇場で完成したといったところか。つまり、まだやっと型になったばかりの必殺技なのである。

初めてキメたあの時ですら、あれだけ鮮やかにシュートを止めてみせたのだ。鍛えれば相当のディフェンス力が期待できるようになるだろう。

もっと進化させ、独自の改良を加えていきたい。そう考える気持ちには円堂にも分かる。

「なら……丁度いい相手がいるじゃねえか。せつかくだ、あいつらに手伝って貰おうぜ」

あいつら、と聖也が言ったのは鬼道達のこと。人数が多いほど有意義な練習ができる。悪い提案ではない。

むしろ、円堂もそのつもりであった。

「おい、鬼道！春奈！塔子ー！」

聖也が木暮を抱えたまま走り始める。だから降ろせってばー！という声が急速にフェードアウトし、円堂は苦笑しながらその背中を追った。

鬼道達がこつちに気付いて手を振って来る。下手な言い訳も挨拶も入らない。心はサッカーを通じて伝え合えばいい。

早速聖也が春奈からボールを奪った。が、すぐにそのボールを鬼道が奪い返す。ドリブルしていく彼に対峙するのは木暮。早速必殺技を練習するつものようだ。

「はあああつ！旋風陣ー！」

地面に手をつき、足を回転させ、巻き起こした風でボールを絡めとる技。だが鬼道の方が一枚上手だった。

イリユージョンボール。分裂するボールの残像。見事にフェイントに引っかけたてしまった木暮の脚は宙をかく。鬼道もうまかったが、まだまだ必殺技は未完成のようだ。

「俺も欲しいなーブロック系の必殺技!!」

「頼むからフール率低いの編み出してくれよ聖也。ただでさえ馬鹿力なんだから」

「うっせえや塔子」

聖也のスライディングをジャンプでかわし、鬼道はボールを塔子にパスする。完全に逆をついた、見事なプレーだ。

いつの間にやら鬼道&春奈&塔子VS円堂&木暮&聖也の図が出来上がっている。どうみても円堂の方が不利だ。自分なんて特に本職はGKなのだから。

と、分析してはみたものの。負けるつもりは毛頭ないわけで。

「はっ!」

塔子からタックルでボールを奪う。身長こそないがそこはGK、ぶつかる事にかけては他ポジションに勝るとも劣らず。見た目よりずっと筋肉もパワーもあるのだと自覚している。

鬼道がチェックをかけてきた。さっきより早い。タックルかスライディングか――技が来る前にパスを出すのが吉だ。

「聖也!」

聖也にパス。が、彼にボールが渡る寸前で春奈が間に割ってきた。鮮やかすぎるほど鮮やかにパスカットされ、聖也がひゅーっと口笛を吹く。

「やるじゃないか音無！」

「それでも昔はお兄ちゃんにビシバシ鍛えられてたもんで！負けませんよー！」

ボールを奪い返そうと、円堂は木暮の二人がかりで向かっていく。

「スーパースキャン！」

けれどそこに、春奈の必殺技が決まる。情報収集で磨かれた鋭い観察眼が、二人の隙をつくルートを見出す。

一瞬生まれる死角。そこを春奈は素早く駆け抜けていた。

「すっげえ！」

悔しさより、嬉しさが勝る。円堂は目をきらきらさせて春奈を見た。マネージャーだとはとても思えないサッカーセンス。一体いくつ必殺技を持っているのか。

春奈から鬼道にパスが出る。鬼道は向かって来た聖也を再びイリユージョンボールで鮮やかにかわす。

ますます勝ちたくなった。そして改めて思ったのだ。

サッカーは楽しい。彼らとやるサッカーはもっと楽しい、と。

「俺、やっぱりサッカーが好きだなあ」

「なーにを今更見てりゃ分かるっての」

「言えてるな」

グラウンドの隅。芝生に寝っ転がる六人。つつい口に出た円堂の言葉に、他五人がくすくす笑う。

「サッカーって…楽しいんだな」

木暮が想いを噛み締めるように、言った。

「俺は…好きで始めたわけじゃなかったけど。最近なんとなく、分かるようになってきた気がする」

「木暮君…」

そんな彼の姿を見て、春奈は嬉しそうだ。未だに暇になるとすぐ悪戯はするし、迷惑もかけてくれる木暮。だけどこの短期間で、随分丸くなった気がする。

他人なんか信じられない、と叫んでいた少年。確かに、人を信じる事は難しい。時に裏切られる事があるのも否定できない。何より信じる事とただ期待だけかける事は同じようで、違う。

けれどいずれ、誰もが気付く時が来るのだ。

人はやがて無意識に、誰かを愛し、信じていく。本気でそう値するべき何かに出逢えた時、人は信じるという意識すら忘れられるのかもしれない。

当たり前のように愛し、信じられる人が見つかったなら。

「何かを好きになったり、愛する事は難しい。嫌ったり、憎む事の方がずっと簡単だ」

星空を見上げ、鬼道が言う。

敬愛し、信じてきた人に…影山に裏切られ。その影山に、真正面から立ち向かおうとしている彼だからこそ説得力がある。

人を信じるのは難しく、疑うは容易い。逃げる事より立ち向かう事の方が難しいように。

「でも…信じて、好きになって初めて…俺達は幸せになれるんだろうな」

彼はひよつとしたら…今でも彼なりのやり方で、影山を信じてみようとしているのかもしれない。赦す方法を捜しているのかもしれない。

円堂はそう、思った。

「私も、サッカーが大好きです。…ってこういう言い方すると告白みたいですけど」

ふふつ、と花が咲いたように笑う春奈。

「サッカーは素敵なものをたくさんくれますから。私にとってサッカーって、いろんな人との絆をくれるもので、世界を広げてくれるものなんです」

「それ、あたしも分かる気がするなあ」

いい事言うじゃん春奈！と塔子が彼女の頭をぐしゃぐしゃと撫でる。なんだか姉と妹のようだ。やめて下さいよーと言いつつ春奈も満更ではなさそうである。

「そうだな音無。だから…サッカーを破壊の道具になんか、させちゃいけないんだ」

円堂の言葉に、メンバーは皆神妙な顔になって頷く。

エイリア学園も影山も。サッカーの本質を理解していない。サッカーは誰かを傷つける為にやるのではない、分かり合う為に在るスポーツなのだ。

彼らにも…その想いを伝える事ができたなら。試合する事で想いを届ける事ができるなら。

「あいつらとも…分かり合える筈。そうだろ円堂」

「ああ」

聖也が円堂の想いを代弁する。

そつだ。だから自分達は別の方法には頼らない。彼らと試合する事で、真正面からぶつかっていく。

その先に光が射すと、信じて。

「この戦いが終わったら」

少しだけ寂しそうに、塔子が言った。

「みんなバラバラになっちゃうんだろうな」

「……」

それは、円堂が考えないようにしていた事。旧雷門イレブンはまだしも。元々今のメンバーは、エイリアを倒す為に集ったものだ。全てが終われば塔子はSPフィクサーズに、木暮は漫遊寺に、吹雪は白恋に帰っていくだろう。帰る場所の無い照美だけは雷門に残るかもしれないが。

それに、もう一人。

「俺も…エイリアを倒したら、帝国に戻るつもりだ」

また敵同士になるな、と言う鬼道。やはりそうなのか。

確かに鬼道が雷門に来たのは世宇子を倒す為で、それで降こちに留まったのもエイリア襲撃があったからに他ならない。

本音は行かないで欲しい。が、やはり彼が本来いるべき場所は帝国なのだろう。そして帝国イレブンは今でも鬼道を信じて、その帰りを待っている。自分達の勝手で引き止めるわけにはいかない。

「みんなそれぞれ、帰るべき所はあるけど」

それは、願望にも近い。けれど円堂の中では紛れもない真実だか

ら。

「バラバラになるわけじゃないって、俺はそう思う。ベタかもしれないけど…みんなサッカーで繋がってる」

「…そうだな」

その言葉を、鬼道が引き継いでくれた。

「どんなに離れても。サッカーが俺達の絆になる。ずっと繋がって
いられる」

星のとても綺麗な晩。誰もが未来を、当たり前前に信じていた。
その時、までは。

【0・37・それはまるで、恋文のよう】

一体このもやもやした気持ちは何処から来るのか。

春奈はさりげなく、後ろを座席を振り返る。斜め後ろで、塔子と鬼道はさりげなく隣に座っている。塔子の声は大きい。話している、新しいフォーメーションの話題も丸聞こえた。

甘いカップルの話題ではない。それでもなんだか二人とも生き生きとしているし、兄も楽しそうに見える。彼の過去を思えばそれは喜ぶべき事である筈なのに――なんだか、見ていると胸が痛くなる。本当は昨晚も、見てしまっていたのだ。塔子が鬼道に告白するところも、二人のキスシーンも。それはキスと呼ぶにはあまりにささやかで一瞬の時間だったかもしれないが、春奈を揺さぶるには充分だった。

予想の範疇だった筈。

少なくとも塔子が兄に好意を寄せているのは知っていたし、いつか二人がくつついてもおかしくないとは思っていた。結構な事ではないか。愛をろくに知らない兄が、愛する人を見つけられるというのなら。

なのに。どうして自分は、こんな鬱々として彼らを見ているのだろう。嫉妬している？そんな馬鹿な。自分にとって鬼道は大切な兄で、塔子の事も姉のように慕う人である筈なのに。

自分は鬼道が好きだ。大好きだ。しかしそれは兄に対するものであって――それ以外の何かであってはならない。自分がそれは一番よく分かっているのに。

それとも――自分は寂しいのだろうか。大好きな二人に、自分一人置いていかれる気がして。

だとしても――それは仕方のない事ではないか。春奈は結局、鬼道の妹というポジションでしかない。塔子の後輩という立場でしかない。いつか離れる時が来たとしても、受け入れるべきではないの

か。

- 嫌な子だな…私。

ぐるぐると考えてみても、結論は一つしか出ない。自分は塔子に嫉妬したのだ。二人に置いていかれるかもしれない寂しいのだ。我ながら幼すぎて泣けてくる。

- 戦いが終わったら、一緒にいらなくなるかもしれない。だったら尚更…二人を応援してあげなくちゃいけないのに。

今日の予定は大まかだが決まっている。佐久間との待ち合わせ場所である帝国学園まで鬼道を送って、自分達は雷門で練習。話が終わって鬼道から連絡が来たらキャラバンで彼を迎えに行き、そのままの足で愛媛に出発する。

ハードスケジュールだが仕方ない。いくら駄々をこねてもエイリアも影山も待つてはくれないのだ。ただでさえ予定は遅れている。これ以上はロスできない。

文武両道の超名門校、帝国学園。スポーツのみならず偏差値も目眩がするほど高い。実は雷門の偏差値も高い方に分類されるのだが、全国区の帝国とは比較にならない。

窓の外に帝国のスタジアムが見えてきて、春奈は益々暗い気持ちになった。鬼道には悪いが、あの場所にはあまりいい思い出がない。あの場所で影山に、危うく殺されかけた雷門イレブン。兄を誤解して、酷いことばかり叫んでしまった自分。

一度口にしてしまった言葉はもう取り返しがつかない。だけど、謝らなければならない。むしろ今日までズルズル引きずって、謝罪の一つも口に出れなかった自分が心底情けない。

キャラバンが停車する。手荷物だけ持って、鬼道がバスを降りる。その背中を、春奈は追いかけていた。

「待つて！」

鬼道が不思議そうに振り返る。

「私も…一緒に行っちゃ駄目かな」

「…すまない」

兄の真実に少しでも近付けたら。知ることができたなら。そう思つてのダメもとの提案は、やっぱりダメであった。

「個人的に相談したいこともあるから、一人で来てくれと言われてるんだ」

「そつか…そうだよ。ごめん」

「いい。氣遣つてくれて、ありがとうな」

すぐに終わるさ、と兄は笑う。その笑顔が少しだけきこちなかったことに、果たして何人が氣付いただろう。

「…あのね、お兄ちゃん」

キャラバンの中から見つめる塔子の視線を感じながら。春奈はその言葉を口にした。

今言わなければ、当分言えなくなる気がして。

「ずっと謝らなきゃいけないって思ってたの。…私がお兄ちゃんのこと…ずっと誤解してたことも。お兄ちゃんはずっと私の為に頑張ってくれてたのに…私、あんな、酷いこと…」

自分が邪魔だから連絡をくれなかった、なんて。今考えるとんだ被害妄想だ。彼は連絡しなかったのではなく、できなかったというのに。

その上…もう貴方は他人だ、なんて。仮に思ったとしても言っていない言葉ではなかった。どれだけ傷つけただろう。考えるだけで

胸を挟られる。

「…気にするな、と言っても無理かもしれないが。いいんだ春奈。勘違いされるような事ばかり繰り返してた俺が悪い」

「お兄ちゃん…でも…」

「いいんだ」

慰める声が、あの頃と同じように優しくて。頭を撫でる手が、あの頃と同じように温かくて。

「春奈は優しい子だな。その優しさを、忘れないようにしなさい」

その愛が、あの頃と同じように嬉しくて。不覚にも涙が出そうになる。

「……うん。ねえ、お兄ちゃん」

自分は、卑怯だ。赦されるのが分かっていた。そして今も、答えが分かっているがこんな問いかけをする。

「私のこと、好き？」

鬼道は一瞬きょとんとして、やがて笑った。その笑顔も、あの頃と何一つ変わっていないかった。

「好きだよ。当たり前だろう？」

青いマントが揺れて、遠ざかる。その“好き”、は。兄としてというより、親としてのそれに近い事も気付いていた。春奈の今一番望む“好き”でない事も。

そして結局、一番聞きたかった愚かな質問は、春奈の胸の内に封印されるのである。結局一生口にしないうで終わる事になる、馬鹿馬

鹿しくて残酷な問いは。

『ねえお兄ちゃん…私と塔子さんの、どっちが一番好き?』

何だか急に空が暗くなってきた気がする。日が落ちてきたせいだけではない。土門は肌で感じる湿った空気に眉を顰めた。

「今日は一日晴れるでしょー…とか言ってたっけ?」

そんな土門の心情を読んでか、一ノ瀬が声をかけてきた。

「言ってた言ってた。こりゃ外れるなー…ってやべ、今日洗濯物ベランダに干しさなかったっけ俺」

「どこの主婦だよ土門ー」

「うっせえ、地味に大事な事だろっ」

「はいはい」

仮設置されたニュー部室の方も、バタバタしているようだ。みんなの溜まりに溜まった洗濯物の一部は、今日マネージャー達がやつとの思いで洗濯したのである。本当に感謝だ。

しかしこの様子では、いきなり夕立になる恐れがある。彼女達は今、物干し竿に干されたタオルやユニフォームを大慌てでしまっているところだった。

まだ乾いてないだろうが仕方ない。残りは乾燥機にお願いするしかないだろう。エイリアに壊された部室。にも関わらず、洗濯乾燥機などの電化製品は奇跡的に無事だったのである。

自分も手伝いに行くべきか。既に風丸と栗松は練習を切り上げて、彼女達に加勢している。どのみち雨が降り出す前に終わらせなくてはならないのだ。

「どうする、きど…あ、今いないだっけ」

それは反射だった。本来キャプテンは円堂なのだが、練習開始や終了の号令は彼がかける事が多い。

特に土門は元帝国生。なんとなく、鬼道の指示を仰ぐのが癖になっている。

「条件反射だねえ。俺も今言いかけたけど」

一ノ瀬も隣で苦笑している。

「…分かってるんだけどさ。鬼道や円堂に…あんま依存しすぎちゃいけないって。俺達だって二年生なのにさ」

「なんか分かる気がするなあ」

円堂と鬼道って、なんとなく別格なんだよな、と一ノ瀬は言う。本当にその通りだった。ディフェンダー陣営は風丸が指揮をとる事もあるが、総指揮という意味ではやはり鬼道なのである。

円堂と、鬼道。そして…豪炎寺。

彼ら3トップ（イナズマブレイクを撃つ事から、ブレイクトリオと呼ばれる事もある）はやはり特別なのだ。

自分達の精神的支柱と言ってもいい。キャプテン円堂の脇をがっしり固める二人。いつの間にかそれでバランスがとれていた。

それが…豪炎寺が抜ける事になって。

彼らの負担は様々な意味で増してしまったように思う。時々円堂が無理して笑っているように感じる時がある。鬼道が感情を殺したとを感じる瞬間がある。

本当は、それではいけないのだ。自分達はチームであり、仲間。

誰か一人や二人に頼りすぎて、寄りかかるような事があつてはいけない。誰かに負担を押し付けてはならない――それは分かっているのに。

「もつと……しっかりしなきゃな。俺達」

「うん……」

その言葉には、様々な意味が込められていた。

円堂に聞いたのである。エイリアとの戦いが終わったら、鬼道は帝国に戻るつもりでいるのだと。つまり彼の指揮に頼れるのも、この戦いの間だけ。

その頃には、豪炎寺の方は戻ってきているかもしれない。怪我をしたマックス達は復帰しているかもしれない――でも。

それでまた円堂と豪炎寺に依存するようなら、何も変わりはない。それで本当にチームだなんて言えるのだろうか。

「あいつらだけに背負わせちゃいけない。……何の為に俺達がいるんだ」

土門が口に出して言った、その時だった。

『土門』

ぞくり、と。

背中に走る、悪寒。なんだ。今、鬼道の声が聞こえたような空耳？ああ、空耳だ。だって今彼は此処にいない。それで片付ければいいじゃないか。なのに。

「…土門？」

突然固まった土門を、一ノ瀬が訝しげに見上げてくる。

何で今、思い出すのか。幼かったあの日――子犬を助けようと道路に飛び出した一ノ瀬の小さな背中。トラックがぶつかる重たい音。秋の悲鳴。転がったボール。

一ノ瀬の靴が片方脱げて、道路に投げ捨てられていた。その主は吹っ飛ばされた体制のままピクリとも動かない。倒れた一ノ瀬の体は、足がおかしな方向に曲がっていて、その下からじわじわと赤いものが滲み出していた。

衝撃を、頭が受け入れるまで時間がかかって。秋が一ノ瀬に駆け寄るのを見て我に返った。そうだ電話。電話しなくては。救急車。何番だったっけ、ああそれよりも携帯はどこだっけ。

そんな事はかりがぐるぐると頭の中を回って。そうだ、二度と思いついたくなかった事なのに、どうしてこんなにハッキリ覚えているのだ。

どうして、今。

「そういえば…鬼道のヤツ遅いなあ。まだ連絡来ねーのか？」

染岡の声が聴覚を刺激した時。

パサリ、と。春奈の左手からまだ半濁きのタオルが滑り落ちるのを、土門の視覚が捉えていた。彼女の右手には、携帯電話が。

「何、これ…」

凍りついた様子の春奈。尋常でないものを感じて、土門は一ノ瀬と共に駆け寄っていく。

「おい、どうした？」

尋ねる土門に、彼女は震える手で携帯のメール画面を見せた。それはたった今話題にしたばかりの、鬼道からのメール。文字は何故か全て、平仮名で。

『はるな

すまない

あいしてる』

【0・38・大紅蓮花、悪夢に咲いて】（前書き）

この第三十八話には、残酷・流血・死ネタが含まれます。苦手な方や義務教育を終わっていない方（十五歳未満と中学生以下の方）は閲覧をご遠慮下さい。

【0・38・大紅蓮花、悪夢に咲いて】

もう手足の感覚すら、失われつつある。

そもそも自分の手足はちゃんとついているのか。繋がっているのか。そうだとしても骨が砕けていてはどうにもならないわけで。

随分と、寒い。素肌に感じる隙間風が冷たくてたまらない。まとも服が着れていないからなのか、体中の血液が流れ出してしまっているせいなのか。

痛覚。

苦痛。

嫌悪感。

悲哀。

先程まで感じていた様々なものが、今はスッポリと抜け落ちていく。襲撃者の気配はもはやない。自分を殺すのが目的なのかと思っていたが、そういうわけでもないのだろうか。

死にたいとは思わないが。生きていてもいいのか、とはぼんやりと思う。彼の、彼らの、あの憎悪に満ちた眼。そうさせたのは他でもない自分。全ての罪は、自分にある。

赦して欲しいなんて、どうして言えるだろう。

気付いた時、あらゆる抵抗をやめていた。逆らう資格など無いと感じたからだ。自分を痛めつける事で彼らの気が晴れるならそれでいい。それで僅かでも罪滅ぼしになるというなら、構わない。

どのみちこんな身体ではもう保たないだろう。こんな事を考え始めて、彼らがいなくなってどれだけの時間が経ったのか。僅か数分かもしれないし、何時間も経っているのかもしれない。

心残りが無いと断言できないあたり、自分は弱い人間だ。

まだサッカーをしていたかった。目的を達せられるまで、彼らの傍にいたかった。真実を明らかにして、あの子供達を救いたかった。円堂の無限の可能性を、その成長をもっと見守りたかった。

結局会う事の出来なかった旧友達に、自分の口から謝罪と感謝を伝えたかった。

未練は溢れていくばかり。なんて情けない事だろう。こんなボロ雑巾のような姿になって尚、死んだ方がマシだとすら思えないなんて。まったくみつともない。

左手はもう、まったく動かない。下半身は感覚すら麻痺して、どんな状態かも想像がつかない。辛うじて動いた右手が、機械の冷たい感触を知る。

眼が霞んでいく。血を流しすぎて意識が朦朧とする。完全にブラツクアウトしてしまう、その前に。

- 春奈。塔子。円堂。…すまない。

最期の力を振り絞って、凍える指先に力を込めた。

大好きな顔。愛すべき顔。思い浮かぶ顔が多い事に、安堵する。自分は幸せ者だ、と。

光を失った紅い瞳が、つつ、と滴を零した。

全身が、痛い。佐久間は膝をついて、荒い息を整えた。

あまり練習で無駄打ちするわけにはいかない技。おかげで随分完成に手間取ってしまったが、- 漸くこれで形になった。あとは実戦で使うだけ。

- 本当に…これでいいのか。

頭の中で最後の理性が、善意が呟く。

後悔しないのか。これが本当に正しい事なのか。間違っているのは自分の方なのではないか――。

――だって鬼道は、約束してくれたじゃないか。帝国に、戻って来るって。

その約束が、佐久間を躊躇わせる。怒れ、憎めと叫ぶ声を遮って心を揺らがせる。迷わせる。

どうせもう、逃げる場所など何処にもありはしない。戻る事など出来る筈が無いというのに――どうして。

――だって俺も源田も、本当は。

「おい、佐久間あ」

名前を呼ばれて、佐久間は我に返った。痛む身体に鞭打って立ち上がる。フィールドの入口に、予想通りの人物の姿があった。

特徴的なモヒカン頭の少年――不動明王。自分と源田をこの場所に連れてきた、張本人。

「あり？源田は？いねーの？」

「総帥に呼ばれているから暫く戻って来ないと思うが」

「ふーん？」

そっかあ、とどこか子供じみた仕草で頭を掻く不動。一体何のもりなのか。こっちはさっさと上がってシャワーを浴びに行きたいというのに。

「じゃあ、仕方ね。お前一人でいーや。まだ総帥にも伝えてないピツグニュース」

知りたい？なあ知りたい？と。どこか歪んだ無邪気さで、自分達の新しい主将は笑う。

ビッグニュース？一体何の話なのか。しかも総帥がまだ知らないって？なりゆきのまま耳を傾ける佐久間に、不動は愉しげに言い放った。

「実はさー……」

鬼道が送ってきた、不吉なメール。いくらなんでも遅すぎる帰り。心配したメンバーは練習を切り上げ、急いでキャラバンに乗り込んだ。向かうは彼と旧友達がいる筈の、帝国学園である。

空はすっかり暗くなっていた。移動中に降り出した土砂降りの雨。窓を激しく叩く滴を、瞳子は睨み付けるように眺めた。

雨は嫌いだ。あの人が死んだと聞かされた日も、こんな土砂降りの雨だった。現実を受け入れられない自分と父はいつまでも雨の中に立ち尽くして――だから自分には、父の涙が見えなくて。

思い出したくもない光景なのに、どうして今思い出すのか。あまりにも不吉ではないか。

帝国学園に着く。バスが止まるやいなや、円堂が真っ先に降りようとした。誰がどう見ても焦っている。傘を持っていく事さえ忘れている。

「待ちなさい、円堂君！」

傘を持たせ、瞳子も外に出た。途端に叩きつける雨。凄い勢いだ。これでは傘をさしていてもあまり意味は無いかもしれない。いつの間にか塔子も降りている。その後ろには聖也。

「てめーらはバスで待つてろ！絶対に此处を動くんじゃねえぞ！」

バラバラと降りて来ようとする仲間達に聖也は、彼らしくもなく強い口調で一喝する。きつと彼も彼なりに何かを感じ取っているのだ。

多分自分達は、笑顔で戻って来る事は出来ないだろう、と。

帝国学園は広い。円堂、瞳子、塔子、聖也の四人は手早く入口で許可を貰い、足早に中へと入る。

探し物をするには、あまりに不向きな広さ。しかも時間も時間なので、人の気配も殆ど無い。地理に明るくない者からするばそれだけで気が滅入ってしまいそうである。

だが呑気にウンザリしている場合ではないのだ。円堂は焦っていた。何故と問われるとうまく説明できないが、とにかく気持ちが急いで仕方がなかった。

嫌な予感、時間の経過と共に強くなる。脳内に、いつも強気に笑っている友人の顔が浮かんでは消えていく。鬼道に限って、とは思っけれど。春奈に送られたあのメール。あれじゃあまるで。

佐久間達との待ち合わせ場所は、帝国学園サッカー部の練習用グラウンドだと言っていた。確か――四番グラウンド。

サッカー名門であり私立でもある帝国はそのあたり太っ腹である。サッカー部だけでグラウンドが何種類もあるというのだから凄い。

「誰も…いないな」

件のグラウンドは閑散としている。場所を間違えたか、それとも彼らが場所を移したのか。もう何時間も経っている事を考えれば、後者の可能性もけて低くは無いが――。

「ら、雷門!？」

「!」

バタバタと走ってくる足音。驚きの声。反対側の入口から走ってきたのは、帝国学園サッカー部の、寺門、咲山、洞面だった。

「なあ、お前達、鬼道を見てないか!？」

向こうが何かを口にするより先に、塔子が尋ねていた。咲山達は顔を見合わせて、俺達も捜してるところなんだ、と言った。

「鬼道さんが戻ってきた姿は、帝国の学生が何人も見てて。鬼道さん言ってたらしいんです、佐久間達と待ち合わせてるって」

だけど、と続ける洞面。

「…学校から出て行く姿は目撃されてなくて。うちの学校セキユリティーは完璧だから、防犯カメラに映らない筈はないのに」

不安げな彼ら。学校から出ていない――という事は高確率でまだ帝国学園内にいるという事。ならば捜せば見つかる筈だが――しかも何時間も、一体何処で何をしているのか。

「妙なのはそれだけじゃねえんだ。鬼道には伝えてなかったけど、実は…」

苦い顔で咲山が言う。

「佐久間と源田。…何日も前から行方不明になってんだよ。愛媛に行ったつきり、帰って来ない」

「な…何だって!？」

「だからおかしいんだ。愛媛で音信不通になった佐久間が、東京に鬼道呼び出すなんて…!」

円堂の胸の内に立ち込める暗雲。それがますます重たい色と質量を持つてのしかかって来る。

鬼道呼び出した筈の佐久間が行方不明になっていた?じゃあ鬼道呼び出したのは一体誰なのだ?佐久間をかたった何者かであるとしならそれは…。

「……鬼道の姿を、部員が最後に見かけたのが…このグラウンドで、ずっとこの付近を捜してたら…アレが…」

「アレ?」

そういえば、何故寺門は重たい工具箱を下げているのだろう。ついて来い、と彼らが言うので、円堂達も後を追う。

西側の出口。その隣には、出口とは別の短い階段がある。その先にあるのは、用具室。サッカーボールや、他に体育で使うような跳び箱なども収納されているという。

異常はすぐに分かった。灰色で無機質だったであろう扉は…悪趣味な色でいっぱいになっていたのだから。

「な…何だよこれ…」

その毒々しさに、円堂の声も上擦った。

扉に、真っ赤な絵の具(?)で落書きされていたもの。それは…歪な魔法陣。周りには意味の分からぬアルファベットがびっしり

書き込まれ、溶けて混じり合い、ますます異様な風体を醸し出している。

「こんなの、今朝までは無かった」

言いながら扉に触れる咲山。しかしその手が赤く染まる事はない。どうやらもう乾いているらしい。

「さっき見つけて。中が怪しいってんで、管理室に鍵を借りに行ったら…なんと鍵が紛失してるらしくて」

「誰かに盗まれたかもしれないって事？」

「…そうだ。しかもこの中にはカメラも無いから、どうなってるか分からない。仕方ないからこじ開けるしかないってんで、工具を持ってきたと」

それで合点がいった。試しに円堂も、力任せに扉を引いてみるが…ビクともしない。頑丈に鍵がかかっている。

「ちよつとどいてな、円堂」

「さ、聖也まさか」

「そのまさか、だ」

円堂を押しつけ、聖也が扉の前に立つ。そして。

「ブツ壊す！」

思いつきり…扉に殺人キックをかました。轟音とともに扉が歪み、掛け金が吹っ飛ぶ。乱暴すぎるわ、と瞳子が溜め息をついた。

「鬼道！いるのか！？」

その聖也がこじ開けた扉に、真っ先に飛び込む円堂。その後ろには瞳子が続く。

倉庫は電気がついていないせいで真っ暗だ。人の気配は、ない。

まずは電気をつけなければ――そう思った次の瞬間、円堂は思いっきりすっころんでいた。

「いてっ！」

何か、布のようなものを踏んだらしい。しかも、湿っているようでなんだかヌルヌルする。一体何が――そこまで考えて、凍りついた。

扉から僅かに差し込む光に照らされたその布は――青。
そして床をぬめつかせていた液体の色は――赤。

「……え？」

まさか。まさか。まさか。

ゆっくりと顔を上げた先には、大きな跳び箱。その影から、何か細いものが飛び出している。

喉の奥から小さく、引きつった悲鳴が漏れた。

それは――血まみれの、華奢な手首であった。

【0・39・樂園は今、喪われた】

円堂はその瞬間、真に悟ったと言っている。

自分達の生きる世界の、残酷さを。

そして・・・この世に神など、存在しないということ。

倉庫の明かりが点いても。

最初、円堂にはそれが誰だか分からなかった。

跳び箱の影に、両手足を投げ出すようにして、仰向けている子供。セミロングの茶髪が床に散らばり、切れ尾の紅い眼がぼっかりと宙を見つめている。

子供の服はズタズタに切り裂かれ、体を隠すというより僅かにまわりついているに過ぎない。

服だけではなく、皮膚も無残な有り様だった。ナイフで何度も何度も斬りつけられたと思しき無数の切り傷があり、血が滲んでいる。殴る蹴るの暴行も繰り返されたのか、剥き出しになった胸や肩はあちこち鬱血して紫色に変色している。綺麗なのは顔だけだ。顔だけは、唇の端と額から細く血を流しているのみである。

片足首と片手首の骨は無残に打ち砕かれていた。おそらく肋骨もバキバキに折られている。さらには下肢には違う種類の暴行の跡。一体どれだけ長い時間なぶられ続けていたのだろう。

全身の傷からの出血で失血死したのか。大きく裂けた胸の傷が致命傷になったのか。いずれにせよ確かなのは、その子供の息が既に無いということ。

「あ……」

ガチガチと鳴る音がうるさいと思ったら、それは自分の奥歯で鳴

る音だった。目の前に死体がある。それだけで恐怖だというのに――それが誰であるか、理解させられた瞬間発狂しそうになった。分らない筈だ。

仲間との絆だった雷門のジャージは切り裂かれた上血にまみれて見る影もなく。青いマントはちぎられ彼の元から離れた場所でぐしゃぐしゃになっていて。

トレードマークだったゴーグルはレンズが割れて近くに転がっており。特徴的なドレッドヘアーはほどけて広がっていたから。

でも、わかってしまった。分かってしまったのだ。

たまにゴーグルの向こうに覗いていた綺麗な眼と、転がっている遺体の眼が同じであることに。

「き……どう……？」

喉がカラカラだった。ぐでんぐでんと視界が廻る。耳鳴りが煩くて仕方ない。

嘘だ。こんなの嘘だ。あるわけない。あつていい訳ない。

鬼道が。あの強くてカッコイイ自分の親友が。天才ゲームメーカーが。

こんな場所で――暴行されて、血まみれで――ボロ雑巾のように死んでるなんて、そんなわけ――。

「円堂？」

どくん、と心臓が一つ、大きく鳴った。塔子の声だ。狭い倉庫、瞳子と円堂の二人以外はまだ皆外にいる。当然、電気をつけたとはいえ遮蔽物の多い倉庫の中の様子など見える筈がない。

円堂より先に我に返ったのは、瞳子だった。

「……駄目よ、財前さん」

いつもはきりっとしている瞳子の声が、震えている。

「入っては、駄目」

こちら側からは瞳子の背中しか見えない。しかしどんな表情をしているかは――驚愕に染まっていく塔子達の顔で明らかだった。

「や……やだ……。嘘……だろ。なあ……」

へしゃり、と塔子の顔が歪む。笑おうとして完全に失敗した顔だ。なんとか冗談で済まそうとして――だけどそれが絶対無理だとも悟っている顔なのだ。

「や……やだ！やだ！鬼道っ！鬼道おっ！！」

「駄目よっ財前さん！！入ってはいけませんっ！！」

「どいてよ監督っ……どけよおおっ！！」

瞳子が怒鳴りながら、塔子を扉の外に押し出そうとする。しかし塔子も引かない。絶叫しながら、中に入ろうともがく。

「見ちゃ駄目よっ……お願い、見ないで……っ見ないで――ッ！！」

ああ、監督、泣いてるんだ。

円堂は膝をついたまま、ぼんやりと思った。足音が迫る。監督を押しつけて、塔子と咲山達が入って来た音だった。

自分は彼らを阻止するか、あるいは道を開けるべきだったのだろう。しかし円堂は今、そのどちらもする事が出来なかった。脳が飽和して、何も考えられそうになかった。

無惨すぎる遺体を見て、彼女達は何を想うだろう。悲しみ？怒り？憎しみ？それとも円堂のように――何も考える事ができなくなるだろうか。

塔子が凍りつく気配があったが、もはや彼女を見る気力は無かった。視線が、捨てられたマリオネットのように横たわる鬼道の身体をさ迷う。そして、その右手に握られた携帯電話で、止まる。青い色の携帯。その画面は開いたまま。円堂が触れると、ブラックアウトしていた画面は光を取り戻す。

現れたのは打ちかけたまま送信する事の出来なかった、メールの文章。

『えんどう

ありが』

「…何、してんだよ。鬼道」

やっと音になった声は、馬鹿みたいに震えていた。

「そんなところで、寝てる場合じゃ、ないじゃん。なあ…起きろ、よ」

起きるわけない、と頭の中で冷静なもう一人の自分が言う。だが円堂の手は、剥き出しになった鬼道の肩に伸びていた。血でぬめつく肌は病的にまで白く、冷たい。

生きた人間の、体温じゃない。

「起きろよ…なあ…なあ…。そんなところで寝てたらサッカー、できないじゃん」

何でだ。何で自分なのだ。

『円堂、ありがとう』なんて――死に際になんでそんなメールを打とうとした？

自分は何もしていない。何もできてない。自分にたくさんものをくれたのはむしろ、彼の方ではないか。

「……やだよ、鬼道」

視界が熱くなり、滲んでいく。

「死んだら、もう、サッカーできない、じゃんっ……！」

ああ、自分。泣いてるのか。

冷えた身体を揺さぶろうとして手首を掴まれた。瞳子だった。現場を荒らしては駄目、警察と救急に連絡しないと。言ったのは分かったが言葉を理解するまで時間がかかった。

警察。どうして。

ああ。そうか。これ。

殺人事件だ。

鬼道は何者かに殺されたのだ。

「あ、……う……」

べったりと塗れた自らの掌。紅い。赤い。朱い。アカイ。

その色を見た瞬間、円堂の中で何かが弾けた。

「あ……あああああ……ッ……！」

フラッシュバックする景色。何なんだこれは。これは一体何なのだ。

泣き叫ぶ自分。横たわる幼児。地面に散らばる長い髪。子供の身体の下から滲み出る赤。自分の手を、髪を、顔を染めた紅。

バチバチと脳内がスパークして、視界が白と黒で明滅して……やがて全ては途絶えた。

「円堂君……？」

自分が血の海に倒れ込んだ事も、瞳子に呼ばれた事も分からぬまま……円堂は、意識を手放したのだった。

「何だか……様子が、おかしくないか？」

窓の外は相変わらずの大雨。そのせいか多少瞳子達の帰りが遅くとも、好んで外に出る人間はいないのだが……。

流石に様子がおかしい。窓の外を見る一ノ瀬と土門が、不安げに顔を見合わせている。

何かあったのか。風丸は目を凝らして雨の向こうを把握しようとする。微かにだがサイレンが聞こえる。救急車と、パトカーの。赤

い光と音は徐々に近付いてきて、帝国学園の門の前で停車した。

つ、と首筋を冷たい汗が伝う。隣では宮坂が自分と同じように青ざめている。

「何が…あつたんでしょうか…？」

「…さあな…」

どうにか絞り出した声は、震えていた。救急車とパトカーという事は…傷害事件か、殺人事件？まさかそんな。サスペンスドラマのような事が…。

ガララ、と音がしてキャラバンのドアが開いた。運転席の古株が開けたのだ。荒々しくステップを駆け上って来たのは、聖也。

「キャラバンを移動させて下さい。此处では救急車の邪魔になります」

皆が何か言うより先に、聖也が口を開く。その顔も青い。それに傘をさして行った筈なのに、何故今何も持っていないのか。

とんでもなく急いで走ってきたといった様子で、ずぶ濡れになっている。

「ねえ…一体何があつたの？」

タオルを差し出ししながら、秋が言う。聖也はタオルを受け取ったまま…少しだけ黙った。言葉を探しているように。

「…円堂が倒れたんだ」

「え…？」

「他にも気絶したり、錯乱状態になった奴が何人かいて…收拾ついでねえんだ。瞳子は円堂に付き添って病院行くつてよ」

「円堂君が…」

あの円堂が、倒れた？メンバーに動揺が広がる。言い方は悪いが、あの風邪もひきそうにない円堂が倒れるなんて、一体どういう事な

のか。

それに他にも錯乱したり気絶する人間が出る事態って。そういえば塔子はどうしたのか。まさか彼女も。

「はぐらかすのやめろよ、聖也」

冷静に言葉を発したのは、一ノ瀬。その顔は険しい。

「何で円堂は倒れたんだ。塔子はどうした？ 鬼道は見つかったのか？」

何か。

風丸の背筋に、冷たいものが走った。そうだ、彼らはそもそも、戻って来ない鬼道を心配して捜しに行ったのではなかったか。

痛いほどの沈黙。誰もが固唾を飲んで聖也の次の言葉を待っている。聖也もまた、塗れた髪を拭くのも忘れて言葉を捜している。

ほんの短い時間だったかもしれない。しかし風丸にはその沈黙が、随分と長く感じられたのだった。

「…………お前達」

やっと、といった様子で口を開く聖也。その声が、震えている。

「落ち着いて、聞け。俺も…何が何だか分かんねえんだ」

その先を、ひよつとしたら自分は想像したのかもしれない。予測していたのかもしれない。

「鬼道の遺体が…見つかった」

キドウ ノ イタイ ガ ミツカッタ。

「…は？」

口をついて出たのは間抜けた声だった。ふらふらと立ち上がる風丸。皆が振り向いて見ているが、それを気にする余裕もなかった。

「悪い冗談なら、やめろよ。今日はエイプリルフルじゃないんだぜ…？」

エイプリルフルにしたって質が悪すぎる。死ネタが一番の御法度ではないか。悪ふざけも大概にしろと言いたい。

彼が死ぬわけじゃないじゃないか。だってほんの数時間前まで生きていて、自分達と会話していたのに。

そうとも、有り得ない。有り得る筈がない。まだ十四歳なのだ。いつもフィールドで冷静に指揮をとる彼なのだ。どんなピンチでも諦めず自分達を引っ張ってきた彼なのだ。

こんなに早く、死ぬ筈が。

「これが冗談に見えるのかよ…？」

聖也の声は普段より低く、違和感を覚えるほど淡々としている。それは感情を無理やり押し殺している声。だから分かった。

今こそが、まごう事なき現実だと。

「お兄、ちゃ…」

「音無さんっ!!」

バタン、と大きな音がした。春奈が倒れた音だ。ショックで意識を失った彼女に夏末が駆け寄るのが見える。

まるで全てが、遠い世界の出来事のように。

「…殺されたのか。鬼道は」

一ノ瀬だけが落ち着いているように見えた。ほぼ間違いないだろう、と答える聖也も。その冷静さは見かけだけとわかっていただけ。

「ざけんなよ…っ」

見た目より遥かに激情家の土門が叫んだ。叩きつけるように。

「ふざけんな!!何であいつが殺されなきゃいけないんだよ…っ!」

その場に座り込む風丸。
まだ、涙出ない。

次章予告

奪い去られた未来。
奪い取られた希望。

「これは悪い夢なのっ…私が目覚めれば全部消えてる夢なの！」

「みんな、いなくなっていく」

「俺達…俺達、鬼道と戦う為に此処に居るのに……！鬼道がいないなら何の為に…何の為にいいっ……！」

「犯人を赦さない…絶対に赦さないっ！殺してやる殺してやる殺してやる殺して八つ裂きにしてやる……っ！」

嘆き、怒り、惑う者達。

「顔を上げる、春奈」

「諦めるな！死んでから諦める……！」

「どんなに否定したってなあ…いなくなった大事な人は帰って来ないんだっ……！」

「だから…サッカーをやめない。サッカーから逃げない」

それでも尚、立ち向かう者達。

「最後まで戦います！僕だって雷門の一員なんだ！」

それぞれの選択と決意、野望と劣情。

鬼道不在で始まる、真帝国の悲劇。

そして今明らかになる、影山零治の真実。

「決めたぜグラン…この試合に勝ったらお前を殺す！」

「貴方も生きなきゃ駄目です！生きて…生きて下さいっ！！」

「お前のせいで何もかも滅茶苦茶だ！！帝国も…俺達のサッカーも
っ！！」

「私を…選手として、チームに迎えて欲しいんです」

「くたばれっ…音無春奈ああっ！！」

「サッカーはね、魔法なんだよ。大好きな人と、仲良くなる魔法。一緒に幸せになる魔法なんだ」

「言うに事欠いてこの私を…臆病者呼ばわりとは…いい度胸だ、財前塔子」

災禍の魔女が降臨する時、悪夢の齒車は回り出す。

「貴方の役目も、ここまでね。源田くん？」

二次創作、イナズマイレブン長編。

《この背中に、白い翼は無いとしても。》

第一章・どうか忘れないで、君が交わした約束を
近日公開予定。

「助けに来たよ、零治」

その先にあるのは、救いか、それとも。

序章後書き

まずはこの小説を読んで下さった方、全てにお礼申し上げます。
初めまして、煌はじめ（スメラギハジメ）です。いい年した社会人がイナズマイレブンにハマリ、この度誠勝手ながら無駄に長い長編を連載させていただいた所存です。

無論非公式。超次元なんてメジャーない無茶苦茶ぶり。ダークもここに極まれり。

同ジャンルでもっと素晴らしい作品が溢れている中、一人明らかに恥晒しで申し訳ないです。にも関わらずアクセス数の恐ろしい伸びに、一人アタフタしておりました。

こんな駄文ながら読んでくださって本当に嬉しく思います。ガツカリさせてしまった方：本当にすみません。

ちなみに当方、コアなイナズマファンというだけで、サッカーの知識など付け焼き刃程度しかありません。またゲームのシステムを参考に試合展開させております。「こんなのサッカーの試合としておかしいだろ！文才以前の問題だ！！」と仰るその貴方、まったくもって正しいですorz

この物語ですが、皆様お気づきの通り、完結してません。あくまで“序章”完結というだけです。なんせあまりにも長いもので…あわわ。

続きですが、実はもうかなりのところまで書き上がってます。

第一章全二十九話。

第二章全四十三話。

第三章は十八話まで。

ただ、次回予告に近日公開予定と書いておいてアレなのですが、自サイトはともかくこちらに投稿するかどうかは未定です。なんせあまりにドス暗い話で（鬼道死亡以上の鬱展開が待ってます）、需

要があるか怪しくて…しかもご存知の通り悲惨な文章力で（汗）

こんなんでも続き読んでやるよ！むしろさつさと書け！という神様のごとき方。いらっしやいましたらその旨を感想欄にてお伝え下されば幸いです。多分残業上がりの変な時間に、調子こいて続きをアップしますので…！

それでは長く語ってしまいましたが、お後がよろしいようで。
縁があればまた。

煌はじめ 拝

追記

ご感想、ごアクセス、誠にありがとうございます！完結済みマークをつけたにも関わらず、まだまだ読みに来て下さる方が多くて本当に嬉しい限りです。また“続きが読みたい”と仰って下さった方も本当にありがとうございます。感謝してもしきれません…！

本日七月二十四日、この物語の続きである『この背中に、白い翼は無いとしても。2』《第一章》どうか忘れないで、君が交わした約束を『』をアップいたしました。“同一作者の最新小説”から飛べると思います。

相変わらず残念な文章力に加え、救いのない展開が続きますが、最後はハッピーエンドです。何卒新章もお付き合いいただければ幸いです。

煌はじめ 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3389m/>

この背中に、白い翼は無いとしても。《序章～どうか嘆かないで、どれほど残

2010年10月9日19時19分発行